

問題児達と錬金術師×
2が来るそうですよ？

射水 終夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アメストリス国、セントラルシティそこに二人の錬金術師が生活をしていた。漆黒の髪に赤い目を持つ少年カズマ・N・エノモトと陽気な性格だけど天才のように頭がいいゴーキ・C・マユズミ。そんな二人は、国家錬金術師になるという目標を掲げていたが・

そんなことお構いなしに召喚されたのはあらゆる修羅神仏が跋扈する異世界「箱庭」だった。

そこで待っていたのは、超崖つぶちコミユニティ!?裏で暗躍する人造人間!?火龍と闘うアームストロング少佐!?そんな前途多難な彼らが織り成す物語をご覧ください!

目次

| | | |
|-----|-------------------|----|
| | Look!オリキャラ図鑑だそうです | |
| | よ | 1 |
| | 第一章 呼び出されたのは錬金術師 | |
| ×2 | | |
| | プロローグ | 11 |
| | 第1話 自己紹介するそうですよ? | |
| 17 | | |
| | 第2話 ウサギが案内人出そうですよ | |
| ? | | 26 |
| | 第3話 箱庭の中だそうですよ? | |
| 36 | | |
| | 第4話 ノーネームだそうですよ? | 46 |
| | 第5話 変態幹部が出るそうですよ? | |
| | 第6話 ギフトカードだそうですよ? | 56 |
| | 第7話 錬金術だそうですよ? | 67 |
| 81 | | |
| | 第8話 魔王だそうですよ? | 88 |
| | 第9話 初めてのゲームですよ? | |
| 100 | | |
| | 第9.5話 Re:kazuma | |
| 115 | | |

| | | | |
|-----|------------|-----------------|-----|
| | 第10話 | 吸血姫様が来るそうですよ | 123 |
| | ? | —— | |
| | 第11話 | ルイは友を呼ぶそうですよ | 137 |
| | ? | —— | |
| | 第12話 | 宣戦布告が可能ですよ? | 151 |
| | 第13話 | ゲス野郎との決戦だそうですよ? | 174 |
| | 第14話 | 後日談 | 164 |
| | 番外編 | Re:picture | 182 |
| | エピローグ | —— | 193 |
| 第二章 | 黒幕の奥の更なる黒幕 | | |
| 307 | 第10話 | 黒幕の奥の更なる黒幕 | 295 |
| | 第9話 | チエックメイト | 283 |
| | 第8話 | 死刑囚の傭兵 | 273 |
| | 第7話 | スタート・again | 258 |
| | 第6話 | ゲームの謎解き | 247 |
| | 第5話 | 造物と錬金術師 | 233 |
| | 第4話 | シャンバラ | 224 |
| | 第3話 | コーキの苛立ち | 210 |
| | 第2話 | ヒゲ☆ | 196 |
| | 第1話 | カズマは誘拐されました。 | |

| | | | |
|-----|-------------------|------------------------|-----|
| | 番外編 | Re:wish | 317 |
| | エピソード | | 330 |
| | Re:happy new year | | 335 |
| | 第三章 | 人も何かの代価をなしに何も得ることは出来ない | |
| 340 | 第1話 | ハロウィン・キャット | |
| | 第2話 | 神も人もうつかり恋に落ちる | |
| | もの | | 355 |
| 368 | 第3話 | 不思議な猫のハーミット | |
| | 第4話 | 嵐の前の笑い | 381 |
| | 第5話 | 強襲の巨人 | 395 |
| | 第6話 | 人体錬成 | 409 |
| | Re:break | | 423 |
| | 第7話 | もう一人の主人公 | 431 |
| | 第8話 | デリート・オア・アライブ | 444 |
| | 第9話 | 知る者知らざる者 | 458 |
| | 第10話 | 神憑り | 472 |
| | 第11話 | 北側第二位 | 487 |
| | 第12話 | 人造人間は殺せない | 500 |
| | 第13話 | 偽装の錬金術師 | 511 |
| | 第14話 | ドッペルゲンガー | 523 |

| | | | |
|--------|-------------|-----------|-----|
| 付属レポート | | 図書館にはヤバイ奴 | |
| がいる | 前編 | | 696 |
| 付属レポート | | 図書館にはヤバイ奴 | |
| がいる | 後編 | | 712 |
| 観察対象 | コーキエpisode | | 724 |
| 観察対象 | コーキエepisode | | 724 |
| 2 | | | |
| 付属レポート | | 耀の悩み | 758 |
| | | | 741 |

Look! オリキャラ図鑑だそうですよ♪

・オリキャラの皆様方

名前：カズマ・N・エノモト

カテゴリー：サモンズS

身長：167cm

体重：51kg

年齢：15歳

識別：人形 魂（本体）

二つ名：くろがね鉄の錬金術師

ギフト：アルキミア錬金術 アクセラレイター加速者 ケットシ猫族

本作の主人公であるドライでクールな錬金術師の人形。何時も黒いパーカーを着ており、無表情である。しかも目にハイライトがない。その正体は、生前のカズマ・N・エノモトの残留思念と記憶を集めて作られた神造魂だった。その役割は、休眠状態のアキレスが目覚めるまで依り代を守ること。心はなく、彼の行動原理には「普通の人間ならどうするのか」というのが一番にあるためツンデレっぽい但实际上は空っぽで何も無い。

そういうことから、レティシアからの告白を断った。感情を知識としてだけ知っているだけで、どういうものかも知らない半端者には恋愛なんぞする資格も愛される資格も無いと考えている。しかし、その考えは告白を断った次の日にレティシア論破(?)された。ありとあらゆる武器を扱うことができ、錬金術で刀剣を変形させて戦う。なお、他のオリキャラからはキャラ設定が細かいことから「ズルい!」と妬まれている。

名前：コーキ・C・マユズミ

カテゴリー：サモンズS

身長：155cm (自称185cm)

体重：43kg

年齢：15歳

識別：人間

二つ名：偽装の錬金術師

最近のマイブーム：閃光弾作り

ギフト：アルキミア錬金術 フエイクイズ偽物は本物 ヘッドフォンファズ脳内魔導起器

“ノーネーム” 所属のカズマの幼なじみ錬金術師の少年。彼のことは幼少期から

知っており、アキレスのことも把握している。わずか15歳で医師免許を取得出来るほどの知識を持つ天才であるが、カズマ曰く「頭が良いけど、バカ」らしい。何時も赤紫色のパーカーを着ており、ヘラヘラニコニコと笑顔を絶やさない。エロいことが好きで、十六夜と白夜叉とは大の仲良しでよく熱く語っているとろがしばしば見かけられる。「僕は貧乳が好きだ！普通のおっぱいも大好きだ！巨乳はもつと大好きだ！おっぱいサイコー!!」という具合に。まあ、こんな風にギャグキャラに見えるがそれは本当の彼なのだろうか。もしかしたら、これら全ては偽物かもしれない。

名前：レーネ・K・エノモト

ロストドリフターズ

カテゴリー：L D

身長：175 cm

体重：56 kg

年齢：18歳

識別：人間

愛する者：ふむ。やはり弟たちだな

最近のマイブーム：ウイラの花嫁修業

ギフト：錬丹術 （じうりきしようらい） 剛力招来 （ちようりきしようらい） 超力招来

“ウイル・オ・ウイスプ”のリーダー代理であり、カズマの姉。大体青のサマーコートを着ており、基本的に動きやすいラフな格好をしている。性格はクールで頼れる家族思いのお姉さん。コミュニティでも子供たちの遊び相手や散髪などをしたりしている。よく領地から基本的に出ないウイラの代わりに招待を受け、本拠を空けるときがある。カズマがハーミットとしてコミュニティに居たときには、西側にいたので会っていなかった。なお、ジャックはサプライズにしたかったらしく話していない。実はここだけの話。カズマをウイラの婿にさせたいと思っているのだった。

名前：鳥居とりい 鏡磨きようま

カテゴリー：ドリフターズ D

身長：175 cm

体重：64 kg

年齢：17歳

識別：人間

心のオアシス：それは白だけだ！

最近の悩み：出番の少なさ

ギフト：???
???

殿下サイドにいる碧眼の少年。何時も緑色のパーカーを羽織っており、何かとばつちりに合うことが多い苦勞人である。性格は基本的に温厚で平和主義。でも、やる時は殺り徹底的に跡形もなく消す。噂によれば、白とは恋仲だとか。クールな彼女によく不意打ちでキスをされ、毎度ドギマギしている。いつか自分から仕返しをしてやろうと決意しているが、隙がなく今だに実行出来ない。

名前：北山きたやま白あきら

ロストドリフターズ

カテゴリー：L D

身長：154 cm

体重：47 kg

年齢：14歳

識別：人間

最近の悩み：鏡磨に悪い虫が付くこと

ギフト：死ドッベルゲンガーへ誘う者

殿下サイドにいる銀髪碧眼ツインテールの少女。何時も白のパーカーに、青のチエツクのスカートに黒のストッキングを履いている。箱庭には“真理の門”と呼ぶ“真理の扉”とはまた違ったものを通してやって来た。その通行料として錬金術を失っている

る。鏡磨だけにタメ口で話し、それ以外には敬語を使う僕っ娘。性格は冷静沈着でクール。よく鏡磨にキスなどをしてドギマギしているのを見て楽しんでる。エンヴィーとはあまり仲が良くななく、口喧嘩になっているが彼女は否定している。逆にリンとは仲が良く一緒に買い物に行ったり、料理をしたりしている。でも、彼女の過度なスキンシップは迷惑でやめて欲しいと思っている。

名前：草薙 レンカ

カテゴリー：D ドリフターズ

身長：169cm

体重：55kg

年齢：多分、100歳以上

得意なこと：子供と遊ぶこと

最近のマイブーム：ボードゲーム

ギフト：神刀・鬼灯 ほおずき 碧い宝石のついたペンダント

草薙諸刃流・草薙真明流の達人であり刀匠としてもそれなりの腕を持っており、〃鬼灯〃という自作の刀を使う。日本の歴史と本を読むことが大好きで、今は五五五五外門の隠れ家の管理をしながら都立図書館の司書として臨時で働いている。殿下たちとは仲が良く、仲間同然だと思っている。性格は穏和で優しいが、戦闘中などキレると修

羅のごとく恐ろしい。なお、初対面だと外見と話し方の差にすごく違和感を感じるようになる。

名前：竜吉公主

サモンズ

カテゴリー：S

身長：157cm

体重：48kg

年齢：16歳

識別：仙女

悩み：Aカップなこと

趣味：レンカのお手伝い

ギフト：操液術

天帝と西王母の娘であり何十年とかかる修業をたった数年で終わらせたエリート仙女。また、草薙レンカの唯一のコミュニケーションのメンバー。普段は漢服か和服のどちらかを着ており、優しいがレンカ以外には極度の人見知りという難点がある。しかし、自分の胸の事を指摘されると誰であろうとキレの良いストレートが相手の顔面にヒットするよ（レンカ談）。箱庭には、勘違いで召喚され、召喚したコミュニケーションが悪質コミュニケーションだった為コミュニケーションごと潰した。レンカとは居場所を探して放浪している時に

出会った。隠れ屋の常連である殿下たちとは、よく会うので少し程度なら話せるがよく嘯む。

名前：ハーミット

身長：50cm

体重：3kg

識別：猫

秘密：ぎゅって強くされるのは嫌だけど、ナデナデされるのは好きだよ。でも、レティシアには言わないでね

ギフト：地獄の炎が蓄積された鉄棒付きランタン

カズマがギフトで猫の獣人型になった姿の一つ。人型（通常のカズマ）と違って感情豊かで愛らしい。キレると地獄の炎で丸焼きにされる時がある。なお、今のところ白夜又以外に丸焼きにされた者はいない。

名前：アキレス

身長：無し

体重：無し

識別：英雄（半神）

主義：ねだるな。勝ち取れ。さすれば与えられん

ギフト：ムスperlヘイム（仮） ??? ??? ??? ???

カズマを創った張本人にして自称カミサマ。ガロロの話によると、英雄アキレスはデイストピアとの戦いで死亡したことになるらしい。しかし、実際は魂魄だけとなって外界に逃れていた。そして、休眠をするために防衛システムのような物としてカズマを創った。その際、あくまでシステムはシステムとするために心は付与しなかった。現在は休眠しなくても活動できるようになったが、当分カズマの身体を手放す気はない。なぜなら、彼の最終的な目的は自分の身体の完全再生であるからだ。

・チャットルームの愉快な仲間たち

アカウト名：カノ

チャットルームに参加するようになってまだ日の浅い新人さん。どうやら、箱庭には召喚されてやってきたらしい。

アカウト名：真由美

いつも騒がしいお喋りな女性(?)。それなりの情報通で、いつも話題を提供してくれている。真面目なキアラとはよく喧嘩をしており、もはや恒例行事のようになっていく。ちなみに喧嘩の原因は大体彼女がふざけてばっかりだからだ。

アカウント名：トーマ

物静かで、言葉の最後に「。」をいつも付けている。真由美とキアラが喧嘩してしようと、止めはせず見ているだけ。実は誰も彼のキャラがどういうものかわからない。

アカウント名：キアラ

チャットルームの常識人さん。不真面目な真由美のことが気にくわない。でも、嵐のような彼女がいらないならいいで寂しい。恋する乙女な一面も持っている。

アカウント名：管理人さん

皆さんが使っているチャットアプリの開発者にして、管理運営をしている不思議な人。何でも知っている全知で世界旅行者。かも？

アカウント名：マックス

管理人さんの知り合いと思われる人。幼さを感じさせる無邪気な話し方をする。今後出番はある。かも？

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

第一章 呼び出されたのは錬金術師×2

プロローグ

セントラル（冬）

今日は、小春日和商店街も買い物客でにぎわっている。

ここは、商店街のとあるカフェ。

その窓際の席に自分の身長位の刀を持った黒髪の少年とショットガンを持った少し茶色っぽい黒髪の少年が座っていた。

彼らは、武器を持っているが軍人ではない。

錬金術師である。

「ねえ、カズマ あの女の子かわいいよね〜」

と商店街を歩いている少女を指さして話しかけるショットガンの少年。

それに対し刀の少年は、

「ZZZZ」

寝ていた。

「この人寝ちやつてるよー！」

とコーキ・C・マズミは、笑っていた。

「おーい、起きてー」

と言いながら顔を軽く叩いてみた

が、起きない。

「ならば、奥義カズちゃん」

ドスッ！

コーキの頭にフォークが深々と刺さっていた。

どうやら、刀の少年が高速でコーキの頭に刺したようだ。

うつすら目を開けたカズマ・N・エノモトは、

「フアッア」

と大きな欠伸をしたあとまだ眠そうに瞬きをいっている。

「もおく、いくら暖かいからって寝ないですよ」

頭から血を出しながらにこやかに言う。

「ああ、すまないでも眠い。」

てか、何で頭からフォークが生えてるんだ？」

「カズマは、万年眠いでしょ

それとこれは、カズマが僕に刺したんでしょ」

と言いながら頭に刺さってるフォークを抜いた。

「そうだけど、で何のよう？」

「軽っ！」

いや、さつきそこの道をかawaii女の子が歩いてたから見て欲しかったんだよ」

と窓の外を指差しながら言った。

「へえ、お前って本当に好きだな」

と興味無さげに答えた。

「いやいや、カズマが興味ないだけで普通の男の子なら当然の反応だよ！」

「いや、俺は興味がないわけではない」

「そんなの嘘だね♪」

「嘘じゃない」

「だって、この前……」

「お前、いい加減にしろよ」

とカズマが殺気を放ち始めた

「おお、怖い怖い」

と言いながら両手を上げて降参のポーズをした。

「はあ」

とため息をついたカズマは、殺気を放つのをやめた。

「まあ、そんなことよりそろそろ帰るぞ」

「わかった」

と言うと2人とも立ってコーキは、ショットガンの入ってるバッグを片方の肩にだけ掛

カズマは、自分の身長位の刀を腰にさした。

店の中の客は、軍人でないのに銃や刀を持って出歩いている2人に注目していた。そんなことを気にすることもなく2人は、普通にレジで会計をして店を出た。

「いや、本当に今日は暖かいね。」

明日もこんな天気がいいな」

と空を眺めながら歩くコーキが言う。

同じく空を眺めながら歩くカズマは、

「フア、ア、そうだな」

と欠伸をしながら答える。

その時だった。

「ねえ、カズマ。」

こつちに封書が2通飛んで来てるんだけど、

不自然なほどに」

「確かにこつちにてか、俺たちに向かって飛んでくるな

不自然なほどに」

飛んできた封書をとり、見てみるとそれぞれの名前が書いてあった。

「とりあえず、僕達宛だし中見てみようよ」

と言うコーキの提案で封書を開けた。

それがこの世界との別れとも知らずに。

「悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの箱庭に来られたし」

読み終わった時彼らは、上空4000mに投げ出されていた。

コーキは、「ああ、僕の人生もこれまでか

せめて、彼女が欲しかった」

と落下しながら死を覚悟した。

「大きな天幕に覆われた都市があるぞ」

カズマは、呑気に地上を見ていた。

「そんなことは、どうでもいいよ。」

死ぬ前に彼女が欲しかったな。

カズマ今までありがとう、君のことは忘れないよ」

「そんな死ぬ気満々のコーキには、悪いが

俺たちはどうやら死なないらしい」

とカズマの声がしたと同時に

「えっ、なんブグググボバ」

着水した。

こうして、彼らは異世界にやって来た。

第1話 自己紹介するそうですよ？

ざばつと水から顔を出したカズマは、一緒に落ちてきて思いっきり水を飲んだと思うコーキを探す。

すると、近くの水が盛り上がってコーキが出てきた。

「ゲホツゲホ、じぬがどおもつだ おえっ」

と咳き込んでいる。

「よく、お前生きてたな」

「そうだね、何とか生きてたよ。」

土左衛門なるかと思つたけど

「とりあえず、さつさと陸に行くぞ」

と言うとカズマは、陸に向かって泳ぎ始める。

「ああ、ちよつと待ってよ。」

まだ、苦しいのに「ゲホツゲホツ」

コーキは、カズマを追いかける。

陸地に上がると金髪の少年と黒髪のロングヘアーの少女と茶髪のショートカットの少女十三毛猫がいた

3人ともカズマと同じくずぶ濡れである

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。」

石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

とそれぞれ罵詈雑言を吐き捨てた

カズマは、それに巻き込まれたくないから黙って見ていた

「……。いえ、石の中に呼び出されては、動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

2人は、フン、と互いに鼻を鳴らした

とりあえず、様子見だなどとカズマが思っているとやつと陸地まで泳いでこれたコーキが来た

「(遅かったな)」

と小声で喋るカズマ

「カズマが早いんでしょ」

とカズマに合わせて小声で言うコーキ

コーキは、カズマ以外の3人を見ながら

「茶髪の子かわいいね

黒髪の子は、かわいいと言うより綺麗だね」

と言う

「そんなことは、どうでもいい」

と呆れながら服の端を絞るカズマ

何かコーキが言おうとしたとき

「此処……どこだろう?」

と茶髪の少女が言った

「さあ。まあ、世界の果てつばいものが見えたり、どこぞの大亀の背中じゃねえか?」

そんなのも見えたんだとカズマは思った

「一応、確認しておくけど、オマエ達にもあの変な☒手紙☒が?」

「そうだけど、まずそのオマエって呼び方訂正してくれる? 私は久遠飛鳥よ。以後気をつけて。それでその猫を抱えた貴女は?」

「……春日部耀。以下同文」

「よろしく、春日部さん。次に野蛮で凶暴そうな貴方は？」

「高圧的な自己紹介ありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃った駄目人間なので用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれよ、お嬢様」

「取り扱い説明書をくれたら考えるわ」

「綺麗な方が飛鳥ちゃんで可愛いのが耀ちゃんて不良っぽいのが十六夜君なんだ」

と服を絞り終わったコーキが言った

「(おい、毎回思うがその年でちゃんて何だ？ちゃんて)」

と疑問を投げかけた

「(カズマには、教えない)」

と答えないコーキ

「ヤハハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

と十六夜は、言うとかズマ達の方を向いて

「さて、あとはその人間擬き共だけだぜ」

と言った

コーキとかズマは頭に？を浮かべ、十六夜が見ている方向自分の後ろを見た

「いや、お前らのことだぜ！」

と言いなからカズマ達を指さす

2人は、前を向いて自分たちを指でさす

そうすると十六夜がうんうん頷いた

「・・・はあ？」

と2人仲良く驚きの声をあげる

「いやいや、ちよつと待つてよ！

僕たち人間擬きじゃなくて人間その物だよ!!」

と全力で抗議をするコーキ

カズマは、肯定するように頷く

それに十六夜は、

「普通の人間ならお前たちみたいなの、赤い目とか黄色い目なんて持つてねーよ」

と言う

確かにカズマの目の色は、赤色

コーキの目の色は、黄色いである

「えっ？ そうなの？」

でも、僕たち生物学上人間だよ

まあ、そんなことどうでもいいや」

自分が人間かについてどうでもいいのかよ！つとカズマは、心のなかでツツコミをし
た

「で、そうそう自己紹介するんだったね

僕の名前は、コーキ・C・マユズミ

よろしくね!!

そして、こつちの目付きが悪いうえに赤目で怖いのが

カズマ・N・エノ。」

モトを言おうとしたときカズマが1mも跳躍して思いつきりコーキの顔面を蹴った

コーキは、

「むづばっぶ」

と声をあげながら50mも飛んでワンバンして

「ごばあっ」

木に激突して止まった

「はあ」

とカズマはため息をつくとスタスタとコーキの所まで行って

ピクピクと痙攣しているコーキの胸ぐらを掴んで持ち上げて

「なあ、オイ貴様何勝手にペラペラ人の個人情報喋ってんだ？ゴラア

お前口軽すぎなんだよ 殺されたいの？」

とさつきまで静かだったカズマがヤクザ並みのドスのきいた声でコーキを責める
さすがに殺りすぎである

コーキはと言うと

「すみません、すみません

もうしないから許して下さい お願い します」

と全力で命乞いをしている

それを見ている3人は、

「彼、大丈夫かしら？」

と飛鳥が言い

「あの威力の蹴りを顔面に喰らって気絶もしてないから大丈夫だと思っうぜ

にしてもやつぱり、あいつら人間じゃあないぜ ヤハハハ」

と笑いながら十六夜がコメントをする

「.....」

耀は、無表情でそれを見ている

三毛猫がつまらなそうに欠伸をした

コーキを引きずって十六夜達の前に投げたカズマは、

「このバカコーキのせいで迷惑を掛けた すまない」

と謝った

コーキは、「僕のせいじゃないもん」

とボソツと言った

「改めて自己紹介をするが俺の名前は、カズマ・N・エノモトだ

よろしく頼む」

「よろしくな赤目野郎」

「よろしくカズマ君」

「以下同文」

フアッアと眠そうに欠伸をするカズマ

ブーブー文句を言うコーキ

コーキを見てケラケラと笑う十六夜

傲慢そうに顔を背ける飛鳥

三毛猫と遊ぶ耀

そんな彼らを物陰から見ていた黒ウサギは思う、

(うわぁ、なんか問題児ばかりみたいですねえ、)

召喚しておいてアレだが、彼らが協力する姿は、客観的に想像できそうにない。

黒ウサギは陰鬱そうに重くため息を吐くのだった。

第2話 ウサギが案内人出そうですよ？

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。

この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

と十六夜が苛立ちながら言う。

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

と飛鳥が同意する。

「確かにこれからどうしたらいいんだろ？」

とブーイングモードから復活したコーキが言う。

「お前ら、落ち着きすぎだろ！」

「うん、普通だったらパニックになるはず」

とカズマと耀は突っ込む。

（全くです。もつとパニックになっていけば出ていきやすいのに

完全に出るタイミングを失いました。もうお腹を括るしかありません）

と出して来ようとしたとき

・

「仕方がねえな。こうなったら、そこにいる奴にでも話を聞くか？」
ビクツ!!と体が飛び跳ねた。

嫌な予感がした。「頭でサイレンがなっている。

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ。

「お前らも気づいてるだろ？」

「まあ〜ね♪アハハ」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「隠密行動がなっていないな」

「へえ？面白い奴らだ」

「軽薄そうに笑う十六夜（目は笑っていない）」

「そうかな〜」

と笑顔のまま焰の錬成陣が書かれたショットガンをバッグから出すコーキ。

5人は、理不尽な招集を受けた腹いせに殺気の籠った冷ややかな視線を

黒ウサギに向ける。

黒ウサギは少しでも穏便にすまそうと

「や、やだなあ皆様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいます

よ？

ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。

そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは1つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

と言いながら茂みから出る。

「断る」

「却下」

「お断りします」

「論外だ」

「かわいいから許す！」

1人許してくれる人がいた。もちろん、コーキである。

「あつは、取りつくシマもないですね♪あと、黒ウサギの可愛さに免じて許してください」

バンザイ、と降参のポーズをとる黒ウサギ。しかし、目は彼らを値踏みしているようだったか

「えい」

「フギヤ！」

耀が黒ウサギのウサ耳を根っこから掴み、力いっぱい引つ張ったのだ。
「ちよ、ちよつとお待ちを！ 触るまでなら黙つて受け入れますが、

まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、
どういふ見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります！」

「へえ、このウサ耳つて本物なのか？」

「今度は十六夜が右から掴んで引つ張る。」

「。。じゃあ私も」

「なら、僕も」

とコーキと飛鳥も黒ウサギの耳を引き抜きに掛かった。

黒ウサギは言葉にならない悲鳴をあげている。

カズマはそれを見ながら

「いつになったら、話が進むんだ？」

と呟いた。

（1時間後）

「あ、あり得ない。あり得ないですよ。」

まさか話を聞いてもらうために小1時間も消費してしまうとは。」

「フア〜ア、眠い。でもやつと話が進むんだな」

「話を進むのを待っていたのなら、黒ウサギを助けてくださいよ！」

と黒ウサギは半ば本気の涙を瞳に浮かばせながら言った。

ちなみにカズマは途中から座って居眠りをしていた。

黒ウサギの努力により4人は岸边に座り込み、彼女の話

『聞くだけ聞こう』という程度に耳を傾けている。

黒ウサギ気を取り直して、両手を広げて

「それではいいですか、皆様。定例文で言いますよ？ 言いますよ？ さあ、言いますよ！ ようこそ 『箱庭の世界』へ！ 我々は皆様にギフトを与えられたものたちだが参加できる

『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召還いたしました！」

「ギフトゲーム？」

「そうです！ 既に気づいていらっしやるでしょうが、皆様は、普通の人間ではございません！ その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその『恩恵』を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

黒ウサギの説明に飛鳥が手を上げて質問する。

「まず初歩的な質問からしていい？ 貴女の言う『我々』とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある『コミュニティ』に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

と十六夜が拒否し、コーキが

「ねえ、その『コミュニティ』って新しく作れるの？」

と質問する。

「はいな、新しく作ることも出来ます！」

そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの『主催者』が提示した商品をゲットできると言うとしてもシンプルな構造となっております」

「主催者って誰？」

と耀が控えめに手を上げて聞く。

「様々ですね。修羅神仏が人を試すための試練と称して行われたり、コミュニティの力を誇示するために独自に開催するグループもあります。前者は自由参加ですが、『主催者』が修羅神仏のため、凶悪かつ難解中には命を落とす物もありますが、その分見返

りは大きいです。場合によっては新しい「恩恵^{ギフト}」を手に入れることもできます。後者は、参加にチップが必要です。参加者が敗退すれば「主催者^{ホスト}」のコミュニティに寄贈されます。」

「後者は俗物ね。チップには何を？」

「様々です。金品・土地・利権・名誉・人間……そして、ギフトも賭けることができます。新たな才能を他人から奪えればより高度なギフトゲームを挑む事も可能です。ただし、ギフトを賭けた場合、負ければご自身の才能も失われるのであしからず。」

そういう黒ウサギの笑顔には黒い影があった。

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらっていいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうやって始めるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、期日内に登録すればOK！商店街でも商店が小規模のゲームを行っているのですよ。よかったら参加してください。」

「まるで祭りだな」

とカズマが呟く。

「……つまりギフトゲームとはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

お？ と驚く黒ウサギ。

「ふふん？ 中々鋭いですね。しかしそれは八割正解二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか！ そんな不逞の輩は悉く処罰します。しかし！先ほどそちらの方がおつしやつた様に、ギフトゲームの本質は勝者が得をするもの！例えば店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればただで入手することも可能だということですね」

「要するに盗みはダメだけど、ギフトゲームに勝てば主催者から賞品としてもらえるんだね」

「それにしても野蠻ね」

「ごもつとも。しかし『主催者』全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

「さて皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界における全ての質問に答える義務がございます。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニケーションでお話させていただきたいのですが……よろしいですか？」

黒ウサギが確認を取ると十六夜とカズマが手を上げた。

「待てよ。まだ俺が質問してないぜ？」

「俺も」

十六夜の声は威圧的でいつもの軽薄な笑顔が無く、カズマは相変わらざる無表情だったが声が少し本気だった。

「……どういった質問でしょう？ルールですか？それともゲームそのものですか？」

黒ウサギも雰囲気を感じ構えるように聞き返す。

「お先にどうぞ」

「おう、ありがとな。俺が聞きたいのは……たつた一つ、手紙に書いてあったことだけだ。この世界は……面白いかな？」

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』

手紙にはそう書いてあった。

ここにいる5人は全てを捨てて箱庭に來た。

それに見合うだけの催し物はあるのか？

それは、ここにいる俺達5人には重要なことだ。

「YES。『ギフトゲーム』は人を超えたものたちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

黒ウサギは自身をもって答える。

「次は、カズマおまえの質問だぜ」

「いや、俺の質問はお前がしてくれた。」

「ということは、カズマさんも箱庭が面白いか知りたかったんですね」

「ああ、前の世界はすごく退屈だったからこの世界は退屈しないか知りたかったんだ」

「さてさて、皆さんの質問にも答えましたし黒ウサギのコミュニティに皆さんをご案内します」

と言い黒ウサギは歩き出した。

第3話 箱庭の中だそうですよ？

「ジン坊っちゃーン！新しい方を連れて来ましたよー！」

と黒ウサギは手を振りながらダボダボのローブを着ている少年に近づく。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの4人が？」

「はいな、こちらの御5人様が……」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

カチン、と石像のように固まる黒ウサギ。

「……え、あれ？もう1人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方が」

「十六夜君なら『ちよつと世界の果てを見てくるぜ！』って走って言ったよ。あつちに」

とコーキが指さすのは上空4000mから見えた断崖絶壁。

街道の真ん中で呆然となった黒ウサギは、ウサ耳を逆立て問いたです。

「な、なんで止めてくれなかったんですか！」

この疑問には、コーキが

「〃止めてくれるなよ〃」って言ってたから」

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか!？」

この訴えには、飛鳥が答えた。

「〃黒ウサギには言うなよ〃」と言われたもの」

「嘘です、絶対嘘です! 実は面倒くさかったただけでしょう!」

「うん」

とカズマと耀が頷く。

無表情どうし息がピッタリだった。

黒ウサギが前のめりに倒れる。

そんな黒ウサギとは対照的に、ジンは蒼白になって叫んだ。

「た、大変です! 〃世界の果て〃にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

「幻獣?」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に〃世界の果て〃付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません!」

「あら、それは残念。もう彼はゲームオーバー?」

「ゲーム参加前にゲームオーバー? ・ ・ ・斬新?」

「墓は、石と十字架どっちがいいと思う?」

「僕は十字架の方がいいと思うよ」

「勝手に死んだことにしないでください！」

ジンは怒るが4人とも肩を竦めるだけである。

黒ウサギはため息を吐きながら立ち上がった。

「はあ・・・ジン坊っちゃん。申し訳ありませんが、御4人のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「わかった。黒ウサギはどうする？」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに———『箱庭の貴族』と謳われるこの黒ウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

黒ウサギは怒りのオーラを出しながら髪を黒から緋色へ変えた。

「ああ、ちよつと待って！僕もついて行く」

「別に構いませんが黒ウサギは凄く速いですよ」

「そうなの？なら、みんなに僕の隠し芸を見せてあげる！」

コーキは手を広げて4人の注目を集める。

4人中2人は頭に？を浮かべ、残りの2人は少し期待をした目でコーキを見る。

その瞬間、コーキの姿がグニヤリと歪んで1匹のチーターになった。

「それがコーキ君のギフト」

「『獣』のギフトですね、ジン坊っちゃん」

「うん、そうだね」

「こんなのもギフトと言うのか」

『どう？ビツクリした！スゴいでしょ』

「YES、なかなかの格の高い『獣』のギフトです！」

『違うよ、これは『獣』のギフトじゃないよ』

「えっ、そうなんですか？でも、どっから見ても・・・」

黒ウサギがコーキを観察していると

「なあ、お前ら十六夜のこと忘れてないか？」

とカズマが言った。

「はっ、しまった！完全に十六夜さんのこと忘れていました。それではコーキさん行き

ましょう」

『了解』

「1刻程で戻ります！皆さんはゆっくりと箱庭ライフを御堪能くださいませ！」

・と言うと黒ウサギとコーキは弾丸のように飛び去り、4人の視界から消え去っていつ

た。

「.....箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

「コーキも普通のチーターより、速くて凄いな」

「普通じゃないからな、あいつも」

「ウサギ達は箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思っ
すが。」

飛鳥は心配そうにしているジンに向き直り、

「十六夜君のことは彼女達に任せて、私たちは先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださいませんか？」

「え、あ、はい。コミュニケーションのリーダーをしてるジンⅡラッセルです。年齢Ⅰになつたばかりの若輩ですがよろしくお願いします。3人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

「カズマ・N・エノモト」

カズマと耀と飛鳥はジンに一礼した。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうですね。軽い食事でもしながら話を聞かせられると嬉しいわ」

飛鳥はジンの手を取り、カズマと耀はそのあとに続くように箱庭の外門をくくった。

箱庭に入ると4人と1匹の頭上に眩しい光が降り注いだ。

『お、お嬢！外から天幕の中に入ったはずなのに、お天道様が見えとるで！』

「……本当だ。外から見たときは箱庭の内側は見えなかったのに」

上空から見た時、箱庭の町並みは見えなかった。

だというのに都市の空には太陽が見える。

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

「それはなんとも気になる話ね。この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますけど」

「本当にいるんだな」

とカズマが呟き、飛鳥は複雑そうな顔をした。

4人と1匹は身近にあった「六本傷」の旗を掲げるカフェテラスで軽食を取ることにした。

「いらつしやいませー。ご注文はどうしますか？」

注文をとるため、店の奥から猫耳の少女が飛び出してきた。

カズマ、飛鳥、耀はその猫耳店員を黒ウサギと同系統として処理したので驚かなかつ

た。

「えーと、紅茶を2つと緑茶を1つとカフェオレを1つ。あと軽食にコレとコレと」
『ネコマンマを！』

「はいはい ティーセット4つにネコマンマですね」

ん？と飛鳥とジンとカズマが首を傾げた。

しかしそれ以上に耀が驚いていた。

「三毛猫の言葉、分かるの？」

「そりや分かりますよー私は猫族なんですから。お歳の割に綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちよつぴりサービサさせてもらいますよ。」

『ねーちゃんも可愛い猫耳に鉤尻尾やな。今度機会があつたら甘噛みしにいくわ』

「やだもーお客さんつたらお上手なんだから♪」

「箱庭つてすごいね、私以外に三毛猫の言葉が分かる人がいたよ」

『来てよかつたなお嬢』

「ちよ、ちよつと待つて。貴女もしかして猫と会話ができるの？」

動揺した声の飛鳥に、耀はコクリと頷く。

「羨ましい」

とカズマが言うのと飛鳥、耀、ジンまで動きが止まるとクスクスと笑い初めた。

カズマが3人を少し睨みながら

「何で俺を見て笑う?」

「い、以外だったからよ。カズマ君が見た目に似合わず猫と話がしたいなんて」

「悪かったな」

「ふふ、しょうがないよ。だってカズマ赤目だし目つきが悪くて怖いから」

それは、カズマも自覚していることだから何も言い返せない。

「ところで、耀さんのギフトは猫以外にも意思疎通は可能なんですか?」

とここでジンが助け舟を出した。

「うん。生きているなら誰とでも話はできる」

「そうは素敵ね。じゃあそこに飛び交う野鳥とも会話が?」

「うん、出来……る?ええと、鳥で会話したことがあるのは雀や鷺、不如帰ぐらいだけど

ペンギンがいったからきつとだいじよ」

「ペンギン!?!」

「う、うん。水族館で知り合った。他にもイルカとも友達」

「し、しかし全ての種と会話可能なら心強いギフトです。この箱庭において幻獣との言語の壁というのはとても大きな壁ですし」

「そうなんだ」

「一部の猫族や黒ウサギのような神仏の眷属として言語中枢を与えられていれば意思疎通は可能ですけど、幻獣達はそれそのものが独立した種の一つです。同一種か相応のギフトがなければ意思疎通は難しいと言うのが一般です。箱庭の創始者の眷属に当たる黒ウサギでも全ての種とコミュニケーションをとることはできないはずですし」

「そう・・・春日部さんは素敵なギフトを持つてるのね。羨ましいわ」

飛鳥に笑いかけられると、耀は困ったように頭を搔く。

対照的に飛鳥の声は憂鬱そうだった。

飛鳥と出会ってすうじかの間柄だが、カズマも耀も彼女らしくないと思った。

「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

「う、うん。飛鳥はどんな力を持つているの？」

「私？私の力は・・・まあ、酷いものよ。だって」

「おんやあ？誰かと思えば東区画の最低辺コミユ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」

品のない上品ぶった声がジンを呼ぶ。

カズマが声のした方を見ると

「ブッ！」

と少し吹き出した。

それもそのはず、そのには2 mを超える巨体をピチピチのタキシードで包んだ変な男がいた。

第4話 ノーネームだそうですよ？

「僕らのコミュニティは『ノーネーム』です。『フォレス・ガロ』のガルド『ガスパー』
「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃない。コミュニティ
の誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなど
出来たものだ。そう思わないかい、お嬢様方」

ガルドと呼ばれたピチピチタキシードがテーブルの空席に腰を下ろした。カズマ達
は失礼な態度のガルドに冷ややかな目で見ていた。

「同席をするなら名乗るべきじゃないか？」

「おっと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ『六百六十六の獣』の傘下である」
「烏合の衆の」

「コミュニティのリーダーをしている、ってマテやゴラア!!誰が烏合の衆だ小僧オオ!!」
怒鳴るガルドはジンに肉食獣のような牙と瞳を向ける。

カズマはそんなやり取りを見て、ノリツツコミもやつてるし意外と仲良いのか?と場
違いなことを考えていた。

「口を慎めや小僧オオ・・・紳士な俺にも聞き逃せねえ言葉もあるんだぜ・・・?」

「森の守護者だったころの貴方なら相応に礼儀で返していたでしょうが、今の貴方はこの二一〇五三八〇外門付近を荒らす獣にしか見えません」

「ハッ、そういう貴様は過去の栄華に縋る亡霊と変わらんだろうがッ。自分のコミュニティがどういふ状況に置かれているのか理解できてんのかい？」

「ハイ、ちよつとストップ」

2人を遮るように止めたのは飛鳥だ。

「事情はよくわからないけど、貴方達の仲が悪いことは承知したわ。それを踏まえて質問するけど、ジン君がガルドさんに指摘されている状況・・・というものを説明していただける？」

「そ、それは」

ジンは言葉に詰まった。

そこにカズマが畳み掛ける。

「ジンは自分の事をコミュニティのリーダーだって言った。ならお前も俺たちを呼んだって事だよな？ だったら、俺たちに責任もってコミュニティのこと、箱庭のことを説明しないと行けないんじゃないか？」

カズマは淡々とジンを責める。

「貴女方の言う通りだ。コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教

えるのは当然のこと。しかし彼はそれをしたからでないでしょう。よろしければこの私
がコミュニティの重要性和ジーン・ラッセル率いる「ノーネーム」のコミュニティの客
観的に説明させていただきませんが」

「そうね。お願いするわ」

「承りました。コミュニティは活動する上で箱庭に「名」と「旗印」を申告しなければ
なりません。特に旗印はコミュニティの縄張りを主張する大事な物。この店にも大き
な旗が掲げられているでしょう？あれがそうです」

ガルドは「六本傷」が描かれた旗を指す。

「六本の傷が入ったあの旗印は、この店を経営するコミュニティの縄張りであることを
示しています。もし自分のコミュニティを大きくしたいと望むのであれば、あの旗印の
コミュニティに両者同意で『ギフトゲーム』を仕掛ければいいのです。私のコミュニ
ティは実際にそうやって大きくしましたから」

自慢げに語るガルドはピチピチのタキシード（笑）に刻まれた旗印を指さす。

そこには、虎の紋様をモチーフにした刺繍が施されていた。

辺りを見回すと、広場周辺の商店や建造物には同じ紋が飾られていた。

「その紋様がお前の縄張りなら、近辺はほとんどお前の支配下ってことか？」

「ええ。この店のように本拠が他区か上層にあるコミュニティと奪うに値しない名も無

きコミュニティ以外の二一〇五三八〇外門付近で活動可能な中流コミュニティは私の支配下です。」

ジンは顔を背けたままローブをぐつと握りしめている。

「さて、ここからがレディ達の問題。実は貴女達の所属するコミュニティは数年前まで、この東区画最大手のコミュニティでした」

「あら、意外ね」

「そうでもないと思う」

「何で？」

耀はカズマのまるで予想していた言葉について質問をする。

「簡単なことだ。さつき、ジンに『過去の栄華に縋る亡霊』って言ってたからだよ」

「なるほど」

そんなやり取りをしている間にガルドの説明は進んでいた。

「——」
——
彼らは敵に回してはいけないモノに目を付けられた。そして彼らはギフトゲームに参加させられ、たった一夜で滅ぼされた。『ギフトゲーム』が支配するこの箱庭の世界、最悪の天災によって」

「天災？」

飛鳥と耀が同時に聞き返す。

「巨大な組織が天災位で滅びるとは思えないが」

「これは比喩にあらず、ですよレディ達。彼らは箱庭で唯一最大にして最悪の天災。俗に『魔王』と呼ばれる者達です」

ガルドの魔王&ノーネームについて話すこと数分後

飛鳥と耀とカズマがそれぞれに出されたカップを片手に話を反復する。

「なるほど。大体理解したわ」

「『魔王』っていうのはこの世界で特権階級を振り回す神とかつてこと」

「そして、ジンのコミュニティはその『魔王』に滅ぼされた」

「そうですね、レディ達。神仏というのは古来、生意気な人間が大好きですから。愛しすぎた挙げ句に使い物にならなくなることはよくあることなんですよ」

ガルドは皮肉そうに笑う。

「名も、旗印も、主力陣の全てを失い、残ったのは膨大な居住区んの土地。もしもこの時に新しいコミュニティを結成していたなら、前のコミュニティは有終の美を飾ってこんな名誉も誇りも失墜した名も無きコミュニティにならなかつたでしょう」

「」

「そもそも考えても見てくださいよ。名前のないコミュニティに一体どんな活動ができます？名も無き組織など当然信用などされませんから、商売も主ホスト権者出来ません。なら、ギフトゲームの参加者は？ええ、それならば可能です。では優秀なギフトを持った人材が、フリーネームなどに集まるでしょうか？」

「そうね。誰も加入したいとは思わないでしょう」

「そう。彼はコミュニティのリーダーとは名ばかりでほとんど黒ウサギに支えてもらうだけの寄生虫」

「っ」

ジンは顔を真っ赤にして両手を握りしめていた。

「私は本当に黒ウサギの彼女が不憫でなりません。ウサギと言えば『箱庭の貴族』と呼ばれるほど強力なギフトの数々を持ち、何処のコミュニティでも破格の待遇で愛でられるはずなんですよ」

「そう。事情は分かっていたわ。それでガルドさんは、どうして私達にそんな話を丁寧に話してくれるのかしら？」

「それをわざわざ聞くのか」

カズマは、はあとため息をつく。

「ご察しのように、もしよろしければ黒ウサギ共々私のコミュニティに来ませんか？」

「な、何を言い出すんですガルドIIガスパー!？」

ジンは怒りのあまりテーブルを叩いた。

「黙れ、ジンIIラツセル。そもそもテメエが名と旗印を新しくしていれば最低限の人材は残っていたはずだろうが。何も知らない相手なら騙しとおせるとでも思ったか？その結果、黒ウサギと同じ苦勞を背負わせるってんなら、こっちも箱庭の住人として通さなきゃなんねえ仁義があるぜ」

ジンは僅かに怯むがそれよりもカズマ達に対する後ろめたさと申し訳なさを感じているのをカズマは感じとった。

「で、どうですかレディ達。返事はすぐには言いません。コミュニティに属さずとも箱庭で30日間の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出したコミュニティと私達『フォレス・ガロ』のコミュニティを視察し、十分に検討してから・・・」

「結構よ。だってジン君のコミュニティで私は間に合っているもの」
「は?とジンとガルドが飛鳥を見る。」

カズマは面白い展開になってきてついニヤリと笑いそうになった。

「春日部さんは今の話をどう思う?」

「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りに来ただけなもの」

「あら意外。じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら?それとカズマ君を友達二号

に推薦するわ」

カズマはいきなり自分の名前が出て飲んでいたカフェオレを吹きそうになった。

「ちよ、ちよつと待て、勝手に推薦するな!？」

「あら、春日部さんとお友達になるのはいや?」

「い、いや別にそういうわけでは・・・」

「なら問題ないわね」

耀はそのやり取りが終わると小さく笑って頷いた。

「うん。飛鳥は私の知る女の子とちよつと違うから大丈夫。カズマは意外と面白そう

か。らしいと思う」

『良かったなお嬢・お嬢に友達が出来てワシも涙が出るほど嬉しいわ』

三毛猫がホロリと泣く。

「俺は面白くない」

そんなカズマの反論は無視された。

「失礼ですが、理由を教えてもらっても?」

「だから、間に合ってるのよ。春日部さんは聞いている通り友達を作り、カズマ君は面白ければどこでもいいからジン君でもガルドさんでもどちらでも構わない。そうよね?」

「うん」

「よく覚えていたな」

「当然よ。そして私は、おおよそ人が望みうる人生全てを支払って、箱庭に来たわ。それを小さな小さな一地域を支配しているだけのコミュニティに入ると思ったのかしら、この士虎紳士」

ガルドは怒りで体を震わせた。

「お、お言葉ですがレデ

『黙りなさい』

ガチン！とガルドは不自然に口を閉じると黙り込んだ。

「」

「!? どうやらガルドは口を開けられなくなったらしい。

「私の話はまだ終わってないわ。貴方からいっばい聞き出さないといけないことがあるのだもの。『貴方は座って、私の質問に答え続けなさい』」

飛鳥の言葉でガルドが椅子にヒビが入るほどの勢いで座る。

「お、お客さん当店でもめ事は控えてください——」

この状況に驚いた猫店員が飛鳥達に駆け寄る。

「ちようどいいわ。猫の店員さんにも聞いて欲しいの。多分面白い事が聞けるはずよ」

首を傾げる猫店員を制して飛鳥はジンに聞く。

「ねえ、ジン君。コミュニティそのものをチップにゲームをすることはそうそうあることなの？」

「ま、稀になら。でもコミュニティの存続を賭けたかなりのレアケースです」

猫店員も頷く。

「そうよね。訪れたばかりの私達でさえそれくらいわかるもの」

「そのコミュニティ同士の戦いに強制力を持つから “主催者権限” を持つ者は魔王として恐れている」

「その特権を持たないあんたがどうして強制的にコミュニティを賭けてギフトゲームが出来る？」

飛鳥に続くように耀とカズマは続ける。

『教えてくださる？』

ガルドは悲鳴を上げそうな顔で答える。

その様子はまるで探偵に追い詰められた容疑者のようだった。

第5話 変態幹部が出るそうですよ?

日が暮れたころ噴水広場でコーキ達と合流し、話を聞いた黒ウサギは予想道理耳を逆立てて怒った。

そして質問と説教が飛び交った。

「な、なんであの短時間に『フォレス・ガロ』のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!」

「しかもゲームの日取りは明日!」

「それも敵のテリトリーで戦うなんて!」

「準備している時間もお金もありません!」

「一体どういうつもりですか!」

「聞いているのですか4人とも!!」

「『ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています。でも、後悔はしてない!』」

「黙らっしやい!!!」

まるで漫才のような息があつた言い訳に黒ウサギは激怒していた。

それをニヤニヤしながら見ているコーキと十六夜。

「まあまあ、そう怒らないでよ黒ウサギちゃん♪カズマ達だって理由もなく喧嘩売ったんじゃないからさ」

「確かにそうですけど、このゲームで得られるのは自己満足だけなんですよ？この「ギアスロール契約書類」を見てください」

そこには、参加者が勝利した場合、主催者は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニケーションを解散する」と書いてあった。

「まあ、確かに自己満足だ。時間をかければ立証出来るものを、わざわざ取り逃がすリスクを背負ってまで短縮させるんだからな」

と横から契約書類を見ていた十六夜が言う。

ちなみにノーネーム側のチップは「罪を黙認する」だ。

それは今回だけでなく、これからずっとである。

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は、その、黒ウサギは言い淀んだ。」

この子供達とは、ガルドが強制的にコミュニケーションを賭けてギフトゲームをするために捕まえた人質のことである。

けど、彼らはもうこの世にはいない。ガルドが殺したのだ。

「そう。人質は既にこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょ

う。でも、あの外道を裁くのに時間をかけたたくないの」

箱庭の法は箱庭都市内だけ有効なものだ。

しかし、〃契約書類〃による強制執行は強力な契約ギアスでガルドを追い詰められる。

「それにね、私は道徳云々よりもあの外道が私の活動範囲内にいるのが許せないの。ここで、逃がせば、また狙ってくるに違いないわ」

「ま、まあ、逃がせば厄介かもしれないけど」

「僕もガルドを逃がしたくないと思ってる。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

「右に同じ」

ジンと耀は飛鳥に同調する姿勢だ

「もう諦めた方がいい。コイツらはもう止まらない。付き合いは短いけど、俺にだってわかる」

黒ウサギも薄々そう思っていたから諦めたように呟いた。

「はあく、。仕方のない人達です。まあいいです。腹立たしいのは同じですし。〃フオレス・ガロ〃程度なら十六夜さんが一人いれば楽勝でしょう」

十六夜は怪訝なおおをして、

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ？」

「だ、ダメですよ！コミュニティの仲間なんですから参加しないと。コーキさんは参加するんですよね？」

「いや、参加しないよ。てか、参加したら殺される」

「コーキさんまで!!どうしてですかっ!?!」

「だって、カズマが参加するなって殺気を放ちながら見てくるから☆」

「何故です。何故カズマさんも十六夜さんもそこまで拒絶するのですかっ!?!」

この黒ウサギの質問にはカズマではなく飛鳥が答えた。

「当たり前よ。この喧嘩は私達が売ったのよ。それなのに十六夜君達が手を出すのは無粋だわ」

「ど、言うことだけ黒ウサギ」

「。。ああもう、好きにしてください」

丸1日振り回されて疲弊した黒ウサギは言い返すのを諦めた。

どうせ失う物はないゲーム、もうどうにでもなればいいデスと呟いて肩を落とす黒ウサギをカズマは同情の目で見ていた。

「そろそろ行きましようか。本当は皆さんを歓迎する為の素敵なお店を予約していたの

ですが、不慮の事故続きで、今日はお流れとなつてしまいました。また後日、きちんと歓迎を」

「いいわよ、無理しなくて。私たちのコミュニティってそれはもう崖っぷちなんですよ？」

黒ウサギは驚いてジンを見る。そしてコミュニティの状況を知られたと悟った。

「も、申し訳ございません。皆さんを騙すのは気がひけたのですが、黒ウサギ達も必死だったのです」

「もういいわ。私は組織の水準なんてどうでもよかつたもの。春日部さんはどう？」

黒ウサギは恐る恐る耀を見る。

「私も怒つてない。あ、けど」

「どうぞ気兼ねなく聞いてください。僕らに出来る事なら最低限の用意はさせてもらいます」

「そ、そんな大それたものじゃないよ。ただ私は、毎日三食お風呂付きの寝床があればいいな、と思つただけだから」

ジンの表情が固まった。

水の確保が大変な土地でお風呂というのは、一種の贅沢なのだ。

それを察した耀が慌てて取り消そうとしたが、先に黒ウサギが嬉々とした顔で水樹を

持ち上げる。

「それなら大丈夫です！十六夜さん蛇神様を倒してこんな大きな水樹の苗を手に入れてくれました！」

「十六夜つて強いんだな」

「いや、強いつてもんじゃないよ。だって蹴り一発で倒してたもんね」

「おう、楽勝だったぜ」

十六夜は得意げに答えた。

「それにしても今日は理不尽に湖へ投げ出されたから、お風呂に入りたかったところよ」
「それには同意だぜ。あんな手荒い招待は二度と御免だ」

「しかも呼び出した本人だけ、濡れてないのが腹立つ」

「よし、いっそのこと黒ウサギちゃんをあそこの噴水に投げようかな〜？」

召喚された5人から責めるような視線に怖気づく黒ウサギ。

「あう。そ、それは黒ウサギの責任外つて 十六夜さん!?!本気で投げようとしなくてください!?!」

それをジンは苦笑しながら見ていた。

「あはは。それじゃあ今日はコミュニティへ帰る？」

「あ、ジンは坊っちゃんには先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら『サウザンドア

イズ」に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。水樹の事もありませんし」

ということとで6人と1匹は「サウザンドアイズ」に向かう。

道中呼び出された5人は興味深そうに街並みを眺めていた。

商店へ向かうペリベツト通りは石造りであり、街路樹は桃色の花を散らして新芽と青葉が生え始めている。

「桜の木ではないわよね？花弁の形が違うし真夏になつても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になつたばかりだぞ。気合いの入つた桜が残つていてもおかしくないだろ」

「今は秋だと思つけど」

「いやいや、何言つてるの3人とも。今は冬だよ。冬」

「咲いているとしても梅の花だな。桜はない」

ん？つと噛み合わない5人は顔を見合わせる。

それを黒ウサギが笑つて説明した。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのデス。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」

「へえ？パラレルワールドつてやつか？」

「近いですね。正しくは立体交差並行世界論というものなのですが、コレの説明は長くなるので、また後日」

黒ウサギは蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている旗がある商店の前で止まった。

「どうやら『サウザンドアイズ』に着いたらしい。」

日が暮れて看板を下げる割烹着の女性店員に、黒ウサギは滑り込みストップを、
「まっ」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

・ストップをかけるどころか拒絶された。

黒ウサギは悔しそうに店員を睨む。

「なんて商売つ気がない店かしら」

「ま、全くです！閉店時間五分前に客を閉め出すなんて!？」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「ヒドッ!?! たったこれだけで出禁だなんて酷いよ〜(泣)」

「そうです!! そうです!! あんまりなんでございますよ!!!」

キヤーキヤーと喚くウザウサギとコーキ。

「なるほど、『箱庭の貴族』であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で

入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」

言葉に詰まる黒ウサギ。

しかし十六夜は躊躇わない。

「俺達は『ノーネーム』ってコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこの『ノーネーム』様ですか?よかつたら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか?」

ぐつと黙りこむ。

これが「名」と「旗印」がないコミュニティのリスクかとカズマ達は理解する。

「その・あの・私達に、旗はあります」

せんと、小声で呟こうとした時だった。

「いいいいいいいいいいいいいやほおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!
久しぶりだ黒ウサギイイイイ!!!」

と店内から爆走して来た着物風の服を着た真っ白い髪の少女を

「ブボラベボツ」

カズマが刀(鞘付き)でおもいつき打った!!?

少女はそのまま180度反対の店内にドゴンバタンと壁に当たる音をたてながら吹っ飛んでった。

「.....」

「ナイスバツティング」

「すごかった」

「彼女大丈夫かしら」

「あちゃー、カズマやり過ぎだよ」

「カ、カズマさん!? あなた様は一体何をやっているのですか!!? いい、いきなり白夜叉様打うなん」この程度で私は諦めんぞおとおおおおお!!?」きやあー」

何が起きたかを説明すると黒ウサギが怒鳴っている途中でさっきの少女（白夜叉と言うらしい）にフライングボディーアタックをされ、空中四回転半をして水路にポチャンと落ちたのだ。なお、白夜叉は抱きついたまま黒ウサギの胸に顔を埋めてなすりつけている。

「フフ、フホフホホ! やっぱりウサギは触り心地が違うのう! ほれ、ここが良いかここが良いか! グフフ」

と下品にも笑いながらスリスリスリスリとなおも胸に顔をなすりつけている。

「し、白夜叉さま! ちよ、ちよつと離れてください!」

白夜叉は頭を掴まれて店に向かって投げつけられた。

くるくると回転して飛んできた白夜叉を十六夜が足で受け止めた。

「てい」

「ゴハア！さっきのバッティングした者に続き初対面のの美少女を足で受け止めるとは
何様だ！」

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ」

「カズマ様？でいいのか？」

ヤハハと笑いながら自己紹介する十六夜。

頭に？を浮かべながら流れに乗ってみるカズマ。

一連の流れの中、呆気にとられていた飛鳥が白夜叉に話しかけた。

「貴女はこの店の人？」

「おお、そうだとも。この『サウザンドアイズ』の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしそのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ」

「オーナー。それでは売り上げが伸びません。ボスが怒ります。」

「見た目は幼女だが中身はエロオヤジだな」

これはカズマのコメントである。

第6話 ギフトカードだそうですよ？

「うう・まさか私まで濡れる事になるなんて」

濡れた服やミニスカートを絞りながら水路から上がってきた黒ウサギが呟いた。

「等価交換だね」

「等価交換だな」

「等価交換なの？」

『等価交換やと思うでお嬢』

悲しげに服を絞る黒ウサギ。

「ふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たという事は

■ 遂に黒ウサギが私のペットに」

■ なりません！という起承転結があつてそんなことになるんですか！」

「ええーと。まず黒ウサギちゃんが白夜叉ちゃんのペットになり「何勝手に捏造してい

るんですか!!」

「おお、おんし中々ノリがいいのう！名をなんといいんだ？」

「コーキ・C・マユズミだよ。よろしくね、白夜叉ちゃん」

ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

白夜又は新たな同士（黒ウサギを弄る方）を見つけ、快くして店に招く。

「さて、話があるのなら店内で聞こう」

女性店員に睨まれながら暖簾をくぐると店の外見にしては不自然な広さの中庭に出た。

正面玄関を見ると、ショーウィンドに様々な珍品名品が並んでいる。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

そのまま中庭を進み縁側で足を止める。

障子を開けると中はやや広い和室だった。

白夜又は上座に腰を下ろし、大きく背伸びをしてからカズマ達に向き直った。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本抛を構える『サウザンドアイズ』幹部の白夜又だ」

「質問があるんだけど、外門って何？」

元気にコーキが問う。

「箱庭の階層を示す外壁にあるもんですよ。数字が若いほど都市の中心に近く、同時に強大なギフトを持つ人達がすんでいるのですよ」

黒ウサギは上空から見た箱庭の図を描いて見せた。

「超巨大玉ねぎ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだね、どちらかと言うとバームクーヘンだね」

「バームクーヘンか。箱庭もあるのか？」

「あるんじゃない。今度探そう」

見も蓋もない感想というか後半2人のバームクーヘンの話に肩を落とす黒ウサギ。

「ふふ、上手いこと例える。ああ、ちなみにバームクーヘンは箱庭にもあるぞ。そしてその例えならここはバームクーヘンの一番薄い皮にあたる。更に言うところ東西南北の区切りの東側で、外門のすぐ外は“世界の果て”がある。そこにはコミュニティに所属していない、その水樹の持ち主などの強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ」

白夜叉は薄く笑い黒ウサギの持つ水樹の苗を見る。

「して、一体誰が、どのよう——」

ここまで聞いてカズマは、早く目的を終わらして本拠にいきたいと考えて話を聞き流し始めた。

要するに長い話に飽きたのだ。

次にカズマが認識した言葉は

「私にギフトゲームで挑むと？」

と高らかに笑う白夜叉の言葉だった。

は?、何故こうなった? いきなり幹部に喧嘩売るなんてシニタイノ? と疑問を浮かべながらもそれが無謀だと判断する。

「え? ちよ、ちよつとお三人様?」

黒ウサギもどうやら理解出来てないらしい。

コーキは、その隣で次の展開にワクワクしていた。
完全に傍観者である。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

「ノリがいいわね」

「しかい、ゲームの前に一つ確認しておくことがある」

「なんだ?」

白夜叉は「サウンドアイズ」の旗印が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

「おんしらが望むのは『挑戦』か——もしくは『決闘』か?」

刹那、視界に爆発的な変化が起きた。

視覚は意味をなくし、様々な情景が脳裏で回転し始める。

白い雪原と凍る湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界に投げ出された。

「・・・なっ・・・!?」

「すごい!!」

「これが『サウザンドアイズ』幹部の力か」

余りの異常さに、十六夜達は同時に息を呑み、コーキとカズマは感嘆の声を上げた。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は『白き夜の魔王』——太陽と白夜の星霊・白

夜叉。おんしらが望むのは『挑戦』か?それとも対等な『決闘』か?」

しばしの静寂の後・諦めたように笑う十六夜が、手を上げて

「参った。やられたよ。降参だ、白夜叉」

「ふむ?それは決闘ではなく、試練を受けるという事なのか?」

「ああ、今回は黙って試されてやるよ、魔王さま」

「く、くく・して、他の童達も同じか?」

「ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

苦虫を噛み潰した表情で返事する耀と飛鳥。

「僕は元々白夜叉ちゃんと決闘する気なんて無いから、いいよ」

「俺もそこまで自惚れてない」

満足顔のコーキと相変わらず淡々と言うカズマ。

その時、彼方にある山脈から甲高い叫びが聞こえた。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ、あやつか。おんしら五人を試すには打って付けかもしれないの」

山脈の方を向き、チョイチョイと手招きをする白夜叉。

すると鷲の翼と獅子の下半身を持つ獣が風の如く現れた。

「グリフォン。嘘、本物!？」

「フン、如何にも、あやつこそギフトゲームを代表する獣だ。さて、肝心の試練だがの。おんしら五人とこのグリフォンで“力” “知恵” “勇氣” の何れかを比べ合い、背に跨がつて湖畔を舞う事が出来ればクリア、という事にしよう」

白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出すと、虚空から「ホストマスター主催者権限」にのみ許された輝く羊皮紙が現れる。

『ギフトゲーム名 “鷲獅子の手綱”

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

カズマ・N・エノモト

コーキ・C・マズミ

・クリア条件　グリフオンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア方法　「力」　「知恵」　「勇氣」の何れかでグリフオンに認められる。

・敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の元、ギフトゲームを開催します。

『サウザンドアイズ』印』

「私がやる」

耀は読み終わるとピシッ！と挙手をした。

『お、お嬢・大丈夫か？なんや獅子の旦那より怖そうやしデカイけど』

「大丈夫、問題ない」

「ふむ。自信が有るようだが、コレは結構な難物だぞ？失敗すれば大怪我では済まんが」

「大丈夫、問題ない」

キラキラ光る耀の目を見て十六夜と飛鳥は苦笑いを漏らす。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気を付けてね、春日部さん」

「あ、ちよつと待って耀ちゃん」

コーキは、耀を止めるとカズマの方を向いた。

カズマはコーキの顔を見ると無言で頷くと、チャックを開けて着ていたパーカーを脱いだ。

そのパーカーを耀に渡さずに後ろを向くとしやがんだ。

コーキ以外は、てつきりパーカーを耀に渡すと思ったので頭に？が浮かび上がった。カズマを見ているとガリガリと地面を削る音が聞こえて来た。

そして、ピカツ！と青白く光るとカズマはこちらを向いた。

カズマの手にはさつきと少しデザインが変わったパーカーを持っていた。

「ほらよ」

「えっと、その、ありがとう」

「気にするな。提案してきたのはコーキだ」

「さすがにその格好で山頂は寒いからね。頑張ってるね！」

「うん、頑張る！」

耀はそう言うのとパーカーを着て、グリフォンに駆け寄っていった。

「どうやらサイズの方は問題ないが袖が少し長かったらしい」

「そうだね。少し余ってるね」

そんな話をして耀とグリフォンを見ていると飛鳥が質問をしてきた。

「カズマ君さつき後ろ向いて何をしていたの？」

「別に。パーカーのサイズを合わせてただけだが」

「だけど、何か光ってたわよね？」

「錬成反応の光だな」

「錬成反応?！」

「まあまあ、それについてはまた後でにして耀ちゃんの応援しよう」

コーキもカズマも今はしゃべる気がないと理解した飛鳥は耀の方に意識を向けた。

結果を言うところの勝負は耀が勝った。

が、勝利が決定した瞬間耀の手から手綱が外れた。

『何!?!』

「春日部さん!?!」

助けに行こうとした黒ウサギを十六夜が止める。

「待て! まだ終わってない」

フワツと、耀の体が翻る。

慣性を殺すような動きはやがて落下速度を衰えさせ、遂には飛翔させた。

ふわふわと不馴れな飛翔を見せる耀に十六夜が近寄った。

「やっぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類だったんだな」

「違う。これは友達になった証」

さつきから興味津々に見てくる十六夜の視線をふいっと避ける。
すると三毛猫が駆け寄ってきて心配そうに耀に問う。

『お嬢!怪我はないか!』

「うん、大丈夫。指がジンジンするのと服がパキパキになったぐらい」

三毛猫を優しく撫でていると思いい出したようにカズマの所に行き、パーカーを脱いで渡した。

「ありがとう。パーカーがあつたから楽だった」

「そうか、役に立って良かった。そして、おめでとう」

そう言うとかズマと耀はパシッとハイタッチをした。

パチパチと拍手が聞こえた。

向こうを見ると白夜叉が拍手をし、グリフォンが感嘆の眼差しで見つめていた。

『見事。お前が得たギフトは、私に勝利した証として使って欲しい』

「うん、大事にする」

「ところで、おんしの持つギフトだが。それは先天性か?」

「違う。父さんに貰った木彫りのおかげ」

「木彫り?」

『お嬢の親父さんは彫刻家やつとります。親父さんの作品でワシらとお嬢は話せるんや』

「ほほう・彫刻家の父か。よかつたらその木彫りを見せてくれんか？」

白夜叉は渡された手のひら大の木彫りのペンダントを見て、顔をしかめる。

飛鳥も十六夜もコーキも黒ウサギも集まつて鑑定を始めた。

ただ一人、カズマだけが鑑定に参加しなかつた。

彼は耀のサイズに合わせたパーカーを錬成して元のサイズにし、直ぐに着た。

そして今もワー、キヤー、ワー、キヤー騒いで鑑定をしている十六夜達が終わるのを待つことにした。

別にカズマは恥ずかしいとかそんなのではなく、ただ単に彫刻とかの美術品に興味がないのだ。

だって、彼は実用性があるものを割りとか好むのだから。

「どれどれ　ふむふむ　うむ、五人ともに素質が高いのは分かる。しかしこれではなんとも言えんな。おんしらは自分のギフトの力をどの程度に把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「僕達はただの」

「突然変異だ」

「うおおおおい？それじゃ話が進まんだらうに。しかも、後ろの二人は突然変異にもほどがあるじゃろ！」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に値札貼られるのは趣味じゃない」

困ったように頭を掻いた白夜叉は、突如妙案が浮かんだようにニヤリと笑った。

「ふむ。何にせよ、主催者^{ホスト}として、試練をクリアしたおんしらには、恩恵^{ギフト}を与えねばならん。ちよいと贅沢だが、コミュニケーション復興の前祝いとしては丁度良からう」

白夜叉がパンパンと拍手を打つと五人の眼前に光輝く五枚のカードが現れる。

カードにはそれぞれの名前と、体に宿るギフトを表すネームが記されていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム^{コード・アンノウン} 〃 正体不明 〃

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム^{いこう} 〃 威光 〃

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム^{ゲノム・ツリ} 〃 生命の目録 〃 ノーフオー

マー 〃

ブラックブルーとライトブルーのコントラストに彩られたカードにカズマ・N・エノ

モト・ギフトネーム^{アルキミア} 〃 錬金術 〃^{アクセラレーター} 〃 加速者 〃

クリームゾンレッドのカードにコーキ・C・マユズミ・ギフトネーム アルキミア 錬金術〃
偽物フエイク・イズ・オーセンティックは本物〃

黒ウサギは驚いたような、興奮したような声で言った。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「お札？」

「商品券？」

「ち、違います！このギフトカードは顕現しているギフトを収納出来る超高価なカード

ですよ！」

「つまり、レアアイテムってことだね」

「レアアイテムなんて物じゃありません！超レアアイテムなんです！」

黒ウサギは、どうにかしてギフトカードの価値を説明している。

「もしかして水樹って奴も収納出来るのか？」

何気なく水樹にカードを向けると光の粒子になってカードの中に呑み込まれた。

「おお？面白いな」

「そのギフトカードは、正式名称を『ラプラスの紙片』即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった『恩恵』の名称。鑑定をせずともそれを見れば大体のギフトの招待がわかると言うもの」

「へえ？じゃあ俺はレアケースってわけか？」

ん？と白夜叉が十六夜のギフトカードを覗きこんだ。

「いや、そんなバカな」

雰囲気尋常ならざるものになった。

「『正体不明』だとありえん、全知である『ラプラスの紙片』がエラーを起こすなど」

「その『ラプラスの紙片』が全知ってことじゃないんじやない？」

「何にせよ、鑑定は出来なかったってことだろ。俺的にはその方がありがたい」

近くでここやり取りを見ていた黒ウサギは、コーキが言っていた『獣になれる、獣のじゃないギフト』について気になり、コーキにギフトカードを見せてもらうことにした。

「あのー、コーキさん。ギフトカードを見せて頂いてもいいですか？」

「ん？別にいいけど」

黒ウサギはコーキからギフトカードを受けとるとさっそくギフトネームを見た。

第7話 錬金術だそうですよ？

黒ウサギはコーキのギフトカードを見て、

「錬金術と偽物は本物・錬金術の方は分かりますが偽物は本物は一体どんなギフトなのでしょうか？」

「そっちが黒ウサギちゃんが勘違いしていたギフトだと思うよ」

「ううくん、名前からして変身系のギフトだと思えますがそれだとチーターに見えるだけですよね」

「うん、だからこのギフトは体の作りを変えて変身するんじゃないの？」

「先程から『思うよ』とか疑問系なのは何故なんですか？」

「なんつて言ったら言いかな。ええつと、まるで呼吸するように当たり前にこの力使っていたからね」

コーキは、こんな風にねって言いながら黒ウサギに変身する。

黒ウサギは、触れようと右手を上げる。

コーキもそれに合わせて左手を上げる。

もし、周りに人がいたら黒ウサギが鏡に触れようとしているようにしか見えないうら

う。

「凄いです。まるで鏡で自分を見ている見たいです！」

「だよね。このギフトってこんなちよつとした芸にも使えるんだよね！」

アハハ笑うと黒ウサギもつられてフフつと笑った。

「ところで、先程からいざよ」「こ、これは、夢・なのか？私は夢を見ているのか？」どうしたのですか？白夜叉様」

いつまにか黒ウサギの隣にいた白夜叉は、まるで奇跡を見たような顔で涙を流していた。

「何で泣いでもぼがッ！」

後半が意味不明になったのは白夜叉がコーキ黒ウサギにダイブして、押し倒したからだ。

「この肌触り、この弾力、そしてこの胸の揉み心地。どれも黒ウサギと全く同じ。黒ウサギが二人。フフ、フホフホホホ！」

スリスリスリスリスリ。モミモミモミモミモミモミモミモミ。

「し、白夜叉ちゃん！ちよ、ちよつとやめつ、ひい！あつ、そこ触らないで。もういい加減にしてッ！」

コーキは白夜叉の頭を掴んで無理矢理カズマ達が集まつてる方に投げた。

水路の時みたいにくるくると縦回転をしていたが今回は誰も受け止めなかった。

「はあはあ、ま、まさか直揉みされるところは思わなかった。黒ウサギちゃんも大変だね。」

「はい、それはもう大変デスヨ」

「とりあえず元に戻って、カズマ何してるんだろ?」

黒ウサギの姿がぐにやりとコーキに戻った。

「何か説明をいっているみたいですね」

黒ウサギとコーキはカズマ、十六夜、耀、飛鳥と今だ地面に倒れたままの白夜叉の所に行く。

「——だ。まとめると、錬金術は理解・分解・再構築の三段階であり、質量保存の法則により質量1の物からは同じ質量1の物しか錬成できず、自然摂理の法則の関係で水属性の物からは水属性の物しか錬成できないってことだ」

「なるほど。俺の知ってる錬金術とは全く違うな」

「ええ、私の知ってる錬金術とも違うわ」

「以下同文」

「あつれ、カズマ。何で十六夜達に錬金術教えてたの?」

「ああ。なんか俺らの世界の錬金術と十六夜達こ錬金術は違うらしいから教えていた」

「違う、錬金術?」

「どうやら、十六夜達が知ってる錬金術は鉛などから黄金を錬成するぐらいしかできないらしい」

「へー、それを聞くと僕たちの錬金術はずいぶん便利だね」

「全くだぜ。結局俺らの世界の錬金術は実在したかもわかんねえしな」

「錬金術は僕らの世界だと当たり前前だけど、ない世界もあるんだね」

とコーキは染々言う。

「さて、カズマ。錬金術に付いての説明はさつき終わつたし、そろそろ実際に見せてくれないよ」

「了解した」

カズマはそう言うとしやがみこみ、小石を拾つて錬成陣を描き始めた。

「これがさつき言った、力の循環を示す円。そして、その中に構築式を描く。これで発動可能だ」

そして、手をパン！と合わせると素早く片膝を突いて錬成陣に掌を打った。

すると、バシィ！と蒼い稲妻が幾つも走り、錬成が始まった。

カズマがゆつくり手を上げていくと、パキ、ペキペキと土が分解され槍へと錬成されていく。

十六夜達から見るとまるで地面から槍を引っ張り出しているように見えただろう。

カズマが刃の部分まで錬成し終わるとどこからともなく拍手が起きた。

「すごいわ、まるで手品みたいね」

「うん、本当に手品みたい」

「すごいです！本当にスゴいです！！このギフトがあれば色んな問題が解決します！！！」

「うむ、そのギフトがさつき説明されたとおりなら、色々なことに役立つだろう」

「なるほど。この窪みが錬成された質量分で土から同じ属性の鉄に変えた。いいぜ、いいぜ、なかなか面白れえギフトじゃないか」

「流星は僕のカズマ！！」

「別に大したことない。そして、俺はコーキの物じゃない」

カズマは、相変わらず淡々と事実を言う。

「いや、大したギフトだぜ、それ。しかし、実戦向きじゃないな」

「実戦向きじゃない？どういふことかしら十六夜君」

「簡単な事だぜ、お嬢様。錬金術を使うには錬成陣が必要だ。つまり、錬成陣を書く時間が必要になる。しかし、相手がそんな時間を与えるわけがない。だから、実戦ではせいぜいトラップや後方支援しかできない」

「あつそんなこと。そこについてはご心配なく」

コーキは肩に掛けていたバッグからショットガンを取り出すとグリップの部分を見

せた。

「ほら、ここに錬成陣が書かれているでしょ。書く時間がないなら書いておけば良いんだよ♪まあ、紙なんかを描いたら破れちゃうからね。だから、こうやって金属製の武器に刻んでいるんだよ」

とコーキは火ネズミが描かれた錬成陣を指差す。

「じゃあ、カズマのその刀も？」

「ああ」

カズマは鞘ごと腰から抜くと刀で言う鰐の部分を見せた。

そこには鰐はなく、シンプルに二重の円の中に六芒星が描かれていた。

「ふむふむ、錬成陣に火ネズミが描かれているとは錬金術の属性は火か？」

「さすが、十六夜君。カズマが土で僕が火。僕の錬金術ってカズマと比べると兵器っぽいんだよね」

コーキはガチャリとリロードするとカズマに向けて引きがねを引いた。

すると、カチンと何かがぶつかかる音がし、火花が発砲された。

カズマがさつと避ける。その火花はチツチツチと走ると50mほど先でボガアン!!と爆発し爆風が吹き荒れた。

「おかしいつ!?絶対今のおかしいつて!!!」

「ああ、あり得ないぜ。あの爆風でミニスカの中が見えないなんてあり得ないぜ」

「フッフ、これこそが黒ウサギが着ているこのミニスカのギフトじゃ!!! 見えてしまえば只の下品な下着達も・見えなければg「これ以上は言わせませんよこの駄神様アアア!!!」

スパーンと白夜叉のセクハラ発言を華麗なツッコミで中止させる黒ウサギ。

そして、他の女子×2＋男子＋αは

「バカだ」

「バカね」

『いきなり爆発するけん、死ぬかと思うた』

「うん、びつくりしたね」

とのこと。

「ええと、今のが僕の錬金術でこのショットガンから火花を飛ばし、目標の場所の酸素濃度を弄り燃焼反応させて爆発させてるんだ」

「便利な術も使い方によつては兵器になるのね」

と言う飛鳥の少し悲しめな言葉でお開きとなった。

第8話 魔王だそうですよ？

暖簾が下げられた店前に移動した、コーキ達は一礼した。

「今日はありがとう。また遊んでくれると嬉しい」

「あら、駄目よ春日部さん。次に挑戦するときは対等の条件で挑むのだもの」

「そのために強くなるから覚悟してよね、白夜叉ちゃん」

「次は渾身の大舞台で挑むぜ」

「ふふ、よかろう。楽しみにしておけ。ただし、黒ウサギをチップに賭けて貰うがの」

「嫌です！」

「了解した。楽しみにしている」

「ダメです！勝手に了解しないでください、カズマさん!!」

「つれない事を言うなよう。私のコミュニティに所属すれば生涯を遊んで暮らせると保証するぞっ」

「さらに三食首輪付きの個室も用意してくれて、棺桶から十字架まで準備してくれるってよ、黒ウサギちゃん」

「三食首輪付きってソレもう明らかにペット扱いですし、死ぬこと前提になってますか

らー！」

怒る黒ウサギ。笑う白夜叉とコーキ。店を出た6人と一匹は「サウザンドアイズ」の支店を後にしようとした

「おい、カズマ少し待て」

が一番後ろにいたカズマは白夜叉に呼び止められた。

「何？」

「おんしは、もう一つのギフトについて何も言わなかったがどのような力か分かっているんじゃない？」

「名前のまんまの単純な能力だ。それがなにか？」

「いや、別に。分かっていると云うんならなんでもない。呼び止めて悪かったのう」

「別に。それじゃ」

「今度、お茶でも飲みにくるがいい」

「了解」

と言うとカズマは、黒ウサギ達を走って追いかけていった。

半刻ほど歩くと「ノーネーム」の居住区の門の前に着いた

「この中が我々のコミュニティでございます。しかし本拠の館は入口からさらに歩かね

ばならないのでございませう。この近辺はまだ戦いの名残がありますので

「戦いの名残? 噂の魔王様との戦いか?」

「は、はい」

「ちようどいっわ。箱庭最悪の天災が残した傷痕、見せてもらおうかしら」

黒ウサギは躊躇いつつ門を開けた。

「つ、これは」

「予想の斜め上だね」

十六夜は木造の廃墟の残骸を手取る。

少し握ると、乾いた音を立てて崩れた。

「おい、黒ウサギ。魔王のギフトゲームがあつたのは、今から何百年前のことだ?」

「僅か三年前のことですぞいませう」

「ハッ、そりや面白いな。いやマジで面白いぞ。この風化しきつた街並みが三年前だと

?」

「常識なら、あり得ないね。普通なら、膨大な時間をかけて自然崩壊したつて言うけど

」

・白地の街路は砂に埋もれ、木造の建物は腐り落ち、鉄筋や針金は錆びて折れ曲がり、街

路樹は石碑のように枯れていた。

とても三年前まで人が住み賑わっていたとは思えなかった。

十六夜は、唐突にカズマ達に話しかけた。

「なあ、お前ら。お前らの錬金術でこの廃墟を直すことって出来ないのか？」

「ん？まあ、出来ないこともないけど。」

「本当ですか!?直してください!!!お願いします!?!」

さっきの暗い空気から一転して黒ウサギは目をキラキラさせてカズマ達に頼み込む。

「断る」

しかし、返ってきた答えは否だった。

「何でですか!!!?何でダメ何ですか、カズマさん!!!」

「そうよ。ダメならダメで理由を説明しなさいっ!!」

「なら、逆に質問する。『ノーネーム』は今、住む場所もないのか？」

「いえ、ありますけど。それがどうしたと言うんですか!?!」

「なら、必要ない。断る」

そう言うトスタスタとカズマは本拠に向かって歩き出した。

「ちよつと!!カズマ君っ!!?待ちなさい!!!」

飛鳥の静止の声も聞かずカズマは歩いていった。

「まあまあ。飛鳥ちゃんも黒ウサギちゃんも怒らないですよ。カズマだってちゃんと考え

「言ってるんだからさ」

「でも、理由を説明してくれませんかと納得出来ません!!」

「そうよ。説明してくれないとわかるわけじゃないじゃない!」

「少しは、落ち着け二人とも。俺は、カズマが断るのが当たり前だと思うぜ。なぜなら、

『住む場所もないのか?』って質問に駄ウサギは『NO』と答えたからだ」

「もつと詳しく言おうと、今『ノーネーム』の財政はかなり厳しい。なのに使わない建物を復活させても維持費と労働力だけがかかるだけじゃん。正直言つて無駄。だから、カズマが断るのは当たり前だよ」

「確かに冷静に考えるとコーキさんの言う通りですし、カズマさんの質問の意味をわかりました」

「どうやら黒ウサギは正気に戻ったようだ。」

「でも、やつぱりちゃんと言ってくれないとわからないわ」

飛鳥は不満げに言った。

「まあ、それがカズマですから。ってね!」

まあ、確かに慣れてない人には自分勝手とか冷酷とかに見られがちなカズマだけど、本当は優しくいい奴だから、カズマと仲良くしてやって下さい。お願いします」

コーキにしては珍しく真面目に言い、頭を下げた。

「おいおい、コーキ。頭を上げろよ、俺は初めからそのつもりだぜ」

「そうですよ、コーキさん。コミュニティの仲間同士仲良くするのは当たり前です！」

「ふん。頭を下げられたら断るわけにいかないわね」

「うん、私ここに友達を作りに来たから。カズマと友達になりたい。あと、何だかコーキってカズマの親みたい」

「ハハハ、その逆はよく言われるんだけどね」

さて、と黒ウサギが手をパンと叩いた。

「それでは、一段落しましたし、本拠に向かいますよう！」

そして、五人と一匹は本拠へと歩き出した。

〃ノーネーム〃・居住区画、水門前

そこには、ジンとコミュニティの子供達に囲まれているカズマがいた。

「あ、皆さん！水路と貯水池の準備は調っています！」

「ご苦勞様ですジン坊ちゃん♪皆も掃除を手伝っていましたか？」

ワイワイとカズマを囲んでいた半数子供達が黒ウサギの元に群がる。

「黒ウサのねーちゃんお帰り！」

「眠たいけどお掃除手伝ったよ!」

「ねえねえ、新しい人達って誰!」

「あのお姉ちゃん名前なんていうの?」

「強い?!カッコいい!」

「YES!とても強くて可愛い人達ですよ!皆に紹介するから一列に並んでください
ね」

パチンと黒ウサギが指を鳴らすと子供達が横一列に並ぶ。

数は20人前後、中には猫耳や狐耳の少年少女もいる。

(マジでガキばつかな。半分は人間以外のガキか?)

(**じ**、実際に目の当たりにすると想像以上に多いわ。これで6分の1ですって?)

(**。**私、子供嫌いなのに大丈夫かなあ)

(**猫**耳、**犬**耳、**狐**耳。何ここ夢のケモミミ天国?)

(**変**態発言だ、コーキ)

(ちよつと、心の中まで突っ込まないでよ)

(そう言う問題かしら)

何故か心で会話が出来るカズマとコーキと飛鳥。

そんなことはさて置き、自己紹介が順に始まりカズマの番が来た。

「次は、カズマさん。フルネームはカズマ・N・エノモトと言い、ギフト錬アルキミア金術を使う錬金術師さんです♪」

ちなみに黒ウサギはカズマのギフトカードを見たわけではないのもう一つあることを知らない。

「ねえねえ、黒ウサのねーちゃん。この人って女の人だよね」

「違うわよ。この人は男の人よ」

「ええー、違うってば。お姉ちゃんだよ」

「お兄ちゃん」

「お姉ちゃん」

「むー」

どうやら、男子からは女に女子から男に見えているようだ。

「ぷぷっ!?!いや〜カズマも大変だねwww」

「さつきも囲まれている時、男子対女子の口論になった」

「何で男だつて言わないんだ?」

「言ったら、『絶対嘘だー。嘘付かないでよ、お姉ちゃん』って言われた」

「なるほど。本人の意見など、どうでもいいってやつか」

そんなこんなと話しているうちに黒ウサギが事態を収集させた。

「ゴホン、さて最後はカズマさんと同じ錬金術師のコーキ・C・マユズミさんです」

「ヤツホー、皆。僕の名前は、コーキ・C・マユズミ。コーキって呼んでね★

皆とは、早く仲良くなりたいたいから気軽に声をかけてね♪ああ、それと名前が日本人なのに姓と名が逆なのは作者のせいだから。そのところ、よろしくね」

「「よろしくお願ひします」」

と子供達は元気な大声で叫ぶと自己紹介は、終了した。

そのあと水樹を台座に乗せたり、十六夜が濡れかけたり、カズマが水路に突き落とされたりした。

屋敷に着いた頃には既に夜中になっていた。

五人は箱庭やコミュニティの質問よりも『風呂に入りたい』という強い要望により、黒ウサギは湯殿の準備をする。

五人はそれぞれに宛がわれた部屋を一通り物色し、貴賓室に集まっていた。しばらくすると

「ゆ、湯殿の準備が出来ました！女性様方からどうぞ！」

「ありがと。先に入らせてもらおうわよ」

「お好きにどうぞ」

「俺は二番風呂が好き男だから問題ねえよ」

女性三人は真つ直ぐに大浴場に向かう。

見えなくなると

「さてと、ここはベタに行こうと」

大浴場に向かつて行こうとするコーキ。

しかし、カズマにフードを捕まれた。

「じゃ、冗談だよ。別に覗こうなんて思っていないから離して」

「拒否、却下、断る」

「ヤハハハ、バレバレだぜコーキ。さて、俺は今のうちに外の奴らと話してくるぜ。お前

らは、どうする?」

「パス」

「十六夜君に任せた!」

「オーケイ、任されたぜ」

「はー、今日は本当に疲れたよカズマ」

今この貴賓室には、カズマとコーキしかない。

「同じく」

カズマは、肘掛けに足を置いてソファで横になっている。

「ハハ、やつぱさそうだよね。いきなり異世界に呼ばれたし」

と言いながらコーキは窓から外をみる。

「でも、つまらなくなさそうだ」

「何ソレ、十六夜君の受け売り?」

「半分は本心だ」

「アハハ。でも、結局国家資格取れなかったな」

「別に国家資格にこだわる必要ない」

「おつ、カツコいいこと言うね。まあ、確かにそうだけど」

「諦めろ」

「あのねー、皆が皆カズマみたいに感情のコントロールが出来ないじゃないんだよ」

「どうでもいい。風呂が空くまで寝てる。空いたら起こせ」

「もう、カズマったら。でもしようがないよね。こんなに人と関わったの久しぶりだし

ね」

「そうだな」

「それじゃ、お休みカズマ」

「ああ、お休み」

と言うとカズマはすぐに寝てしまった。

第9話 初めてのゲームですよ？

『よオ、錬金術師。ここに来るのは初めてだなア』

「誰だ、お前」

『オレかア？オレは、~~××~~だ』

「そう。それで何か用~~※~~」

『愛想のねエ奴だなア、まったく』

「で、用はなんだ？」

『別に用って用はねエが質問だよ。質問』

「何だ？」

『この世界を楽しんでいるかア？』

「この世界？」

『箱庭だよ。箱庭』

「別に、退屈はしなさそうだ」

『そオかい、そオかい。感情が薄いお前からそれが聞いただけ良かったよ』

「何故俺のことを知っている？」

『答えは簡単だ、オレが××だからだよオ錬金術師。おおっと、そろそろ時間だぜ錬金術師』

「時間？」

『最後に言つとくが、錬金術師お前がここに居れるのはオレの力つてことを忘れるなよオ』

カズマは自室のベッドの上で目覚めた。

箱庭二一〇五三八〇外門。ペリベット通り・噴水広場前。

参加者である4人と観戦者＋審判の3人と一匹は、〃フォレス・ガロ〃の居住区に向かう途中〃六本傷〃の猫店員から「二度と不義理な真似が出来ないようにしてやってください！」と熱烈なエールと「舞台区画ではなく、居住区でゲームを行うらしいんですよ」と言う情報を教えてもらった。

「ねえ、カズマ。なんか考え事？」

「別に。ただ眠い」

「？」

ジンはカズマの顔を見るが昨日と同じ無表情だ。

「コーキさん。カズマさんは何か考え事をしているのですか？」

「ん？ああ、ジン君はまだあつて1日しか経ってないからわからないと思うけど何か考
えてるみたい」

ちなみにコーキのフレンドリーな性格もあつてジンとコーキはすぐに打ち解けてい
た。

「あ、皆さん！見えてきましたけど、」

黒ウサギは一瞬、目を疑った。

他の（カズマは居眠り中）メンバーも同様。

それもそのはず、居住区が森のように木々が生えているからだ。

鬱蒼と生い茂る木々を見上げ、耀は呟く。

「ジャングル？」

「フオレス・ガロ」だけに？」

「虎の住むコミュニティだしな。おかしくはないだろ」

「Z z z z z」

「いや、おかしいです。つてカズマさん寝ないでくださいっ!!今から、ギフトゲームです

よー!

寝てない」

「いや、バッチリ寝ていましたよね!?『Z z z z z』つて上に書いていますし」

● そんな黒ウサギたちに対しジンは木々に手を伸ばす。

● その樹枝は生き物のよう脈を打っていた。

「。。。。鬼化”してゐる？いや、まさか」

『ギフトゲーム名 “ハンティング”

・ プレイヤー一覧 久遠 飛鳥

春日部 耀

カズマ・N・エノモト

ジン＝ラツセル

・ クリア条件 ホストの本拠内に潜むガルド＝ガスパーの討伐。

・ クリア方法 ホスト側が指定した特定の武器でのみ討伐可能。指定武器以外は ”

契約”^{ギアス} によってガルド＝ガスパーを傷つける事は不可能。

・ 敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・ 指定武器 ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、”ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

『 フォレス・ガロ”印』

「さて、それじゃあゲームスタートといきましょうか」

「視界が悪い」

「大丈夫。近くには誰もいないし近くに來たら匂いで分かる」

「あら、犬にもお友達が？」

「うん。二十匹ぐらい」

耀のギフトは獣の友達が多いほど強くなるらしい。だから身体能力や五感がかなり優れている。

「詳しい位置は分かりますか？」

「それはわからない。でも風下にいるのにわからないから、多分建物の中に潜んでいると思う」

「ではまず外から探しましょう」

4人は森の散策を始めた。

奇妙な木々は家屋を呑み込んで成長したらしく、住居等はほとんどが枝や根に食い破られている。

散策する二人とは別に、耀は高い樹からカズマは樹から樹へと飛び移りながらガルドを警戒している。

「ダメね。ヒントも見当たらないし、武器らしい武器も見つからないわ」

「もしかしたらガルド自信がその役目を担っているのかもしれない」
そうなる状況はかなりやつかいだ。

武器がなければこちらが一方的に攻められる。

リスクの低い一撃離脱を狙うなら、耀の力に頼るしかない。(カズマは「契約」により剣術を使っても意味がない)

「気が乗らないけど、方針を変えましょう。まずは春日部さんの力でガルドを探して」
「もう見つけてる」

耀は樹から飛び降りると残骸が残る街路を指し、

「本拠の中にいる。影が見えたんだけど、目で確認した」

耀の瞳は普段と違い、猛禽類を彷彿させる金色になっている。

三人が警戒しつつ本拠の館へ向かっていると樹の上からカズマが飛び降りてきた。

「あら、カズマ君。何処に行っていたの？ガルドなら本拠にいるわよ」

「確認した。向こうもこちらに気が付いてる。待ち伏せされてると考えた方がいい」

「なら、中に入る順番とかを決めた方がいいわね」

「ところで、錬金術は使えるの？」

「一応。でも、時間稼ぎぐらいにしか役にたたない」

「大丈夫。その間に私が武器を奪うから」

「見てください。館までも呑み込まれています」

作戦会議をしているうちに「フォレス・ガロ」の本拠についた。

「ガルドは二階にいたから、入っても大丈夫」

中も酷いありさまだった。

高級そうな家具は打ち倒されて散在している。

四人は、瓦礫を掘り返してみたりしてみたがヒントらしいものも武器もなかった。

「二階に上がるけど、ジン君。貴方はここでまってなさい」

「ど、どうしてですか？ 僕だってギフトを持っています。足手まといには」

「違う。上で何が起きてもいいようにジンには、ここで退路を守って欲しい。だよな？

飛鳥」

「ええ。春日部さんの言う通りよ」

もっともな答えだったがジンはそれでも不安だった。

飛鳥と耀は根に阻まれた階段を音を立てずに上がっていく。

先に素早く上がっていたカズマは、扉に耳を当てて中を窺っている。

そして、意を決して三人が勢いよく飛び込んだ瞬間

「GEEEEEEYAAAAAaaaaaa!!」

言葉を失った虎の怪物が、白銀の剣を背に立ち塞がった。

門前で待っていたコーキと黒ウサギ、十六夜の元に獣の咆哮が届く。

「い、今の凶暴な叫びは？」

「ああ、間違いない」

「耀さんが虎のギフトを使ったんでしよう」

「あ、なるほど。ってそんなわけないでしょう!? しかもコーキさんは、私に化けないでくださいー!」

「テへ☆」

「可愛くしてもダメです!!」

ウサ耳を逆立てて怒る黒ウサギ。

笑顔で小首を傾げる黒ウサギ。

両方の黒ウサギを見比べた十六夜は

「うむ、コーキの方が可愛いな。本物のウサギさん、マジ駄目だな」

「せめて聞こえないように言ってください! 本気で凹みますから!」

ペシペシと叩く黒ウサギ。

その後ろで “YES! ウサギが呼びました!” のポーズをとる黒ウサギ（偽物）。

その完成度に手を叩く十六夜。

そんな漫才のような空気の中でも黒ウサギ（本物）は、ハラハラしながら無事を祈っていた。

目にも留まらぬ突進を仕掛けるガルドを受け止めたのは、一番前にいたカズマだった。

辛うじてガルドの突進を受け流したカズマは、飛鳥に向かって叫んだ。

「逃げろー！」

ガルドの姿は先日のワータイガーではなく、紅い瞳を光らせる虎の化物になっていた。

階段の下にいたジンがガルドの姿を見るや否や、彼に何があったかを理解した。

「鬼、しかも吸血種！やっぱり彼女が！」

「つべこべ言わず逃げるわよ！」

飛鳥はジンの襟を掴んで階段から飛び降りる。

「ま、待って下さい！まだカズマさんと耀さんが上に！」

『いいから逃げなさい！』

飛鳥の命令に、ジンの意識は津波に巻き込まれたように途切れた。

そして、ジンは飛鳥の手を握ると、

「一気に逃げます」

「え？」

飛鳥を腰から抱きかかえ、もうスピードで走っていく。

「ちよ、ちよつと」

飛鳥は抱きかかえられたまま鬱蒼と生い茂る木々を抜ける。

それはいいが、本拠から必要以上に離れるのは計算外だった。

「もういい、もういいわ！『今すぐ止まりなさい！』」

「はい。あれ？」

ジンは我に返ったように足を止めた。

「わ、わ！」

「きゃ！」

ジンは力が向けたように後ろへ倒れる。

飛鳥を支えきれずに倒れたのだ。

「ちよつと、失礼ではなくて？」

「す、すみませんすみませんすみません！自分でも信じられないぐらい力が溢れて」

飛鳥はとりあえずこの話を置いておくことにしてさっきのことを話す。

「ガルドが守る白銀の十字剣・吸血鬼と化したガルド。間違いありません。指定武器

は、その白銀の十字剣です」

「はい。元々ガルドは、人間・虎・悪魔から得た霊格、その三つのギフトから成るワータイガーです。ですが吸血鬼によって人間から鬼種に変えられたのでしよう」

つまり、ガルドが虎の姿をしていたのは人間のギフトを鬼種に変えられたからだ。

「もしかしてこの舞台を用意したのも」

「ま、まだ吸血鬼かどうかは分かりません。でも、黒幕がいる可能性はかなり高いです」

「そう、誰だか知らないけど、生意気なことをしてくれたものね」

不機嫌そうに飛鳥が顔を背けた時、二人のそばの茂みが揺れた。

「誰？」

「私」

「とカズマ」

茂みから出てきたのは、血だらけ耀を左腕で抱えたカズマだった。

二人は血を流す耀の右腕を見るや悲鳴のような声を上げた。

「か、春日部さん！大丈夫なの!？」

「大丈夫じゃない。凄く痛い。本気で泣きそうかも」

そう耀が言うとかズマは、ゆっくり横に寝せた。

そして、よく見るとカズマの右手には白銀の十字剣が握られていた。

「まさか、剣を奪おうとして。」

「本当は倒すつもりだった。せつかくカズマにも手伝ってもらったのに。油断した。」

「ごめん」

耀はそう言うのと完全に気を失った。

「ま、まずい！傷そのものよりも出血が！このままだと。」

出血多量で死んでしまう。しかし、応急処置をするにもなにもない。

飛鳥は悔しげ立ち上がる

「今からあの虎を退治してくるわ。ジン君はここで待つてなさい。十分で戻るわ」

髪を結んでいた二つのリボンを解き、ジンに渡した。

「カズマ君。悪いんだけど、その白銀の十字剣を譲ってもらえないかしら？」

カズマは頷きもせず、右手の剣を前に出す。

飛鳥は、それを掴もうとしたがカズマが剣をヒョイツと右横に動かしたため受け取れなかった。

今度は右横に手を伸ばしたがまた同じ移動させられる。それを何度も繰り返した。

「いい加減にしてツ！遊んでいる暇なんてないのよ!!今がどんな状況かわかっているの!？」

「お前は、何故この剣が必要なんだ？」

「そんなのこのゲームを早く終わらして春日部さんを治療するために決まっているじゃないッ!!!」

「本当にそれだけか？」

「何よっ！他に何かあるって言うのよっ!?」

「後悔、罪悪感、罪滅ぼし」

「っ!？」

カズマは、淡々と事実を飛鳥の心理を述べていく。

ジンは先に飛鳥のリボンを耀の傷口にしっかりと巻くとカズマを止めようとした。

が、そこでジンは違和感を感じた。

先ほどからの言い合い（今は飛鳥が必死に否定している）を第三者目線で見たから気がついたのだ。

カズマの言葉、そして動きまでも空虚に感じた。

カズマの動きに意志がなく、言葉は無感情ではなく無機質に聞こえる。

瞳も飛鳥を見ているようで、ただそこに眼球を向けているだけに見える。

そう、まるで機械のように人形のように空っぽのように見えた。

「素人が使ツタトコロデ殺セナイ。マシテヤソンナ心理状況デ冷静ナ判断モデキナイ」

「そんなことないわっ!!!」

「久遠、言ッテオクガ俺ハ優シクナイ。ダカラ、オ前ノ罪滅ボシニ付キ合ワナイ」
そう言い捨てるカズマは本拠に向いて歩き出すと消えた。

ガルドは、森を駆けていた。獣として。

ガルドは、吸血鬼として一番近い血の臭いに導かれた。

「結局は獣と言うことだな。動きが単純」

獣は足を止めた。警戒心からではない。

標的の白銀の十字剣に対して恐怖した。

「.....」

カズマは白銀の十字剣を腰を落とし、片手で構えた。

「GEEEEYYYYAAAAAaaa!!」

鬼種を持つガルドは豹よりも遙かに速い踏み込みで襲いかかった。

正面から飛び込んだガルドに、同じく真正面から飛び込むカズマは、
アクセラレート
「加速」

と呟いた。

その瞬間カズマの動きはガルドの目にも、消えたとしか言いようがないほどに加速した。

「ゲームセット。俺たちの勝ちだ」

という言葉が聞こえた時にはカズマはガルドの後ろにいた。すぐに振り向こうとしたが、気づいていなかった。

頭と体が離れていたことを。

悲鳴一つあげる暇もなかった。

痛みを感じる暇もなかった。

ただ、気づいた時には死んでいた。

それが虎の怪物になってしまったガルドの最後だった。

第9・5話 Re : k a z m a

ガルドとのギフトゲームから数時間後

ジンは、ノーネーム本拠の大浴場に一人浸かりながらガルドとのギフトゲームの後のことを思い出していた。

あのあと、すぐにゲームがクリアされたと通知が来た。

カズマが終わらせたのだ。

そして、耀の怪我を心配した黒ウサギと十六夜十コーキが駆けつけた。

黒ウサギは耀を見るや、いな直ぐに本拠の治療系ギフトで治療することを決め、担いで本拠に向かおうとした。

その時、意外なことにコーキが自分は医療系の錬金術が使えるし知識もちゃんとあるから着いていくと言った。

ジンも大まかな錬金術の原理を聞いていたがまさか医療にまで使えることと自分と4歳しか離れていないのに医療の知識があることに驚いた。

人は見かけによらないとは、このことだった。

カズマはコーキにタクシーの代わりに使われ、コーキをおんぶして黒ウサギと同じ速さで駆けていった。

飛鳥は、耀を心配しながらぶつぶつとカズマへの文句を呟いていた。

「そんなちよつとしたやり取りは、色々あったが一番大変だったのは、フオレス・ガロに奪われた『名』と『旗印』をそれぞれのコミユニティに返す時だった。

十六夜がいきなり『名』と『旗印』を返還すると言った時には自分までパニックになりそうだった。

でも、ちゃんと自己主張もしながら返すことが出来たから、これで名前も広がったと思う。

とりあえずは、成功でいいかなとジンは思った。

丁度そんな感じで思考を締めくくった時、ガラツ!!と浴室の扉が開けられた。

十六夜さんかなつと思つてジンが見るとそこには、

「あつ、ジン君。お風呂入つてたんだ」

笑顔のコーキがいた。

「あ、コーキさん。どうも、お疲れ様です」

「お疲れー。今日はジン君も頑張つたね！立派だったよ。さすが、リーダー」

軽く挨拶を交わしながら、コーキは湯船に浸かった。

「いえいえ、僕なんか。ほとんどは、十六夜さんがしてくれたことですし」

「謙遜しないでいいよ。ジン君はジン君の仕事をしたんだから、もつと自信を持ちなよ」

「えつと、その、そうですかね。そうだといいな」

あははつと笑うジン。

「でも、コーキさんだつてすごいですよ！その歳で医療の知識があるなんて」

「確かに年齢で見ればそうかもしてないけど、基本的なことしかわかんないよ」

「それでもです！あつ、コーキさんつて内科じゃなくて外科ですよね？」

「うん、まあ。一応、内科の知識もあるよ！」

「なら、これから病気や怪我をしても安心ですね」

「いや、出来れば怪我也も病気もしない方がいいんだよ」

「それもそうですね」

あははつと二人揃つて笑つた。

コーキは、本当に話しやすい人だなつとジンは思つた。

「そう言えば、コーキさんがカズマさんと幼なじみなんですよね？」

「うん、そうだよ。小さいころからの付き合いだよ。で、何々？カズマの何が知りたい

の?。」

「え、いや、大したことじゃないんですけど。」

と言うとジンはガルドとのギフトゲームで感じた違和感についてコーキに話した。

「なるほど。カズマらしいって言えばカズマらしいね。その言い合い。カズマって根っから理性型だし。」

ああ、でカズマが人形みたいだった?。」

「はい、僕にはそう見えましたが」

「うーん。どうしよつかなく?別に言ってもいいんだけどね」

コーキは唸りながら考えている。

ジンとしては、その違和感の原因が分かるのなら知りたかった。

単純な好奇心としても。仲間としても。

「まあ、いいかな。ジン君もコミュニケーションのリーダーだし。でも、絶対に秘密だよ」

「はい、絶対に誰にも言いません」

コーキは、一時真剣な顔でジンの顔を見たあといつもの笑顔で話初めた。

「実はね。カズマ・N・エノモトって人間は今から3年前に死んでいる」

◇◇◇

「えっ、意味がわからないって?まあ、そうだよね。順番に話すから待つてね

「僕達は、"アメストリス国"のセントラルシティの少し南のそれなりに栄えた町に産まれたんだ

「ああ、セントラルシティって何？って言われたら、そっちでいう首都って奴かな

「僕とカズマの家は、隣だったから小さいころから兄弟のように遊んでいたんだ。親同士も仲良かったしね

「その頃のカズマは、可愛かったな。人見知りでよく知らない人がいると僕の後ろに隠れていたんだよ

「想像出来ないって？そりやそうだよ。今のカズマと違って感情表現豊かだし

「ここだけの話。実は、カズマって町中の同年代男子を振った功績を持つてるんだwwww

「だよね。いくらカワイイからって同性に告白するなんてね。でも、しょうがないよ。だって、皆知らなかつたんだもん。カズマが男子だってwwww

「ああ、ゴメンごめん。話が脱線したね。えーと、カズマが5歳の時、だったかな？カズマって急に倒れて病院に連れて行かれたんだ

「その結果心臓の病気でいつ発作が起きるか分からないって言われたんだ。でも、発作が起きない間は普通の生活をしていいって言われたから入院はしなくてすんだんだよ

「うん、まあ、確かに心臓に負担が掛かる運動は出来るだけしないようにしていたけど、

とりあえずは日常を過ごしていたよ

「でも、時が経つにつれて発作が起きて入院することが多くなつていったんだ。あの時は、よく病院にお見舞いに行つていたよ。それで、学校のこととかくだらないことを話してカズマが笑つてそれなりに楽しかつたな」

「でもね。楽しい時間には、終わりがあある。いや、楽しい時間だけとは限らないね。『1歳の時、カズマは学校で発作が起きたんだ。その時は、放課後で僕とカズマしか教室にいなかったから慌てて先生を呼びに行こうとしたんだ

』だけどね。だけどね。さつきまで苦しんでいたカズマが身動き一つしなくなつたんだ。ねえ、ジン君。それが何を意味をするか分かるよね？」

「そう、死んだんだ。カズマ・N・エノモトは、死んだんだ

「そのあと、僕の泣き声に気づいた先生が一応病院に連れつてたんだけど、僕には結果は見えていた。」

「だけど、カズマは生きて帰つてきた

「え？ 僕の勘違いだったんじゃないかって？ いや、それはない。あの時確かにカズマは死んだ

「まあ、もうすぐ終わるから最後まで聞いて。帰つて来たカズマは、僕の知っているカズ

マジじゃなかった

「記憶とかそう言うのは、ちゃんとあるんだけど感情が無くなっていったんだ

「いや、正しくはリセットされたって考えた方が良いね。ゼロだったんだ。完全な無。笑うこともない。」

「まるで、記憶はそのまま初期化した魂を入れたみたいだったんだ

◇◇◇

ジンは、ここまでの話を聞いて一つの仮説を立てた。

カズマの死体に何かが憑依して、今のカズマがいるんじゃないかと。

死体に憑依する話など、伝説や昔話ならよくある話だ。

ウンウン唸りながらこの仮説に根拠を着けようとした。

そこで、気がついた。

いつの間にかコーキが真面目で悲しそうな顔からいつもに笑顔を通り越してニタニタして見ていることを。

「ええくと。どうかしましたかコーキさん？」

「いやー、別にー。僕の作り話を真に受けたジン君がウンウン唸りながら考えているなーって思ってたwwww」

「え？作り話？全部嘘だったんですか？」

「そうだよ。ああ、ゴメンね。全部ほら話だよ」

「な、な、それじゃあ真面目に聞いてた僕がバカみたいじゃないですか?!?!」

「だねー。面白かったよ。ジン君がカズマについて悩んでいる姿とか笑いこらえるの大変だったんだよwww」

口元を押さえて笑うコーキ。

「ムー。いくらコーキさんでも酷すぎます。僕で遊ばないでください」

ジンは、プイツとそっぽを向いた。

「おつ、ジン君が拗ねた!カッワイイ」

「うるさいデスヨ。コーキさん」

と言うとジンはコーキから距離をとった。

「まあまあ、そう怒らないでよ。僕だって悪気しかなかったんだから」

「なら、しかたありま、って悪気しかないんじゃないですか!!!」

「ナイスツツコミ。黒ウサギちゃん並みのツツコミセンスがあるね!」

「もう、いいデス。話になりません」

この時、ジンは黒ウサギの苦労を身をもって知った。

今度、休暇をあげないと。

ジンは、そう思った。

第10話 吸血姫様が来るそうですよ？

「ノーネーム」談話室

耀の見舞いの後、十六夜・カズマ・黒ウサギ・コーキはソファアールで寛いでいた。

「春日部の傷、2〜3日で治れば治るって？流石は箱庭ってことか」

「YES♪ただ出血が酷かったので、増血を施しました」

「いや、ほんと箱庭って凄いや！増血っていつでもあんな量をカバール出来るなんて聞いたことない!!」

「そーいや、お前その歳で医者知識あるんだったな」

「まあね！これでも医療免許を取れるぐらい凄いや☆」

「最小の医者」ボソツ

カズマが本を読みながら呟いた。

「シヤアア！」

とコーキは、意味のわからない威嚇をしている。

「おい、黒ウサギ。例のゲームはどうなった？」

二人のやり取りを苦笑しながら見ていた十六夜が質問した。

一応、この談話室で仲間が景品に出されるゲームについて話していた。

初めは、十六夜が参加する話だったがいつの間にかカズマとコーキも一緒に参加することになっていった。

いわゆる、道連れである。

その事を二人が知ったのはついさっきだ。

黒ウサギは、十六夜+道連れが参加してくれると喜んでいたが申請から帰ると一転して泣きそうな顔になっていた。

「ゲームが延期？」

「はい・申請に行った先で知りました。このまま中止の線もあるそうです」

黒ウサギは、ウサ耳を萎れせ落ち込んでいる。

「どうやら巨額の買い手が付いてしまったそうで」

コーキは座ってるカズマの頭に顎を乗せ、つまらなそうに呟いた。

「うわー、ないわー。ホストとしてのプライドとかないのかな」

「チツ、同感だ。出した景品を取り下げるなんて、所詮は売買組織ってことかよ」

「別におかしいことじゃない。確か「サウザンド・アイズ」の仕組みは、半分が白夜又みたくないな直轄幹部。

もう半分が傘下のコミュニティの幹部だ。大方、今回のゲームは後者の方が主催なん

だろう」

カズマは相変わらず、淡々と推測を言う。

「YES、カズマさんの言う通り今回の主権は傘下側の幹部 “ペルセウス” です」

「えっ、 “ペルセウス” ってあの有名な?」

「はいな。その “ペルセウス” です」

「マジかよ。ペルセウスのゴーゴン退治って言ったたらかなり有名な話だぞ、オイ。ペルセウスってのは、そんな腐った奴なのか?」

「ああ、違う。今の “ペルセウス” のリーダーは二代目らしい」

「先ほどから気になっていたのですが、カズマさんは何故そんなに詳しいのですか?」

「本に書いてある」

カズマは読んでいた本を黒ウサギに見せながら言った。

「今の “ペルセウス” が腐ってることは、分かったが景品だった仲間ってどんな奴だ?」

「まさか、金髪でロングヘアーで頭にリボンを着けてる美少女?」

「YES♪スーパープラチナブロードの超美人さんです!特に湯浴みの時に濡れた髪が星の光でキラキラしてキレイって、何故コーキさんはレティシア様のお姿を知ってるんですか?」

「いや、だっているもん」

コーキは相変わらず本を読んでいるカズマの隣を指差す。

そこには美麗な金髪を特注のリボンで結び、紅いレザージャケットに拘束具を彷彿させるロングスカートを着た少女が優雅に紅茶を飲んでいた。

「やあ、黒ウサギ。久しぶりだな」

「あ、どうもお久しぶりです。つて、レ、レティシア様!?!いつからいらしたのですか?!?!」

「うむ、先ほどからだ。あと、様はよせ。今の私は他人に所有させる身分だ」

「コーキさんもカズマさんもレティシア様がいらしゃっていただけなら教えてくださいよ
！」

「ええ、鈍い黒ウサギちゃんがいけないと思うよ。こんなに堂々としたのにねえ?」

「まあ、確かに。あそこまで気づかないとは、鈍いにもほどがあるぞ黒ウサギ」

「鈍ウサギ」

「レティシア様まで。いくらなんでも酷いです」

ウサギ耳を萎れせる黒ウサギ。

十六夜の存在に気がついたレティシアは、彼の奇妙な視線に小首を傾げる。

「どうした? 私の顔に何か付いているか?」

「いや、前評判通りの美人。いや美少女だと思つてな。お前らもそう思うだろ?」

「だね。目の保養するなら今だね十六夜君!」

「おつ、分かつてんじゃねえか！」

十六夜達の回答は真剣だったが、レティシアは心底楽しそうな哄笑で返す。

「ふふ、なるほど。君が十六夜か。白夜叉の言う通り面白い男だな。しかし、観賞なら黒ウサギも負けてないと思うぞ」

「あれは愛玩動物なんだから、観賞するより弄つてナンボだろ」

「ふむ。否定はしない」

「否定してください！」

黒ウサギは口を尖らせて怒る。

「レティシア様と比べたら世の女性のほとんどが観賞価値すらない女性でございます。

黒ウサギだけが見劣るわけありません」

「いや、全く負けちゃいねえぜ？ 違う方向で美人なのは否定しねえよ。好みで言えば黒

ウサギの方が断然タイプだからな」

「。そ、そうですか」

不意打ちの言葉に思わず頬とウサ耳が紅くなる黒ウサギ。

「黒ウサギ。まさか私は無粋な事をしたか？ 逢引きの最中だったとか」

「実は、そうなんだよ。今、黒ウサギちゃんは十六夜君に夢中で今もイチャイチャしてる

途中だったんだよwwww」

「しかも、今黒ウサギの腹に俺たちの子供が。」

「いません！勝手に捏造しないでください!!このお馬鹿様ああああああ!!!」
スパパーンつとウサ耳をさつきより紅くしながら叩く黒ウサギ。

「フフフ、そうか。結婚式には呼んでくれよ」

「レテイシア様まで乗らないでください!」

ここで、紅茶を一口飲むとコーキが話題を変えた。

ちなみに紅茶は、カズマが全員入れている。

「ねえ、白夜叉ちゃんから僕のこと聞いてない?」

「君は、確か高性能な変身系ギフトを持っていると聞いている」

「おっ、やっぱりそこだね。僕、一発芸やりまーす!『いいいいやほおおお!胸を揉ませろ黒ウサギイイイ!!!』」

コーキは、一瞬で白夜叉になるとソファアの向かいに座っていた黒ウサギに胸目掛けてダイブした。

が、カズマが読んでいた本を投げ打ち落とされた。

「ゴフウ!カズマ何故邪魔をするのじゃ!」

「黙れ変態」

カズマは絶対零度の瞳で白夜叉(コーキ)を見下ろしながら言った。

「これは驚いた。一瞬本当に白夜叉が来たのか思ったぞ」

レティシアは拍手をしながら感想を述べた。

「アハハハ、カズマさんありがとございます」

本を取るために立ったカズマにさっきのお礼を言った。

カズマは、本を回収すると同じ場所に座り本を開いた。

そこで、さっきからレティシアに見られていることにカズマは気づいた。

「何だ？」

「別に。君は、コーキのように白夜叉からの評価を聞かないんだな」

「別にどうでもいい」

「君は少しドライ過ぎないか？」

「いつもの事だから気にするなレティシア」

「そーだよ。カズマが無愛想なのはもはや常識」

「お二人とも少し酷いですよ」

「でも、僕のように仲良くなれば素直に感情を見せてくれる時があるんだよ」

「なんだソレ。ギャルゲーのヒロインか？いや、この場合は乙女ゲーか」

「俺は男だ！」

「えっ!？」

「何故驚く？」

「いや、白夜叉からはスカートをはかせたい女子ランキング第1位と聞いていたから」
「ちよつと、ボコシテクル」

「待て待て！止めろ!!おいコーキお前も押さえる！」

「あわわわ、カズマさんの怒りがヤバいです」

「ふむ。目のクマを消したらいい感じな女子になるだろう」

「レティシアちゃんも紅茶飲みながらカズマ女子化計画立てないで!!」

コーキ&十六夜の説得によりカズマの怒りは消火させた。

「で、一体何のようでわざわざレティシアちゃんはここに来たの？」

コーキはカズマに紅茶のお代わりを貰いながら言う。

人に所有されているはずのレティシアがここにいるということとは、それなりのリスクを負っているはずだ。

「大したことではない。新生コミュニティがどの程度力を持っているかを見に来ただ」

「ほう、結果は？」

「生憎ガルドでは当て馬にもならなかったよ。ゲームに参加した彼女らはまだまだ青い

果実で判断に困る。……こうして足を運んだが。私はお前たちに何と言葉をかければいいのか」

レティシアは、苦笑をしながらそう答えた。

その時、青い果実でのとこでカズマがピクツと反応したがそれだけだった。

「違うね。アンタは言葉を掛けたくてここに来たんじゃない」

「ジン君達がちゃんと自分の力だけでやっていけるか心配だったから来たんじゃないの？」

「……ああ。そうかもしれないな」

レティシアは首肯する。

しかし、目的は色んな意味で中途半端に進行している。

自嘲が拭えないレティシアに、コーキは明るく提案する。

「さてさて、不安なレティシアちゃんに僕達から提案があるよ☆。その不安を払えるイイ方法が」

「何？」

「簡単な話。僕たちとギフトゲームをしよう元・魔王様」

そう言い窓をバンツと開け放った。

そして、

「まっ、メインは十六夜君に頼むけどね〜」

黒ウサギはずっこけた。

「コーキさんじゃないですか！」

「いやー、ゴメンね。よく考えたら僕、絶対勝てない」キツパリ

「いや、そんなはつきり言われましても」

「ふふ・なるほど。それは思いつかなかった。実に分かりやすい。下手な策を弄さず、初めからそうしていればよかった」

「ゲームのルールはどうする？」

「どうせ力試しだ。手間をかける必要もない。双方が共に一撃ずつ撃ち合い、そして受け合う」

「最後に立っていた者の勝ち。いいね、シンプルイズベストってか？」

二人は笑みを交わす。

十六夜もノリノリだ。

十六夜とレティシアが窓から中庭に飛び出すと、二人の位置は天と地に別れていた。「へえ？箱庭の吸血鬼は翼が生えるのか？」

「ああ。翼で飛んでいる訳ではないがな」

そこから十数m離れたところにカズマ達はいた。

「ねえ、カズマ。どっちが勝つと思う？」

「さあ？でも、十六夜が勝たないと意味がない」

「だね。もし、十六夜君が負けたら次カズマだから」

「イヤだ。お前が殺れコーキ」

「ええー。十六夜君の次に強そうなのカズマか耀ちゃんでしょ」

「火力ならお前が上だ」

「まあ、純粹な火力ならね」

ははつとコーキが笑うのとレティシアがギフトカードを取り出すのは同時だった。

金と紅と黒のコントラストで彩られたギフトカードを見た黒ウサギは蒼白になって叫んだ。

「レ、レティシア様!?そのギフトカードは」

「下がれ黒ウサギ。力試しとはいえ、決闘である事に変更無し」

ギフトカードが輝き、長柄の武具が現れる。

「互いにランスを一打投擲する。受け手は止められねば敗北。悪いが先手は譲ってもら
うぞ」

「好きにしな」

投擲用に作られたランスを掲げると、全身をしならせた反動で打ち出した。

「ハアア!!!」

怒号と共に放たれた槍は瞬く間に摩擦で熱を帯び、一直線に十六夜に落下していく。

十六夜は、流星の如く舞落ちる槍を

「ハッ!?..しやらくせえ!!!」

殴りつけた。

「は..」

「あ、これヤバイ..」

「加速」

素つ頓狂な声を上げたのは黒ウサギとレテイシア。

後ろ二つはコーキとカズマだ。

殴られたランスはひしやげ、まるで散弾銃のように無数の凶器となってレテイシアに

第三宇宙速度で返された。

「..これほどか..」

着弾する間際、血みどろになって落ちる覚悟をした。

が、加速していたカズマがレテイシアを抱き抱え第三宇宙速度で飛んでくる鉄塊の雨

の範囲外に連れ出した。

「レテイシア!」

黒ウサギは、カズマの元に駆けつけるとレティシアのギフトカードを掠め取った。

「く、黒ウサギ！何を！」

「ギフトネーム・純潔ロード・オブ・ヴァンパイアの吸血姫」
 やっぱり、ギフトネームが変わってる。鬼種は残っているものの、神格が残っていない」

「っ」

ギッと目を背けるレティシア。

歩み寄った十六夜は肩をすくませた。

「なんだよ。もしかして元・魔王様のギフトって、吸血鬼のギフトしか残ってねえのか？」

「はい。武具は多少残してありますが、自身に宿る恩恵ギフトは」

十六夜は隠す素振りもせず盛大に舌打ちをした。

コーキも場の空気を読み声のトーンを下げ質問する。

「能力や種族みたいなギフトって人に所有されるとその人に奪われるの？」

「いいえ。魔王がコミュニティから奪ったのは人材であってギフトではありません。武器などの顕現しているギフトと違い、云わば魂の一部。隷属させた相手から合意なしにギフトを奪う事は出来ません」

「じゃあ、レティシアちゃんは自分から」

三人の視線を受けて苦虫を噛み潰したような顔で目を逸らすレティシア。

「私は。」

言葉にしようとして呑み込む仕草を幾度か繰り返す。

しかし打ち明けるには至らず、口を閉ざしたまま俯いてしまった。

「コーキは場の空気をリセットしよう」と提案する。

「まっ、とりあえず屋敷に戻ってから美味しい茶菓子でも食べながら話そう、ねっ」

「そう、ですね」

レティシアと黒ウサギは沈鬱そうに頷き、十六夜はめんどくさそうに屋敷に戻った。

さて、読者の皆さんも忘れていかぬかも知れないがカズマはレティシアを抱き抱えたま

ま、ずっと空気となっていた。

（いつ、下ろせば良いんだ？）

カズマは、とりあえず意気消沈しているレティシアを抱き抱えたまま屋敷に向かった。

第11話 ルイは友を呼ぶそうですよ？

ノーネームの仲間は、満月が綺麗な夜空の街道を「サウザンドアイズ」へ向かって歩いていて。

十六夜は早足で歩きながら空を見上げていた。

「こんなにいい星空なのに、出歩いてる奴はほとんどいないな」

箱庭に来る前は、眠らない夜の街で生きていた十六夜にとっては新鮮に感じられた。

対照的に、戦後間もない時代から来た飛鳥にとっては疑問の対象だ。

「これだけハッキリ満月が出ているのに、星の光が霞まないなんておかしくないかしら？」

「あつ、それ天幕が星が見やすいようにしているらしいよ」

「そうなの？ だけどそれ、何か利点でもあるのかしら違？ そして、何故コーキ君はそんなことを知っているのかしら？」

「興味本位で調べたからだよ」

「そして、お嬢様。さっきの質問は無粋だぜ。『夜に綺麗な星が見れますように』っていう職人の心意気が分からないか？」

「おっ！良いこと言うね」

「ええ、とてもロマンがあるわ。カズマ君もそう思うわよね？」

と飛鳥がカズマに話を振った。

「・・・」

が、カズマは返事どころか反応すら無かった。

そして、丁度“サウザウンドアイズ”の門前に着いた。

「お待ちしておりました。中でオーナーとルイオス様がお待ちです」

迎えたのは例の無愛想な女性店員だった。

「黒ウサギ達が来る事は承知の上、と申すことですか？あれだけ無礼を働いておきなが

らよくも『お待ちしておりました』なんて言えたものデス」

「・事の詳細は聞き及んでおりません。中でルイオス様からお聞きください」

憤慨しそうになる黒ウサギだが、店員に文句を言っても意味がない。

店内に入り、中庭を抜けて離れの家屋に向かう黒ウサギ達。

さて、ここまでいきなり時間が飛んでいて分かりにくい読者もいるだろうから、

前回からこの話までに何があったのかを出来るだけ簡単に説明をしよう。

◇◇◇

中庭から戻ろうとしていたカズマ達。

そこにいきなり褐色の光（ゴーゴンの威光と言うらしい）が射し込んだ。レティシアはカズマ達を守るため、自ら光を受け石化してしまった。

すると、翼の生えた空を駆ける靴を装備した次々に現れレティシアは回収された。

その時の会話からレティシアが箱庭外のコミュニティと取引をする事を知った。

一応、説明するがカズマ達はなにもしなかつたのではなく、なにもできなかったのだ。

なぜなら、レティシアは「ペルセウス」の所有物だ。

それが逃げ出したのだ。

庇いようがない。

しかも、「ペルセウス」は腐っても「サウザンドアイズ」の幹部だ。

問題を起こせば、白夜叉に迷惑をかけることになる。

話を戻そう。

そのあと、「ペルセウス」の「ノーネーム」と見下した行為に黒ウサギがキレた。

が、十六夜が右耳をコーキが左耳を引っ張って止めた。

そんな間に「ペルセウス」の男達は姿を消していた。

十六夜曰く、透明になれる兜を使つたらしい。

そして、他のメンバー（ジンと飛鳥）を呼びに行き、「サウザンドアイズ」の支店に

向かった。

この続きが一番初めへと繋がる。

ちなみにジンは、耀の看病のため本拠に残った。

◇◇◇

中で迎えたルイオスの第一声は

「うわお、ウサギじゃん！うわー実物初めて見た！噂には聞いていたけど、本当に東側にウサギがいるなんて思わなかった！つーか、ミニスカにガーターソックスって随分エロいな！ねー君、うちのコミュニテイに来いよ。三食首輪つきで毎晩可愛がるぜ？」

という警察に逮捕されてもしようがないレベルの変態発言だった。

それに対して、

（うわー、類は友を呼ぶって言うけど、白夜叉ちゃんと違って聞いててキシヨイな）

（斬っていいよな？コイツはいない方が世界のためだよな？よし、殺そう（笑））

（待て待て。いつもの冷静さは、どこに行ったんだ、カズマ？）

（二人とも、心で会話しているわよ）

（飛鳥さんですよ！）

四人の反応はこのようなものだった。

「これはまた、分かりやすい外道ね。先に断っておくけど、この美脚は私たちのものよ」

「そうですそうです！黒ウサギの脚は、って違いますよ飛鳥さん!!」

流石は、黒ウサギ。ノリツツコミを中々だ。

二人を見ながら、十六夜はため息をついた。

「そうだけお嬢様。この美脚は既に俺のものだ」

「そうですそうですこの美脚はもう黙らっしやいッ!!」

「よかろう、ならば黒ウサギの脚を言い値で」

「売ったッ!!!」

「売・り・ま・せ・ん・！あーもう、真面目なお話をしに来たのですからいい加減にしてください！怒りますよ!!」

「バカだね、黒ウサギちゃん。怒らされてるんだよ、十六夜君に」

スパパァーン!!とハリセンを横に一閃。

今の黒ウサギは短気だ。

肝心のルイオスは完全に置いてけぼりを食らっていた。

五人のやり取りが終わると唐突に笑い出した。

「あつはははは！え、何？「ノーネーム」っていう芸人コミュニティなの君たち？もしそうならまとめて「ペルセウス」に来てってマジで。道楽に金をかけるのが性分だからね。勿論、その美脚は僕のベットで毎晩好きだけ開かせてもらうけど」

「お断りでございます。黒ウサギは礼節も知らぬ殿方に肌を見せるつもりはありません

ん」

嫌悪感たっぷり吐き捨てた。

「へえ？俺はてつきり見せる為に着ているのかと思っただが？」

「実は、僕も」

「私もよ」

「あ、飛鳥さんまで。違いますよ！これは白夜叉様が開催するゲームの審判をさせてもらうとき、この格好を常備すれば賃金を三割増しすると言われて嫌々」

「へー、はあー、ふうん？」

「嫌々そんな服着せられてたのかよ。おい白夜叉」

「なんだ小僧共」

キツと白夜叉を睨む十六夜とコーキ。

三者は凄んで睨み合うと、同時に右手を掲げ、

「超グツジヨブ！」

「うむ」

「イエエーイ！！」

「ビシッ！と親指を立てて意志疎通をし、ハイタッチをする三人。

流星は、カズマ女装計画のメンバーだ。仲がいい。

一方黒ウサギは、話が全然進まずガクリと項垂れた。

◇◇◇

「以上が『ペルセウス』が私達に振るった内容です。ご理解いただけただけでしょうか？」

場所は、変わって客室（座敷）だ。

話を仕切り直すために移動し、『サウザンドアイズ』の幹部と向かい合う形で座っている。

「う、うむ。謝罪を望むのであれば後日。」

「結構です。『ペルセウス』に受けた屈辱は両コミュニティの決闘をもって決着をつけるべきかと」

両コミュニティの直接対決。これが黒ウサギの狙いだ。

レイシアを取り戻す為には、なりふり構ってられない。使える手段は全て使う気だ。

「嫌だ？」

唐突にルイオスは、言った。

「はい。」

「嫌だ。決闘なんて冗談じゃない。それにあの吸血鬼が暴れたって証拠があるのか？」

「それなら彼女の石化を解いてもらえば」

「駄目だね。アイツは一度逃げ出したんだ。出荷するまで石化は解けない。そうだろう？元お仲間さん？」

嫌みつたらしく笑うルイオス。

「そもそも、あの吸血鬼が逃げ出した原因はお前たちだろ？実は盗んだんじゃない？」

「はあ？君いい加減にしなよ！何を根拠にそんなこと言っているんだい？」

「事実、あの吸血鬼はお前のところに居たじゃないか」

ぐつと黙りこむコーキ。それを言われたら言い返せない。

(ただの七光りつてわけじゃないね。クソツ)

「まあ、どうしても決闘に持ち込みたいって言うならちゃんと調査しないとね。もつ

とも、ちゃんと調査されて困るのは別の人だろうけどね」

「そ、それは。」

視線を白夜叉に移す黒ウサギ。

この一件で、白夜叉に苦勞をかけるのは避けつつあった。

「じゃ、さっさと帰ってあの吸血鬼を売り払うか。あんな見た目だし、そっち系のマニアには需要があるだろうし。にしても、太陽の光っていう天然の牢獄の下、永遠に玩具にされる美女つてもエロくない？」

「あ、貴方という人は。」

黒ウサギはウサ耳を逆立てて叫んだ。

「それにしてもあの吸血鬼は不憫だねえ。自分の恩恵を魔王に渡してでも、危ない道に行く仲間を止めに行つたのに仲間たちはあつさりを見捨てやがった！あの女が目覚ましたらどんな気分だろうねえ？」

「え、な」

黒ウサギは絶句した。

今の話が本当なら魔王に奪われたはずのレティシアが東側にいるのも、ギフトカードに記されたネームのランクが暴落していることにも説明がつく。

「ねえ、黒ウサギさん。このまま彼女を見捨てたら、コミュニティの同士として義が立たないんじゃないかな？」

「どういうことですか？」

「取引をしよう。吸血鬼を『ノーネーム』に戻してやる。代わりに、君とそうだな。そこの大人しそうな黒髪を貰おうか？」

黒ウサギとカズマを指差しながらルイオスは言った。

「なっ、」

「え？」

「マジかよ」

「(笑)」

「ほう」ニヤニヤ

上から、黒ウサギ、飛鳥、十六夜、コーキ、白夜叉の順だ。

「ああ、そういえば君なんて名前なの? 教えてよ。もしかしたら、僕が一生君のご主人かもしれないだし」

黒ウサギ達の反応に気づいていないのか厭らしい笑みで話しかける。

「.....」

「ん? 君、顔とか綺麗なんだからもつと愛想良くしなよ。ほら、初めに名前を言ってみてよ、ねえ?」

そう言いながらカズマの肩に触れようとした。

その瞬間カズマは、座ったままの体勢で体を鋭く捻ると同時にほとんどテイクバック無しの右ストレートを放った。

「ツ!!!」

ゴスツつと鈍い音と共に食らい、障子を突き破ってルイオスは飛んでいった。

カズマは素早く外に出るとギフトカードから刀を出し、抜刀した。

「くつ、名無し風情が調子に乗るなよ!!! 女だからって容赦しないぞツ!!!」

しかし、尚も殺気立つルイオス。

「君もわからないひとだね。十六夜君と白夜叉ちゃんが止めてくれんなつかたら死んでたんだよ。いい加減にしないとケシ炭にするぞ」

いつものコーキからは、考えられない鋭く冷たい声だった。

また、戦いが始まりそうな予感がし、黒ウサギは慌てて仲裁する。

「ちよ、ちよつと落ち着いてください！今日の一件は互いに不問ということにしましょう。後、先程の話ですが、少しだけお時間をください」

黒ウサギの返事に驚いた飛鳥は、堪らず叫んだ。

「ま、待ちなさい黒ウサギ！貴女、この男の物になつていいというの!？」

「仲間相談する為にも、どうかお時間を」

「オツケーオツケー。こっちの取引ギリギリ日程。一週間だけ待つてあげる」

さつきまでの不機嫌から一転して、にこやかに笑うルイオス。

黒ウサギはそれだけを言うかと早足で座敷を出た。

飛鳥も黒ウサギを追つて座敷を出た。

「白夜叉は恵まれてるな。気難しい友人とゲスい部下に挟まれるなんてそう経験できないぞ」

「全くだの。羨ましいなら代わつてやるぞ」

「ちよつ、十六夜君。呑気に喋つてるとこ悪いんだけど、カズマ運ぶの手伝つて〜?」

「はあ? 何でだよ。お前が運べばいいじゃねえかコーキ」

「いや、おんぶするとカズマの足が地面についたままになつて引きずることになるんだよ」

「ああ、そういえばお前身長低かつたな」

「シヤラーアアップ! はい、カズマおんぶしてさつさと黒ウサギちゃんを追いかけよう!」

カズマを十六夜に押し付けるとコーキはすぐに座敷を出ていった。

「つたく、しようがねえな。またな、白夜叉」

「うむ、次来るときはいい知らせを待つておるぞ」

「ハツ、当たり前じゃねえか」

そう言うのと、十六夜はカズマをおんぶして黒ウサギ達を追つた。

◇◇◇

外に出ると飛鳥の抗議の声が聞こえてきた。

「いいえ、嘘よ! 今の貴女の顔を見れば分かるわ! 貴女は仲間の為に自分を売り払つても構わないって思つている! だけどそんな無駄なこと、私達が絶対に許さないわ!」

黒ウサギも堪らず叫んだ。

「む、無駄って。どうしてそこまで言われなきやいけないのですか!?!」

そんな二人から1mほど離れた所にいたコーキの隣に十六夜は並んだ。

「何で止めないんだ?」

「ん、だつて声かけたら巻き込まれそうだから。巻き込まれるのはゴメンだよ」
「まあ、確かにな。それにしても、今日のコイツおかしくなかったか?」

コイツとは、十六夜におんぶされているカズマのことだ。

「そうかな? カズマだつて人間なんだから冷静さをなくして怒ることもあるよ」

「何がアイツの逆鱗に触れたんだろうな?」

「さあ? いくつか候補はあるけど、確証はない」

「女と間違えたこと、ルイオスの変態発言と態度つてところか?」

「あと、レティシアちゃんの3つだと思う」

「何でそこで、吸血ロリが出てくるんだ?」

「その話は、後にしてアレ止めてきてよ十六夜君」

「つたく、しようがねえな。世話の焼ける駄ウサギとお嬢様だけ」

「いつてらしゃいゝ!」

笑顔で手を振りながら十六夜を送り出す、その裏でため息をついた。

（いくらなんでも、早すぎるよ。白カズマ君）

第12話 宣戦布告が可能ですよ？

ルイオスとの一件から3日後

黒ウサギはジンに謹慎処分を受け、自室で雨の降る箱庭の都市を見ていた。

(ああ、定期降雨の時期でしたっけ。南側と違って東は天幕の開放がないですもんね)

人工降雨は一定のスパンで行われる。わざわざ、ありもしない雨雲を光学屈折で作
雨を降らしている。

(そう言えばレティシア様は雨が苦手でしたっけ。血の臭いが湿気と共に立ちこめるの
は宜しくない、とか何とか)

■吸血鬼のくせに何を言っているのやら。思い出して黒ウサギは苦笑した。

■憂鬱そうに窓の外を見ていると、コンコンと控えめなノックが響く。

「はーい、鍵もかかっていますし中に誰もいませんよー」

「。入ってもいいという事かしら？」

「そうなんじゃない？」

「誰もないなら、文句も言われないしね！」

■声は、飛鳥と耀とコーキのものだ。

しかし『誰もいない』と主張しているのに『入って良し』と判断するなんてまるで空
き巣だ。

「あら、本当に鍵がかかっているわ」

「ん・ホントだ。こじ開ける？」

「なんだったら、ケシ炭にしよう（ワクワク）」

ガチャガチャとドアノブが回される。

黒ウサギは観念したように立ち上がった。

「はいはい、開けます開けます！御三人はもうすこしソフトというか、オブラートにす
ね」

「よし、ケシ炭にしよう」

「任せた！」

ドゴオオオオツ！

「オブラアアアト！」

熱風で吹っ飛んで行きかがら叫んだ。

稀代の問題児に木製のドアはあまりにも無力だった。

黒ウサギはウサ耳を垂れさせ、破壊されたドアノブ（焦げてる）を片手にしくしく泣
いた。

「・・・。どういう状況なんだ？」

カズマは大きなトレイから香ばしい匂いをさせながら部屋に入っていった。

流した涙そのままに、自前の湯沸し器で紅茶を淹れる。ティーセットは、カズマが持つてきてくれた。

その間にカズマは、香ばしい匂いのする出来たてのミートパイを一人一人の置いていく。

「まさかカズマさんが？」

「ああ、作ってみたから持つてきた。皆に食べてもらおうと思って」

「このトマトソースも？」

「ああ、塩気が足りなかったら言ってくれ」

そう言いながら、カズマは椅子に座ると皆はミートパイを食べ始めた。

「うん、カズマらしい味だね。ソース無しでも食べれる」

「あら、コーキ君。せつかくソースもあるんだから使ったほうがいいわよ」

「うん、美味しい。毎日食べたいくらい」

「ん、パイ生地のサクサク感もたまりません！」

「それは、よかった。丁度いいウサギの挽き肉があったから作ったんだ」

「本当の本当の本当の本当に黒ウサギは、同族を食べていないのですね？」

「ほーんーとーだー。てーかー、しーつーこーい。あーとー、播ーらーすーな」

「はあく、良かったです。カズマさんいくら冗談でも言っていていいものと悪いものがあるんですよ！」

「すまん」

「ハツハ、カズマの冗談っていつも怖いんだよね！やられた本人は全然笑えないよ」

「その冗談怖かったかしら？」

「飛鳥ちゃんにするならそのミートパイの肉が人間って感じかな」

「うっ」

飛鳥は人の肉で出来たミートパイを想像したのか気持ち悪そうな声を出した。

「ねえ、カズマ。おかわりない？もつと、食べたい」

「残念だが、ない」

「カズマ、そんな嘘じゃ私を騙せないよ。私の五感によればカズマが焼いたミートパイは全部で7つだったはず」

「本当におまえは、さつきまでベットに寝ていた人間か!？」

「そんなことより、おかわり」

お皿をグイグイと押し付ける耀。

かなりカズマのミートパイを気に入ったようだ。

「つたく、余りの2つの内1つはさつきジンに渡してきた。そして、残りの1つは十六夜ののだ！」

「大丈夫、十六夜は今いないから食べても問題n「問題大有りだろ!!」あつ、十六夜」

十六夜は窓ガラスをガシャンと蹴り破って入って来た。

「全く人の留守中にうまそうな物食って、さらに人の分まで食おうなんていくらなんでも行儀が悪いぜ、春日部」

「い、十六夜さん！今まで何処に、って破壊せずに入れないのでございますかあなたたちは!？」

「だって鍵かかってたし」

「あ、なるほど！じゃあ黒ウサギの持つてる焦げたドアノブは一体何なんですこのお馬鹿様!!」

・十六夜はヤハハと笑いながら、大風呂敷を不思議な目で見ているように見せる。

「ゲームの戦利品。見るか？」

「これ、どうしたの？」

「だから、戦利品だって言ってるだろ」

「?どうしたの二人とも?」

今度は飛鳥も大風呂敷の中を覗き込む。

初めは理解出来ないような顔をしていたが、理解すると小さく吹き出した。

「もしかして・貴方、一人でこれを取りに行っていたの?」

「ああ。時間ギリギリまで集めてた」

「ここまで来たら見たくなるのが当然の反応と言うもの。」

と言うわけでコーキも

「えつ、何々?十六夜君は一体何を持って来たの?」

中を覗き込んだ。

すると、飛鳥と同じように吹き出した。

「ははは、こりや黒ウサギちゃんだけじゃなくてカズマも喜ぶねwww」

でもね、とコーキは笑いを噛み殺しながら言った。

「こんな面白いことをする時は言って欲しいなく。だって、その方が面白いから」

「わりの、わりの。次からは声をかけるぜ」

「私も」

「私もよ」

四人は悪戯っぽく笑みを交わす。

「逆転のカードを持ってきたぜ。これでお前が『ペルセウス』に行く必要はない。後は

オマエ次第だ、黒ウサギ」

ポン、と黒ウサギの膝の上に大風呂敷を落とす。

だが黒ウサギは中身を確認しない。

なぜな。中身は、すでに分かっているのだから。

「まさか・あの短時間で、本当に？」

「ああ。ま、ゲームそのものよりも時間との戦いが問題だったけどな。どつかの加速者さんが手伝ってくれたらもつと早く終わっていたんだがな」

十六夜はカズマを見ながらわざとらしく言う。

カズマは素知らぬ顔で紅茶を一口飲むと、

「情報料でそのことはチャラだ。それにお前なら問題無かっただろ？」

「現に間に合ったしな。等価交換と言うことにしとくぜ」

「カ、カズマさんは知っていたのですか!？」

「当たり前だろ。だってコイツが提案してきたんだからな」

答えたのはカズマではなく、十六夜だ。

カズマは相変わらず素知らぬ顔でミートパイを食べている。

その反応に十六夜は苦笑しながら言った。

「そんなことより、黒ウサギお前にはやることがあるだろ？」

黒ウサギは溢れそう涙を拭い、

「YES♪ペルセウスに宣戦布告します。我等の同士・レティシア様を取り返しましょう！」

五人を見回たし高らかに宣言した。

(コミュニケーションに来てくれたのが皆さんで
 黒ウサギは本当に良かったと思っています)

◇◇◇

『ギフトゲーム名 FAIRYTALE in PERSEUS』

・プレイヤー一覧

カズマ・N・エノモト

コーキ・C・マユズミ

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・ “ノーネーム” ゲームマスター ジンIIラツセル

・ “ペルセウス” ゲームマスター ルイオスIIペルセウス

・ クリア条件 ホスト側のゲームマスターの打倒

・敗北条件 プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・舞台詳細・ルール

*ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿から出てはならない。

*ホスト側の参加者は最奥に入ってはいけない。

*プレイヤー側はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはいけない。
い。

*姿を見られたプレイヤー達は失格となり、ゲームマスターへの挑戦資格を失う。

*失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行する事はできる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“ペルセウス”印』

『ギアスロール契約書類』に承諾した瞬間光に包まれ、気づいた時にはギフトゲームへの入り口にいた。

「姿を見れば失格、か。つまりペルセウスを暗殺しろってことか？」

「なら、あのクズは寝ているってなるぞ。いくなんでも、そんなに甘くはないだろ」

「だよ。多分ルイオスは最奥で僕たちを待っているんだよ」

「YES。でも、まずは宮殿を攻略しなければなりません」

「そして、僕達は不可視のギフトを所持していないのでちゃんとした作戦を立てる必要があります」

「宮殿最奥まで　『主催者』側に気付かれず到達しないと、失格となり挑戦権がなくなる。」

全員でルイオスに挑むのは恐らく無理だ。

「このゲームには大きく分けて三つの役割分担が必要だね」

飛鳥の隣で耀が頷く。

「うん。まず、ジン君と一緒にゲームマスターを倒す役割。次に索適、見えない敵を感じて撃退する役割。最後に失格覚悟の囷と露払いをする役割」

「耀ちゃんは五感が優れているから索敵だね」

「黒うさぎは参加することができませんので、ゲームマスターを倒す役割は十六夜さんをお願いします」

「そうしたいのは山々なんだがその役割はカズマに譲らせてもらおうぜ！」

「あつ、そうなんですか！つてえええッ!？」

「そこまで驚かなくてもいいだろ」

「いや、黒ウサギはつきり十六夜さんが殺るのだと……」

「俺もそのつもりだったんだが、まあ気にするな」

十六夜は結局譲った理由を言わなかった。

まあ、正直ルイオスをボコせるなら譲ってくれた理由なんてどうでもよかったのがカズマの本音だ。

「それにアイツよりよっぽど楽しめそうな奴がいるからな。俺はそれを貰うぜ」

「十六夜さんまさか…」

「ああ、そのまさかだ。俺の獲物は、隷属させた元・魔王様だ！」

「もしかして、十六夜さんって意外に知能派でございます？」

「何を今さら。俺はどっかの文系無表情少年よりも知能派だぞ」

フフンと自慢気に笑う十六夜。

「黙れ、第三宇宙速度バカ」

「ああ？なら、お前はドアノブ回さずに扉開けるか？」

「そんなの朝飯前だ」

「……………」。お二人共参考までに、方法をお聞きしても？」

十六夜とカズマは応えるように門の前に立ち、

「そんなもん、こうやって開けるに決まってるッ！」

轟音と閃光と共に扉半分は蹴り破られ、もう半分は錬金術で分解されたのだった。仲間を助けるための戦いが今始まった。

第13話 ゲス野郎との決戦だそうですよ？

白亜の宮殿 正面階段前広間

そこに飛鳥は一人でいた。

「見つけたぞ！名無しの女だ！」

真つ正面から挑んだカズマ達を捕らえに来た騎士達を飛鳥が操るギフト水樹が道をふさいでいた。

「不可視のギフトを持つ者は残りのメンバーを探しに行け！残りの者でこれを倒すぞ！」

徐々に騎士達が集まってくる。

どうやら数でいつきに押しきろうと考えているようだ。

それは、囷と露払い担当の飛鳥には都合良かった。

そして、不可視のギフトを持ってない騎士が全員集まるとリーダー格の騎士が剣を掲げ、

「全員突ぶべっ!!？」

後ろにいた騎士のシヨットガンで頭を殴られた。

すかさず周りの騎士達は殴った騎士を取り囲んだ。

「キサマ何のつもりだ！まさか我々を裏切るのか!?」

殴った騎士はやれやれと肩をすくめると、

「いや、裏切るも何も仲間じゃないんだけどね」

グニヤリと捻れたと思った時にはその姿は茶髪に黄目の少年になっていた。

「キツ、キサマ名無しの仲間だったのか!」

「そうだよ。そんなじゃ、久しぶりに暴れるぞ！イツツ・ショウタイム！イエーイ!!!」

そう叫ぶとショットガンを天に向け、引き金を引いた。

その瞬間、コーキの 周りにいた騎士達をいくつもの爆炎が襲った。

「オラオラオラ。どんどんいくぞ！ハハハハハハハ!!!」

コーキはすぐりにリロードをすると引き金を引く。

様々な場所で爆発が発生し騎士達を焼き、時には爆風で空を舞う。

あらかた騎士の数を減らすとコーキは水樹を登り飛鳥の隣に立った。

「あー、楽しかった！それじゃ、あとは任せたよ飛鳥ちゃん」

「やつと私の出番ね。『水樹よ、敵をまとめて吹き飛ばしなさい』」

炎の次は激しい水流が騎士達に襲いかかった。

◇◇◇

その頃、カズマ達をは2つの不可視のギフトを手に入れ、最奥に着いた。

ここまでの話を簡単にまとめると

1、耀の活躍で不可視のギフト（レプリカ）をゲット

2、カズマの活躍により、不可視のギフト（本物）をゲット

※詳しくはあとがきで

という感じだ。

まさか、二項目で説明が終わると思わなかった。

ゴホン、話を戻そう。

最奥の最上階は、まるで闘技場のような簡単な造りだった。

「皆さん……！」

最上階で待っていた黒ウサギは安堵したように四人の姿を確かめたため息をもらす。

上空を見上げると、ゲス野郎がカズマ達を見下ろしていた。

「ふん。ホントに使えない奴ら。今回の一件でまとめて粛正しないと」

ルイオスの膝まで覆うロングブーツには 光輝く翼があった。

「まあでも、これでこのコミュニティが誰のおかげで存続出来ているかわかっただろうね」

バサッと翼が羽ばたく。たった一度の羽ばたきでルイオスは 風を追い抜き、落下速

度の数十倍の勢いでカズマ達の前に降り立った。

「なにはともあれ、ようこそ白亜の宮殿・最上階へ。ゲームマスターとして相手をしよう。……………あれ、この台詞言うのって初めてかも」

「どうでもいいが始めるぞ」

「フン。気が荒いな」

ルイオスの翼が羽ばたく。

彼はギフトカードを取りだし、光と共に燃え盛る炎の弓を取り出した。

「メインで戦うのは僕じゃない。さてと、コイツを呼ぶか」

そう言うと、ルイオスはギフトを掲げた。

それは、星の光のように強弱をつけながら光る。

耀にはとつきに構え、ジンを庇うように背後に隠す。

光が一層強くなると、ルイオスは叫んだ。

「目覚めろ、アルゴールの魔王!!」

直後、甲高い女の声が響き渡った。

「ra、GYAAAAaaaaaa!!」

「な、なんて絶叫を」

「避けろ、黒ウサギ!!」

えっ、と硬直する黒ウサギ。

カズマは姿勢を低くして鞘に手をかけると空に向かって一閃。

直後、空から巨大な岩塊が真つ二つになっていくつも落ちてきた。

「へえ、名無しのくせにやるじゃん。にしても、飛べない人間って不便だよねえ。落下してくる雲も避けられないんだから」

「雲ですって……!!?」

そう「アルゴールの魔王」は出現と同時にゲーム盤全てに石化の光を放っていたのだ。

恐らく飛鳥やコーキ、その他のペルセウスの騎士達も石化しているだろう。

「殺れ、アルゴール!」

ルイオス命令するとアルゴールはカズマに襲いかかった。

しかし、それを十六夜が

「はっ、お前の相手はこの俺様だ!」

殴り飛ばした。

「graa!?!GYAAAAaaaaa!!!」

殴り飛ばされたのに驚いたもののアルゴールは空中で体勢を立て直し、今度は十六夜に向かって襲いかかった。

「いいぜいいぜ！そうこないとなオイ!!!」

「さて、邪魔な奴は居なくなつた。覚悟しやがれゲス野郎!!」

「ハッ、あつちの奴はともかく君じゃ僕に触れることも出来ないよ」

ルイオスは素早く弓を引くと、炎の矢を放つた。

その矢は一つが二つ、二つが四つと増えていき、あつという間に雨のように降つてきた。

それに対し、カズマは刀を地面にキインと打ち付けた。

それだけで地面は盛り上がり壁が高速鍊成された。

ドガガガッ!!!いくつもの矢と壁がぶつかり砂ぼこりを舞い上げらせカズマを包む。

「チッ」

ルイオスは舌打ちをした。

これではカズマの正確な位置が分からない。

その時、いきなり砂ぼこりが吹き飛ばされた。

もちろん、飛ばしたのはカズマだ。

「もう、終わりか？なら、こっちから行かせてもらおう」

そう言うと、カズマはカズマは柄まで刀を地面に突き刺した。

次の瞬間、バシイ!!といくつもの稲妻が走り出した。

刀を地面から抜いていくのに合わせて、バキ・バキバキと錬成されていく。

抜き終えた時にはそれは刀のような曲線の細い刃物ではなく、横広いくて分厚い大剣と化していた。

錬成にかかった時間は3秒。

その間にルイオスは矢を三本取りだし放つ。

「加速」
アクセラレート

カズマは加速し、雨のように降る矢を避けながら真つ二つに斬つた岩塊をジャンプ台代わりに跳んだ。

「クソツ!!」

ルイオスは炎の炎の弓を仕舞うと「星霊殺し」のハルパーを取りだし迎え撃つ。

カズマの大剣とハルパーがぶつかった瞬間、ハルパーに蒼い稲妻が走り砕け散った。

「ハ・ッー!!」

これには、持ち主であるルイオス以外にも見ていたジンや黒ウサギも絶句した。

「ハアアアア!!!」

カズマはその隙を逃さず、大剣を振り上げると思いつき叩きつけた。

バキ・メキメキメキ、と骨が折れる音がした時にはルイオスは地面にすごい勢いで激突していた。

「グハアツ!! ハアハア、クソツ! 名無しのクセに」
カズマはルイオスの隣に着地した。

「へえ、まだ喋れるんだ。意外だな」

「これくらいでいい気になるなよ。僕にはまだアルゴールがいる」
ルイオスは、ヨロヨロと立ち上がる

「アルゴオオオオオ!! 宮殿の悪魔化を許可する! 奴らを殺せ!!」
叫んだ。

が、しかしアルゴールからの反応は無かった。

「アルゴール!? どうした? 命令だ、宮殿を悪魔化しろ!」

それどころか、さっきまでしていた戦闘音まで一切していない。

その時、ルイオスの後ろでズドン! と音がした。

後ろを振り返ると

ピクリとも動かないオルゴールを踏みつけている十六夜がいた。

「ん? なんか呼んだか、ゲームマスター?」

「ば、馬鹿な!? アルゴールが神格も持っていない奴に倒せるはずはない!」

「んなこと言っても今のお前の目の前で起こっていることは現実だぜ」

ルイオスは呆然としている。

当たり前だ。数多のギフトで身を固め、さらに世界を石化出来るほどの星霊を従えているのに「名無し」に敗北寸前なのだ。

「さて、これで終わりと思うなよ」

「そうだな、もしこのまま負けたら、お前たちの旗印を戴こう」

「なっ!?!お前たちはあの吸血鬼が目的じゃないのか」

「それは後からでもなんとかなる。それよりも、重要なことがある」

「そうだな、次に旗印を使ってもう一度ゲームをし、お前たちの名前を戴こう」

「ここで、問題だ。名と旗印を奪ったからって俺たちは満足するでしょうか?」

カズマはルイオスにわざとらしく問いかける。

「ま、まさか」

「答えは、否。徹底的に潰す」

「コミュニティの存続そのものが出来ないぐらいにな」

「や、やめろ。やめてくれ!」

「イヤだね。やめて欲しいなら俺たちを楽しませろ」

「言っただろ?これで終わりじゃないと」

ルイオスはやつと気付いた。自分は敵に回してはいけない奴を敵に回してしまったというこ

コイツらにとって自分は対戦者ですらない
舞台の上で回っているただの道化師だ^{ビエロ}

「さあ、ゲーム続行と行こうぜゲームマスター！」

第14話 後日談

「ペルセウス」に勝利した七人はレティシアを運び、石化を解いた途端、

「二二じゃあこれからよろしく、メイドさん二二」

問題児四人（カズマ以外）は口を揃えて言った。

「え？」

「え？」

「は？」

「え？」

「え？じゃないわよ。だって今回のゲームで活躍したのって私達だけじゃない？黒ウサギとジン君はくつついて来たただけなもの」

「うん。私は不可視のギフト手に入れたりジンを守ったりしたし」

「僕はペルセウス兵相手に無双したり、石化したりしたし」

「俺は元・魔王倒したしな。所有権は俺達で等分、1：1：1：3：4でもう話は付いた
！」

「何を言っちゃやてんでございますかこの人達!？」

黒ウサギとジンは混乱していた。

もちろん、カズマは混乱などしない。

「その等分、誰が1で3で4なんだ？」

「私は1よ」

「私も1」

「僕も1」

「俺は3だ」

「じゃあ4は？」

「「「お前だ!!!」」」

「俺は話に参加していないし、いらない」

「ダメよ。これはもう決定事項なのだから」

「ちなみに俺の意見は？」

「「「関係なし!」」」

仲のよろしいことで。あと、面倒だなとかズマは思った。

「ふむ、そうだな。私は皆に恩義を感じてる。コミュニティに帰れた事に、この上なく感動している。だが親しき仲にも礼儀ありだ。君達が家政婦をしろというのなら、喜んでやろうじゃないか」

「れ、レティシア様!？」

黒ウサギは驚きの声を上げた。

まさか尊敬している先輩がメイドとして扱われるなんて。

黒ウサギが困惑しているうちに飛鳥は嬉々としてメイド服をレティシアに渡した。

「私、ずっと金髪の使用人に憧れていたのよ。はい、これメイド服ね。家事については黒ウサギかカズマ君から習ってね」

「黒ウサギは分かるがカズマも家事が出来るのか?」

「とーぜん、だつて僕を1年間近く養ってくれたのはカズマなんだよ!掃除、洗濯、料理全てが高レベル。一家に一人カズマが欲しいくらいだね!」

「俺を家電みたいに紹介するな!」

どつ、と笑いがおきた。

「ふふ、教育係(?)も決まったことだしさつそくメイド服に着替えて来てちょうだい」
「了解した」

そう言うのと走ってレティシアは着替えに行つた。

「さて、カズマ君」

「何だ?」

「カズマ君つて家事している時も私服じゃない?」

「ああ」

「だから、掃除をしていたりすると服が汚れてしまうでしょ？そう思つて服を用意したの」

「確かに汚れるが別に洗濯するのも俺だから、いらないぞ」

「そんなこと言わずに。せっかく白夜叉に頼んで作ってもらつたんだから遠慮なく貰いなさい」

飛鳥は一呼吸おくと

「この、時雨さん案：ネコミミメイド服を!!」

「んなもん誰が着るか!!!」

「ええー、着ようよ！せっかく飛鳥ちゃんがプレゼントしてくれたんだし」

「そうだぞ。せっかくお嬢様が白夜叉に頼んで作つて貰つたんだぞ」

ぐいぐいとメイド服をネコミミメイド服を押し付けようとするコーキと十六夜。

さすがのカズマも3対1では分が悪い。

まず、春日部に助け船を求めてみる。

「・・・」ワクワクワクワク

ダメだ、コイツすっごいワクワクしてやがる。

次に黒ウサギ。

「アハハ、頑張ってくださいーい」マキコマレタクナイデス
遠い、黒ウサギが離れていきやがる。

最後の希望、ジン。

「えっと、そのあの」アセアセ

ムツクみたいにあわあわしてただけで、助けにならねえ。

十六夜とコーキに服を脱がされそうになった時、丁度レティシアが着替えを終えて戻ってきた。

「その、どうだ？ こういうのは初めてでな、似合っているか？」

レティシアを見るとコーキも十六夜も固まった。

「やっぱり私の目に狂いはなかったわ！ もの凄く似合っているわよレティシア！」
と歓喜の声を上げる飛鳥。

「流石はレティシア様！ すごくお似合いです！ ございます♪」

と手を叩いて褒める黒ウサギ。

「とてもお似合いだとおもいます」

笑みを浮かべながら言うジン。

「流石はお嬢様だ。よくぞこのメイド服を用意してくれた、GJ！」

片手でカズマの服を掴んだまま親指を立てる十六夜。

「こんなカワイイ金髪メイドにお世話になれるなんて箱庭万歳！箱庭万歳！箱庭万歳！」

「ヒヤホー！、と、今にも踊り出しそうなテンションなコーキ。

「カズマはどうだ。」

「今まで見たことあるどんな女より可愛らしいし、綺麗だと思う」

「そ、そうか！私はどんな女より可愛い綺麗か。ふふ、ふふ」

レティシアは頬を赤くしながらカズマの言葉を反復する。

「よくもまあ、そんなこつ恥ずかしいことが真顔で言えるな」

「あい！それがカズマですから！」

十六夜の呆れ声にコーキはどっかの漫画の青猫のように答える。

「そんな恥ずかしいことを言えるカズマ君ならメイド服ぐらいどうとでもないわよね？」

不覚にもレティシアに見とれていたカズマは反応が遅れ、ネコミミメイド服を押し付けられた。

「ちよ、おい久遠！俺は着ないからな！」

「」

「皆は何も言わず、ただ期待に満ちた目でカズマを見ている。」

「本当だぞ」

「」

「まるで着ない方が恥ずかしいぞ、と言わんばかりに。」

「カズマは悩んだ。着ないでこの場を治める方法を。男として着るわけにはいかない。考えた結果

「さうらばだ」 シュバツ

逃げた。全力で。

「レティシア！カズマ君を捕まえてネコミミメイド服を着せるのよ！」

「了解した！カズマ待て〜〜」

レティシアはネコミミメイド服を片手に駆けていく。

その後に飛鳥と耀も続く。

「なんと言うか。後日談なのに締まらないな」

「そうかな？僕的には楽しいからいいんだけど」

「それは言ってる」

それにしても、と言うと

「僕は今のこの日常が面白くて大好きなんだよね。ねえ、十六夜君はこの日常は好き？」

「ああ、もちろんだぜ」

それを聞くとコーキはにひつと笑った。

おまけ

あのあと、カズマは結局レイシア達に捕まりネコミメイド服で今後家事をすることになり、

「誰がそんな服でやるかッ!!!」

ならなかったようだ。

そして、KJCのメンバーが3人増えた。

番外編 Re:picture

「何を見てるんだ？」

十六夜は畳に寝っ転がっているコーキに聞いた。

「ん？ああ、写真だよ写真〜」

「ということとは、お前こっちに呼ばれる時写真持ってたってことか？」

「いやいや、仮に持ち込んでても湖へのダイブの時に終わるし」

「なら、箱庭に来てからの写真か？」

「ブッブー、残念。答えは、白夜叉ちゃんがちよつと変わったプリンターって写真を現像する機械を貸してくれたんだ」

「そういえば、お前らの世界にプリンターなんてないよな。写真見せてくれよ
いいよ！とコーキは十六夜に写真の束を渡した。

1 枚目、モップで床を掃除しているカズマ。

2 枚目、洗濯物を干してるカズマ。

3 枚目、料理しているカズマの後ろ姿。

4 枚目、ご飯を無表情で食べているカズマ

5枚目、男子に告白されているカズマ

などなどカズマの写真しかなかった。

「コーキ、俺はお前をノーマルだと持ってたんだがどうやら俺の勘違いだったみたいだな」

「違うっ!!!僕はそっち系じゃない!!!僕はノーマルに女の子が好きな健全男子だ!!!」

「別に隠さなくていいぞ。世の中には色んな奴がいるからな」

「本当に違うんだ!!!」

「落ち着け。冗談だ、お前は俺の同士だと思っている」

「ならいいけど」

不満そうにコーキは言った。

「ところで、これ何でカズマの写真ばつかなんだ?」

「それはプリンターのギフトが脳とリンクして写真を現像するからだよ」

「脳とリンク?」

「うん。ほら、僕達って目で見たものを電気信号とかにして脳に保存したりしてるじゃない。それを利用して、プリンターを脳とリンクさせて電気信号を読み取って現像してるらしい」

「なんか俺の時代にもそんな技術あったな。それで、お前目線の写真だからカズマがいっぱい写っているんだな?」

「そういうこと」

「にしても、あいつが家事しているとこあんま見たことねえぞ。いつも寝てるからな」
「そうだね。基本起きてる時は家事してるけど、大半は寝てるもんね」

「でも、この部屋作るぐらいの金はかせいでるんだよな。いつゲームに参加してるんだ？」

そう、この部屋（和室）はカズマの部屋なのである。

元々は他の部屋と同じ洋室で生活していたカズマが飛鳥の話や本を読んで和室を空いていた隣の部屋に作ったのだ。

材料は「サウザンド・アイズ」から買い、錬金術などを使って一人で作ったらしい。

戸棚にはお茶つばに急須、和菓子など和のお茶が出来るようになっていた。

もちろん、簡単なキッチンもある。

他にも押し入れの中には敷き布団などもあって和の文化に浸れる一室となっていた。

ちなみにコーキは長机の近くに座布団を4枚ほど敷いて寝っ転がっている。

その向かいでは飛鳥、耀そしてメイドであるレティシアが和菓子やお茶を飲みながら雑談をしていた。

この前からメイドになったレティシアはカズマの指導のもと日々家事に励んでいる。

カズマの指導と言ってもカズマはいつも何処かで寝てるのでそれを起こして無理矢

理教えてもらっている。

一日に一回ぐらいはカズマから何か教えているが、一回では足りないらしい。

そしてこの部屋の主である彼は現在白夜叉に仕事を頼まれ、不在である。2、3日は戻らないそうだ。

「さあ？ 僕もカズマと24時間いるわけじゃないから」

「だよな。おつ、こつちにも写真あるじゃん！」

十六夜は長机の上に置いてあった写真の束を一つ取った。

一枚目のは、上半身裸の筋肉ヒゲダルマがカズマを投げ飛ばしているところだった。

「なんだ、これ。」

「何を見ているのかしら？」

そこで飛鳥、耀、レティシアの女性陣が十六夜が持っている写真を覗き込んだ。

「カズマ君と。」

「マツチヨ。」

「なんだこれは？」

十六夜と同じような反応をする女性陣。

「ははは、そこだけ見たらわけわかんないよね。よし、こんなこともあろうかとプロジェクターって機械もあるんだよ！」

「コーキは待つててね!とせつせと障子を閉めたりプロジェクトの準備をした。」

「数分後」

ポチつとスイッチを入れるときさっきの写真が壁に写し出された。

「さて、皆はこの筋肉ヒゲダルマが誰なのか?そして何故カズマは投げ飛ばされているか知りたいんだよね?」

「ああ、そうだ。何故カズマがこんなことになっているかが知りたい」

レティシアが他の三人を代表して答える。

「まず、僕達が国家錬金術師は知っているよね?あの写真は箱庭に呼びされる半年ほど前にあつた『国家錬金術師見習い』って言う、国家資格を取れそうな人が国家錬金術師と1ヶ月生活してみるって企画の時の写真なんだ」

「じゃあ、あのマツチヨは国家錬金術師なのか?」

「YES!彼の名前はアレックス・ルイ・アームストロング。二つ名は『豪腕』」

「なんと言うか、二つ名も名前も彼を表してるわね」

「うん、アームストロングと豪腕。見たため名前も力持ちだね」

「そして、彼は軍人でも有り地位は『少佐』。まあ、アームストロング家自体が代々高官を輩出している名門中の名門なんだけどね」

忘れるところだったけど、と付け加えると

「これは初日に互いの時期紹介も終わって錬金術について話して貰ってたら『健全な精神は鍛えぬかれた美しき肉体に宿るもの』って言い出して『見よ！我輩の美しき筋肉を!!!』って言って上半身裸になつてはち切れんばかりの筋肉を見せられたよ。あれはマジ凄かった！それで『では、体を鍛えるため組手をするのである。二人で来い、遠慮無用!!!』そして初めにカズマが投げ飛ばされたわけ」

「少佐って暑苦しそうだが漢だな。あの筋肉には少し憧れるぜ」
と十六夜。

「あんな筋肉どうやったらかしら？不思議だわ」

「多分筋肉が発達しやすい体質なんだよ」

と飛鳥と耀。

コーキはリモコンで写真を次のにした。

それには、大きなお屋敷が写っていた。

「これは、アームストロング少佐の豪邸か？」

「おっ、正解！よくわかったね、レティシアちゃん」

パチパチパチと手を叩くコーキ。

「西洋の豪邸っていうのも日本ののと違った良さがわね」

「お嬢様の言う通りだな。にしてもこの豪邸デカいな、この館ぐらいあんじゃねえか？」
飛鳥と十六夜の感想が終わると次の写真に変えた。

「む？これはカズマつと誰だこの女は？」

「金髪だし、少佐の家族じゃないの？」

「でも、似てないよな」

「ええ、金髪以外似てないわね」

「それがなんと！少佐の妹である、キャスリン・エル・アームストロングなのだ!!」

どどーんという効果音が付き添うな勢いでコーキはいった。

「全然似てないな」

「突然変異か？」

「あつ、ちなみにお父さんとお母さんはこんな感じ」

写真を二枚追加で表示した。

「なおさら、突然変異じゃねえか」

「本当に少佐の妹？」

「ほんとーだよ！」

またコーキがリモコンを操作すると、今度は片手でピアノを持ち上げてるキャスリンの写真が表示された。

「前言撤回。少佐の妹だね（確信）」

「あの細い体の何処にあの腕力が。」

「あら、十六夜君もそれくらい出来るわよね？」

「あれと俺を一緒にするな、お嬢様」

彼女が少佐の妹だと納得してくれたようだ。

「他には面白いのなのか？」

「私ももつと見たいわ」

「うくん、他にはカズマの告白現場の写真ぐらいしかないな」

「カズマって元の世界で彼女いたの？」

「いや、いなかったよ。まず告白してきた男女比が4：1だったしね」

「あいつらしいな、うん」

「それに、カズマ恋愛どころか他人に興味がなかったからね。ああ、でも十六夜君たちのことは気に入ってるみたいだよ」

「それは、嬉しいわね」

「うん」

「特にレティシアちゃんはカズマのお気に入りに入りランキングで1位か2位を争うぐらいにね」

「私にはそう見えないんだが。」

「幼なじみの僕が言うんだから間違いない！自信持っていよ」

「要するにアイツは吸血ロリのことが好きなのか？」

「そこまではわかんない。僕にわかるのはカズマはすごくレティシアちゃんを気に入っているってことまで。それがどういう意味なのかまではわかんないよ」

「レティシアはどうなの!?!レティシアはカズマ君のことをどう思ってるの!?!」

飛鳥は興奮気味にレティシアに問いかける。

「お、おい飛鳥？いきなりどうした？近い、近すぎるぞ！落ち着け！」

「そうだよ、少し落ち着いて。いきなりどうしたの？」

「これが落ち着いていられるわけないわ。もしかしたら、恋愛が見れるかもしれないよ!?!私、一回生の恋愛を見てみたかったの！」

「そ、そうなの？飛鳥ちゃんが興奮している理由はわかった。とりあえず、僕も幼なじみがどう思われているか知りたいなあ？」

「面白そうだし、俺も聞きたいな」

「私も」

「さあ、レティシア。言うのよ！」

「え、いや、そのいきなり言われてもな。その実を言うと、初めて彼を見た時には好

きになってたのかもしれない。俗に言う一目惚れと言うやつだ。と思う。それでドライに扱われて、少し傷ついた。でも、メイド服姿を褒められた時にはすごく嬉しかった。今思えば一番最初に会った時、よく平然としていられたと思う。多分、私は好きなのかもしれない。カズマのことを。」

レティシアは頬を赤く染め、うつむきながらそう言った。

「いいわね！いいわね！レティシア貴女最高よ！」

「いや、ご馳走さま。まさか一目惚れとは思わなかったよ。」

「あとは、アイツ次第だな」

「レティシア頑張つて！」

「あ、あくまで『かもしれない』だけだ！だから勝手に話を進めるな！」

「そんなに顔赤くして可愛いな♪お礼に僕の宝物を見せてあげる☆」

「おい、聞いているのか!？」

コーキはレティシアの抗議の声を無視し、リモコンを操作した。

写真には、四歳児ぐらいの白いワンピースを着たロングヘアの女の子が写っていた。

「この女の子、カズマ」

「「「「えっ?」」」」



「カズマよ、昨日はご苦労じゃった。この調子なら今日中に仕事が終わって明日には帰れると思うぞ。って聞いとんのかカズマ？おい！」

「何の話だ？」

「やはり、聞いてなかったか。この調子なら明日には『ノーネーム』に帰れるぞつと言ったんじゃ」

「ああ、了解」

と返事をしながらカズマは頭の中で首をかしげた。？

(さつき、何でレティシアのことが頭に浮かんだんだ)

どうやら、彼には自覚がないようだ。

.....

おまけ

「ただいま？」

「お帰り、カズマ。てか、何で疑問系なの？」

「どうした？」

「何でカズマの頭に猫耳が生えてるの!!?」

カズマは白夜叉からの報酬でギフト「ケットシ猫族」を手に入れた。

エピソード

「カノ」さんが入室しました。

トーマ：こんばんは。

キアラ：ばんはー

真由美：こんばんはです！

カノ：こんばんは

真由美：それでは、みんな揃ったからさっそく今回の話題を発表するよー！！

キアラ：パチパチパチ

カノ：待ってました！

トーマ：ワクワク

真由美：ズバリ！今日の話題は・・・最近東側で噂になつてゐる黒狐についてです！

カノ：???

トーマ：カノさんは知らないんですか？

カノ：ええ、何のことだかさっぱり

キアラ：なら、私が説明しましょう！

真由美：それ、私の仕事。

キアラ：黒狐とは、最近東側の違法オークションや闇コミュニティを次々と壊滅させている者のことです

真由美：無視ですか。（泣）

カノ：まるで正義の味方みたいですね。ところで、何で黒狐って呼ばれてるんですか？

キアラ：それは服装が少し大きめな黒いパーカーに黒い長ズボンを着ていて顔に黒い狐の仮面を着けているからです

真由美：ちなみに普通の狐の仮面は白に赤で描かれているんですけど、黒狐のは黒に赤で描かれているんです！

トーマ：あ、真由美さんが復活した。

キアラ：でも、すごいですよね。たった一人でコミュニティを潰すなんて並みのギフト所有者じゃありませんよ

カノ：そういうえば、さつきキアラさんは黒狐を者つて言いましたよね？人ではなく者と

トーマ：ええ、黒狐はパーカーのフードをかぶっているし、仮面も着けているから顔もわからない。

キアラ：しかも、大きめの服を着ているから男女の判別不可

真由美：そして、動きが風のように速いらしいんです。だから、潰されたコミュニケーションのメンバーでさえまともに黒狐の姿を見たものはいない

トーマ：一説には正体は本物狐だ。

キアラ：一説によると星霊だ

真由美：一説に闇コミュニティに殺された人の幽霊だ、とか色々ありますが実際は階層支配者である白夜叉が雇った傭兵つて説が多いですね

カノ：何だか都市伝説みたいですね

キアラ：一回でいいから見てみたいですねー

トーマ：白夜叉と言えば、皆さん知ってますか？なんでも、火龍誕生祭に招待されたらしいですよ。

真由美：確かにあまりない話ですが何かあるんですか？

トーマ：いえ、白夜叉が招待されたこと自体は問題ないんですが。

キアラ：なんだかハッキリしませんね。早く言ってください

カノ：まあまあ、そう急かさないであげましょうよ

トーマ：すみません。あくまで噂なんですけど、

火龍誕生祭に魔王が襲来するらしいんですよ。

第二章 黒幕の奥の更なる黒幕

第1話 カズマは誘拐されました。

〃ノーネーム〃 農園跡地

レティシア黒ウサギは荒廃している白地の土地を見ながら話をしていた。

「ところで、黒ウサギよ。先程から主殿達の姿が見えないんだが」

「十六夜さん、飛鳥さん、耀さん、コーキさんは恐らく何処かにいると思いますがカズマさんはいつも通りでしょう。あ、そろそろお洗濯するお時間なので起こしてきてくれませんか？」

「うむ。まったくアイツはいつも寝ているからな。少しは、自分で起きて行動して欲しいものだ」

レティシアはヤレヤレという感じに口では言っているが表情は嬉しそうだった。

その時、

「く、黒ウサギのお姉ちゃああああん！た、大変ー！ー！！！！」

割烹着姿に狐耳と二尾を持つ、年長組のリリが泣きそうな顔で走ってきた。

「リリ!? どうしたのですか？」

「じ、実は飛鳥様が十六夜様と耀様とコーキ様を連れて……あ、こ、これ手紙！そしてこっちはレティシア様宛です！」

パタパタと二尾を動かしながら、リリは黒ウサギはとレティシアにそれぞれの手紙を渡した。

『黒ウサギへ』

北側の四〇〇〇〇〇〇外門と東の三九九九九外門で開催される祭典に参加してきます。

貴女も後から必ず来ること。

私達に祭りの事を意図的に黙っていた罰として、今日中に捕まえられなかった場合私達四人十一人はコミュニニティを脱退します。

あ、『十一人』つてのはカズマ君のことね。彼は人質として誘拐しました。

死ぬ気で探してね。応援してるわ。

P/S ジン君は道案内で連れて行きます』

『レティシアちゃんへ』

ここを出る時カズマが寝ていたので寝袋に積めて誘拐しちゃった、テヘツ☆

このままだと、愛しのカズマはコミュニニティを僕達の道連れで脱退しちゃうよ！

それがいやだったら、頑張つて僕を捕まえてね！

期待してるよ。

P/S 僕は「火龍誕生祭」に行ってください」

「な、何を言っちゃってんですかあの問題児様方ああああー！！！！
と絶叫している隣でレティシアは

「フッフッフ・随分と面白いことをしてくれたな、コーキ」

笑っていた。

◇◇◇
ここに問題児逃走者V S 保護者ハンター? の鬼ごっこが幕を開けた。

同時刻、逃走者側

十六夜、耀、飛鳥、ジン、コーキそしてカズマは「六本傷」のカフェにいた。

「まさか、980000kmも離れてるなんて。」

「ですから皆さん、戻りませんか?」

「断固断る!」

彼らは先ほどジンから北側の境界壁までの距離を聞いたところだ。

いくら世界屈指の最強問題児集団でも980000kmは遠すぎた。

「んー、じゃああれは?」「ペルセウス」のところに行つたときに使つたど〇でもドアみたいなの」

「それはもしかして、アストラルゲート“境界門”のことですか？」

「うん、あれなら門を潜るだけで移動出来るじゃん」

「断固拒否です！外門同士を繋ぐ“境界門”を起動させるには凄くお金がかかります！

“サウザンドアイズ”発行の金貨で一人一枚！六人で六枚！これはコミュニティの全財産よりも多いです！」

ジンはコーキの提案を全力で拒否した。

「なるほど。確かにコミュニティを破産させるわけにはいかないね。それにしても、ジン君元気だね。何か良いことでもあった？」

この言葉にジンはイラツとした。

「せっかくコイツ誘拐してまで煽ったが、マジでどうする？」

「今頃、黒ウサギもレティシアもすごく怒ってるのかな」

「今なら笑い話ですみますから、皆さん帰りませんか？」

「ちよつと待つて、最後の希望にかけてみる」

コーキはそう言うのと、地面に寝袋で寝ているカズマのポケットに手を突っ込んでコインケースを引き抜いた。

それを逆さまにし、振ってみると硬貨数枚テーブルの上に落ちた。

「えーと、カズマのポケットマネーは銅貨五枚に銀貨一枚、そして金貨四枚」

場所は変わって、〃サウザンドアイズ〃支店・和室。

店内に入る時の白夜叉の空中スパーアクセルや、女性店員の門前払いの話は以下略。

そして、今十六夜がここに来た理由を説明したところだ。

「ふむ、なるほど。その話の前にまず、一つ問いたい。〃フオレス・ガロ〃の一件以降、おんしらが魔王に関するトラブルを引き受けるとの噂があるが、真か？」

「ああ、その話？それなら本当よ」

飛鳥が肯定する。

「ジンよ。それはコミュニティのトップとしての方針か？」

「はい。名と旗印を奪われたコミュニティの存在を手早く広めるには、これが一番いい方法だと思いました」

白夜叉は少し考え込むと言った。

「なら良い。これ以上の世話は老婆心というものだろう」

「んで、路銀関係の話は？」

「うむ。実はその〃打倒魔王〃を掲げたコミュニティに、東のフロアマスターから正式に頼みたい事がある。此度の共同祭典についてだ。よろしいな、ジン殿？」

「は、はい！謹んで承ります！」

「認められて良かったね、ジン君」

「はい！」

ジンは明るい表情で応えた。

「さて、ではどこから話そうかの……ああ、そうだ。北のフロアマスターの一角が世代交代をしたのを知っておるか？」

「え？」

「急病で引退だとか。まあ亜龍にしては高齢だったからのう。寄る年波には勝てなかったということじゃな」

「まさか頭首が替わっていたとは知りませんでした。それで、今はどなたが頭首を？ やっぱり長女のサラ様か、次男のマンドラ様が」

「いや。頭首は末の娘。おんしと同年のサンドラが火龍を襲名した」

は？とジンが小首を傾げて一拍。二度程瞬きをした。

「サ、サンドラが!? え、ちよ、ちよつと待ってください! 彼女はまだ十一歳ですよ!」

「あら、ジン君だって十一歳で私達のリーダーじゃない」

「そ、それはそうですけど、いえ、だけど、」

「なんだ? まさか御チビの恋人か?」

「わー、ジン君彼女いるんだ。初耳! 意外と隅に置けないね! この、い・ろ・お・と・こ」

「コーキさんは黙っててくださいいッ！」

ヤハハと誤魔化す十六夜とコーキ。それに怒鳴り返すジンだった。

「んで、結局白夜叉ちゃんは何がして欲しいの。あれ？何か忘れてるような」

「そう急かすな。今回の誕生祭は北の次代マスターであるサンドラのお披露目も兼ねておる。しかし、その幼き故に東のフロアマスターである私に共同の主権者ホストを依頼してきただい」

「あら、それはおかしな話ね。北は他にもマスター達が居るのでしよう。ならそのコミュニティをお願いして共同主権にすればいいんじゃないかしら？」

「うむ。まあ、そうなのだがの」

急に歯切れが悪くなる白夜叉。

頭をかいて言いにくそうにしている白夜叉に十六夜が助け船を出した。

「幼い権力者を良く思わないs「あ！思い出した!!」ってどうしたコーキ？」

さつきまでウンウン唸っていたコーキがいきなり大きな声で言った。

「白夜叉ちゃん！この話あとどれくらいで終わる!？」

「ん？んん、そうだな。短くともあと一時間程度はかかるかの？」

「まずい、そんな時間ないのに。まずいマズイマズイ」

「だからどうかしたの、コーキ君？」

「黒ウサギちゃんとしてイシアちゃん」

「「「あつ！」」」

ハッ、と他の問題児三人とジンも気が付く。

今現在、自分達は逃走者の身。なのに今から更に一時間もの説明を聞いていたら捕まってしまう。

ジンは咄嗟に立ち上がると

「し、白夜叉様！」

『ジン君、だまりなさい！』

ガチン！と下顎をを飛鳥のギフトで閉じらせられた。

「ん、あく、うるさい。人がn「状況説明すんの面倒だからもうちょい寝てろ！」

この騒ぎに不機嫌MAXで起きたカズマは十六夜に殴られ気絶した。

「ナイス、十六夜君！そして、さっさと北側に連れてって白夜叉ちゃん！」

「む、むう？別に構わんが、何か急用か？とか、内容も聞かずに受託してよいのか？」

「いいから、早く！それにそっちの方が「面白い！僕が（俺が）保証する！」

後半はコーキと十六夜のユニゾンになった。

白夜叉は目を丸くすると何々と哄笑を上げ頷いた。

「そうか。面白いか。いやいや、それは大事だ！娯楽こそ我々の生きる糧なのだからな。

ジンには悪いが、面白いならば仕方がないのう？」

白夜叉のイタズラっぽい横顔に声に出せない悲鳴を上げるジン。

暴れるジンを嬉々として押さえつける問題児達を余所目に、白夜叉は両手を前にだしパンパンと柏手を打った。

「ふむ。これでよし！これでお望み通り、北側に着いたぞ」

「「「えっ!?!」」」

◇◇◇

東と北の境界壁

四〇〇〇〇〇〇外門・三九九九九九外門、旧サウザンドアイズ支店。

四人が店から出ると、厚い風が頬を撫でた。

何時の間にか高台に移動していた支店からは街一帯が展望出来た。

飛鳥が大きく息を呑み、感嘆の声を上げた。

「赤壁と炎と・ガラスの街」

そう、ここからは東と北を区切る巨大な赤壁、境界壁が見えた。

他にも、彫像されたモニユメントやゴシック調の尖塔群のアーチ、二つの外門が一体となった巨大な凱旋門もあった。

カズマが好きそうだな、とコーキは考えながらカットガラスで飾られた歩廊を眺めて

いた。

「いや、こんだけ離れてるだけあって東と全然違うね。歩くキャンドルスタンドなんて空想の世界の物で実際にみることになるなんて思わなかったよ」

「ふふ。それだけではないぞ。其処の外門から出た世界は真つ白な雪原でなそれを箱庭の結界と灯火で、常秋の様相を保っているのだ」

白夜叉の解説に耳を傾けている十六夜とコーキの隣で飛鳥が熱っぽく訴えた。

「今すぐ行きましょう！あのガラスの歩廊を行ってみたいわ！いいでしょう白夜叉？」

「ああ、構わんよ。続きは夜にでもしよう。暇があればこのギフトゲームにも参加していけ」

白夜叉がゴソゴソと着物の袖から取り出したゲームのチラシを四人が覗き込んだ時だった。

「見イつけたのデスヨオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ズドオン!!と、爆撃の様な着地。その絶叫に跳ね上がる一同。

大声の主は我らが同士・黒ウサギ・もとい、鬼ウサギ。

「ふ、ふふ、フフフフ、よおおおやく見つけたのですよ、問題児様方ア」

危機を感じとり真つ先に動いたのは十六夜だった。

「逃げるぞツ!!」

「逃がすかツ!!」

「え、ちよつと、」

十六夜は隣にいた飛鳥を抱き締めかかえ逃走。

耀は旋風を巻き上げ、空に逃げようとしたが鬼ウサギの大ジャンプでブーツを掴まれた。

「わ、わわ。」

「耀さん、捕まえたのです!!もう逃がしません!!」

ぶっ壊れた気味に笑う鬼ウサギは耀の耳元で囁いた。

「後デタツプリ御説教タイムナノデスヨ。フッフ、御覚悟シテクダサイネ（黒笑）（黒笑）」

（黒笑）」

「りよ、了解」

そして、壊ウサギは耀を白夜叉に投げつけると白夜叉に耀を任せ十六夜を追いかけ街へ走っていった。

「ふう、どうやら気づかれなかったみたいだね。僕って運がいいな」

鬼ウサギ登場からずっと身の安全のため空気に徹していたコーキは呟いた。

その時、〃サウザンドアイズ〃支店からカズマが不機嫌そうに出てきた。

「クソツ、十六夜の奴どこ行きやがった・つか、ここどこ？」

十六夜に殴られたことを怒っていたカズマは街を見ると、すぐに疑問を口にした。

それも、そのはず

!?

〃ノーネーム〃本抛で寝る↓起きたら〃サウザンドアイズ〃支店↓十六夜に殴られて気絶↓外に出たら知らない街が目の前にあつた

のだから。

「いや、カズマ起きたんだーここはね、北側にある四〇〇〇〇〇〇・三九九九九九外門。僕達は〃火龍誕生祭〃にきているんだよ」

と言いながら後ろにいるカズマの方を振り返ったコーキはピタリ、と固まった。

そこには金髪美少女に後ろから抱き付くように、首に噛り付かれたカズマの姿があつた。

次の瞬間には恐らく吸血をされて貧血を起こしたのだろう、自立出来なくなったカズマをレティシアが人形のように抱いた。

ぎゅつとカズマを抱き締めながらレティシアは笑顔でコーキを見ている。もちろん眼は笑っていない。むしろ不自然に瞳孔が開いていて怖い。

「あ、あは、アハハハハハ」

今のレテイシアなら身体中の血液を飲まれかねない。彼女の眼は『ただで済むと思うなよ（黒笑）』と言っている。

ふう、とコーキはため息をつくとき、全力で土下座をした。

「すみませんでしたツツ!!」

.....

第2話 ヒゲ☆

“サウザンドアイズ” 支店

コーキは正座で座っておりがたーい御説教を聞いていた。

「だからな、いくらなんでも脱退つてのは悪質すぎるぞ。どれ程私たちが——」
とまあこんな感じだ。

同じく捕まった耀は、耀で白夜叉に事の経緯を話した。

ちなみに貧血で倒れた哀れなカズマはレティシアに膝枕をされている。

「ふふ。なるほどのう。おんし達らしい悪戯だ。しかし、“脱退”とはちとやりすぎじゃ。しかも、レティシアを煽るために誘拐までしておつて」

「うん・私も少し思った。でも、黒ウサギも悪い。お金が無いことを説明してくれたら、こんな強行手段に出なかつた」

「普段の行いが裏目に出た、とは考えれんのか？」

「そ、そうだけど……。それも含めて信頼のない証拠。少しは焦ればいい」
拗ねたように言う耀と、くつくつと笑う白夜叉。

そこにやっと、御説教から解放されたコーキが疲れた顔で会話に参加した。

「し、白夜叉ちゃん。僕にもお茶と和菓子を頂戴。」

白夜叉は急須からお茶を注ぎ、甘い和菓子の皿と一緒に出した。

コーキは一口で和菓子を食べ、お茶を一気に飲んだ。

そして、眼を閉じると、

「ふう〜、生き返った!!!いやあれだね、今後レティシアちゃんを怒らすのは当分やめとこ
う。僕の精神力がもたない」

次の瞬間にはいつものコーキがいた。

「おい、今当分つと言ったか、コーキ?」

「嘘です!冗談です!ごめんなさい、ちよつとした出来心だったんです!これから未来
永劫僕はカズマに誓ってレティシアちゃんを怒らせません!」

「何故、そこでカズマに誓うのじゃ?」

「なんとなく。んでんで、大きいギフトゲームがあるって本当?」

「本当だとも。特に耀、おんしに出場して欲しいゲームがある」

そう言うところをチラシを取り出し見せた。

『ギフトゲーム名 “造物主達の決闘”』

・参加資格、及び概要

・参加者は創作系のギフトを所持。

・サポートとして、一名までの同伴を許可。

・決闘内容はその都度変化。

・ギフト保持者は創作系のギフト以外使用を一部禁ず。

・授与される恩恵に関して

・“階級支配者”の火龍にプレイヤー希望する恩恵を進言できる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、両コミュニティはギフトゲームを開催します。

“サウザンドアイ

ズ”印

“サラマンド

ラ”印

「ありや？このギフトゲーム、僕出れないじゃん！でも、確かに耀ちゃんにピッタリの

ゲームだね」

「そうかな？」

「そうだと。幸いなことにサポーター役にはジンもおるし、隣の自称天才もおるぞ」

「やーだ白夜叉ちゃん。自称じゃなくて、事実だよ。じ・じ・つ」

「確かに頭がよく回るが、神話とうの知識はカズマが上じやなかったか？」

「うっ」

コーキはあからさまに目を逸らす。そう、コーキは医術をも使える天才だが神話とかは学問と関係ないと判断して疎い。

その点、カズマは昔から神話や物語が好きで読んでいたので詳しい。

「ね、白夜叉」

と耀がふと質問する。

「何かな？」

「その恩恵で、黒ウサギと仲直り出来るかな？」

その、質問に白夜叉は優しい笑みで肯定した。

「出来るとも。おんしにそのつもりがあるのならの」

「そっか。なら、出場してみる」

これでコーキのやることも決まった。

「んじや、ゲームまで時間あるし自由行動ってことでもいい？」

「よいぞ。この機会に大いに楽しんで来い。ああ、お前達の宿はここじゃから日が沈む頃には帰ってこいぞ」

「ん、了解。おーい、カズマ起きろー！街に遊びに行くぞー！」

レティシアに膝枕されてる、カズマの顔をペチペチと叩く。

するとカズマはうめき声上げると目を覚ました。

「あ、ああ、そうかここは『サウザンドアイズ』か。」

カズマは起き上がると周りを見回し、現状を把握した。

「いくらレティシアちゃんの手が気持ちいいからって寝すぎ。レティシアちゃんが迷惑だよ。」

「いや、私は別に構わないんだが。その、もし迷惑をかけたと思うなら、礼として褒美が欲しい。」

レティシアは俯きながら、途切れ途切れに言った。彼女の顔は言うまでもなく真っ赤だ。

「？」

カズマは小首を傾げた。そのまま考えること3秒。

レティシアが何を欲しているか理解すると、カズマはレティシアの頭をなでなでと優しく撫で始めた。

気持ち良さそうに目を細めるレティシア。ものすごく幸せそうだ。

そんな二人の少し離れた所で白夜叉が言った。

「。なんじゃ、あいつらそんな関係じゃったのか」

「多分白夜叉が妄想している関係じゃない」

「とうか、＼ノーネーム」に來たらたまに見れるよ。だつて、家事とかが上手に出來たらレティシアちゃんのご褒美として撫でてもらつてるもん」
 「なるほどのう。レティシアの片想いというわけか。あの人形のようなあやつに想いが届くというのう、レティシア」

白夜又は子の成長を見守る親のような優しい笑みを浮かべながら呟いた。

そのあと少し甘い時間は10分位続いたのだつた。

◇◇◇

「東北の境界壁・自由区画・商業区

そこをコーキ、カズマ、レティシアの三人は歩いてきた。

「うわー、すごい！ キヤンドルスタンドが看板下げて走つてく」

「あれは、＼ウイル・オ・ウイスプ」が出演しているやつだな」

「＼ウイル・オ・ウイスプ」？ 人魂が集まったコミュニテイ？」

「はは、違う違う。確かに見知らぬ霊の子供を引き取つたりしているが、お前が想像しているようなホラーなコミュニテイじゃないぞ」

とレティシアは笑いながら答える。

彼女は先程からすぐくご機嫌だ。

それは頭を撫でてもらったこと以外にも今こうしてカズマと一緒に街を見回ってい

るからだろう。

ちなみに耀は「食べ物私が私を読んでいる」と真顔で言うどどっかに行ってしまった。今頃はどこかで屋台荒らしをしているだろう。

「あ、クレープ屋さん発見！カズマ、レティシアちゃん食べない？」

「いいよ」

「なら私が二人の分も買ってこよう。何がいい？」

「ん、お言葉に甘えて。僕はイチゴので」

「俺は、チョコと生クリーム」

「わかった。それじゃ行ってk」「ああ、待って待って！」「どうした？」

コーキはコインケースから銀貨を取り出すとレティシアに渡した。

「レティシアちゃん、僕達追いかけるためにポケットマネー使ってお金ないって言うってたじゃん。これ使いなよ」

「そうだったな、私としたことがうっかりしていた。それじゃあ、買ってくる」

そう言うのとレティシアはクレープ屋さんに駆けていった。

「いや、レティシアちゃんいい子だね。あんな美少女好意を向けられてる幼なじみが憎いなー」

と言いなながらチラリと隣カズマを見てみる。

カズマはこちらを向いてジトローつとした目でコーキを見ていた。

「そんなことで誤魔化せると思ったかコーキ？」

「ええ、何のことかな。僕はカズマ何を言いたいかわかんない」

とわざとらしく惚ける。

「そうか、わかんないなら教えてやろう。何でお前が俺の財布持ってんだよ!!」

そうさつきレティシアに渡した銀貨含め、コーキが出したコインケースは前話の時に盗ったカズマの物だ。

「にやつはー、バレたか。ゴメンナー、つつい間が指したんだよ。でもカズマは優しいから許してくれるよ、ね？」

最後レティシアに化けて可愛く許しを乞う。

もし、そこら辺の男ならすぐに首を縦に振っただろうがカズマは違う。

彼は「はあ、全く」とため息をつくど、左手で頭を抑え右手は拳を握りしめた。

「許すわけないだろうが、バカがあ!!!」

と殴ろうとした時だった。

「む?そこにいるのはカズマ・N・エノモト!カズマ・N・エノモトではないか!」

そう大声で言い誰かが近づいて来た。

ん?とコーキを殴ろうとしていた手を止め振り返ると、そこには――

次の瞬間にはカズマの苦しそうな叫び声とボキ、メキとかの骨が折れる音が響いてい
た。

「ん？今カズマの声が聞こえたような」

「はい、お待ちどう様！イチゴグレープに生チョコクレープにチョコフォンデュクレー
プね」

「ああ、ありがとう」

レティシアは代金を渡し、クレープ三つを受けとると落とさないように気をつけて歩
き出した。

すると、カズマ達を待たせている所あたりに人だかりが出来ていた。

「何かあったのか」

人だかりの中ではコーキの静止の声が聞こえてくる。

「すまない、ちよつと通してくれ。すまない」

と人だかりの中に入ると中の光景はある意味すごかった。

涙を流し『我輩感動！』と言いながらカズマを抱き締め（ほぼ締め技）頬擦りしてい
る筋肉ヒゲダルマ。

そのヒゲダルマに

「少佐、アームストロング少佐！死んじやう、カズマが死んじやうから!!首を締められた子猫のように『みゆ・』つてなつてゐるから!!」

必死にカズマを放すように説得しようとするコーキ。

それを見ていたレティシアは、『いいな！私をカズマに頬擦りしたい!!』と思つたと、そこでやつとカズマが少佐から解放された。

「我輩としたことが久しぶりにアメストリス人に会えた嬉しさのあまり我を忘れておつた」

「うん、そうだね。危うく、カズマを窒息死させちゃう位我を忘れてたね!」

「クソがつ！少佐あんた俺を殺すきか？危うく、死に損ねたぞ!!!」

「ふん！前から言つておるだろう。鍛え方が足らんのだと!!」

「あんたと一緒にすんなコラア!」

「まあまあ、カズマ落ち着いて。そしてレティシアちゃんも妄想 in the worldから帰つてきて〜」

「カズマに抱きついて、頬擦りして匂い嗅いだりして、あれしてこれしてぐふぐふふふふ。——はっ!」

とりあえず少佐が何故ここにいるなど話をするため、カズマたちを引き連れ移動をすることにした。



とあるカフェテラス

「んじやまず、レティシアは初対面だし自己紹介からよろしく!」

「うむ。我輩名はアレックス・ルイ・アームストロング、地位は少佐。そして国家錬金術師でもあります。以後お見知りおきを」

「うん、話に聞いていた通りパワフルな人だ。私の名前はレティシア・ドラクレア、よろしくアームストロング少佐」

そう言うと二人は握手をした。

「で、何であんたがここ箱庭にいるんだ?」

カズマは生チョコクレープをモグモグと食べながら質問する。

ちなみに席は時計回りにカズマ、レティシア、少佐、コーキの順になっている。

「む、それについてだが少し長くなるぞ。いいのか?」

「大丈夫だ。実際に話が長くても作者が簡単にまとめてくれる」

「なら、思う存分話すとしよう」

そう言い少佐はこれまでの経緯について話した。

「——というわけである」

カズマは紅茶を一口飲んでため息をついた。

「何と言うか、あんたらしいな少佐」

少佐話を簡単にまとめるとこうだ。

- 1, アームストロング家に代々伝わりし開かずの間を開けてしまった
- 2, その床には錬成陣が描かれていて、それを調べていたら勝手に術が発動した
- 3, 気づいた時にはこの街に立っていた
- 4, 周りの人に話を聞き、箱庭について知った
- 5, 生活のためにもギフトゲームに参加して連勝をしていた
- 6, そこをサラマンドラにスカウトされた

「恐らく、少佐殿が錬成陣と思ったものは魔法陣だと私は思う」

「魔法陣ですと?」

「ああ、召喚や転移の魔法陣は錬成陣と似ているからな」

「何故そのようなものが我輩の家に?」

「さすがにそれは私にもわからない」

コーキは追加で注文していたショートケーキの最後の一口を食べると言った。

「それを考える初めるときりがないよ。とそんなことより、少佐さあ街を案内してよ」

「街と言うより『火龍誕生祭』を、だろろうコーキ・C・マユズミ?」

「さすがに少佐分かってる」

「うむ、任せよ。コミュニティ「サラマンドラ」所属アレックス・ルイ・アームストロングがお前たちを案内しよう」

全員が椅子から立つと会計をし、歩き出した。

と、そこで

「あつ、言い忘れてたけど案内するのは僕だけでいいよ。カズマとレティシアちゃんは二人だけで見て回りなよ」

少佐は転けそうになった。

「何だ、案内するのはお前だけなのか」

「そうガツカリしなさんな。見てよあのカズマの尻尾。楽しみにしていたことがよくわかるよ」

そこでカズマはさつと頭を触ると、そこにはネコミミがぴよこん！とあった。

「クソガつ！また出てきやがった!!」

と不機嫌そうに言うカズマ。

そんなカズマを無視し、

「それじゃあ、コーキの言う通りに二人で回ることにする。すまないが、少佐の案内はまた後日頼むとするよ」

「いつでもお待ちしております、レティシア殿」

コーキの方を向くとアイコンタクトで

『感謝する。このチャンスを無駄にはしない!』

『グットラック、レティシアちゃん。良い結果が出ることを祈ってるよ☆』
礼を言う。

「んじゃあ、またね!行こう、少佐!!!」

「うむ、また会おうカズマ・N・エノモト」

そう言つてコーキ達は人混みの中に消えていった。

「それでは私たちも行こう、カズマ!」

レティシアはカズマの手を握ると走り出した。

「おい、そんなに急がなくても。」

「時間は有限なんだ。早くしないと日が暮れる!」

その言葉にカズマはため息をつきながらもこういうのも悪くないなと思つた。

このあと、ネズミの大群と会つたのは約10分後の話だつた。

第3話 コーキの苛立ち

境界壁・舞台区画、美術展・出展会場付近の“ウィル・オ・ウィスプ”の店

「流石は“ウィル・オ・ウィスプ”のアクセサリー。どれも細工が細かくて綺麗だなあ。カズマ、これ似合うか？」

レティシアは並べてある数々のアクセサリーの中からネックレスをとると着けてみた。

「似合ってると思う。これがコークならもっと上手い誉め言葉を言うんだろうがな」

カズマは中々戻らないネコミミと格闘しながら言う。

「まあ確かに、あいつはよく口が回る。でも、カズマもそこまで口下手じゃないと私は思うぞ」

レティシアはネックレスを元の所に置きながら機嫌良く言った。

「そうか？でもやっぱり実際とこ——」

とカズマが言った時だった。

「ぎ、ぎやあああああああああああ——」

つんざくような悲鳴が上がった。

そして、突如近くにある展示会場の洞窟からわらわらと参加者たちが逃げ出してきた。

「何かあったみたいだな」

「ああ」

さっきの楽しい雰囲気から一転、カズマとレティシアは冷静に状況を分析する。

カズマがネコミミを澄ましていると、展示会場の洞窟から逃げ出してきたらしい男と誰かの会話が聞こえた。

「おい！どうした!? 中で何があったんだ!?!」

「か、影、真つ黒い影と紅い光の群れが」

「影と紅い光だと?」

「そ、そうだ。その長い髪に赤いドレスの女の子と小さい精霊を追いかけて」

そこでカズマは人獣から人型に戻ると

「おい、レティシア今の」

「赤いドレスに長髪の女の子、まさかっ!?!」

二人はそれ以上は言葉にせず、すぐに走り出し展示会場に入る。

レティシアは途中から翼を出して回廊を先に突き抜けて飛んでいく。

程無くして飛鳥と思われる声が聞こえてきた。

「……っっていないさい。落ちては駄目よ！」

「飛鳥!?!何がっ!?!」

レティシアは言葉を切り、息を呑んだ。

そこには逃げ出そうとする者達と、何千、何万というネズミの群れとそれから小さな精霊を守り戦う飛鳥だった。

「レティシア、ここを閉じる! 久遠を回収しろ!」

カズマは先を飛ぶ、レティシアにそう叫ぶとギフトカードから刀を取り出す。

「了解した!」

レティシアはリボンを片手で解くと、さらに加速して飛鳥の元に向かって行った。

その時、姿が少女から女性に、服装はメイド服から深紅のレザージャケットに変わっていたがカズマは気にしなかった。

レティシアは飛鳥の元にたどり着くと、影で飛鳥に襲いかかるネズミを全て肉の塵と変えた。

「飛鳥、出るぞ!」

「え? れ、レティシア!?!」

飛鳥の戸惑いの声を無視して抱き抱え、飛ぶ。

すぐにカズマの頭上を越えていった。

カズマは刀抜くと、地面を弾いた。

すると、カズマの前にバシイ！と横一直線に蒼い稲妻がいくつも走る

。そして次の瞬間には地面盛り上がり、洞窟を完全に塞ぐ壁が錬成されていた。

「こんなものか」

壁の向こうではネズミの動く気配がしていたが、すぐに無くなった。

恐らくこれ以上は無駄だと思ひ手を引いたのだろう。

カズマが洞窟から出ると、元のメイド服のレティシアと飛鳥と飛鳥に半泣きになりながら抱き付く小さい妖精がいた。

「あすかつ！あすかあつ」

「ちよ、ちよつと」

「ああ、カズマご苦勞様。ネズミ共はどうなった？」

「壁を越えるのが無理だと分かったら、逃げていった。あと、そのチビ妖精どうするんだ？」

「見ての通り、飛鳥にすっかり懐いている。日も暮れて危ないし、今日のところは連れて帰ろう」

カズマはそれに「そうか」と答え、飛鳥は躊躇いながら「そ、そうね」と頷いた。

そして、飛鳥を真ん中にして雑談を交えながら三人並んで“サウザンドアイズ”の店

舗に戻るのだった。

その時、カズマが思い出したように「レティシア、お前フォルムチェンジ出来たんだな」と言ったら無言でドスツ！と蹴られたのはまた別の話である。

◇◇◇

「ふん！『ノーネーム』の分際で我々のゲームに騒ぎを持ち込むとはな！相応の厳罰は覚悟しているか!？」

（あゝ、何この人？どんだけ見栄が大事なの？面倒なタイプだなあゝ）

コーキは少し不機嫌だった。

「これマンドラ。それを決めるのはおんしらの頭首、サンドラであるろ？」

それが自分がしてないのに怒られているからではない。観光を邪魔されたからでもない。

カズマと別れた後、少佐がコミュニティに呼ばれたのでついていったら十六夜と黒ウサギにあった。

そしてあの後の顛末を聞いてただ説教をされるなら良かったが、マンドラの差別のようない方が気に入らなかつた。

カズマもそうなんだが、基本的にコーキは差別が大嫌いだ。

理由はイシユヴァールのこととか様々なこと。

ちなみにガルドの時は実力をまだ証明してないので特に何とも思っていない。

でも、今は違う。『フォレス・ガロ』を解散させ、『ペルセウス』を倒し、『サウザンドアイズ』に正式に仕事の依頼をされるまでになっている。

そこまで実力を証明しているのに差別されたように言われるのはさすがに腹が立つ。それが、相手の実力を分かんないほどバカそうな人じやないから尚更だ。

コーキはそんな苛立ちをテンプレ笑顔の仮面に隠す。ヘラヘラ、ニコニコと。そして、何故そこまでマンドラが過剰に反応しているかを観察する。

「『箱庭の貴族』とその盟友の方。此度は『火龍誕生祭』に足を運んでいただきありがとうございます。貴方達が破壊した建造物のい「それならこやつらの仲間が元に戻しておろぞ」つてええ？」

マンドラは驚いて白夜叉が指す方を見ると、さっきまで破壊されていた時計塔が元に戻っていた。

これにはマンドラも驚いていた。

誰が直したかは言わずもがな。

マンドラは咳払いをすると続けた。

「ええ、建造物もちやんと元に戻っていますし、今回の件に関しては私から不問とさせていただきます」

「へえ？いくら時計塔直したからって太っ腹だな」

十六夜が意外そうな声を上げた。

「うむ。おんしらは私が直々に協力を要請したのだから。何より怪我人が出なかった

ことが幸いしたのだ」

黒ウサギはほっと胸を撫で下ろした。

「ふむ。いい機会だから、昼の続きを話しておこうかの」

「そう言う」と白夜又は連れの者達を下がらせ、サンドラも同じよう側近であるマンドラを残して同士を下がらせた。

コーキは下がる少佐に『またね〜！』と手を振り、少佐も小さく手を振ってくれた。

書き忘れていたが、『サラマンドラ』での少佐の地位は側近であるマンドラの補佐である。

これでここに残ったのは、白夜叉、十六夜、コーキ、ジン、黒ウサギ、サンドラ、マンドラの七人。

サンドラは人がいなくなると、硬い表情と口調を崩し、玉座を飛び出してジンに駆け寄った。

「ジン、久しぶり！コミュニケーションが襲われたと聞いて随分と心配していた！」

「ありがとう。サンドラも元気そうでよかった」

ジンもサンドラも普通の少年少女のように笑顔で話をしている。それをコーキは、和むにやーと思いつながら観察の合間の休憩をする。

「ふふ、当然。魔王に襲われたと聞いて、本当はすぐに会いに行きたかったんだ。けどお父様の急病や継承式のことですつと会いに行けなくて」

「それは仕方ないよ。だけどあのサンドラがフロアマスターになっていたなんて」
「その様に気安く呼ぶな名無しの小僧!!」

サンドラはいきなり帯刀していた剣をジンに向かって抜く。

ジンの首筋に触れる直前、その刃を十六夜が足の裏で受け止め、蹴り返した。

「いくらなんでも過剰反応し過ぎじゃない？ いい大人が聞いて呆れるなあ」

ここで初めてサンドラはコーキが後ろに居たことに気が付いた。

コーキはショットガンの銃口を片手でサンドラの頭に押し付けたまま肩を竦める。

「ふん！ サンドラはもう北のマスターになったんだぞ！ 誕生祭を兼ねたこの共同祭典に名無し」 風情を招き入れ、恩情を掛けた挙げ句、馴れ馴れしく接されたのでは「サラマンドラ」の威厳に関わるわ！ この「名無し」のクズが！」

サンドラは振り向き、ショットガンを払いのけるとコーキと睨み合う。

「これマンドラ。いい加減に下がれ・コーキもだ」

それを白夜叉が呆れた口調で諫めた。

「アハ！ゴメンねー。いくらなんでもジン君を守るためでもやり過ぎたかなー？」
 「実際に守ったのは俺だぜ」

「そだね。とりあえず、お話の続きをどうぞ」

とコーキはピエロのようにおどけてみせた。

全くとため息をつくとき白夜又は一枚の封書を取り出した。

「この封書の中に、おんしらを呼び出した理由が書いてある。己の目で確かめるがい」

怪訝な表情で十六夜が受けり、内容に目を通す。コーキはそれを横から覗き込んだ。

「」

「あーら、本当だったんだ」

内容を確認した十六夜からは普段の軽薄な笑みが消え、コーキからは緊張の色が見えた。!

それを不思議に思った黒ウサギも手紙を覗き込むと、

「こ、これは」

驚愕の声を上げた。

其処には只一文、こう書かれていた。

『火龍誕生祭にて、魔王襲来』の兆しあり』

第4話 シャンバラ

サウザンドアイズ旧支店・露天風呂

「ハハハ！今、露天風呂つて聞いて女湯を想像しましたか？残念、ここは男湯でございませよー」

「誰に説明してんだ、コーキ？」

「ん？この世界を神の視点から見てる方々ですかね？w w w w w w」

コーキはケラケラ笑いながら答えた。

「んで、何でお前は黒ウサギの姿で温泉入つてんだよ？」

十六夜の質問に待つてましたと言わんばかりにコーキが答えた。

「それは、男湯なんてむさ苦しシーンですからせめてものサービスです♪」

「そんなにむさ苦しんですかね？」

とジン。

「そりやそうだろ。御チビだつて見るなら男湯より女湯の方がいいだろ？」

「確かに見るなら男湯より女湯がつて何を言わすんですか、十六夜さん!？」

顔を真っ赤にして怒鳴るジンを見て、十六夜はヤハハと笑う。

「やっぱり御チビも男だな」

「そうですねー。健全な男の子ですもんね、ジン坊っちゃーん!!」

コーキの呼び方に身の危険を感じたジンはカズマの後ろにさっと隠れる。

それを見て、コーキは悪戯を思い付いた子供のような笑みを浮かべると、

「恥ずかしがるなよーん!」

カズマの後ろにいるジンに飛びかかった。

盾になっているカズマは、すつと十六夜の横に移動しこれを回避。

残った無防備なジンはそのまま黒ウサギ^{コーキ}に抱き付かれた。

「ほーら、どうですジン坊っちゃん? この黒ウサギの力。ラ・ダは?」

「ぎやあああああ!! ちや、コーキさん、やめ 助け 僕の精神が 理性が あ

ああああああ!!!」

ジンはバシヤバシヤと手足をバタつかせて抵抗するが効果はない。

「あはは、可愛い反応。そんなジン坊っちゃんにはサービスう!」

黒ウサギはジンを抱き締める力を更に強くする。

それによりジンの顔により強く黒ウサギの大きくて、柔らかく、しかし程良い弾力を持つ双乳が押し付けられ、彼の理性はガリガリ削られていく。

「あ、あああああああああああああ!!!」

ジンは顔どころか身体中真っ赤にして絶叫しながら更に激しく抵抗する。

一応書いておくが黒ウサギはバスタオルは巻いている。ジンにとってはほぼ意味ないが。

そんな見ていた十六夜は悔しそうに呟いた。

「御チビのくせに羨まし過ぎるぜ」

「騒がしい」

隣でカズマは少し迷惑そうにしている。

「あ、そうだ！お前にまだ礼言ってなかったな、ありがとな」

「いきなり何？全然意味わからない」

「俺と黒ウサギがぶつ壊した時計塔だよ。おかげで助かったぜ！」

「ああ、あれ。あれもお前達の仕業だったのか。今日は厄日だ」

「否定は出来ないな。事の始まりは寝ている所を拉致られたところからだな」

「うん」

「次に起きたら、すぐに俺に殴られ」

「時計塔直さなければよかった」

「更に次に起きて、外に出たら吸血され」

「頭痛かった」

「でも、吸血ロリに膝枕され」

「」

「感想は？」

「気持ちよかった」

「うぜえ、死ね！」

「断る」

「で、崩壊した時計塔を直した」と。確かに厄日と表しても仕方ないな」

そう言いながら、十六夜はカズマの手首を掴む。

「同情するぜ。本当にすごく同情するぜ」

「わざとらしい。あと、手掴むな」

「そんな今日不幸だったお前にこの十六夜様からのプレゼントだ。受け取れやゴラア！」

と言うと十六夜は同時に立ち上がり、カズマをブン投げた。

カズマは特に叫び声も出さず、竹垣を越え、向こう側の温泉にどっぽーん！と投げ込まれた。

「よし！ホールインワン！」

「あれ。十六夜君何女湯に投げたの？」

そう言いながら隣にやって来るコーキ（通常）の後ろにはジンが茹でダコのように浮いているが気にしない☆

「カズマ！」

「はっ!？」

カズマの怒鳴り声がしてきたのはすぐ後だった。

◇◇◇

露天風呂・女湯

飛鳥、黒ウサギに対する白夜叉の変態発言により桶が投げられた直後だった。

白夜叉が沈んだ辺りにいきなり肌色の何かが落ちてきた。

「く、黒ウサギ！今何か飛んで来たわよ!？」

「そ、そうですね！でも、一体何が。」

その時ぎばっ、と落ちてきた本人が起き上がった。

「クソが！十六夜の野郎ブン投げやがって！もし石畳に落ちてたらどおする気だ、ああ

!？」

落ちてたら本人⇨カズマは男湯の方を見ながら殺気立っていた。

「」

「」
 。。。この温泉に他に誰かがいることに気づいたカズマは黒ウサギ達の方を振り

返った。

「……」

カズマは何時もの無表情のまま一時停止したあとすぐに元の男湯の方を向いた。

そして、

「テメエ、十六夜ふざけんな!!!無駄に処理しねえといけないことが増えただけじゃねえか!!!俺を過労死させる気か!?!?」

近くに沈んでいた白夜叉を掴むと、男湯にブン投げながら怒鳴った。

「ハッ、テメエこそ何を言ってるんだ?俺は疲れてるお前に男のロマンである『シャンバラ女湯』に送ってやったんだぜ?むしろ感謝してほしいくらいだね」

ゴスツ!と鈍い打撃音と、白夜叉の「おんし。これ、二度目じゃぞ」という声も聞こえた。

「そーだよ、カズマ!普通入りたくても入れないんだぞ!羨ましいなあwwwwww」
「テメエらが死にたいことよく分かった!そこ動くなゴラア!!!」

と言いカズマが湯船から立ち上がるうとした時だった。

「オイオイ。お前今何も着けてないだろ?そのまま立つてこつち来たら不味いんじゃないのか?」

腰を浮かしていたカズマは、はっ!と気付きしぶしぶ座り直した。

「ヤハハハ！ やっぱお前でもそれは無理か。それじゃ、Good luck kazuma!」

「Good luck」

こうしてカズマと十六夜達の口喧嘩は終了したが。

もちろん、ここまで保留にしていた女性陣の対応をしないといけないのだった。

「大丈夫よ、カズマ君。さっきの言い合いでカズマ君が悪くないってことわかったんだし」

「YES、それにカズマさんのことを男性だと思わなければ問題無しです!」

「いや、それは問題大ありだ」

「え? いいんじゃない。カズマはそういう生き方も出来ると思うよ」

「どういう生き方だよ! それと、どうでもいいが、向こう向いてるからせめてタオル位巻いてくれ」

女性陣は下を向いて自分の状態を見ると、少し顔を赤くした。

「そ、そうだな! ついでにカズマの分も私が取ってこよう!」

レティシアの言葉に「そうだな」と相槌を打ちながらカズマは後ろ向いた。

1分後

「それにしてもカズマ君のお肌って白くて綺麗ね」

・飛鳥の言葉につられ黒ウサギや耀、レティシアもカズマをまじまじと見る。

「飛鳥さんの言う通りお肌綺麗ですね。何か特別なことをなされてるんですか？」

「いや、別に」

「ねえ、レティシア。世の中って残酷だよ。私達は色々頑張っているのにカズマは何もなくても綺麗な肌なんて」

・耀はどこか遠い目をしながら隣のレティシアに言う。

「」

「レティシア？聞いてる？」

「——たい」

「へ？」

「触りたい！」

「「はっ？」」「」

これにはレティシア以外、珍しくカズマも驚いた。

そこでレティシアは今の声が出ていたことに気付き、思わず自分の口を塞ぐ。

「レティシア様いきなりどうしたのですか!？」

「触りたいってカズマ君をつ!?カズマ君を触りたいって言ったのレティシア!?!」

黒ウサギはいきなりことに驚き、飛鳥は鼻息を荒げ、耀は「そうなの?」とレティシアに無言の問いをする。

レティシアはあまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら自分を罵った。
 (バカバカバカバカ!私の馬鹿者!いくらなんでも今のはないだろ!!ああ、絶対カズマに変な奴だと思われた。)

レティシアは恐る恐るその本人、カズマを見る。

そしてカズマは――

「いいんじゃない。別に」と言った

「へ?」

いきなりの言葉に驚く一同。

「だからいいんじゃないって。別に触ったって減るもんじゃないし」

「そ、そういう問題でございますか」

「カズマ君で異性に触られることに抵抗ないの?」

「別に。触られたからって何って話」

と言い、じゃぼつと右腕を皆の前に出す。　　？

「カズマって大胆と言うか、豪快？ 違う、無自覚。何か違うな」

耀はブツブツ呟きながら、ツンツンとカズマ腕をつつく。

飛鳥も黒ウサギもつられて、ついたり指でなぞったりしてみる。

「カズマ君ってやっぱり男の子なのね」

「うん」

「そうですねー」

三人は一通り触ると、まだ触ってないレテイシアを見る。

「」

レテイシアは頬を赤らめまじつとカズマの腕を見つめている。

さながら、猫じゃらしを前にしたネコのように。

早くしてほしいのかカズマが腕を揺らす。

ゴクリと生唾をレテイシアは呑むと、恐る恐るカズマの腕に手を延ばす。

（うわあ、柔らかい。しかもスベスベだ。でも、女と比べると少し固いな。やっぱり男

の子と言うことだな。ああ、触っていて気持ちいい。）

初め遠慮がちに触っていたレテイシアだったが、あまりのその気持ち良さにすぐに両

手でカズマの腕を堪能し初める。

指先で肌をなぞったり、手の平で撫でたりと様々な方法でカズマの腕を味わう。

そこで不意にされるがままだったカズマが腕を湯船に沈めた。

「あ。」

とレティシアが寂しげな声を上げた。

カズマは再び右手を出すと水面と平行に円を書き、レティシアに周りを見るよう促す。

そこには頬を赤く染め（温泉と関係なく）、少し羨ましそうにレティシアを見ている黒ウサギ、飛鳥そして耀がいた。

そして、このあとのレティシアのフォローや興奮している三人を宥めるなど、結局カズマは安らぐことは出来なかった。

後にこの時の事を飛鳥は、

「正直言ってもものすごくエロかったわ！ここままR—18な展開にいけそうなくらい！」ハアハア

と興奮気味に語っていた。



「疲れた」

カズマはポツリと呟いた。

あのあと事態をどうにか収集させ、女性陣全員が上がったのを確認したのち竹垣を越え、男湯に戻ると予想通り十六夜達は先にながっていった。

そして、現在脱衣場にて着替えている途中である。

「はあ」

どカズマは浴衣に腕を通しながら疲れたようにため息をついた。

ふと、さつきまでレティシアに触りまくられていた右腕が目にはいった。

（。案外悪くもなかったな。今日一日）

不幸なことや面倒なこと、色々あったがそれなりに楽しいこともあった。

例えばアームストロング少佐に会えたこととか、歩くランタンとかが見れたこととかだ。

その中でも一番楽しかったのは、少しだけだがレティシアと街を回ったことだ。

単純にカズマが黄昏時が大好きだという理由もある。でも、一番の理由としては何時もと違うからだ。

何時もなら隣に居るのはニコニコ、ヘラヘラしている幼なじみ。それはそれなりに楽しい。

が、流石に飽きというか、なんとというか。物足りないものだ。

でも、その時隣に居たのは金髪美少女。ああ、別にコーキとかみたいにテンションが上がるってわけじゃない。

単純に、普通に楽しかったのだ。新鮮だったとも言える。

あつ、別に友達がいなかったわけではない。

ただ、カズマはそういうものの相手は幼なじみに全て任せ、ただそこにいただけだった。だから、ある意味コーキ以外と街を回ったのは初めてだった。

さらに言えば異性と二人なら本当に初めてだ。

前の世界では、何度か（デートに）誘われたことがあったが（本人自覚なし）全て断つた。

理由は簡単ただ興味がない、それだけだ。

（また、あんな風に出かけることが出来たらいいな）

そう、心で眩きながら帯を締めた。

「浴衣、というものは初めて着たが、」

カズマはびよんぴよんと跳んでみる。

「軽いな」

そう眩くと脱衣場を出た。

このあと、十六夜と白夜叉とコーキのトリオに水をぶっかけられて濡れ濡れになったのは蒼鋼という読者の要望だということをカズマはまだ知らなかった。

第5話 造物と錬金術師

火龍誕生祭・“造物主達の決闘”ギフトゲーム会場

『長らくお待ちせしました！火龍誕生祭のメインギフトゲーム・“造物主達の決闘”の決勝を始めたと思います！進行及び審判は“サウザンドアイズ”の専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギがお務めさせていただきます♪』

「うおおおおおおおおおおおおおおおお月の兎が本当にきたあああああああああああああああああああ!!」

「黒ウサギいいいいいい！お前に会うため此処まできたぞおおおおおおお!!」

「今日こそスカートの中を見てみせるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

■ 割れんばかりの熱い歓声。

■ これを聞くに黒ウサギちゃんの人気の凄まじさがわかる。

■ 21世紀のアイドルでもここまであるのだろうか

■ ちよつと疑問に思う。

「。随分と人気者なのね」

飛鳥ちゃんは生ゴミを見るような冷めきった目で観客席の一部を見下ろす。

それを見てついつい苦笑してしまう。

飛鳥ちゃんがいた時代から約100年もしない内にソレは日本に生まれる文化なのだから。

ここは普通の客席よりも高い位置にあるVIP席みたいな所。

現在、ここにいるのは十六夜君、飛鳥ちゃん、白夜叉ちゃん、サンドラちゃん、マンドラさん、そしてアームストロング少佐と僕の七人だ。

レティシアちゃんは「合わせる顔がない！」とか言っつて部屋から出て来なかったのでお留守番。

昨日のお風呂上がりからそんな感じだったので一体女湯で何があったかは気になるところだ。

適当にそんなことを考えていると、

「コーキ・C・マユズミ、お主は本当に出なくて良いのか？」

と少佐が尋ねてきた。

「別にいいんだよ。適材適所。耀ちゃんの足手まといにはなりたくないからね」

「だが、相手は『ウィル・オ・ウイスプ』のジャック・オー・ランタン。お主の分野ではないか？」

「アレがただの火を吹くカボチャなら僕の分野なんだけど。カズマの情報が正しいなら、僕はただの足手まといだよ」

「む。そこまで言うなら致し方ない。カズマ・N・エノモトの実力でも見せてもらおう」

「ははは。あの頃なんかより、うんと強くなっているから楽しみにしていいよ！」

少佐は「うむ。楽しみである」と言うと視線を会場に向ける。

僕は張り付けた笑顔の裏で思う。

本当にアレがただの火を吹くカボチャなら。

この舞台に立てるのに、と。

でも仕方ない。

だって、相手は不死なのだから。

◇◇◇

『ギフトゲーム名 “アンダーウッドの迷路”』

・勝利条件 一、プレイヤーが大樹の根の迷路より野外に出る。

二、対戦プレイヤーのギフトを破壊。

三、対戦プレイヤーが勝利条件を満たせなくなった場合（降参含む）

・敗北条件 一、対戦プレイヤーが勝利条件を満たした場合。

二、上記の勝利条件を満たせなくなった場合。』

「——ジャツジマスター“審判権限”の名において。以上が両者不可侵で有ることを、御旗の下に契り

ます。御二人とも、どうか誇りある戦いを。此処に、ゲーム開始を宣言します」

黒ウサギの宣誓が終わる。ゲーム開始の合図だ。

ステージは白夜叉が作ったタイトル通り、大樹の根の迷路だ。

両プレイヤーは距離を取り、初手を探る。

しばしの空白の後。先に動いたのは、ツインテールの髪に白黒のゴスロリ系フリルスカートを着た、このゲームの対戦相手 “ウィル・オ・ウイスプ” のアーシャ・イグニファトウスだ。

「睨み合っても進まねえし。先手は譲るぜ」

「」

「ま、後でいちゃもん付けられるのも面倒だからな」

ツインテールを揺らしながら肩を竦め、余裕の笑みを浮かべる。

それに耀の右肩に乗っている黒猫は、傲慢さで足元をすくわれるタイプと分析する。

「貴女は “ウィル・オ・ウイスプ” のリーダー?」

「え? あ、そう見える? なら嬉しいんだけどなあ♪けど残念なことにアーシャ様は、」

「そう。分かった」

リーダーと間違われたことが嬉しかったのだろう、満面の笑みで答えるアーシャ。

それを見て、さつき[?]の分析結果は間違つてなかつたと再確認する黒猫。
全然聞く気がない耀はさつさと背後の通路に疾走していく。

「え、ちよ、ちよつと。」

いきなりのことにはしぼし唾然とするアーシャ。

ハッ和我に返つた彼女、怒りの叫び声を上げた。

「そ・そつちがその気なら手加減なんざしねえ！行くぞジャック！樹の根の面迷路で人間狩りだ！」

「Y A H O H O H O h o h o ！！」

その声に「ウィル・オ・ウイスプ」の名物幽鬼、ジャック・オー・ランタンが応える。

「地の利は私たちにある！焼き払えジャック！」

「Y A ッ F U U U U U U U U U U U u u u u u u u u ！！」

アーシャが左手を翳すと、ジャックの右手に提げられたランタンとカボチャ頭から悪魔の業火が溢れ出す。
!?

それは瞬く間に樹の根を焼き払って耀と黒猫に襲いかかる。

しかし、それを耀は最小限の風を起こして避ける。

（避けた？違う！今の風・コレがコイツのギフトか・）

対して、アーシャとジャックをずっと観察している黒猫と耀はあの業火の仕組みに気

づいていた。

（あの炎・ジンの話していた「ウィル・オ・ウィスプ」のお話通りだ）

（まんま過ぎるのもちよつと拍子抜けだな）

「あーくそ！ちよろちよろと避けやがって！三発同時に打ち込むぞジャック！」

「Y A ツ F U U U U U U u u u u u u !!」

アーシャが左手を翳し、次に右手のランタンでジャックが業火を放つ。先ほどより勢いの増じた三本の炎。

・対する耀はギフトを使わずに全てを避けた。

「な」

・絶句するアーシャ。

・黒猫——いや、言う必要ないかもしれないがカズマはくんくんと臭いを嗅ぐ。

（ああ・やつぱりガス臭い。俺の鼻で分かるなら、春日部はもう気づいてる。）

カズマは仕組みが分かったからと、油断しない。むしろ、警戒する。

なぜなら、ジャック自信はなにもしてないと分かったからだ。

ゲーム開始前、耀はカズマをサポートとして参加させる時一つの条件を付けた。

私一人で対処出来なくなつた場合だけゲームに参加すること、と。

元々、耀は迷惑をかけた黒ウサギと仲直りをするためにこのゲームに参加している。

だから、同じ迷惑をかけたコーキと協力するのは全然良かったが、わりと迷惑をかけた側の人間なのであるカズマには条件を付けたのだ。

ということ、カズマは現在何時でも参加出来るよう状況の分析などを行っているのだ。

なお、猫型になっている理由は持ち運びが便利だからである。

話は戻るがカズマは、耀が対処出来なくなるのはあのカボチャが動いた時だと思っ
ている。

だから、「一層警戒心を強くしたのだ。

「くそ、やべえぞジャック。このままじゃ逃げられる！」

「Y a h o . . .」

ここでアーシヤは種を見破られたのに気づき、歯噛みした。

現時点で走力では耀が勝っている。

当たり前と言えば当たり前だ。

彼女は豹の力でどんどん距離をあげ、しかも気流の流れから出口への道を把握している。

このままだとアーシヤに勝ち目は無い。まあ、あくまでこのままだつたら、だが。

アーシヤは離れていく耀の背中を見つめ——諦めたようにため息を吐いた。

「くそつたれ。悔しいが後はアンタに任せるよ。本気でやっちゃって、ジャックさん」
「わかりました」

え？と耀が振り返る。遙か後方にいたジャックの姿は無く、耀のすぐ前方に霞の如く姿を現したのだ。

耀は驚愕のあまり思わず足を止める。

「嘘」

「嘘じゃありません。失礼、お嬢さん」

ジャックの真つ白な手で耀がなぎ払われる寸前、

「ごちうこそ、失礼」

と言う声が聞こえたときと認識した時にはドゴンツ！と鈍い打撃音と共にジャックは樹の根に叩きつけられていた。

「っ」

「ジャックさん！」

とアーシャが叫ぶ。

その隣に着地したカズマは

「約束通り、参加する。問題ないな？」

耀に確認する。

その右手には、いつの間に出して錬成したのか鈍器——正式名称モーニングスターが握られている。

「うん」

その言葉を聞き終えると、すぐにジャックが叩き付けられた下の根に飛び降りた。
カズマが着地すると、ジャックが起き上がるのはほぼ同時だった。

「悪いがここからは俺が相手だ」

「ヤホホーいやいや、全然構いませんよ。ルールには一人まで補佐は許されていますから」
どっかの誰かを彷彿させるように笑いながら答えるジャック。

その裏で彼は

（いや、はや・困りましたね。早くアーシヤの援護をしたいというのに。先ほどのスピードに楽々・とついて来たところを見るに正面突破は無理ですね。）

ここを突破する方法を考えていた。

それに対し、カズマは右手のモーニングスターをぐるりと回すと、

「来ないの？なら、^{アクセラレート}加速」

コマンドを呟いた瞬間、ジャックの目の前にモーニングスターが迫っていた。

「なっ!？」

ここで自分の懐にカズマが飛び込んでいるということを確認した。

咄嗟に右手に持っているランタンで受ける。

そこで更に彼は驚いた。

防御に使ったランタンがいとも容易く砕け散ったのだ。

もちろん、ジャックが持っているランタンは普通のランタンではなく、並のギフト所持者でも破壊するどころか傷一つつけられない程の強度を持っている。

ランタンを犠牲にして稼いだ僅かな時間で全力で後退した。

「今の避けるんだな。流星はジャック・オー・ランタンってところか。」

とカズマが呟いた。

「ヤホホー！ いや、危ないところでした！ まさか、あのランタンを破壊されるとは。仕方ありませんが、これは私の負けですね」

「そう」

カズマは短く返事をする、モーニングスターを元の刀に錬成し直して鞘に納めた。

そしてすぐに

『勝者・春日部耀!!』

黒ウサギからのゲーム終了のアナウンスが聞こえてきた。

◇◇◇

気がつく、カズマは元の円上の舞台の上に立っていた。

会場を割れんばかりの歓声が包み込んでいた。

少し、うるさいなと感じ始めた時、ジャックが話しかけてきた。

「お名前をお聞きしても？」

とそこでカズマは自分が名乗っていないことに気づいた。

「『ノーネーム』所属、カズマ・N・エノモト」

「カズマ・N・エノモト。・カズマ・N・エノモト！ああ、貴方があのカズマ・N・エノモトだったのですね！ということは、先程のメイスから刀に形状変化させたのは『錬丹術』いや、『錬金術』ですね？」

「あ、ああ。そうだが、俺を知っているのか？」

「ええ、もちろん！何時も彼女から貴方の話を聞かされていましたから。ああ、そうだ。もし、空いている日がありましたらぜひ、『ウィル・オ・ウイスプ』に足を運んで下さい！お待ちしておりますよ！ヤホホ〜♪」

と半ば、ジャックの勢い押し入れ領くカズマ。

そして、カズマは「彼女って誰？」という疑問をジャックに聞くことは出来なかった。

なぜなら、数多の黒く輝く『ギアスロール』が舞い落ちてきたからだ。

そして、観客席の誰かがこう叫んだ。

「魔王が……魔王が現れたぞオオオオオオオオ——!!!」

第6話 ゲームの謎解き

『ギフトゲーム名 The P I E D P I P E R of H A M E L I N』

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台区画に存在する参加者・主催者の全コミニティ。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『グリムグリモワール・ハーメルン』

“印”

時系列は前回の話から少し飛び、黒ウサギの審判権限ジャッジマスタによる審議決議終了後である。前回からここまでの出来事をまとめると、

一、魔王が襲来した

二、十六夜は軍服を着たヴェーザーと言う魔王の仲間と交戦

三、カズマとレティシアは陶器で出来た化け物シウトロムと斑模様の少女の魔王パスとと交戦。後に

サンドラも参戦

四、飛鳥、耀、コーキなどは魔笛を操るラツテンと交戦。その際飛鳥が行方不明になる

五、白夜又は参加条件がクリアされて無いため参戦不可

六、一から四項目の戦闘中、黒ウサギの“審判権限”によりゲームが一時中断。審議決議が行われた

そして、その結果ルールが一部変更された。

『ギフトゲーム名 The P I E D P I P E R of H A M E L I N “

・プレイヤー一覧

・現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台区画に存在する

参加者・主催者の全コミュニティ（「箱庭の貴族」を含む）。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

・太陽の運行者・星霊 白夜叉（現在非参戦の為、中断の接触禁止）。

プレイヤー側・禁止事項

・自決及び同士討ちによる討ち死に。

・休止期間中にゲームテリトリー（舞台区画）からの脱出を禁ず。

・休止期間の自由行動範囲は、大祭本陣営より500m四方に限る。

・ホストマスター側 勝利条件

・全プレイヤーの屈服・及び殺害。

・八日後の時間制限を迎えると無条件勝利。

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

・休止期間

・一週間を、相互不可侵の時間として設ける。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『印』

◇◇◇

境界壁・舞台区画

カズマは大祭本陣営、隔離部屋個室のドアの前に立っていた。

「はあ」

「とため息を一つ。」

(面倒だ)

「ここですじつとしているわけにもいかず、とりあえずドアをノックする。」

コンコン。

「誰?」

と中から怠そうな声が返ってくる。

「カズマ。昼飯持って来た」

「どうぞで」

とすぐに返事が返って来た。

現金な奴と思いながらドアを開け、部屋に入る。

「今日の昼ごはんは何?」

「それが病人の言葉かよ」

「だって、6日も隔離されたら楽しみがご飯くらいしかなくなるから」

「お前は隔離とか関係なくとも、飯が楽しみだろ」

「ご飯『が』じゃなく、ご飯『も』だよ」

「ああ、そう」

カズマは適当に答えながらベットの脇に置いてある椅子に座る。

この会話からわかる通り、隔離されているのは春日部耀だ。

“ノーネーム”の中で彼女だけが黒死病を発症して今もベットで横になっている。

他のコミュニケーションでも、かなりの数の人達が発症していて雑魚寝状態らしい。

それでも、個室を使用出来ているのはサンドラのお陰だ。

「それにしても、魔王ってどうやって感染させたのかな？」

「さあ？コーキの奴は知ってるっぽいけど俺はさっぱり。起きれる？」

「うん」

耀はケホツと咳き込みながら起き上がる。

カズマは手に持っていたお盆ごと一人用土鍋と水が入ったコップ、あとれんげを渡

す。

「ありがとう」

受けとると、パカツと蓋を開けた。

「雑炊か」

「そう今日は雑炊だ」

「カズマ、私は病人なんだよ。もつと栄養があるのが食べたい！」

「これは日本での病人食の一つでもあつて、食べやすいし栄養も取れるし体を暖まる。そして、何より美味しい万能食つてレティシアが言つていたぞ」

「栄養があるもの。つまり、元氣が出るもの。それはお肉なんだよ！お肉食べたい！！具体的に言つと、挽き肉をパイ生地で包んで焼いたのが食べたい！」

「素直にミートパイ食べたいつて言えよ」

「素直に言つたら作つてくれる？」

「断る」

「ケチ」

「ケチで結構」

「ぶー」

と拗ねる耀。

それを見て、カズマはため息を吐く。

「。はあ、面倒な奴。わかつた、治つたら作つてやる」

「前半ものすごく酷いこと言ってるけど、治ったら本当に作ってくれるの？」
と目を超キラキラさせる。

「ホントだ」

「絶対にだよ。絶対に」

「わかったからさっさと食え」

「うん」

そう言うのと耀は雑炊を食べ始めた。

そこでやっぱりカズマは、コイツ本当に病人なのかと疑う。

「ははふははふ、ははふははふは？（前座が終わったから聞くけど、ゲームはどんな感じ？）」

「食ってから言え。というかさっきの会話は前座だったのかよ」

「ゴクン。で、どんな感じ？」

「方針も決まって準備完了」

「えっ？ クリア方法分かったの？」

「聞いてないのか？ それなら6日前に結論が出ていたぞ」

「。知らなかった」

・カズマはそれを聞くと呆れたようにため息を吐き、一枚の紙を取りだしペンで何かを

書き始めた。

そして、一分後

ぺらっと紙を耀に渡した。

そこには

『口で説明するの面倒から読んで。

まず、偽りの伝承反対である真実の伝承とは1248年8月26日に起きたことだと推測される。

次に選択肢Ⅱ魔王側のメンバーはラッテン・ヴェーザー・シュトロム・ペストの三人と一体である。

ラッテンについて

ラッテンⅡネズミは1559年頃に付け加えられたものなので偽物と断定

ヴェーザーについて

ヴェーザーⅡヴェーザー川。実際にある川であり、子供たちは溺死したという説もあり本物である可能性が高い

シュトロムについて

十六夜曰く、ヴェーザー川のことを指してるらしい。

ペストについて

彼女は確実に偽物であると考えている。なぜなら黒死病は発症等に個人差があり、130人もの子供が同時に死ぬことはありえないのである。そもそも、黒死病をイメージさせたのは道化師の斑模様の服と操ったネズミなので1559年に付け加えられたことを考えると、偽物である可能性が更に上がる。極めつけに、コーキ曰く黒死病がヨーロッパで流行したのは14世紀頃らしい。

「以上のことから、俺たちはヴェーザーが本物のハーメルンの笛吹だと推測した。」
 「なるほど。じゃあ、『偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ』の一文のクリア方法って何？」

「全部コーキと十六夜の受け売りだが、『砕き』と『掲げよ』は一対の同形状で、そこ二つの動作が出来るものと推測される。なら、考えられるのは碑石共に飾られたステンドグラスらしい。で、これはイコールで彼女らの侵入方法でもある」

「侵入方法？」

「ああ、アイツらは美術工芸の**侵入**として**侵入**していたんだ」

「えっ、でもそれって。ああ、でもジャックと同じ扱ってことか」

「で、少佐に頼んで調べてもらったところ、『ノーネーム』名義で100以上のステンドグラスが確認された」

「じゃあその偽物のステンドグラスを砕いて、本物のステンドグラスを掲げればいいん

だね？」

「そういうことだ」

「でも、偽物と本物については他のコミュニケーションから意見が出なかったの？」

「出た」

「なら、どうやってまとめたの？」

耀にだって「ノーネーム」だという自覚がある。命が掛かっているゲームで名前の無い自分達が意見を言ってもすぐに納得してくれないことぐらい予想出来る。なら、どうやって短期間でまとめることが出来たかは当然の疑問である。

その答えは単純だった。

「コーキが片っ端から論破した」

「ああ」

ちよつと、論破されたコミュニケーションに同情した。彼らだって必死に考えたはずだ。

でも、それを名無しのチビに論破されたのだ。プライドとか色々傷つけられてそうない気がした。

耀もあの何時もニコニコ、ヘラヘラしている彼が口が上手いことぐらい知っているの
でそれはそれで納得した。

「話も終わったし、食べ終わってるからもう帰る」

カズマにそう言われて、土鍋の中を見るといつの間にか雑炊は無くなっていた。
「私の楽しみが」（涙）

と落ち込んでる間にさっさとカズマは、お盆ごと食器を回収し部屋を出ていく。
その寸前に、

「ミートパイ忘れないでね」

と言うとカズマは一瞬だけ止まると、

「はあ」

とため息を吐いて出ていった。

◇◇◇

大祭運営本陣・廊下

（面倒だった）

カズマは何度目になるか分からないため息と共にそう思った。

現在カズマは耀が食した食器を片手に厨房に向かっているところだ。

そこにコーキが右の通路から現れた。

「よっ、カズマ。耀ちゃんとこの帰り？」

「ああ、コーキか。うん」

「ふむふむ。なるほど」

「ところでお前は何してんだ？」

「流石にヒマすぎて持ってきたラノベも読み終わったから暇人中々♪」

「なら、久しぶりに少佐と筋トレでもしてきたらどうだ？少佐喜ぶぞ」

「カズマは僕にあの筋肉ムキムキの暑苦しい人と密室で二人きりで筋トレしろと言うの？」

「お前、たまに少佐のこと本当に慕ってんのかわかんなくなるわ」

「だって考えてみてよ！筋肉肉ムキムキのヒゲダルマと一緒に汗を流すのと、美少女とR—18な意味で一緒に汗を流すのどっちがいい？断然後者でしょ!!!」

「まず比較するものがおかしい。ていうか、R—18って何だよ。R—18って」

「おやおやく、やはり気になりますか？やっぱり、カズマも男の子ってことですか。レティシアちゃんが喜ぶぞ」

「意味がわからん。なら、お前医者だろ。看病したり治療したりしたらどうだ？」

「チツチツチツ。それが、そううまく医療系錬金術ってのは出来てないんだよ」

「そうなのか？」

「うん。医療系だろうがなんだろうが錬金術である以上、等価交換。つまり、無から有は生み出せない。それはカズマも知ってるでしょ」

「ああ」

「で、外傷とかなら無事な組織を繋げて傷を塞いだり出来るけど、ペストみたいな菌が原因の場合は抗生物質とかの薬と一緒に使うんだよ。だけど、その肝心な薬が全然ないの！だからどうすることも出来ないの！」

「なるほど」

「まあ、僕はそんなことより気になることがあるんだよね」

「？」

「ほらっ、僕たちが相手することになっている魔王側が雇った傭兵のことだよ」

「それが？」

「それが、じゃないでしょ！魔王は普通傭兵なんか雇わないんだよ！それが今回の魔王は雇っている。何か裏がありそうな気がするんだ」

「裏って？」

「さあ？僕もそこまでは分かんない。でも気を付けた方がいいよ、カズマ」

「お前こそ」

「そだね。んじや、僕はそろそろ行くよ」

「おう」

そう言うカズマは厨房の方に消えていった。

「さてと」

コーキはカズマが歩いて来た方向、隔離部屋の方に進む。

そして、すぐにある右の通路に顔を出し、

「なくしてるの、レティシアちゃん！」

「やはり、気付いていたのかコーキ」

レティシアはため息と共に言う。

「そりや、まあ。カズマからは見えなくても僕からは丸見えだからね」

「私もそこそこ尾行術に自信があったんだがな」

「まあまあ、そう落ち込まずに。でも、わざわざストーカーするくらいからついて行けば

良かったんじゃない？」

「いやいやいや、分かかっていないなコーキ。——そう、カズマを尾行する。それが良いの

だよー」

「あくまで、ストーカーとは言わないんだね！ちなみに何時から尾行しているの？」

「96時間前からだが？」

「4日前からっ!?!えっ、じゃあ4日前からずっとストーキングしてるの!?!不眠不休で」

「いや、流石に不眠不休ではないぞ。ちゃんとカズマが寝たのを確認した後に寝てるし、

カズマが起きる前に私は起きています。何だったら、カズマの今日までどのように過ごし

たかを紙に書いてもいいぞ」

「いや、遠慮しとくよ」

「残念だ。それでは、私はそろそろ行くとするよ。またな、コーキ」

「うん、じゃあまたねー！」

そう言いレティシアはカズマと同じ、厨房の方に消えていった。

廊下に一人立たずみながら、**コーキ**は、

「カズマって愛されているね。 **（意味深）**」

と呟いた。

第7話 スタート・again

境界壁・舞台区画。大祭運営本陣営、大広間

黄昏時の夕陽に染まる舞台区画の歩廊は、今や人一人いない。

尖塔群の影が傾き、宮殿が影に吞まれる。

その大広間に集まった人員は、約五〇〇。

ジャックなどの『出展物枠』の者や病魔に冒された者以外全員集めたが、それでも全体の一割未満である。

ざわつく衆人の前にサンドラが現れると、不安を掻き消すような凜然とした声で話し始めた。

「今回のゲームの行動方針を再確認します。何度も言いますが、動ける参加者にはそれぞれ重要な役割を果たしていただきます。今一度、ご清聴ください。マンドラ兄様。お願いします」

傍に控えていたマンドラは軍服を直し、アームストロング少佐から書状を受け取ると読み上げた。

「其の一。三体の悪魔と二人の傭兵は『サラマンドラ』とジン||ラツセル率いる『ノー

ネーム”が戦う。

其の二。その他の者は、各所に配置された一三〇枚のステンドグラスの搜索。

其の三。発見した者は指揮者に指示を仰ぎ、ルールに従って破壊、もしくは保護すること」

「ありがとうございます。——以上が参加者側の方針です。皆さん、仲間をコミュニケーションを守るため魔王とのラストゲーム頑張りましょう」

おおと雄叫びが上がる。良い感じに士気も上がっている。

魔王のゲームに勝つため、参加者は一斉に行動を開始した。

一方、カズマとコーキはそんな様子を宮殿上から見ている。

『『頑張りましょう』だって、カズマ。笑っちゃうよね』

『そう言うな。多分、彼女は知らないのだから』

『おやおや？お優しいですな、カズマ君』

『黙れ、クズ。俺は優しくくない』

『はいはい、そうですねっと。まあ、正直なところ何処までが黒なのかわかんないしね。でも、あの人は多分黒だ』

『どうでもいいが、やっぱり』

「ん？」

「やっぱり・何がコミュニケーションを守るだ。気持ち悪い」

カズマは相変わらず淡々と言ったのだった。

何時もならそんなことを言ったら注意するコーキは、ニコニコ、ヘラヘラと笑っていた。

さあ、ゲームはもう間もなく開始される。

◇◇◇

ゲーム再開の合図は、激しい地鳴りと共に起きた。

宮殿の上から移動し、街の十字路にいたコーキとカズマは光に包まれた。

そして気付くと、天を衝く程の巨大な境界壁は無くなり、数多にあつた尖塔群も無くそこには木造の街並みがあった。

「わーお！すつごい！これ本物のハーメルンの街だよね？」

「多分」

「魔道書ってこんなことも出来るんだ！一冊欲しいなあ」

「今はあとにしる。この状況だと恐らく、ステンドグラスは教会にあるはずだ。そこから離れて戦えよ」

「分かってますって！ジン君達を巻き込むわけにはいかないからね」

そう言いながら彼らは二手に別れて道を進み出した。

カズマ side

ガシヤ、ガシヤ、ガシヤ。

「ほう、余裕だな。小僧」

金属同士がぶつかる音と共にそんな声がかけられた。

カズマは読んでいた本をパタンと閉じると、音がする方を見る。

「別に。このゲームの謎は解かれ、勝利条件が満たされようとしている。なら、お前達は俺達を足止めしないとならない。だから、探す必要もない。どうせ、そちらから見つけてくれるからな」

「はっ、何処の小僧かは知らんが肝が据わっているな。私のことは・とりあえずナンバー48と名乗っておこうか。私は依頼者クライアントに、お前達を時間制限まで足止めするように言われている。だがもし、不可能なら殺しても構わないとも言われている。悪く思うなよ、小僧」

「『ノーネーム』所属、カズマ・N・エノモト。別にどうでもいい。それがアンタの仕事だろ」

カズマは抜刀しながら言う。

「フツ、小僧の言う通りだ。どれ、手並み拝見——」

48は腰を低くして、構えるとカズマに斬りかかった。

コーキ side

(さて、カズマと別れてみたのはいいけど、向こうの傭兵って何処にいるのかな?)

コーキはショットガン片手にキョロキョロと周りを見回す。

が、一人もいない。まあ、当たり前と言えば当たり前だが。

(せめて、どんな武装をしているかぐらい分かればどこにいるか大体予想できるのに)
と考えている時だった。

「ヒュウッ」

と口笛が聞こえ、振り向いた時には目の前に刃が迫っていた。

「うおっと!」

ガキンツ!と、コーキは咄嗟に右手に持っていたショットガンで受け止める。

「OK OK! チビのくせにオレの一撃を受け止めるとはいい動きだア。そうでなくっちゃ殺りがいがねエ」

「そりゃ、どうも。チビって言葉以外はありがたく受け取るよ。どうやら、君が僕の相手する傭兵のようだね」

「オレの名は、ナンバー66! もっとも仕事上の呼び名だがなア」

そこでコーキはどうか押し返し、直ぐに力を抜く。

「おわっ」

それにより66がバランスを崩した。その間にバックステップで距離をとる。

「お、とつとつと。オレが依頼者クライアントから言われたことは、お前達を時間制限まで足止めするってつまねエことだが、オレは肉を切ることが大好きなんだア。解体させてもらおうぜエ」

66はバランスをとりながら言う。

「依頼者の意に沿わないことをしようなんて、悪い傭兵だな」

「げっへっへ。なアに、お前が弱すぎて死んでしまいましたって言えばいいことよ。だから、安心して泣き叫べ！」

この後、複数の爆発音と金属音が鳴り響いた。

ジン side

と、いう風にかズマ達が戦闘を開始頃、ジン達の搜索隊はラッテンと対峙していた。「殺したら失格になるなら殺さなければいいじゃない♪ほら、半殺しぐらいに手加減して、自分も殺されないようにすれば万々歳って奴よ」

艶美な唇を歪ましてジン達を見下ろすラッテン。

その後ろには何十匹もの“サラマンドラ”の火蜥蜴の姿がある。

でも、ジン達はさつきラッテンが言った通り彼らを殺すことは出来ない。

何故なら、ルールにより同士討ちが禁止されているからだ。

しかし、ラッテンは躊躇なくフルートを振るって火蜥蜴達に命令を下す。

「さあ！仲間同士で戯れてごらんなきいな！」

屋根から一斉に火球を吐き出す火蜥蜴達。参加者達に緊張が走った。

最早戦うしかないかと思いを決したその時——嵐の様に迸る黒い影が火球の打ち砕き、地面に黄色い稲妻が走り瞬時に壁を形成しジン達を守った。

「何ッ・」

ラッテンの唇から余裕が消えた。黒い影は瞬く間に頭上に収束して戻っていく。

そこには、煌々と靡く金髪姿の純血の吸血鬼、レティシア。そして、その真下の屋根の上には、こちらと同じく金髪（髪の量は気にしない☆）であり、上半身裸の光る筋肉美アームストロング少佐がいた。

「見つけたぞ、ネズミ使い」

「この『豪腕の錬金術師』・アレックス・ルイ・アームストロングがお相手致す!!!」

二人とも射殺するような瞳でラッテンを睨む。其処に普段の温厚さはない。

それに対し、ラッテンは少佐を完全に無視し、レティシアの美貌に思わず声を上げた。
 「うわおおお・本物！本物の、純血の吸血鬼！うわあ・超美少女じゃない。何あの煌めきまくってるスーパープラチナブロンド。ああだめ、今から興奮してきたかも」

その間に、ギフトカードから槍を取り出すと、レティシアは投擲した。それをラッテンはクルリとステップを踏んで避ける。

「あら、せっかく褒めてあげたのに。この仕打ちは酷いんじゃない?」

「ふん。お前などに言われても、嬉しくないわ! どうせ言われるなら、カズマに言われたいし興奮して欲しい!!!」

ふざけたような会話をしているが両者が本気になっているのは一目瞭然である。

彼方では爆発音や紅蓮の焰、そして黒い風の奔流に雷鳴と赤い炎などそれぞれの戦闘が行われている。

「ふふ。いい感じに祭りっぽくなってきたじゃない。じゃ私も、切り札投入ジョーカーといこうかしら?」

ラッテンは魔笛を唇に当て、奏で始める。

まるで、何かを目覚めさせるかのような曲調はやがて大地を迫り上げ、陶器で出来た巨兵を数多に構築し始めた。

その数、十数体。舞台区画の各地に陶器の巨兵は、一斉に雄叫びを上げた。

「BRUUUUUUUUUM!!!」

嵐の様に全身の風穴から大気を吸い上げ放出し始める巨兵。

まさか一度にこれだけの数が現れるとは想定外のことだった。

各所でステンドグラスを搜索していたコミュニケーションから悲鳴が上がる。

想像以上の戦力投入に動揺するレティシア。

その時、今まで沈黙を保っていた漢——アームストロング少佐が口を開いた。

「巨兵言えど、陶器。ならば、我輩の筋肉の敵ではない！見よ、魔王の一味よ！これぞ、我がアームストロング家に代々伝わりし芸術的錬金術!!!」

少佐はレンガ位の大きさ石を投げ、落ちてきたそれを全筋肉をフル活用しぶん殴った

！

石は黄色い稲妻を帯ながら、途中で形状を鉄の杭のような物に変え、砲弾のように飛んでいく。

それは、他のコミュニケーションを襲っていた陶器の巨兵——シュトロムの体をやすやすと打ち砕き、貫通する。

さらにその勢いが弱まることはなく、次に貫通した先にいたシュトロムを貫通し、さらに次と、そして更に次と、どんどんシュトロムを破壊していく。

合計6体ものシュトロムが破壊されたのは一瞬の事だった。

「あ・ありえない。」

「いくらなんでもムチャクチャだ。」

ラッテンは当然として、味方であるレティシアまでもこの出来事に驚愕していた。

「ちよ、ちよつとそこの筋肉ヒゲダルマは誰よ!?こんな強い奴がここに居るなんて聞いてないわよ!」

血の気が引いたように慌てて屋根の上を逃げ出す、ラツテン。

「逃がさぬツ!!」

とラツテンを追いかけようとする少佐をレティシアが

「待て、少佐!アイツは私が追いかける。少佐殿は、あの巨兵を頼む」

「了解しました。ご武運を!」

「ああ」

と言いつレティシアはラツテンを追う。

少佐はすぐに錬成するための石を拾うと構えた。

「我がアームストロング家に代々伝わりし錬金術とこの鍛え上げられし筋肉のコラボレーション。特と見よ!!」

このあと陶器の巨兵、シウトロムは1分もかからずに駆逐されたのだった。

第8話 死刑囚の傭兵

少佐がシウトロムを駆逐している時、教会から離れたところでは爆炎と叫び声が響いていた。

「ギャー……！！死ぬ！死ぬ！死ぬ……」

と叫びながら全力ダッシュしているのは、ナンバー66。

そして、その後ろからはガチャリとショットガンをリロードしながら歩くコーキ。

「鎧のくせに速いな」

のんびりした口調で言いながらトリガーを引く。

ショットガンの中でガチンツと金属が金属で打たれる音と同時に火花が発射される。

「クソツッ！来やがった!!」

66は走りながら、火種である火花を見ると近くの家屋の扉を蹴り破り転がり込む。

外で火種が爆発的に燃え上がり、66の逃げ込んだ家屋は吹き飛ばされ、燃え上がる。

「うーん、死んだかな？死んでるといいな。いい加減、遊ぶのにも飽きてきたよ」

と一瞬で廃材となり、所々で燃えている元家屋を見ながら呟く。

その時だった。コーキの立っている2m先の木片が盛り上がり、中から66が飛び

出して来た。

「油断したな、クソチビ！肩ロースいただきッ!!」

そう叫びながら66は右手の包丁をコーキの左肩に振り下ろす。

完全に回避も防衛も間に合わない。66は思っていたが

「はい、残念。ドーン！」

目の前でドガンツと爆発が起き、吹き飛ばされた。

その際、爆風でガイコツみたいな頭部の鎧が落ちた。

「!？」

ここでコーキは驚いた。

本来頭部の鎧が外れたなら装備者の顔が見れるはずなのだが——そこにはなにも無かった！

「野郎。頭が落ちちまったじゃねエか」

「そ、その身体。」

そうつまり、空っぽなのだ。本来なら鎧を着ているはず人間がない。

「げっへっへ、ちよいと訳ありでなア。おめエ、その錬金術使つてんならアメストリス出身だろオ？なら、聞いたことあるだろ。バリーつつう肉屋の話を」

「バリー。バリー。バリー。ってまさか!?バリー・ザ・チョップパート!!」

「そう。奴は23人もの人間を解体し、中央市民を恐怖のどん底に叩きこんだ！」

「そんなバカな!? バリー・ザ・チョツパーは死刑になつたはずじゃ。」

「それは表向きの話だ。奴は傭兵になる事を条件をまぬがれたんだ。ただし、肉体を取り上げられぬ魂のみ鉄の身体に定着させられてなア！」

「ま、まさか。」

「そう！今、でめエの目の前にいるこのオレ!! バリー・ザ・チョツパーとはオレの事だア!!!」

そうコーキ達が相手をしている傭兵らは、本物の殺人鬼だった。

そして、それを知ったコーキの反応は――

「へえ！ 鎧に魂を定着させるなんて流石箱庭！ 面白い！ これは医者としての興味も湧くな。」

66――いや、バリーは盛大にずつ転ける。

「――つて、オイ！ てめエ、ここまで盛り上がつてその反応はねエだろ!! そこは『な、何だつて!』とか『あ、あり得ないッ!』とか『何だその身体!!』とか驚くところだろ!」

「ええ〜? そんなこと言われても、ここ箱庭だし〜。そんな人がいてもおかしくないじゃん! てか、そんなんで驚いていたら箱庭で生活出来ないよ。もう一つ言えば、アメ

ストリス国出身でも呼び出された年代によつては君のこと知らない人だっているよ」

まっ、そんなことは置いといてと続ける

「どうやら君は随分と面白い身体をしているようだね。その魂を鎧に定着させる方法とか色々教えて欲しいなあ？」

「ハッ、何でこのオレがためエにそんなこと教えねエといけねエんだよ。そんなことやり、大人しく切られやがれエ!!!」

と斬りかかるバリー。

しかし、コーキは手に持っているショットガンのトリガーを引く。

「でえええ!!」

ただそれだけで、バリーは爆炎に包まれ爆風で吹き飛ばされる。

「もく、君は分かかってないね。君に拒否権なんて初めからないんだよ？君の返事は、はいとYESの二択なの。OK?」

コーキはいつもの笑顔のまま、バリーの口の中に銃口を突っ込みながら言った。

「さあ、返事を聞かせて貰おうか？」

◇◇

（む、今度は何で来る？）

48は苦戦していた。

それは、カズマの速さ——では、ない。
カズマは大きく一回転する。

その一瞬後ろを向いた間に武器がバスタードソードからバトル・アックスに変わって
いた。

48は即受け止めるのは不可能と判断すると、横薙ぎのそれをバックステップで回
避。

そう、48が苦戦していたのは一瞬の内に別の武器に錬成されることと、そのレパー
トリートの多さにあった。

現在、何十回めの錬成だが一度も同じ武器には錬成されてないし種類も刀剣・短剣・長
柄・打撃系と様々だ。

だが、カズマの本当にすごいところは錬成した武器全てを完全に使いこなしている
ところだ。

今もバトル・アックスを巧みに使い48を追撃している。

しかし、48も死んでも傭兵。それなりの場数を踏んでいる。

彼は、今までの経験から直感でカズマの斬撃や石突を避ける。

受けるなんて論外だった。もし、受け止めようとすればその瞬間愛刀ごと斬り砕かれ
るのは目に見えていた。

48は避けるだけではなく、ちゃんと切り返しをしている時を狙い攻撃しているが全て弾かれる。

かと言って、カズマの斬撃も48に当たらず回避される。

両者はどちらにも一撃も加えることが出来ず、時間だけが過ぎていく。

48には都合の良い状況である。

「チツ」

カズマは舌打ちをすると大きく振り上げ、全力で振り下ろす。

48は大きく下がることでこれを回避。

カズマの一撃はそのまま地面を砕き、土埃が舞う。

それが48の視界を奪い、カズマの姿を隠す。

しかし、48は気付いている。これが武器錬成と奇襲のためだと。

そして、錬成する時に光るということも知っているので360度全部に気を配りカズマが錬成をするのを待つ。

カツ、48の左後方で蒼く光った。

「そこだッ!!」

光った左後方を向きつつ、渾身の突きを繰り出す。

が、しかし

「——いないだど!？」

次の瞬間、突きを繰り出した真下からレイピアが突き上げられた。

それは、48の頭に着けている布を切り裂いた。

「ツ!!」

48は咄嗟に刀を振り下ろし牽制しながら二撃目、三撃目を避け距離をとった。

「フツ、惜しかったな小僧」

「チツ。お前が予想より速くなければ、あのまま頭部を貫いてエンドだったんだがな」

「なら、加速すれば私など今すぐ殺せるだろう、アクセラレーター加速者“?”」

「お前殺した後、重要な仕事が残っているからな。加速することは出来ない。だけど、

もう終わらせる」

カズマは両手に一本ずつ持っていたレイピアを重ね、錬金術を発動する。

そして右手に40cmほどの短剣、パリーイング・ダガーを、左手には70cmぐら

いの長さの剣身のかなり細い両手剣、メル・パッター・ベモーを錬成した。

「ほう、『もう終わらせる』か。面白い、やれるのもならやってみるがいい!」

48は刀を構え、今までの比にならないほどの殺気を放った。

これまでの時間稼ぎと違って本気で殺しに来る、ということだ。

カズマも右手のダガーと左手のベモーを構える。

両者は同時に動いた。

カズマは一步目からトップスピードを出し、左手を引く。

48も同じく最速でカズマに接近し、右上から刀を振り下ろす。

カズマはそれを右手のダガーでパリィ。そして左手のベモーをまるで銃弾のような速さで突き出す。

それを48は紙一重でかわし、横に一線。

瞬時にダガーを逆さに持ち変えるとこれを受け止める。

その間に両手剣である左手のベモーをレイピアように連続で突き出す。

48はすぐに刀を引き、カズマの連撃を軽く弾くようにして流していく。

五、六撃目を流した48は七撃目を大きく弾いた。

それによりカズマの左側の胴ががら空きになる。

(隙有りッ!!!)

そう思った48はベモーを弾いた刀をカズマの左脇腹に

「終わりだ小僧ッ!!!」

全力で振り下ろした。

カズマはその一撃をどうにか右手のダガーで受けようとする。

48は当然のごとく角度を調整しダガーの少し上を狙う。

その時だった。カズマのパーリーイング・ダガーの剣身が三叉に分かれた。
「何ッ!?!」

これには48も驚き、一瞬隙が出来る。

その間に刀は三叉になったダガーに受け止められ、閉じることにより挟まれる。そして、弾かれていたベモーで48の胸を貫かれた。

が、

(手応えがないッ!?)

今度はカズマが驚く番だった。

48は挟まれていた刀を素早く引き抜くと下から上に斬り上げる。

「うッ、^{アクセラレート}加速ッ!」

カズマのうめき声と共に血が舞い、黒い布切れが舞う。

48は後ろを向きながら言う。

「フッ、流石は加速者だな。その右腕貫うつもりだったんだがな、速い」

「クッ、^{クッ}がッ!てめえ、その中、空っぽだろうが」

カズマは右腕と右肩から夥しい量の血を流しながら言う。

「小僧の言う通り、この鎧の中は空っぽだ。しかし、これも錬金術の一種なのだ。私はあまり詳しくないがこの血印が魂を繋ぎ止め、そして血液中に含まれる鉄分が鎧の金属と

同調しているらしい」

48は鎧の面の部分を開け、血印を見せながら説明する。

「つまり、この血印を壊せばお前の勝ちと言うことだ。まあ、もう無理だろうがな」

カズマは思考が途切れ途切れになる中どうにかこれを理解する。

48が元々生身の身体を持った人間であること。それを錬金術で魂を鎧に定着させられていること。そして、頭部の血印を破壊すればいいこと。

(頭がくらくらする。右腕は。ほぼ使い物にならない。武器は。)

カズマはまとまらない思考の中右手の血まみれのダガーと左手のベモーを合わせ元の刀に錬成し直す。

「ほう、まだ足掻くか」

「加速」

カズマは加速し、48の懐に一瞬で懐に入り込み左手で刀を一線。

これに対し、48もバックステップを踏みながら刀を振るう。

が、そこまでがカズマの限界だった。

足が纏れ、意識が明滅する。それにより48に激突し、弾かれ地面に倒れた。

足も手も頭も働かない。今何をしないといけないのか、今何をしていいのか、何で倒れているかも分からなくなった。

明滅していた意識も徐々に遅くなり停止していく。48が何か言っている気がするが、よく分からない。

そして、カズマの意識はここで途切れた。

「よくまあ、その傷でここまで動いたものだ」

48は倒れてピクリとも動かないカズマを見下ろしながら呟いた。

その時、本来ならその呟きに答える者などいはずなのに返事があった。

「でも、良かったのかよ兄者？ 依頼人クライアントには時間稼ぎを頼まれていたのに殺しちまって」

その返事は48の中、厳密に言えば鎧の身体の方から聞こえる。

そう、一つの鎧に二つの魂——兄弟殺人鬼「スライサー」の魂を定着しているのだ。

「致し方ないであろう。向こうは本気で破壊しに来ているんだ。何時までも時間稼ぎな

どしておれぬ。それに、無理な場合は殺して良いと言われているだろう」

「にしても、コイツ若いなあ。14、5つてところか。まあ、この箱庭では外見と年齢が

必ずしも一致するとは限らないがね。つーか、トドメ刺さねえのか？」

「刺しても良いが、しなくともこの出血量だ。次期に死ぬ」

今もカズマからは血が流れ、血溜まりを拡大させていつている。

「俺的には死ぬのを待つより、この手で葬りさりたいんだがダメか、兄者？」

「。遅いか早いかの違いだ。お前に任せる、我が弟よ」

「オーケイ、兄者！」

「そう弟は答えると刀を上段に構え、

「さらばだ、小僧」

「地獄でまた会おうぜ！」

カズマの首にヒュツと振り下ろした。

第9話 チエツクメイト

「うおああ」

「弟よツ！」

グシャリ、スライサーのうなじ部分にあつた弟の血印が握り潰された音。

そして、鎧を素手で貫き血印を握り潰したのは重症であるカズマ。

「そオだよな、そオだよな！一つの身体に魂が一つとは限らねエもんな!!」

「貴様！何故その傷で動ける!?!」

「ああ？ンなもん、オレが不死だからに決まってるだろうが」

「なっ」

48. は今の言葉に驚きながらも、カズマの様子がおかしいことに気付いた。

目は見開かれ、瞳孔も開いて目はまるでアイレンズのようだ。

そして口元は裂けたように狂気的な笑みを浮かべ、まるで壊れた人形のような表情をしている。

どう見てもまともな状態ではないの是一目瞭然だった。

「貴様は小僧じゃないな！」

そう叫びながら自分を貫ぬいているカズマ（？）の腕を斬り落とそうしたが、
「何だ?!」

48は自分の鎧の身体がガシャーン!!と崩れ落ちるのを上から見ていた。

ここで自分（頭部）が上に撥ね飛ばされているのに気付いたのだ。

「ハッ、小僧はバケモノを。」

この後が続かなかったのは、宙を舞っていた48の頭部は血印の場所を中心にバキ
ンツ!と真つ二つに斬られたからである。

「バケモノ?ンなもんじゃねエ、オレはカミサマだ!」

カミサマはガンガラガンと落ちた48の残骸に目もくれず、そう言い放った。

そして刀を鞘に納めながら、

「こんなところで死んでんじゃねエよ、錬金術師。後、少しでお前の役目も終わるんだか
らなア」

と呟いた。

◇◇◇

「——ズマ、起きて!カズマ起きてっば!!」

コーキの叫び声でカズマは目を覚ました。

「オッハー、カズマ。寝ている間に勝手に手当てさせてもらったけど、問題ないよね?」

「ん・あ・あ、問題ない。・・・ところで、空っぽの傭兵は？」

「それなら、そこに残骸があるよ。って、カズマが破壊したんじゃないの？」

「いや、覚えていない」

「ま、当然だね。こんだけ血を流せば普通死ぬってレベルの血を流してるから記憶がなくとも当たり前。でも、生きてるところか普通に動けるカズマは規格外だね。本当に人間か疑うレベルの。ま、生理食塩水を流したけどね」

「俺はどれくらい倒れてた？」

「さあ？ 僕が見つけた時にはぶっ倒れていたからね。そこから、止血して包帯巻いて、生理食塩水作って即席の点滴で流したから大体、1〜2時間ぐらいかな」

「なるほど。状況は？」

カズマは立ち上がりながら言う。

「十六夜君と戦っていたウエーザーは消滅。レイシアちゃんが戦っていたラッテンは飛鳥ちゃんがゲームを放棄させた」

「久遠っていたのか」

「うん。僕もよく分からないけど、紅いロボットと連れて戻って来たよ。ええと、あとシウトロムは全部少佐が秒殺しちやつた☆」

「流石は『豪腕の錬金術師』」

「で、残ってるのはあとあのちびっこ魔王様だけだよ。現在、僕たちとレティシアちゃんを除いた「ノーネーム」メンバー十サンドラちゃんと交戦中。他の仲間殺られたから時間稼ぎを止めて、本気で殺しに来てるって状況」

「了解。月は？」

「あと、数分。アレはちゃんと持ってる？」

「ああ」

カズマはそう答えながらポケットから紙片を取り出し見せる。

コーキは頷くと、

「さて、このゲームを終わらせにいきますか」

そう言い、カズマとコーキは死の風と紅い巨人、そして炎に雷鳴轟く最後の戦場へと駆けた。

◇◇◇

「ヤハハ、おせえぞお前ら！何ダラダラしてた!？」

戦闘に加わっての一言目は十六夜の笑いながらのそんな言葉だった。

「いや、ゴメンね！カズマの治療に少し時間がかかったんだよ」

コーキはショットガンのトリガーを引き、死の風を全て焼き尽くす。

「治療って、カズマさん！その腕大丈夫なのでございますか!？もし、無理なのでしたら飛

鳥さんと変わって貰っても構いませんよ！」

「問題ない」

「ああ、言つとくけどそれやったらまた傷口開くよ」

「なら、尚更飛鳥さんと交代してください！」

「問題ない」

「カズマ君が何をしないといけないのかはわからないけれど、遠慮することはないのよ？」

「問題ない」

カズマの返答を聞いて三人は、

((さつきから問題ないってしか返ってこない(わ)(のですよ).....))

とちよつと心配になった。

「ふん、今さら二人増えたところで何？殺しに行く手間が省けるだけよ」

「そう言いなよ、斑ロリ。コイツらは、もしもの時の『箱庭の貴族』直々のお前を倒すための秘策に必要なんだよ」

「あら、秘策って何かしら？どうせ意味ないだろうけど、そこまで強調するんだもの。少しはマシなのよね」

「ああ、期待していいぜ！」

「そう」

ペストは無造作に腕を振る。それにより、せつかくコーキが焼き尽くした死の風が前よりも激しく強く吹き荒れ始めた。

十六夜はそれを殴って霧散させ、コーキは再びトリガー引きながら叫んだ。

「ちよ、黒ウサギちゃん！早くしないと！」

「そうだぞ、黒ウサギ！さっさとしねえと他の連中がどんどん死ぬぞー！」

と十六夜も怒鳴る。

黒ウサギは何時もと違う強い意志の宿った瞳で集結した主力を一瞥し微笑むと、

「ご安心を！今から魔王と此処にいる主力——纏めて、月までご案内します♪」

なっ、という驚きの声は刹那に消えた。

いくら黒ウサギから話を聞いていたと言えど、実際になつてみると驚きを隠せない。

黒ウサギの持つ白黒のギフトカードの輝きと共に周囲の光は暗転して星が巡り、温度は下がり大気が凍りつくほどの過酷な環境に変わる。

激しい力の奔流が収まり、瞳を開けると——天には、箱庭が逆さまになつて浮いていた。
た。！

その光景にコーキは、

「すげーい」

「と感嘆の声を漏らす。」

「カズマは何時もの無表情だったが、石碑の様な白い彫像群が散乱する神殿だったものをジッと見ていた。」

「なつ、あれは、チャンドラ・マハール「月界神殿」！インドラ軍神ではなく、チャンドラ月神の神格を持つギフト。」

ペストはカズマと同じものを見て蒼白になって叫んでいた。

「YES!」のギフトこそ、我々「月の兎」が招かれた神殿！帝釈天様と月神様より譲り受けた、「月界神殿」でございますー」

「け！けど、ルールではゲーム盤から出ることは禁じられているはず、」

「ちゃんとゲーム盤の枠内にいますよ？ただ、高度が物凄く高いだけでございます」
「っ。」

つまり、現在月はハーメルンの街の頭上にあるということだ。

「これで参加者側の人間の心配はなくなりました！サンドラ様と十六夜さん、コーキさんはしばし魔王をpushさえてください！黒ウサギもすぐ参戦します！飛鳥さんとカズマさんは此方へ！」

言うや否や、三人はペストに向かって突撃する。

ペストは焦りながらも、死の風を放出させて迎え撃つ。

「構わないわ。全てのステンドグラスが発見される前に終わらせる。」

「ハッ、やれるもんならやってみな！」

衝撃波を全身に食らいながら十六夜は突進し、蹴りを入れようとしますが避けられる。

サンドラは十六夜が切り裂いた死の風の隙間から轟炎が縫う。

それはペストに着弾すると爆発的に燃え上がる。

これはサンドラだけの火力ではない。

サンドラはコーキの方を見ると、コーキはにつと笑い返す。

そんなやり取りが行われている間にペストの傷は瞬時に癒える。

「ありやりや。二人分の火力でもダメか。」

「当たり前だわ。私を打倒するというのなら、星を砕くに値する一撃を用意なさい——

！」

「ハッ、ならこの俺がお前を倒せるぜ斑ロリ！」

そう叫びながら十六夜はペストに拳を叩き込む。

ペストはそれを双掌で高めた衝撃の渦で迎え撃つ。

両者の圧倒的な力がぶつかり合い、月面に新たなクレーターを作り出した。

そんな十六夜達が奮闘する中、飛鳥は質問をする。

「で、結局私はどうすればいいのかしら？」

「その前に。カズマさん、アレはお持ちですね？」

「ああ」

カズマはそう答えながら、“叙事詩・マハーバーラタの紙片”を取り出した。

「この紙片からはインドラに縁がある武具を召喚することが出来ます。しかし、この槍は強力な半面、ギフトゲーム中に一度しか使えません」

飛鳥の表情に緊張が走る。

「これを・カズマ君が使うのよね？」

「YES! 飛鳥さんにはそのカズマさんと槍の力を十分に發揮させてもらいます！そして黒ウサギが隙を作るので、その槍を直撃させてください！それでこのギフトゲームは勝利です！」

黒ウサギがカズマの持っていた紙片触れると、雷鳴と共に槍に変わった。

カズマの手に今まで使った武具とは違うズシリとした投擲用の槍が現れた。

これこそが帝釈天の神格が宿る槍。

カズマはその神槍をダンベルのように何度か持ち上げたり下げたりし、クルクルと回し逆手に持ち変え構えた。

「準備完了。いつでも殺れる」

「最後にお聞きしますが、腕の方は本当に大丈夫でございませうか？」

「問題ない」

黒ウサギはカズマのその返答に苦笑した。

「では、飛鳥さん。あとは頼みましたよ！」

「ええ、任されたわ」

領き返すともう一枚の紙片をギフトカードから取り出し、死の渦に飛び込もうとする。

その手には金剛杵も何もない。

その無謀な突撃にサンドラは焦つて声を上げた。

「だ、駄目だ黒ウサギ！何を考えて」

「貴女さえ倒せば」

ペストは苛立たしげに死の風を舞い上がらせ襲いかかる。

「太陽に復讐を、でございますか？ならばこそ、この輝きを乗り越えてごらん下さい！」

黒ウサギは「マハーバーラタの紙片」掲げ、太陽の光にも似た黄金の輝きを持つ鎧を纏う。

強襲した死の風は太陽の光に焼かれ、一瞬で霧散して消えた。

「そ、そんな」

悲痛な声が上がると、ペスト自身、自分の弱点が太陽だと分かっていた。

「インドラ軍神にチャンドラ太陽神スリーヤ護天十二天を三天までも操るなんて、この化け物——!!!」

ペストは大きく後退し、最低限の守りを固める。

全身から太陽の輝きを放つ黒ウサギは、背後で控えてる飛鳥に叫ぶ。

「今です飛鳥さん！」

黒ウサギの声に応じ、右手を翳して名を下す。

「放ちなさい、カズマ君！」

「アクセラレイト加速」

コマンドを口にした瞬間、槍はカズマの右腕から第四宇宙速度で打ち出された。

黒ウサギに気を取られていたペストに避ける間などなく被弾し、月面を空高く打ち上

げられて貫かれた。

「この程度で」

迸る千の雷に焼かれながらも、ペストはまだ抗う。

しかし、インドラの槍の放つ天雷は直撃した後も衰えず、むしろ輝く様に力を解放し

ていく。

天雷は千から万へ、万から億へ急速に力が増し、衰えることなく敵を焼き尽くすまで

光を放ち続ける。

「そんな私は、まだ」

「——チェックメイト、お前の負けだ 黒死斑魔王^{ブラック・パーチャ}」

「そして、さようなら」

飛鳥が別れの言葉を告げると、一際激しい雷光が月面に撒き散らされ魔王と共に爆せた。

第10話 黒幕の奥の更なる黒幕

境界壁・舞台区画

月から戻ったカズマは赤い煉瓦建物の上に座っていた。

「で、結局俺の腕はどうなんだ、マユズミ先生？」

その隣では、コーキがカズマの右腕の包帯を解いていた。

「そうだねえ、右腕は加速に耐えられなかったみたいだね。完全に肩外れてるよ。そして予想通り、包帯が血でべとべと」

「つまり？」

「つまり、本陣營に戻ったら肩はめて固定しないといけないってわけ。そして、右腕の使用を禁じます」

「それは困る。右利きだからな」

「はっはっは！なら、左で投げれば出血も脱臼しても困らなかったのにねwww。ほい、巻き終わり！」

包帯の巻き直しが終わると、カズマはそのまま後ろに倒れる。

「はぁ、疲れた。寝る」

「ちよちよちよ、こんなところで寝ないでよ！肩だつてまだはめてないのに……つてカズマさん？起きてます？」

ちよいちよいとコーキはつついてみたが反応がなく、規則正しい寝息が聞こえる。

「はあ、まったくう。この幼なじみは。もし、ここにいるのが僕じゃなくレティシアちゃんだつたら速攻既成事実作りされるとか考えのいのかなく」

いくらレティシアでもそんなことはまだしない、とツツコミを入れてくれる人はいなかった。

はあともう一度ため息吐いた時にはコーキの姿は黒ウサギに変わっていた。

そしてそのまま寝ているカズマをお姫様抱っこすると、ぴよんぴよんと屋根から屋根を飛び本陣營に帰っていった。

これまでの一部始終を見られていたということに気づかずに。

◇◇◇

ゲーム終了より48時間後

外では祝勝会を兼ねた誕生祭が行われていた。

サンドラの魔王に初勝利を取めたことや、「ノーネーム」の功績が取り上げられ大いに盛り上がっていた。

さて、そんな表の世界と違ったこちらは舞台裏。

「マンドラは身近な衛兵（少佐も含む）にも暇を与えて宴を楽しむよう促し、宮殿の執務室で一人『サウザンドアイズ』の黒い封蠟が押された手紙を読んでいた。」

「他に人は無く、扉も閉めきつている。」

「手紙の内容に一通り目を通すと、執務机に手紙を置き、独り嘆く。」

「『全てが万事上手く進行し、魔王を撃退されましたこと、お祝い申し上げます。新生』サラマンドラ」が北のフロアマスターとしてご活躍されることを心より期待しております。追伸／星海王からお預かりした神珍鉄は、例の撒き餌達に贈らせていただきました。か。流石は『サウザンドアイズ』。何もかもお見通しか。悪い事は出来んな」

「大体予想通りだね〜」

「ガタンツ！」とマンドラは立ち上がる。

周囲には誰もいない。だがその時ヒユウと風が吹いた。

バツと窓の方を見ると、先程まで閉まっていた窓に人影が二つあった。

一つは窓に座っている右腕を固定されているカズマ。もう一つはその背中に寄りかかるようにして外を見ているコーキ。

「さっきの『悪い事』ってあれでしょ。『サラマンドラ』が魔王をこの祭りに招いたことじゃない？」

「なっ、」

「いや、子供かあんた？あいつらの侵入方法を考えれば、一三〇枚ものステンドグラスの
出展なんて主催者側が意図的に見落としてない限りないだろう？」

「もし、これが意図的じゃないって言うなら、『サラマンドラ』は脳みそスカスカのクズ
の集まりってわけだね」

アハハ と笑いながらコーキは祝勝会で盛り上がる街を見下ろす。

マンドラは冷や汗を流しながら、帯刀している剣を握る。

目の前には手負いの人間に完全にこちらを警戒してない人間 と思っていると、

「ああ、止めといた方がいいよ。このことに気づいてるのが僕たちだけと思」うなよ」

その言葉にビクツ とマンドラは身の危険を感じた。

「当然、十六夜も気付いているし、他の有力なコミユニティも気付いているはずだ」

「だよね。新人魔王VS新人階級支配者？ずいぶんとご都合主義な話だよ。そして、

新人で信用が薄かったサンドラちゃんは、見事魔王を退けてみんなを守り、階級支配者
として認められました。めでたし、めでたしって感じ？良かったね！これで『サラマン

ドラ』の未来は安泰だよ！」

「っ」

歯齧みをするマンドラ。

コーキはそれを見て、はあく と盛大に溜め息を吐いた。

「ほんつと、イライラするね。ここまでお膳立てしてんだからさつさと話したらどうだい？そもそも、今回の死者が『サラマンドラ』以外だったらどうするつもりだったの？さらに言えば、今回のゲームは完全にそちらの手に余るものだったよね？僕たちが居なかつたらとつくに魔王に滅ぼされてたんじゃない『サラマンドラ』って」

「はっ、まだ黙るの？本当に」

「ん？——かるまい」

「ん？」

「箱庭の外から来た貴様らに分かるまい」

マンドラは怒りからなのかは不明だが震えながらこちらを睨んでいた。

「コミュニティの旗を！名を！名誉を守るという意味がツ!!!有力な跡目に裏切られ、長が病に床に伏せ、失墜寸前のコミュニティを支えるために命を賭すなどツ!!箱庭の外、ましてや人間なんぞにわかるはずがない!!!」

所詮、箱庭の外の部外者。

その言葉はコーキは何も言えなかつた。

いくら理論武装しようともこれは変わらない事実であるのだから。

が、

「くだらねえ」

「何だとツ!？」

「正直言つてあんたが言つてゐることは本当にくだらねえよ。というか、サラマンドラは俺たちにそれを言う資格はない」

「どういうことだ!？」

「だつて、サラマンドラ」つて「元・ノーネーム」を見捨てたんだろ?」

「ツ!!!」

「それがなに俺達に名だ、旗だつてほざいてるんだ? ホントくだらねえ」

カズマは表面上こんなことを言っているが「サラマンドラ」が「元・ノーネーム」を見捨てたことを怒っているわけではない。そこについては、心底どうでもいい。

「サラマンドラ」が自分のコミュニティを守るために見捨てたことくらい分かっている。

でも、自分が見捨てた結果「ノーネーム」になったコミュニティに所属しているカズマ達に『名が、旗が』と言うのは間違っているだろう。

「ならどうすれば、どうすれば良かったと言うのだツ!？」

マンドラは堪らず、叫んでいた。

「いや、そこは『どうすれば良かった』じゃなく『どうすればいい』だ？何を勘違いしているか知らないが、今更何を何と言おうと過去は変わらないし、そもそも俺達はその時居なかつたんだからな」

「そうそう。僕も『サラマンドラ』の真意が聞きたかつただけだし。そして、目の前にいるのが錬金術師つてことは僕たちがどうして欲しいかは言わなくてもいいよね？」

● 激情に震えていたマンドラは瞳を閉じ、剣を鞘に納めると、

「フツ、『等価交換』か」

● と言つて笑つた。

「——御旗に誓おう。その時こそ、『サラマンドラ』は秩序の守護者として駆けつけると」

● と言つた時には、二人は裏舞台から居なくなつていた。

◇◇◇

境界壁・舞台区画 “火龍誕生祭” 運営本陣営付近

どんちゃんどんちゃんどんと街が魔王との戦いの勝利に酔つてる中をカズマとコーキは、歩いてた。

「結局、俺がいた意味つてあつたのか？」

「え、あつたでしょ！カズマだつてそこそこ言つてたじゃん」

「俺は、事実を言ったただけだが。」

「いや、でもさ。いくら事実でもあれはちよつと同情するよ。まつ、どーでもいいけどね。さて、何か食べる？あ、でも右手使えないなら厳しいかな？」

「問題ない。こうすればいい」

「つて、いつ買ったの!？」

いつも間にかカズマの右手には揚げたてのフライドポテトが持たれていて、それを動かせる左手でモグモグ食べていた。

「いいな！僕にm「カズマツ！」

とコーキの声を上書きするほどの声でした。

その方向を見ると、レティシアを先頭に「ノーネーム」のメンバー十少佐がこつちんやつて来る。

「あら、コーキ君。どこに行っていたの？せっかくだから楽しみましょう！」

「飛鳥さんの言う通りです！楽しまないと損でございますよ♪ウキヤ〜！」

「お前は少し落ち着け、黒ウサギ」

「カズマ！カズマ！その手じゃ食べにくいだろ。私が食べさせてやる。これもメイドの仕事だから／＼」

「い、いや大丈夫だ。一人で食べれる。」

! . . . !

「遠慮することはないぞ！ほら、あーん」

「いや、本当に大丈夫。」

「カズマ・N・エノモト。人の好意は素直に受け取るものだぞ」

「あんたもかよ、少佐！」

と一瞬の内にバカ騒ぎ始まった。

それを境界壁の上から見ていた黒いドレスのような服を着た女はため息を吐いた。

「はあ、いくらルーキーとはいえたった殺せたのが5人。しかも48と66を使つてこれなのは予想外だったわ」

その隣では丸々と太った男が幼子のように指をくわえ、羨ましそうに街を見ている。

「それもこれもあの『ノーネーム』のせいね。東側で名無しが『ペルセウス』を倒した噂は聞いていたけどもここまで強いなんて」

そうぼやいていると、

「ラスト、お腹すいた。食べに行つていい？」
と太った男が言ってきた。

ラストと呼ばれた女は一度街を見たあと、

「いいわよ、グラトニー。でも、人は食べちゃダメよ」

「分かったー！」

グラトニーは、ピヨン と境界壁から飛び、重力に引かれて街へと下りて行った。

ラストはそれを見送ると、視線をカズマ達へと戻し、

「でも、まあ 人柱候補が二人も見つかったことだけは収穫ね。お父様に報告しなければ

ば。」

と呟いた。

番外編 Re : wish

「ノーネーム」本拠・コーキの部屋

コンコン。

「はいはい。誰かな？」

「私だ、コーキ。入るぞ」

「どうぞどうぞ」

ガチャ とドアを開け入って来たのは、綺麗な金髪を持つ吸血鬼メイド・レティシアだった。

その右手のトレイには、ティーポットとカップ、そしてお菓子がのっていた。レティシアはそれを椅子が二つある小さな丸テーブルに置いていく。

コーキは、その間に机の引き出しから小さなポリ袋と『レティシアちゃん』と書かれた付箋が貼られた写真の束を出す。

そして、それぞれの準備が終わると席に着いた。

「いや、それにしても写真の注文は予想してただけ、これんなのを注文されるとは思わなかったよ」

「そうか？ 私は吸血鬼だから普通だと思っただが。」

「まあ、それは僕のイメージの話だから気にしなくていいよ。」

コーキはそう言いながら、写真の束をレティシアの前に置いた。

「さて、これが注文してた火龍誕生祭に居た時のカズマの写真ね。」

レティシアはそれを手に取り、ざっと目に通す。

その際、表情が綻んでいたのは当然ことである。

「で、こっちが包帯ね。」

今度はコーキが出した包帯の入ったポリ袋を開けると少し匂いを嗅ぐとすぐに袋を閉じた。

「ふむ。カズマの血の匂いだ。」

そうこれは、インドラの槍を放った際に体が耐えきれず再出血し血でべとべとになった包帯である。

詳しくは、第10話の冒頭を参照。

「て言うかそれ、何に使うの？」

「匂いを嗅いだり、多少だが血を食べることが出来るのだぞ！」

「え、ああ、吸血したいならカズマ本人に頼んだら？ そっちの方が生だし。」

「いや、それが何度か頼んでみたんだが断られてな。」

「こんな美少女に吸血してもらえるなんて本望でしょ。でも、流石はカズマだね。」
 「で、代金は銀貨二枚だったか？」

「うん。けど一枚でいいよ！」

「随分と良心的だな」

「いや、その代わりって訳じゃないけど少しお喋りに付き合つて欲しいな―って」

「ああ、だからお茶の用意をさせたのか」

「そゆことww」

レティシアはすつと手を伸ばし、優雅にお茶を一口飲むと、

「では、お喋りとは何を話すのだ？」

「いや、本題に入る前に質問とかない？僕について」

「もちろんあるぞ。例えば、君はカズマ以外にも私や飛鳥、黒ウサギに耀などの写真をどうしているのかな、とかか」

「あつ、やつぱそこ気になるw？そりや、カズマの写真があれば自分の写真もあるかもつて考えるの当然だね！ちなみに、〃ノーネーム〃全員の写真があるよ」

「それで、私とかの写真とかも、やつぱり売つてたりしているのか？」

「うん。まあ心配することはないよ！今のところ、〃ノーネーム〃メンバーと白夜叉ちゃんにしか売つてないから。てか、主な収入源は白夜叉ちゃんなんだよねー」

「やはり、黒ウサギの写真がメインか？」

「うん。でも、女性陣の写真全部買ってるよ」

「ほう。私のもか？」

「そだねー。でも、レティシアちゃんの写真なら飛鳥ちゃんも買ってたよ」

「カズマじゃないのか」

ちよつと、シヨックと言いか残念な表情のレティシア。

コーキは笑いながら、お茶菓子のクッキーを食べ、

「ハハハ！まあ、カズマは写真なんかに興味はないからね」

「それはひとまず、置いとくが飛鳥も写真を買っているなんて意外だな」

「そう？黒ウサギちゃんとか耀ちゃんも思い出写真として買いに来るから割りと普通だ

よ」

「ああ、なるほど！そういうことか。こう見ると、本物の写真屋みたいだな」

「まあね！でも、こうやって好きな人、気になる人の写真を買いに来る人もいるんだよ

ね」

・と言いながら何処からか出したカメラでレティシアの写真を一枚パシャ と撮る

・。カメラとかは、どこで買ったんだ？やっぱ、"サウザンドアイズ"か？」

・「本体はね！でも、細々としたパーツは僕の行きつけの雑貨店で買ったよ」

「雑貨店？」

「うん。『愛されて80年、あなたの町のハボック雑貨店！パンツのゴムから装甲車まで電話一本でいつでもどこでもお届け参上！』つてのが売り文句の雑貨店なんだ。配達もしてくれるし、実際に店舗に行っても色々あつて楽しいんだよ！」

「それは、中々面白そうな雑貨店だな。今度の買い物のに寄つてみようかな。」

「そうすると、良いよ。なんだつたらカズマを連れて買い物デートつてのはどう？」

「なっ!? デ、デートだと。／＼／＼／」

思い出されるのは、火龍誕生祭のこと。途中で邪魔が入ったがアレは本当に楽しかった。あの時は、勢いでカズマと一緒に祭りを回ったが今思い返してみると恥ずかしいというか何と言うか。よくもまあ、大胆なことを出来たとレティシアは思う。

「ありやありや。レティシアちゃん、顔赤いよー！一瞬の間に頭の中で妄想デートでもしたの？カワイイなー!!」

「そ、そんなことしてないぞ！別にこれはその。ええと。」

「アハハハ！冗談だよ！じよーだん！でも、まあレティシアちゃんが今後カズマとどうなりたかかってのは知りたくないあ？」

「どうなりたか。どういう意味だ。」

「そりやそのままだよ。恋人になりたいとか結婚したいとか、なんだつたら妄想したこ

とでもでもいいよ。要するに願望を言えばいいんだよ！」

「別に大したことないぞ。」

レティシアは恥ずかしそうにもじもじしながら、

「もし、出来れば。」

「出来れば？」

「出来れば、普通に話たり触ったり匂い嗅いだり私物もらったり吸血したり髪に触れたり手を握ったり隣を歩いたり女装させたりデートしたり肉を喰べたりカズマの服を着たり写真でポスター作ったりブロマイド作ったり一緒に寝たりキスしたり一生私から離れられなくさせたり抱き枕作ったり一つになったり抱き枕にしたりしたいだけだ。」

／／／

「うん！超僕の予想の斜め上だね!!一部は頬を赤らめて言うことじゃないと思うよ!!」

レティシアは「うう、恥ずかしい。」と言いながら両手で顔を赤い顔を隠す。

ここからレティシアは元の調子を取り戻すまでコーキはそっとして置いた。

◇◇◇

「落ち着いた？」

「ああ」

そう言いながらレティシアはぬるくなった紅茶を飲み干すと、深呼吸をした。

「よし！もう大丈夫だ」

「まだ頬は赤いよ」

「誰のせいだと思ってる」

「さて、一段落したところで本題に入りますか」

「まだ本題じゃなかったのか。もう2620文字だぞ」

「大丈夫！作者がどうかにかしてくれるはず」

コーキは立ち上がる。とクローゼットに向かい開けると、

「えくと、どこだっけ。ああ、あった！あった！」

中からミニスカの巫女服とロングブーツ、そして金の髪留めを取り出した。

「それは、まさか。」

「じゃー！じゃーん！ついに完成しました。金剛型三番艦、謙虚で朗らかで礼儀正しくし

かも巨乳と提督たちの心を大破させる艦娘・榛名の衣装です☆」

「本当に作っていたのか。」

「確かに本編の合間に作るのは大変だったけどね」

コーキはそう言いながら黒い布で即席のカーテンを作り、

「ちよつと着替えて来るねー！」

カーテンを閉じた。

コーキが着替えてる間にレティシアは考えた。

(うーん、コーキ自身が着替えているつてことは誰に変身してるのだろう？ここまでのパターンから考えれば黒ウサギだろうが。それなら白夜叉がすごく喜びそうだな)

そこでカーテンがシャツ と開いた。

「お待たせ！レティシアちゃん」

その向こうにいたのは――

赤い瞳に綺麗な黒の長髪の美少女だった。

「!？」

レティシアは、気づいていなかった。

自分が無意識の内にテーブルの上に置いてあるコーキのカメラに手を伸ばしていることを。

そして、シャッターを切っていることに。

「そ、その姿。まさか、カズマなのか。」パシャパシャ

「YES！流石はレティシアちゃん、わかってるー！ちなみに髪はウィッグね」

そんな会話が行われている間もレティシアはシャッターを切り続け、コーキはその度にカズマが絶対しない笑顔で様々なポーズをとる。

合計20枚を超えた辺りでやっとレティシアはシャッターを切るのをやめた。

「どうだった、レティシアちゃん？カ・ズ・マの女装姿は」

「ああ、ヤバイ。これはヤバすぎだ！今すぐ抱き締めてお持ち帰りしたいぐらいかわ
イイツ!!!」

「ですよー！僕もそう思うんだよ。ちなみに僕的にこの衣装かなり気に入ってるんだ
♪」

コーキはくるくると回りながら窓に近づきカーテンを開け、身を乗り出した。

「ねえねえ、カズマもこの服着てみようよ！絶対似合うって!!だって、偽物であるぼぎゆ
が!!!」

語尾がおかしいのは窓の向かいの木の上で寝ていた黒猫に強烈なネコパンチを食
らったからである。

その勢いで室内に倒れた偽物を無感情な目で見たあと、何事もなかったように黒猫は
眠った。

「うう・鼻痛い。どうやらおきに召さなかったみたいだね。」

「そうみたいだな。ああ、猫型のカズマもかわいい。もふもふしてふにふにしたい。」

「じゃ、気を取り直して。次の衣装行ってみよう！」
レティシアの感想はスルーしてコーキは次の衣装をクローゼットから取り出した。

「ふむ。今度のは女装じゃなくいいのか」

「ああ、これはアメストリス国の軍服。青が基本の服だ」

今のコーキ（カズマ）はきつきままでのコーキが動かすカズマではなくコーキが演じるカズマである。

「こーやって見ると、軍服もなかなか様になってるな。何というか、カツコイイ。出来る青年将校って感じだな」

レティシアはまるで芸術作品を見る専門家みたいに何度も頷きながら言う。

「アメストリス国の軍服ってことは少佐も同じ服を着ていたってことか？」

「ああ、基本的にあの人も同じ格好していたけど何故かよく上着を脱ぐんだよな」

「？。暑いからとかじゃないのか？」

「違う。詳しく言うと、上半身裸になりたがる。主に戦闘時などに」

「シウトロムを駆逐した時みたいにか？」

「見てないからわからないが多分そうだと思う」

「。何気に思ったが少佐殿って話の中とかによく登場しないか？」

「そうだな。作者が面白くて少佐のことが好きだったり、読者の受けもいいからな」

「確か、『ヒゲ☆』の時はかなりお気に入り登録者が増えたらしいな」

「原作での少佐の人気度がよくわかる」

うんうんとレティシアは頷く。そして一拍間を空けると、

「さて、コーキよ。君が作った衣装はまだ他にもあるのだろうか？ 撮影を続けようじゃないか」

カズマ笑うと、クローゼットの中から燕尾服やどこかのロボットアニメのアイドル衣装やらセーラー服やら淡い色の浴衣など色々な衣装取り出し、撮影会が再開された。

のちに、その写真がネットで話題になり非公式ファンクラブが出来たり、一体何処のコミュニティの美少女なのかを調べる調査団が結成されたりするほどの人気になるのだったがそれを窓一つ向こうにいる黒猫^{カズマ}は知るわけがなかった。

◇◇◇

ここからは、おまけというか余りというか。本来はないはずの延長戦みたいなものだ。

正直、どうでもいい内容だが暇なら見たらいい。別に強制も何もしない。

どうせ喋るのはコーキ一人なのだからな。

「ねえ、レティシアちゃん。君はカズマが君のことをどう思っているかを考えたことはある？」

「うん。やっぱり考えたことあるよね」

「でも、結局わからないって言うのは当たり前だよ。そりや、本人のみぞ知るってね

「えっ？何が言いたいかって？僕にとつては大したことじゃないけど。僕はカズマがレティシアちゃんのことをどう思っているか知ってるよ

「いや、そんなに食いつかれても困るなあ。別に本人に聞いた訳ではないから

「何故わかるか？それは、あれだよ。僕が幼なじみだか——ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。本当にごめんなさい。だから、そんな笑顔で嫉妬した視線を向けないで！怖いから！

「ええと、ともかくこれはカズマについての常識から言える事なんだけど——カズマってレティシアちゃんのことどうとも思ってるよ。好きでもなければ嫌いでもない。かといって、興味もないし関心もないね

「ありや？意外とシヨックとか受けてないね。もしかして分かってた？

「ああね。薄々分かってたんだ

「うん、やっぱり少しはシヨックだよ。でも、気にしなくていいと思うよ。レティシアちゃんだけがそういうことって訳じゃないから

「つまり、カズマって人間は他人に興味がないの。レティシアちゃんや十六夜君、そして僕もね。例え、僕が死んでもお葬式には参加してくれても何も感じてないだろうし、『あ、死んだんだ』ってぐらいの感想しかないよ

「そう、幼なじみである僕でさえカズマの中ではその程度なんだよ。そしてこれはレティシアちゃんたちも一緒

「さてさて、そんな超ドライなカズマの心を奪うことが出来るか僕は楽しみだね！期待してるよ!!」

「ん？カズマが何でそんなにドライでいられるかって？そんなの簡単だよ

「だって、僕たちの代わりはいくらでもいるから」

エピローグ

“真由美”さんが入室しました。

真由美：皆さあぁあぁん、こんばんわー!!! 今日も元気な貴方のスピーカー真由美さんですよ!!!

真由美：つて、あれ？誰もいないんですか？いないのでしたら私のハイテンションな挨拶がバカみたいじゃないですか

トーマ：居ますよ。

真由美：うわっ！びっくりした。トーマさんいたんでしたらいると言ってくださいよ
(――;)

トーマ：すみません。真由美があまりに痛かったので返事をするか迷っていたんです

真由美：中々、グサつときますね

トーマ：実際痛いのは本当ですし。

真由美：追い討ち!? 追い討ちですか!? 多少自覚があるだけに辛い!

トーマ：自覚・あつたんですね。

真由美：ええ、まあ。でも、何かチャットやつてるとテンション上がっちゃうんです

よね!!!パソコンなんて無かったですから!

トーマ・真由美さんで召喚されたのですか?てつきり、箱庭生まれだと思ってました。
真由美:そうなんですか。ってカノさんもキアラさんも遅くないですか?そろそろ来て欲しいですね

“カノ”さんが入室しました。

“キアラ”さんが入室しました。

トーマ:確かに遅いですねー。

トーマ:って来ました。

キアラ:ばんわー。いつもより遅くなりました!すみません

カノ:皆さん、集まっていますね。何かいつも最後にinしてる気がします

キアラ:それは、気のせいじゃないですねw

真由美:ついに揃いやがりましたね!そんじやいきましょう!!今回のお話はやっぱりあれでしょ!『トーマさんが言っていた噂が本当だったこと』ですよね!?

カノ:そつちですか!

キアラ:普通は『火龍誕生祭に現れた魔王!そしてそれを撃退した“名無し”』でしょ!

真由美:ぶー。乗り悪いですよキアラさん

キアラ：それにしても、トーマさんが言っていた噂って本当だったんですね。噂だからって侮れませんね

トーマ：あれは、かなり驚きました。

真由美：あれ、スルーですか？

カノ：でも、見事倒すことが出来て良かった！死者も一桁だったらしいですし

トーマ：確かに魔王に襲われてその程度の被害で済んだのは運がいいと思います。

真由美：おーい、皆さーん！私が見えてますか？あんまりイメジると泣きます、本気で（；|；）

キアラ：顔文字はもう泣いていますよ、それ。あと、普通に会話に参加すれば無視しません

真由美：でもでも、一番の見所はやっぱり“名無し”ですよ！

カノ：“サラマンドラ”も頑張ったらしいんですが一番活躍したのはあの“ペルセウス”を倒した“ノーネーム”らしいですね

真由美：ええ、しかも彼らはどうやら「対魔王コミュニティ」らしいですよ

キアラ：対魔王コミュニティ？

トーマ：何ですか、それ？初耳ですね。

真由美：打倒魔王掲げているコミュニティのことです。と言っても、そんなコミュニティ

テイ彼らだけですけどね w w

カノ：あと、記事を見て気になったことがあるんですが魔王って傭兵とか雇ったりするものですか？

真由美：いいいえ、基本的はないですね

キアラ：そもそも、魔王って呼ばれるくらい強いから傭兵なんか雇う必要ありません

！

トーマ：数が必要な時は低級の悪魔を召喚したりします。今回のシウトロムがそれですね。

カノ：ふむふむ、なるほど。今回魔王は少タイレギュラーだったんですね

真由美：そりやそうですね！あの白夜叉が居たのに侵入を許し、そして彼女をゲームに参加させないなんて普通は無理ですよ！

カノ：でも、ルーキーだったんですよ？

真由美：ええ。だから、一部では魔王の組織があるのではないかって言われています

キアラ：確かにそう考えると、新参魔王なのにやたらと規格外なことをした説明がつきますね

トーマ：でも、魔王は群れません。

キアラ：それはあくまで基本でしょう、トーマさん。考えてみてください。ここは箱

庭ですよ？そんなお堅い考えに縛られていたら足元をすわれます！

カノ：確かに箱庭に来てからは、常識が崩れましたもんね。カルチャーショックなんてレベルじゃない

キアラ：でしょでしょ

真由美：皆さん！突然ですが重大な発表があります（チユウモク

トーマ：どうしました？

真由美：なんと、私たちチャットキャラが本編キャラを差し置いて新年特別版をすることが決まりました！

カノ：えっ？

キアラ：はっ？

トーマ：すごい！

真由美：というわけで、3時間後またお会いしましょう！

「真由美」さんが退室しました。

R e : h a p p y n e w y e a r

「真由美」さんが入室しました。

真由美：はいはい、みなさん！揃っていますか？

キアラ：はい！

カノ：YES！

トーマ：揃ってます！

真由美：それでは、お手を拝借。せーのっ！

真由美・カノ・キアラ・トーマ：明けましておめでとうございます！！！！

真由美・カノ・キアラ・トーマ：そして、今年もよろしくお願ひします！！！！

キアラ：つて、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！

真由美：えー？言ってる場合だよん！だつて、1月1日0時過ぎたし

キアラ：そもそも、チャットなのに被つてるところも変でしょ！ありえないでしょ！

真由美：あつそれは、新年特別版だから多少の矛盾とかは無問題もうまんたい

トーマ：「ありえない」なんてありえない。それが箱庭ですよ、キアラさん。

カノ：話を戻しますが、真由美さんがいきなり私たちが新年特別版をやるって言つて

退室したので色々混乱したんですよ！

キアラ：もう、混乱どころではなかったデス！混沌ですよ混沌、太陽曰く燃えよ混沌カオスですよ！

真由美：（「・ω・」）うー！（／・ω・）／にやー！（「・ω・」）うー！（／・ω・）／にやー！

キアラ：黙らっしやい！

真由美：えー。言わしたのキアラさんですよ。つまり、私は被害者ですよ、被害者♪
キアラ：ああ、もう、ほんつとウザイですね！あなたは！

真由美：あはっ☆

カノ：終わりましたかね？

トーマ：終わったと思います。

トーマ：ところで気になったんですが特別版って何をするんですか？

キアラ：あ、それ気になる

真由美：いつも通りですよ？ただ、ちよつとメタ発言して良かったり矛盾してて良かったりするだけです

キアラ：メタ発言？それってこれですか？『レティシアちゃんの恋が実ると思う人、手あげて！』

トーマ：はい

真由美：はい！

カノ：それメタ発言なんですか？

キアラ：さあ？でも、カノさん乗り悪いですよ。やつぱり、恋は実らないと

カノ：そうですね？私、恋愛に疎いので分かりません

キアラ：恋は良いですよ！恋、それは人生の春。世界が色鮮やかに見えてきます！

真由美：はっはー。さては、現在彼氏さんにベタ惚れしてますね？

キアラ：YES！今日の初詣が楽しみです！

トーマ：ご馳走さま。彼氏さんは、愛されていて幸せですね！

真由美：そうですねー。私にとって初詣なんてリア充を狩る場所でしかアリマセンヨ

真由美：シアワセソウナフタリグミヲミルト、ザンゴクナマデニコワシタクナルンデ

スヨネwwwwwwww

キアラ：ありがとございます、トーマさん。そして、真由美さんは『リア充爆発しろ！』って素直に言ったらどうです？

真由美：私をそこら辺の低級と一緒にしないでください。私は実際に爆破しますから

☆

キアラ：死んでください

真由美：アハ、やだ★

キアラ：ああ、そう言えば今度のデートにアンダーウツドの収穫祭に行くんですがみなさんは行きますか？

トーマ：その祭りは楽しいから毎年飽きもせず行ってます。もちろん、今年も。

真由美：私は、コミュニティの経済状況的に厳しいですね。まあ、私が本気出せば行けますけどね！

カノ：ああ、私は行こうと思えば自分の足で行けます

トーマ：はは、これはアンダーウツドにこのメンバーが集まりそうですね。

キアラ：それは面白そうですね！是非とも真由美さんのリアルの姿を見たいですね

wwwwwwww

真由美：私の美しさを見て落ち込まないといいですね（余裕の笑み）

カノ：あ！

トーマ：どうしました？

カノ：完全に忘れてた。招待されてたのを今、思い出しました！

キアラ：えっ？収穫祭にですか？すごいじゃないですか!?

カノ：いえ、
“ウイル・オ・ウイスプ”
にです

第三章 人も何かの代価をなしに何も得ることは出来な

い

第1話 ハロウィン・キャット

とある空に浮かぶ古城

そこは、人一人どころか生物一ついない。

その本来何者もないはずの古城の中に声が響き渡った。

「おい、エンヴィー！何処だー？エンヴィー。マジでどこいったアイツ」

緑色のパーカーを着た少年は、そう叫びながら古城の中を歩いていく。

どうやら、人を探しているようだ。？

少年は何度か「エンヴィー」なる者の名前を呼んでいると、古城の一番外側の大きな窓（ガラスなど無い）に腰掛け外を見ている長い髪にバンダナをしている少年（？）を見つけた。

「あつ、いた。やっと見つけたぞ、エンヴィー！」

「ん。何だ。鏡磨か」

？

鏡磨と呼んだ少年のほうをチラツツと見るエンヴェー。

「何だはないだろ、何だは。せつかく、人が呼びに来てあげたつてのにさあ」

「はははは！ごめんごめん。さつき、ラストおぼはんから連絡があつてさ」

「火龍誕生祭のことか？」

「うん。いや、あの黒死病のルーキーがさ。どうやら失敗も失敗大失敗。全然使えなかつたみたいで。せつかく、色々サポートしてあげたのにね、全部無駄。でも、人柱候補を見つけるのには役立ったみたい。しかも、二人」

「へえ、それは収穫だな。でも、『人柱候補』つてことはまだ扉を開けてないんだよな？」

「そつ。まあ、なんかクズ魔王を倒したから収穫祭にコミュニティ自体が招待されてるみたい。だから、こつちに来るらしいよ。そう言えば、鏡磨つて何か用があつたんじやないの？」

「あつ！忘れてた。白とリンが晩御飯だから呼んで来いって言われてたんだつた！」

「おいおい、しつかりしてくれよ。もう、その年でポケちやつてるの？今度から『ポケ鏡磨』つて呼ぶよっ！」

「ポケてねえよ！つーか、さつきと行くぞ。俺が怒られる」

「別に鏡磨が怒られるのはいいいけどね。そう言えば、今日の晩御飯何？」

「ええと、確か——」

そんな会話をしながら二つの人影は城内へと消えていった。

◇◇◇

「ノーネーム」 廃墟街から本拠への道

三年前の「魔王」の力により、廃墟街と化した街の家屋をバラして整備をした飛鳥とその巨大な鉄人形のデイーンは本拠へと帰っているところだった。

途中、デイーンの頭上であお向けに寝ている耀が加わっている。

さて、そんな風に二人を乗せ本拠へと向かっていたデイーンは奇妙な物を見つけ立ち止まった。

例え、飛鳥や耀が自分の足で歩いていようが十六夜だろうがレティシアだろうが足を止めただろう。

まあ、カズマなら何時もの無表情のまま踏みつけて行ったしれないが。

デイーンが見つけた物は——生き倒れだった。

生き倒れと言ってもうっ伏せに倒れているため本場に生きているかわからない。

「。確か、こんなのに出会った時の対応の仕方を十六夜君が言っていたわよね？」

「。デイーンの主である飛鳥は生き倒れを見下ろしながら言う。

そして、飛鳥には生き倒れている者の服装に見覚えがあった。

「コーキ君、大丈夫？どうしたの？そんな所に倒れて。具合でも悪いの？」

「返事が無い。ただの屍のようだ。」

「飛鳥は、数十秒待ったが返事がないため無視して本拠帰ろうかなと考えたところで屍が声を発した。」

「あ・ああ、すかちゃん。ヘルプ・ミー。ディーンに乗せてくれるとありがたい」

初めは聞き取りにくかったがだんだん通常の喋りに戻った。

でも、彼にして声に元気が無かった。

「?。ディーン、コーキ君を乗せてあげなさい」

「Den」

ディーンは飛鳥の言う通り、コーキのフードを摘まんで自分の肩（飛鳥の隣）にコーキを乗せた。

「ああ、ありがとう」

「やっぱり、元気がない。」

「コーキ君、本当にどうしたの? いつもより、テンションがあきらかに低いわよ」

「実はね・僕、出禁くらったんだああああああ!!!」

コーキは泣きながら言っているが飛鳥はそんなことよりも「出禁」について考えていた。

出禁は、基本的に店などで起こることだがコーキがそれくらいで生き倒れになるわけがない。

「じゃあ、何なのか。飛鳥には心当たりがない。

「あの、泣いてるところ悪いのだけど、出禁って何が出禁になったの？」

「ギフトゲーム」

「へ？」

「僕は、ギフトゲームが出禁になったの！これじゃ、アンダーウッドどころか今後の生活が危ないんだよお！」シクシク

というコーキの訴えは置いといて彼が言った『アンダーウッド』のところを説明しよう。

火龍誕生祭が終わり一ヶ月が終わった頃、ノーネームのメンバーは現在の農園区の状態や今後の活動方針を決める話し合いが行われた。

農園区の状態の説明、今後どういう風になるかの話はわりとスムーズに済んだがリーダーであるジンが予想していた通り一つ問題が起きた。

それは、〃ノーネーム〃に送られてきた招待状の内の一つ、南側の〃龍角ドラコングを持つ驚獅子ライフ〃連盟からの収穫祭への招待状だった。

これ自体は問題どころか〃ノーネーム〃としては破格のVIP待遇だった。宿泊費

なども全部「主催者」持ちである。

さて、問題だったのはこの収穫祭は前夜祭を合わせると約一ヶ月ほどあり、長期間主力がないことを避けるため、その全てに参加出来るのは二人だけだということだ。

なら、当然その二人をどうやって決めるかという話になり十六夜の案で『前夜祭までに、最も多く戦果を上げた者が勝者二名』ということになった。

つまり、Let's 貢献！

「仕方なく、白夜叉ちゃんのところアルバイト的なのしよかなって思ってたけど、結局自分の戦力強化にしかならなかったんだ（涙目）」

「え、でもアルバイト出来たのよね？なら、何か貰えたのでしょ？」

「さっきも言ったけど、自分の戦力強化にしかならなかったんだよ」

と言いながら自分の左耳をコンコンとつつく。

そこには、白と蛍光黄色のヘッドフォンが着いていた。

それを見て、飛鳥は疑問に思った。

通常ヘッドフォンは、左右に小型スピーカーがあり、それをアームで繋いでいる。

が、それは左耳にしかなかったし音楽機器に繋ぐためのコードも無いもなかった。

「それが、バイト代？というかそれ不良品じゃないの？」

「はっはっは！確かに見た目は変わった片耳ヘッドフォンだけど、実はこれ——」

一瞬で泣き顔からいつもの顔に戻ったコーキが説明を始めようとした時だった。

「うわああああああ！来ないで！来ないで！来ないで！来ないで！！！！」

そんな叫び声が出て、いつの間にか廃墟街を抜け農園区を移動していた二人と一体は声のした本拠の方を見る。

すると、こちらに向かつて走ってくる人影——もとい、人影一つと猫影が一つあった。

先ほどの声の主は魔女の帽子に黒いマントを身につけ、黒い鉄棒の先に蒼白い炎が灯ったランタンを括りつけた物を持っていて、まるでハロウィンの世界からやって来たみたいな格好をした体長50cmほどの猫人獣だった。

そして、その猫を追いかけているのは

「待ってくれーちよつとでいいんだーちよつとでー！」

超金髪美少女メイド吸血鬼のレティシアだった。

いきなりのことに状況が理解できず、呆けてしまう飛鳥とコーキ。

その間に猫は足を止めていたディーンの脚にガシツと掴まりと、よじよじと俊敏な動きで登り始めた。

あつという間に体、頭を登りその上であお向け寝ていた耀の鉄板の上まで逃げる猫。

そこでやつと、飛鳥が声をかけた。

「あの、ハーミット君？一体どうしたの？というか、何故貴方がここににいるの？」

「そんな細かいことは、いいから助けてよ！さつきから来ないでって言うてるのにレティシアが追いかけてくるんだ！」

と、言っている間に翼を持つレティシアはそれを展開しハーミットの目の前に現れる。

「さあ、もう逃げ場はないぞ。諦めて大人しくしてくれ」

「嫌だ！絶対に嫌だ！」

「あの、レティシアちゃんはその猫君に何をしようしているの？何かすごく嫌がってるみたいだけど。」

「別に大したことじゃない。ちよつと、モフモフさせて欲しいだけだ！」

「ん、まあ確かに手触り良さそうだし、カワイイもんね。その気持ち分かるよ」

「私も少しモフモフしたいわ」

「久遠まで!？」

「別にいいじゃない、それくらい。触ったからって減るものではないわ」

「そもそも、何で嫌なの？」

「え、いやだって——」

ハーミットはチラチラとレティシアの方を見ながら、

「だって、一回捕まったら二度と逃げれないってボクの本能が言っているから」

この答えにコーキは首を傾げ、飛鳥は「なるほどね」と呟き、レティシアは「私は、そんな酷い奴じゃない！優しくする、だからモフモフさせてくれえ!!」と、瞳をうるうるさせながら言う。

「うっ」

あきらかに、罪悪感を感じたような声をハーミットは漏らした。

「ハーミット君」

「可哀想だし、少しだけ」

そこにさらに飛鳥とコーキの追い打ちがくる。

「うううっ」

と、唸り

「分かったよ。もうレティシアの好きにしていよいよ」

脱力したように耀の鉄板の上に座り込んだ。

「本当か!?なら、遠慮なく抱き締めるぞ!」

レティシアは、ピアと顔を輝かせハーミットに抱き締める。

「ああ、ふかふかだ〜!気持ちいい。かわいい〜。最高だあ」

「ちよ、レティシア。苦しいよお」

そしてこの後、ハーミットは本拠に着くまでレティシアに撫でられたり、頬擦りされ

たりしていたそうだ。



本拠に帰り、昼食を食べた後

大広間には、収穫祭に誰が何日いるのかを決めるため十六夜、飛鳥、コーキ、耀、そして審査役のジンとレティシアが集まっていた。

「あの、皆さん。カズマさんが居ないのですが何方か知りませんか？あと、レティシアが抱いているネコはどちら様ですか？格好からして『ウイル・オ・ウイスプ』の方ですよね？」

「そうだよ。ボクの名前はハーミット。春日部耀がギフトゲームに勝利したことにより発注されたモノを届けに来たんだよ」

ガシャガシャとランタンを持った手を振るハーミット。

彼は本拠に着く前から、昼食を食べる時もレティシアに抱かれたままだった。

「あと、ジン君。カズマ君なら、もうここに居るから始めていいわよ」
「えっ？どこにですか？」

「いや、そこに居るじゃねえか、御チビ」

と十六夜の指の先■にいるのはハーミットだ。

「えっ？いや、彼は■。『ウイル・オ・ウイスプ』のハーミットさんで」

「悪いけど、ジン君の理解速度には合わせられないわ」

「簡潔に言うとその猫君は、『ノーネーム』所属のカズマ・N・エノモトであり、『ウイ
ル・オ・ウイスプ』所属のハーミットなんだよ！」

「厳密に言えば、『ウイル・オ・ウイスプ』所属じゃ無いんだけどね」

「当たり前だ。いくら、ジャックでも私のカズマを渡すわけにはいかんからな」

「ボクは、いつからレティシアのモノになったんだろうね」

「早く始めよう」

「というわけで閑話休題。」

「えー、改めて審査を始めたいと思います。まず、大きな戦果からです」

一拍おいて、

「まず、飛鳥さんですが、牧畜を飼育するための土地の整備と、山羊十頭を手に入れたそ
うです。飼育小屋と土地の準備が整い次第、『ノーネーム』に連れてくる予定です」

「ふふ。子供達も『山羊が来る！』『チーズが作れる』と喜んでいたぞ。派手ではないが
コミュニケーションとしては大きな進展だと思っぞ」

フフン、と後ろ髪を掻きあげる飛鳥。

余裕が感じられる。

レテイシアはハーミットを両手で抱えているため、代わりにハーミットが報告書をペラリと捲る。

「次にカズマだが、流石というか、なんとというか」

「ですね。カズマさんは、『ノーネーム』敷地内に温泉の源泉の発見。そしてこの本拠へのパイプ接続、新しい浴槽や浴場等の入浴設備の増築を全て一人でしてくれました」

「はははは！また、本拠を改造したんだねwww」

「カズマ君の行動力には驚かせられるわね」

「温泉に入り放題」

「また、自費で作ったのか？お前、毎回どうやって金稼いでいるんだよ？」

ハーミットは報告書から顔を上げると、十六夜の質問に半分答えた。

「今回はほとんど、お金は使っていないよ。金属パーツはほとんど土から錬成したし。お金使ったのは木材だけかな。あと、ジン。ボクは辞退したはずだけど、なんで参加させられてるわけ？」

「いえ、十六夜さんたちが参加させろって言ったので「そう、別にいいけど」」

ジンの言葉を遮るハーミット。

「あの、怒ってます？」

「別に。ボクのことはいいいから続けよう」

「あ、はい。次にコーキさんですが、残念なことに十六夜さんと同じ『出禁』をくらった
そうで、戦果はありません」

「十六夜君はいいよね。なんか白夜叉ちゃんからなかなか良いギフトゲーム紹介して
もってき」

「お前もお前で白夜叉がなんかギフトゲームじゃなくても仕事くれただろ？」

「新しく売り出そうか考えているギフトのテストの仕事だったら全然戦果にはならな
かったよ！」

はっはー、とやけぎみに笑うコーキ。

「ええ、次は耀さんの戦果です」

「春日部耀の戦果は、ボクたち『ウィル・オ・ウィスプ』主催のギフトゲームの賞品。こ
の、ジャックが作った炎を蓄積できる巨大キャンドルホルダーだよ。おめでとう！」

ハーミットは、腰に着けていたポーチの中からギフトカードを取り出し、キャンドル
ホルダーを实体化させる。

「これを地下工房の儀式場に置けば、本拠と別館にある『ウィル・オ・ウィスプ』製の備
品に炎を同調させることが出来る」

「これを機に、**竈・燭台・ランプ**といった生活必需品を『ウィル・オ・ウィスプ』に発注
したいと思います。あ、ハーミットさんいいですか？」

「うん、いいよ。むしろ、ジャックも喜ぶと思うよ！本拠と別館の全部ならそれなりにお金になるしね」

「あれ？ ヴィル・オ・ウイスプ」って貧乏なの？ けっこう、ガラス細工とか有名なものに」
「別にそういうわけじゃないけど、子供たちが多いのに稼ぐ人が少ないからね。お世辞にも裕福とは言えないよ」

「なるほどな。てか、知らない間にそこまで設備プランが進んでいたとはな。やるじゃねえか、春日部」

「うん。今回は本当に頑張った」

何時になく得意気な微笑みを浮かべる耀。

今回の収穫祭の参加日数を決めるこのゲームには、並々ならぬやる気を出していた。彼女にしては、これ以上の戦果は挙げられないだろうという、自信に満ちた微笑みだった。

「いや、意外だったぜ。金銭を賭けた小規模ゲームが多い七桁で、中々大きい戦果を挙げたみたいじゃねえか」

とニヤリと笑いながら言う十六夜。

「嫌みか！それは嫌みなのか！何の戦果も挙げられなかった僕への嫌みなのか！というか、十六夜君の戦果は何なのさ！？余裕ぶっこいてるみたいだけど、耀ちゃんたちを越え

られるの!？」

そんなコーキの言葉を聞き、十六夜は不敵な笑みを浮かべ立ち上がる。

「当然だろ。そんじや、今から戦果を取りに行くとしようかね」

「取りに行くってどこに？」

「〃サウザンドアイズ〃にさ。主要メンバーには聞いて欲しい話があるからな」

十六夜のその含みのあるその言葉に首を傾げた一回であった。

第2話 神も人もうつかり恋に落ちるもの

“サウザンドアイズ”支店

毎度のごとく毎度のように女性店員に門前払い受けていた一同は白夜叉の

「おお、スマンスマン。小僧たちが来ると伝えておらんかった。ちよいと重要な案件がある故、急ぎで通してやってくれ」

という言葉でようやく入店が許された。

女性店員本人は心底嫌そうな顔をしていたが。

何時ものように中庭から座敷に向かっていたが、障子の向こうから聞こえるあられもない女性の声を止めた。

「や、やめてください！白夜叉様!!!黒ウサギは『箱庭の貴族』の沽券に掛けて、あれ以上きわどい衣装は着ないと言ったではありませんか!」

「く、黒ウサギの言う通りです!この白雪も神格のはしくれとして、こ、このような恥ずかしい格好をして人前に入る訳には!」

黒ウサギと白雪なる者の悲痛な声が響き、一同は何事かと顔を見合わせる。

障子に映る白夜叉の影絵は、ノリノリで二人に襲いかかる。

それを見てハーミットはレティシアの腕のなかで溜め息を吐き、コーキは懐からカメラを取り出し電源を入れる。

「ふふふ、うぶな奴らよ。おんしらは何も分かっておらん。清く正しく美しく、尊いが故に、穢し墮とし辱しめたいと人は強く望むものよ。おんしらのように高嶺の花など特にそうなのだ!!このままではいずれ、その発育した豊満でエロイ身体にエロイ事を仕込みたいというエロイ欲求が爆発したエロイ暴徒がおんしらを姦策に嵌めてエロエロにしようとした動きだすに違いない!そうツ!!まるで今の私の様にツ!!」

「黙れこの駄神ツ!!!」

刹那、竜巻う水流と轟雷が障子を突き破った。

ついでに白夜叉も吹っ飛んできた。小柄な身体で勢いよくトリプルアクセルを決めながら飛んでくる彼女にハーミットはランタンをかざした。

「燃えちやえッ!」

そんな可愛らしい声とは裏腹にランタンから蒼い炎が溢れ出し、生き物の様に白夜叉へと襲いかかった。

「熱ちちちッ!」

火だるま化した白夜叉はそのまま吹っ飛び続け何時かの様に十六夜に、

「てい」

「ゴバアツ!!!」

と蹴られクルクルと回転しながら庭の池に落ちていった。

「人に火を点けるなんてハーミット君って、かわいい顔してなかなか凄いことやるわね」

「うんうん」

「大丈夫だよ、変態白夜又だから」

「つーか、何をやったらそんなに黒ウサギを——」

怒らせるんだ——と十六夜の言葉は続かなかつた。

水煙の向こうに見える黒ウサギたちの姿に、言葉を無くしていたのだ。

「黒ウサギどうした? その格好」

ひや、と水煙の向こうで情けない声がする。

「あ、やだ、なんで十六夜さんが此所に——」

「いや、それは俺の台詞だと思おうが、ふむ」

バツと水煙を腕で払う。

途端に、黒ウサギと白雪姫は自分の身体を抱きしめるようにへたり込んだ。

水煙が晴れて見通しが良くなった事で、後ろのハーミット達まで黒ウサギと白雪姫の

姿が良く見えるようになった。

「着物？」

「えつと、ミニスカの着物？」

「いいや、ワンサイズ小さいミニスカの着物にガーターソックスだな」

「ふむふむ。僕のデータバランクによれば、この衣装は花柳齋人形『雪月花』の次女、『月の乙女』夜々の着物をモデルにしたっぼいね」

「うむ、流石はコーキ！その通りだ！この前酒飲み友達である硝子に三姉妹の写真を見せられてのお。どの子も可愛かったが夜々を見てビビッときたんじゃ！」

黒ウサギたちが着せられていたのは、身体のラインがはつきりと分かるよう小さめに着付けられた着物を、又下でバツサリと切り取った奇形の着物だった。加えて肩から胸までを大胆に開き、肌の露出を多くしている。極めつけは、花柄レースのガーターソックスという、もはや意味の分からない衣装である。

と、ここでコーキはレティシアの隣、つまり最後尾にいたコーキの存在に彼女気づいた。

「な、何でお前が——いや、貴方がここにいる。コーキ!!」

先程の黒ウサギよりも情けない声を出したのは白雪姫だった。

ん？とコーキは思い一番前まで移動し、先程よりも顔を赤く染め黒ウサギの影に隠れようとしている白雪姫を見る。

そして、

「誰？」

「ずごつ、白雪姫とコーキを除いた全員がずっこけそうになった。

「いや、本当にそのミニスカ着物が似合うエロイお姉さんはどちら様？正直、そんな美人さんに会っていたら忘れるわけないんだけどね」

と首を傾げるコーキ。

「いや、分からないのも無理はない。私は、そのあの」

ほそぼそと言って重要どころがわからない。

その助け舟を出したのはこの中で白夜叉を除いたら白雪姫の本来の姿を知っている十六夜だった。

「なあ、コーキ。トリトニス滝にいた蛇神を覚えているか？」

「はい？いきなり、どうしたの？藪から棒に。覚えているけど、というか、十六夜君この美人さんのこと知ってるの？」

「まあ、聞け。その蛇神の名前が白雪姫っていうらしいぞ」

「へー、そうなんだ。白雪姫ね。白雪、って！！」

考えるように下げていた顔をぱつと上げると、白雪と十六夜を交互に何度も「えっ？えっ？えっ？」と言いながら見て白雪の方で止まると、

「まさか、このお姉さんがあの十六夜君に蹴られて一発KOされていた蛇神様

!!!????」

◇◇◇

「それにしても、色々と驚いたわね」

「うんうん。というか、白雪とコーキってなにかあったの？」

「いや、別になんかあったわけじゃねえけど、俺が白雪に喧嘩を売られて蹴っ飛ばしたって話はコーキ言っていただろ」

「言っていたわね。でも、十六夜君女性を蹴るのはどうかと思うわ」

「いや、そんな時は蛇の姿だったからな。そもそも、女だったとは驚いたぜ。で、そのあといくら喧嘩売られたからってかわいそうだよとか言ってるコーキが錬金術で治療してやったんだ」

「えっ、それだけ？」

「おう！それだけだ」

「白雪ってコーキ君に好意を持ってそうだったわよね？」

「多分」

「確実に一票だ！」

「.....」

「白雪ちよろツ!!!」

「何か言ったか、小僧どもツ!」

「「いえ、なにも。」」

「ばつと障子が開け放たれ、隣の部屋で着替えていた白雪と黒ウサギが戻つて来た。

「うう、やつと何時もの格好に戻れたのですよ。」

「ねえ、黒ウサギ。さっきの着物どこに置いたの?」

ハーミットは、座っているレティシアの膝の上から飛び降りながら聞く。

「それでしたら、ここに。」というか、ハーミットさんはそのハレンチな着物モドキをどうするのですか?」

「ん、燃やすんだよ」

「でしたら、どうぞどうぞ」

と言いながら黒ウサギは綺麗畳まれた着物二着をハーミットに渡そうとする。

「ちよつと、待てーい! 制作者であるこの私の許可を得ずに勝手に処分しようとするでない!」

「お黙りください、白夜叉様! こんなものない方が世の中のためでございます!」

「黒ウサギの言う通りです! こんな淫らな衣装を着させられたことなど、恥でしかない。

その事実ごと燃やせ、猫!」

「ええ? 僕はすごく似合ってたと思うし、好きだよ」

「やっぱり、私のは燃やすな猫」

「君も物好きだね。というか、白夜又この衣装何のために作ったの？ああ、いやまたエロイのが見たかったからとかしかかないよね」

そう言いながら、ボツと着物が炎に包まれ灰と化し風に舞った。

「いや、別にそういうわけではない。今の服は本来黒ウサギに着せる衣装ではなく、この外門に造る新しい施設で使う予定の正装じゃよ」

白夜又は焦げ臭い頭を振りながら真面目に答えた。

「し、施設の正装!?あのエツチな着物モドキがでございますか!?一体どんなお馬鹿な施設を作るつもりなんですか!」

「もう一回燃える?」

「落ち着け。施設そのものは至って真つ当な代物だ」

「まあ、簡単に説明するとじゃな。まず、これは“階層支配者”の活動じゃ。次に魔王らしい魔王もいないし優秀な断罪者パニッシャーが大体の仕事は片付けてくれるからの、ちよいと発展に協力しようと思ったんじゃ。そして、何をしようか悩んどつたら十六夜から提案があつたんじゃよ。〃発展にはまず、潤沢な水源の確保が望ましい”とな」

「ああ、そういえばこの前の干魃の時に色んなコミュニティが困つてたもんね」

「そうだ。そして、街中にある水路だがあれは有料だからな。使えるのは中級コミュニ

「ティだけだ」

「もう一つ言えば、定期降雨を溜めるにしてもそんな大きな土地を持つているところも少ないからね」

いつの間にかレティシアの膝の上に座らされているハーミットが付け加えた。

「うむ。そこで一つ『階層支配者』の権限で大規模な水源施設の開拓を行おうというわけだ。十六夜かコーキに頼もうと思つて、結局十六夜にしたんじやが。十六夜には白雪の元に水源となるギフトを取りに行かせたんじやよ。よもや隷属させてくるとは思わんかつたわ。まだまだ修行が足りんのう、白雪？」

ニヤニヤと笑いながら白雪を見る白夜叉。

白地の着物に着替えた白雪は、ムスツとした顔で言つた。

「お話は分かりました。しかし！なぜ、コーキではなくあの小僧を寄越したのですか!? コーキならば無条件に隷属しても良かった——もとい、ギフトを渡していたというのに！よりもよつてあの小僧を。」

「そうだよ！白夜叉ちゃん！僕には、テスター仕事しかくれなかつたのに！どうして、十六夜君にその仕事を任せたの!?僕だつて白雪ちゃんみたいな女の子を隷属させたかつたよ!!!」

「いや、単純におんしは白雪のギフトゲームとは相性悪いし無条件でギフトを渡されて

は意味がないのじゃ。正式にギフトゲームをしそしてギフトを手に入れる今回はそれが必要だったんじゃないよ」

「えっ、何で？」

「今回私は『階層支配者』として施設は用意するが最後の一押しはその地域の者が成さねばならない。なのに、無条件で手に入れたギフトを一押しにするわけにはいかんじゃろ」

「まあ、そういうことなら致し方ありませんな」

「よく分からないけど、『仕事』に話は納得した」

とりあえず、ここで一旦コーキと白雪の文句が終わったので十六夜は本題に移ることにした。

「さあ、これで契約成立。ゲームクリアだ。例の物を渡してもらおうじゃねえか」

「ふふ、分かっておる。『ノーネーム』に託すのは前代未聞だが、**地域発展のために**人格所持者を貸し出すのじゃ。他のコミユニティも文句は言えんさ」

そう言うのと白夜又は柏手をパンパンと打った。

すると座敷は光に包まれ、やがて一枚の羊皮紙が現れる。

羽ペンを虚空から取り出した白夜又は文末にサインを書き込むと、ジンに渡した。

「それでは、ジン＝ラッセル。これはおんしに預けるぞ」

「ぼ、僕ですか？」

「うむ。これはコミュニティのリーダーが管理するものじゃからな」

ジンは白夜叉の視線に促され、羊皮紙に目を通した。

直後、ジンは衝撃で硬直し動かなくなった。

「こ、これまさか」

「どうしましたジン坊っちゃん？」

ピョンと、ジンの後ろに回り込む黒ウサギ。

すると、ジンと同様に彼女も固まった。

その羊皮紙に書かれていたことは、次のようなことだ。

『——二二〇五三八〇外門 利権証——』

*階層支配者は本書類が外門の利権証である事を保証します。

*外門利権証の発行に伴い、外門の外装をコミュニティの広報に使用する事を許可します。

*外門利権証の所有コミュニティに右記の アストララゲト “境界門” 使用料の八〇%を納めます。

*外門利権証の所有コミュニティに右記の “境界門” を無償で使用する事を許可します。

*外門利権証は以後、 “ のコミュニティが レギオンマスター 地域支配者で在る事を認め

ます

アイズ“印”

このあとのジンや黒ウサギの喜びようは説明するまでもないだろう。

文面を見れば、どれほどすごいかはイメージ出来よう。

というわけで以下略とさせてもらう。

◇◇◇

黒ウサギのあまりの嬉しさによるオーバリアクションも終わり“ノーネーム”一行が帰ろうとしている時、

「おお、忘れるところじゃった。コーキよ、少し残つといてくれ。話がある。私からも白雪からもな」

「ん、そう？んじや、レティシアちゃんたち先に帰つといて〜」

「分かった。それでは、また——あ、カズマ」

相変わらず抱かれていたハーミットは突然腕を抜け、飛び下りると正座をしている白雪に駆け寄った。

「何かようか、猫？」

「言わなくても良かったけど、昔話の中でも神話の中でも助けられて恋に落ちるなんて

“サウザンド

「実によくある話だよ」

「ふん、私は別に小僧共の言葉など気にしてないぞ。これは他人に口出しされるようなものではない」

「そう。別にどうでもいいけど」

それだけを言うと、ハーミットは部屋を出ようとして再びレティシアに捕まっていた。

こうして部屋には白夜叉と白雪、そしてコーキだけとなっていた。

第3話 不思議な猫のハーミット

カズマ作・新設された露天風呂

「ノーネーム」が地域支配者に任命された夜。

小さな宴が終わり、それぞれが思い思いの時間を過ごす頃、コーキは露天風呂に浸かっていた。

一人というわけではなく、十六夜とリリも一緒だ。

現在、十六夜はリリの髪を「ほれ、終わったぞ」洗い終わったようだ。

「は、はい。ありがとうございます」

「気にするな。別に俺がやりたかっただけだからな」

ヤハハと笑いながら十六夜は湯船に浸かった。

「なあ、コーキ。白雪と何話したんだ？」

「ん、別に。お礼言われたり十六夜君の愚痴聞いたりしてただけだよ。まあ、白夜叉ちゃんもつと他に言うことないのかーって言ったりしていただけよ。十六夜君が期待しているようなことはなかったよ」

「そうか。良かったな、お前のことが好きな奴ができて。ずっと、彼女欲しいって言って

たもんな」

「ん、嬉しいのは嬉しいんだけどね。ちよつと悲しいところもあるかな」

「悲しいところ？」

「僕ってさ、人間の女の子にモテないのかなって思つてね」

「。ああ、まあ気にするな。お前は良いところ色々あるからな」

「十六夜様の言う通りです！コーキ様はいつも明るくてお優しいですから私たちは大好きですよ！」

「ありがとう、リリちゃん。嬉しさ100%になったよん☆」

ニコツと笑つてみせるコーキ。

「じゃあさ、コーキはこれからどうするつもりなんだよ？」

「そうだねー、ある意味今日が初対面だし様子見かな？まあ、向こうから言われた時にはしつかる応えるつもりだし、僕が本気で惚れたら自分から歩み寄るよ」

「つまり、今後に期待しとけばいいわけか」

「まっ、そういうことだね！応援よろしく!!」

「ヤハハ！任せとけ、いざという時はニヤニヤしながら応援してやるよ」

「ニヤニヤはいらなかな〜」

と話で盛り上がっているとがらつと脱衣場の扉が開けられレティシアが顔を出した。

そして、キヨロキヨロと露天風呂を見渡すと、はあとため息を吐いた。

「どうした、レティシア？カズマでも探しているのか？」

「その通りだ。さつき、中の浴場の方は見たんだがいなかったから、てつきりこつちに
いると思っただがな」

「ん？そもそも、カズマがお風呂入っているという予想はどこから来たの？てか、そんな
とこいいいで入って来たら？」

「それもそうだな。せつかく、カズマが作ったものだしな」

レティシア眩きながら入ってくるレティシアは日頃の少女の姿ではなく、美しい女性
の姿をしていた。

「ああ、でなぜカズマが風呂に居ると思ったかだったな。先程、人型服を持って歩いてい
たからだ」

「あれ？カズマってまだハーミットだったの？」

「その時はそうだったぞ」

「それにしても、カズマ様の猫のお姿可愛かったですね！」

「だよね。レティシアちゃんなんかずつと抱っこしてて離さなかったもんね」

「仕方がないだろう。あんな可愛くてカズマだなんて、反則だ！」

「それだけじゃねえだろ。合法的愛しいカズマを抱くことが出来るからっていうのもあ

るだろ」

「ま、まあ、それもあるがあの手触り気持ち良すぎてクセになつてしまふんだ」

「それはともかく、今まで一番カズマと一緒にいた一日だったんじゃないの？」

「うん、しかもずっと抱き締めていられたのは本当に幸せだった／＼／＼」

「少し距離が縮まつたんじゃない？」

「絶対縮まつてると思うぜ。しかも、——」

「あ、じゃあカズマを探してたの——」

「い、いや、別にそんな意図で——」

このように露天風呂では、恋バナが行われていたが当の本人であるカズマはハーミットとしての仕事をしているのだった。



三毛猫が寝室を抜け出してまもなく、耀が膝を抱え丸くなって少したつた頃

窓の方から感情の乏しい声があった。

「今日も月が綺麗だね」

「誰、ハーミット？」

耀が顔を上げると窓に腰かけて月を眺めている魔女の帽子をかぶった黒猫がいた。
?

「いつからそこに？」

「ん？ そうだね。君が三毛猫に事情を話している時にはもう近くにいたよ。中々入るタイミングが掴めなくてね。今になっちゃたんだ」

「そういえば、三毛猫はどこ？」

耀はキョロキョロと部屋を見渡すがどこにもいなかった。

「さつき部屋を出ていったよ。水でも飲みに行つたんじゃない？」

「そう、ならいいけど。それでハーミットは私の話を聞いていたの？」

「ボクも悪いとは思つたんだけどね。こつちにもまだ『主催者』の一人として仕事が残つていたから」

「仕事」

「うん。ボクたちに見事勝利した君には賞品を実際に渡さないとね」

そこで初めてこちらを向いたハーミットの手にはキャンドルホルダーが握られていた。

「それは、ジンに渡したはずじゃ」

「まだだよ。これは勝利した君が一番に受け取るべきモノで、君からジンに渡すものだよ」

ハーミットは窓から飛び下りると、耀の前で立ち止まった。

「おめでとう、春日部耀！見事なゲームメイクだったよ!!」

・そう笑顔で言いながらキャンドルホルダーを手渡した。

「」

「どうしたの？」

「いや、ハーミットって本当にカズマと同一人物なのかなって思っただけ。カズマ、いつも無表情だし。」

「春日部には言われたくないな」

「そして、無愛想だしドライだし」

「もうミートパイ作ってあげないぞっ！」ニヤハ

「ごめんなさい。そして、やっぱり別人にしか思えない」

「まあ、そんなことはどうでもいいよ。ボクはカズマであってカズマではないからね。前にも似たようなこと言ったけど、別人だと考えた方がいいよ。そっちが混乱しない」

さて、と一区切りを入れて、

「少し話を戻すけど春日部耀、君が言っていた『私たちで造った農園』にしたかったって言っていたけどボクは何もしてないんだけど。」

「あ・うん。カズマは何もしてなくないよ。畑を造るために耕したり、錬金術を使ったりしてちゃんと『農園』を造っている。私には錬金術は使えないから普通のお手伝いし

か出来ないけど。」

「あれは、ただ仕事だからしているだけなんだけどね。特に意味もないし、君みたいに執着もないから仕事じゃなかったらしないんだけどね」

「でも、私と違つて『農園』を造つていゝことは事実」

「そうだけど、やっぱりボクには理解出来ないね。仮に今から春日部が『農園』に執着する理由を説明しても意味はない。ボクには理解の出来ないことだから。あと、最後に一つ言つておくことがある」

ハーミットは、歩いてドアの前に移動しながら、

「春日部耀、君の悲しみが君だけのものだけとは思ふなよ。心の距離が近いほど、感情は伝播しやすい。君が何もしなくても他の人が身勝手に何かするかもしれないからね」

「。ハーミットは何か知つてゐるの？」

「何も知らないよ。ただの直感。野生の感つて言つてもいいね。君を見てゐると何か嫌な予感がするんだ。だから、忠告した。ボクは面倒なことが嫌いだからね」

そう言ふと、ドアを開け

「じゃね、良い夜を」

すぐに耀の寢室からいなくなつてしまつた。

声をかける暇すらなかつた。

耀はベットに横になりながらさっきのハーミットの忠告を思い出して、
 「あれがハーミットなりの慰め方だったのかな？」
 と首を傾げた。

◇◇◇

ランプの消えた室内の大浴場へと続く廊下

ハーミットが人型の服を持って浴場へと向かっていると、前の方から三毛猫が走って来て——すれ違った。

その時、ハーミットの目は捉えていた、その口には十六夜のヘッドフォンがくわえられていることを。

ハーミットは立ち止まり、振り返ったが特に何もせずただ三毛猫が去っていった方を赤く光る無機質な目で見ながら、

「ああ、もう手遅れだったんだ。残念」

そう呟き、再び浴場へ向かって歩き出した。

◇◇◇

次の日の朝

「十六夜君、まだ見つけれられないの？夜通し捜したのでしょ？って、カズマ君もいないわよ！」

「あ、い、十六夜さんはともかくカズマさんは何の問題もないはずですよ。まさか！二度寝しているのでは!？」

そろそろ出発しないといけない時間になり、慌てだす二人。

その時、隣にいたジンが声を上げた。

「あ、二人とも来ましたよ！」

しかし、十六夜の頭にはヘッドフォンはなく、イヤバンドが載せていた。

なお、カズマ（睡眠中）はフードを掴まれて引きずられていた。

そして、黒ウサギが目を丸くして十六夜に質問をしている時に手を放された。

そこでカズマは少し目を覚ました。

「眠い。」

「おやおやおやく、カズマ君それではダメですね！これから僕はまだ行けない楽しい楽しい収穫祭に行くって言うのに!!」

朝から元気な声をしているのはコーキ。

「そうだと。せつかく、行けるんだ。楽しむべきだ」

と言うのはレティシア。?

「そんなに行きたいなら代わるか」

「いや、それじゃルール違反だよ。これはギフトゲームで負けた僕が悪いんだから」

「でも、十六夜は春日部に譲るみたいだ」

「あれは、例外だ。どうやら身内が造った大事なものらしいからな」

「そう」

「少しは頭、覚醒した？」

「まあ」

「なら、良かった。でも、本当に楽しみなよ！僕もあとで行くからさ」

「私もコーキと一緒に行く予定だ。あー、えーと、その、出来ればだが　まあ」

と頬赤らめながらもじもじとし始めるレティシア。

レティシアが色々先伸ばしの言葉が続けるので首を少し傾げるカズマ。

レティシアが肝心なところを言えないでいると、コーキが後ろに回り、

「ほら、しっかりと！ガンバレ!!」

レティシアの肩を押した。

コーキに押され、少し距離を詰めたレティシアは腹を決め、

「カズマ、その時は私と一緒に　収穫祭をまわらないか　火龍誕生祭の時みたいになら／＼」

／＼

「別にいいけど」

カズマはいつもの無表情で答えた。

すると、レティシアはたちまち笑顔になり後ろにいるコーキとハイタッチをした。

カズマにはこのレティシアとコーキの行動の意味がわからなかった。

それと、ほぼ同時に耀の方の話も終わつたみたいだ。

こうして飛鳥、カズマ、黒ウサギ、ジンそして耀と三毛猫の五人と一匹は本拠を後にした。

本拠に残つた十六夜、コーキ、レティシアは手を振つて見送る。

一行が見えなくなるとコーキは、ニパツと笑いながら十六夜に声をかけた。

「ねえねえ、十六夜君。君がせっかく頑張つて勝ち取つた順番を譲つてまで捜しているヘッドフォンつて確か君の知り合いが作つたものだったよね？」

「ああ、そうだが。それがどうした？」

コーキはヘッドフォン捜索の際に何で大事なかを聞いている。

「いやいや、せっかく十六夜君がちよっとセンチメンタルみたいな感じだからさあ。

君の世界の話聞かせてよ！何気に僕たちの世界のことはちよくちよく話してるけど、そつちの話つて全く聞いてないからね」

「聞いてどうするんだよ」

「単純な話、好奇心だよ！十六夜君のような人間がどんな生活をしていたか興味があるんだ。レティシアちゃんも気になるでしょ？」

「まあな。十六夜がどんな風に今の逆廻十六夜になったかには、私もかなり興味がある」
うんうんと頷きながら言うレテイシア。

十六夜は、一瞬面倒なので話題を変えようか考えたがやめた。

別に隠すようなものではないし、コーキたちの世界の話をもう聞いているのだ。

相手には聞いて自分は面倒だから話さない、なんてことは筋が通らない。

つまり、等価交換である。

「良いぜ、話してやるよ。でも、朝食を食った後にな。じゃねえとテンション上がらねえ。

そして、良い茶と茶菓子も用意しろ。話を円滑に面白くするには、必須だからな」

「O・K・O・K、十六夜君。良い茶菓子ならカズマの和室から盗んで来れば良い！」

「あ？あそこの戸棚、春日部がつまみ食いしないようにカギかかっているだろ」

「フフフ、僕のピッキングスキルなら30秒だよ」

「そこは鍊金術を使え」

「ついでにお茶つ葉も拝借させてもらおう。何故かカズマは『サウザンドアイズ』から

良いものをもらっているからな」

「んじや、まあ、僕は先に盗んでくるよ。朝食の準備してて〜」

「了解した」

「盗んだのがバレても自分で責任取れよ、コーキ」

「え、ちよ、待っ——」

そうなこんなで彼らは本抛の館へと戻って行った。

第4話 嵐の前の笑い

七七五九一七五外門 “アンダーウッドの大瀑布” フィル・ボルグの丘陵

「わ、」

「きや」

ビュウ、と吹き込んだ冷たい風[？]に悲鳴をあげる飛鳥と耀。

カズマにはパーカーを着てるから少し涼しい位で丁度良い風だった。

「す・凄・い・！・な・ん・て・巨・大・な・水・樹・」

丘陵に立つ外門を出たカズマたちの瞳に飛び込んだのは、樹の根が網目模様[？]に張り巡らされた地下都市と、清涼とした飛沫舞う水舞台だった。

「飛鳥、下！水樹から流れた滝の先に、水晶の水路がある！」

耀は今まででない様な歓声を上げ、飛鳥の袖を引っ張る。

珍しいことだ。他の人に無関心なカズマでもそう思ったぐらいに。

カズマも下を見てみると、大樹の根が地下都市を網目状に覆っており、その間を縫うように翠色の水晶で作られた水路があった。

「飛鳥、上！」

えっ、と声を出しながら上を向く飛鳥。

(本当にテンションが高い)

カズマはそう思いながら上を見ると、何十羽も角が生えた鳥が飛んでいた。

「角が生えた鳥。しかもあれ、鹿の角だ。聞いたことも見たこともない鳥だよ。やつぱり幻獣なのかな？ 黒ウサギは知ってる？」

「え？ え、ええまあ。」

「ホント？ 何て言う幻獣なの？ ちよつと見て来てもいい？」

その言葉に困ったように黒ウサギがしていると、

巨大な翼で旋風を巻き上げ現れたのは「サウザンドアイズ」のグリフォンだった。

なお、下りてくる時に何か言っていた気がしたが飛鳥、カズマ、ジンの普通の人間には分からなかった。

「久しぶり。此処が故郷だったんだ」

どうやら世間話をしているようだがやつぱり三人には何を言っているか分からない。

ここで自分も動物の言葉が理解出来る方法があったことを思い出したカズマはネコミミを出してみる。

「YES！お久しぶりなのです！」

「お、お久しぶり。でいいのかしら、ジン君？」

「き、きつと合っていますよ！ね、ねえカズマさん？」

「幻獣はダメか。」

「どうやら、ネコミミを出しても理解出来なかつたらしい。

ここからは以下略。理解出来ない言葉が多すぎるので。

一応何があつたのかは説明しよう。

1, グリフォン（名前はグリーと言うらしい）が街まで送ってくれた。

2, その途中、あまりの勢いにジン（命綱付き）はグリーの背から落ち、飛鳥は二の舞にならないように頑張っていた

3, カズマは平然と立ち上がると、ジンの命綱を引っ張って回収していた

まあ、主なことはこんなことだろう。

ジン、ドンマイだ☆

◇◇◇

「うん、分かった。気を付けてね」

耀がそう言うや否、翼を広げグリー去っていった。

多分、仕事に向かったのだろう。

そして、耀が黒ウサギから殺人種であるペリユドンには近づいてはいけない釘を刺されていると、

「あー！誰かと思つたらハー、もといカズマじゃん！しかも、耀もいる。何？お前らも収穫祭に、」

「アーシャ。そんな言葉遣いは教えていませんよ」

賑やかな声が見ると、そこにはこの前まで寝食を共にした、ウィル・オ・ウィスプのアーシャとジャックが窓から身を乗り出して手を振っていた。

「ジャック、アーシャ」

「君も来てたんだ」

「まあねー。コッチにも色々事情があつて、サツと！」

アーシャは窓から飛び降り、ジャックはふわふわと降りてきた。

「やつぱり、あんたは人の姿だと無表情なんだな。ハーミットの時はメチャクチャ表情豊かなのにさ。同じ奴なんて信じらんないよ」

「前にも言ったが一緒だと考えるな。混乱するだけだ」

「そうだけどさ。もうちよい、笑つた方が良く私は思うよ、ガチで。ところでさ、耀は

もう出場する——」

今度はアーシヤは耀と出場するギフトゲームについて話し始めた。

「ヤホホホ！こんなに早くまたお会い出来るとは、嬉しいですね。子供たちが貴方が帰ってしまつて寂しがつてましたよ！」

「それについては、ノーコメント。仕事の方は完了した」

「人の御姿をしているということは、そのようですね。それにしても『ウィル・オ・ウィスプ』の物品を一式注文をされた時には、本当に感謝感激ですよ！いやはや、カズマさん。前にも言いましたが私たちのコミュニティに来ませんか？」

「それについても、前と同じノーコメント。それよりも、バイト代についてだが——」

「ああ、それでしたら——」

とゴニヨゴニヨと話し始める二人。

それを見ていた飛鳥とジンは、

「ジン君、大変よ！ジャックが主力を引き抜こうとしているわ」
 「そうですね。由々しき事態ですね。流石は『ウィル・オ・ウィスプ』の参謀——油断出来ません」

ちよつと危機感を感じていた。



「ウィル・オ・ウィスプ」の二人は「主催者」に挨拶に行くと言うので、「ノーネーム」の一行も一緒に行くことにした。

現在位置は、「アンダーウッド」の地下都市、壁際の螺旋階段である。

深さは20mほどだが、壁伝いに上るならかなりの距離だ。

しかし「ノーネーム」のメンバーは億劫そうな顔をせず、初めてきた都市に瞳を輝かせる組と黙々と登る組（約一名）に別れていた。

収穫祭とあつて、出店も多くあちらこちらから美味しそうな薫りが漂ってくる。

その内の一つに耀が目を奪われた。

「あ、黒ウサギ。あの出店で売っている「白牛の焼きたてチーズ」って」

「駄目ですよ。食べ歩きは「主催者」への挨拶が済んでから、」

「美味しいね」

「いつの間にか買ってきたんですか!!?」

「カズマの方がすごいよ」

ばつ、とカズマの方を見ると彼の手には二枚のこんがり焼かれたパンがあり、その間には焼きたてとろつとろのチーズにこんがり絶妙な焼き加減のベーコン、そしてブラックペッパーがかかったホットサンド×4があった。

カズマが黒ウサギの視線を意に介さず食べているように、耀もチーズを一口、二口と

食べていく。

そこで、耀は物欲しそうに見ている飛鳥とアーシャに気づき、

「—— 匂う？」

「匂う!!」

「匂う!!? 匂ううって聞かれた!?そこは普通、『食べる?』って聞くはずなのに『匂う?』って聞いたよコイツ!!」

「うん。だって、もう食べちゃったし」

「しかも空っぽ!!」

「残り香かよ!!どんなシユールプレイ望んでるのお前!」

「こうなったら、仕方ないわ!カズマ君、そのホットサンドを寄越しなさい!!」

「そんなにいっぱい持つてるんだから一つくらいくれてもバチは当たらないぜ!てか、マジでそれ一つくれ!いや、ください!!!」

「と耀がダメだと分かると、すぐにカズマの方にターゲットマーカ―が動いた。」

「カズマはモグモグとホットサンドを食われたまま逃走。」

「待ちなさい!!」

「待ちやがれ!」

その後を追いかけて行く二人。

それを見ながらジャックは頭を抱えて笑った。

「ヤホホホ！ いやまったく、春日部嬢もカズマさんも面白いですなあ。賑やかな同士をお持ちで羨ましい限りですよ、ジンⅡラツセル殿」

「カズマさんは賑やかな人ではないですがね。でも、賑やかさでは『ウィル・オ・ウィスプ』の方が上だと思います」

「ヤホホホ！ いやまったく恐れ入ります！」

どの集団よりも賑やかな一同であつた。

◇◇◇

『アンダーウッド』 収穫祭本陣営。貴賓室

受付を済ませ通された貴賓室は大樹の中心にあり、窓から覗くと網目状の根に覆われた『アンダーウッド』の地下都市が見える。

ドラゴン・コングライフの龍角を持つ鷲獅子の議長、つまり今回の『主催者』は『一本角』の旗が飾られた席に座り、こちらにも座るように促した。

「では自己紹介をさせてもらおうか。私は『一本角』の頭首を務めるサラⅡドルトレイク。名前から分かるように元『サラマンドラ』の一員でもある」

「じゃあ、地下都市にある水晶の水路は、」

「もちろん私が作った。しかし勘違いしてくるな。あの水晶や『アンダーウッド』で使われている技術は、私が独自に生み出したもの。盗み出したようなことを言うのは止めてくれ」

ホツと胸を撫で下ろすジン。それが気がかりだったのだろう。

「それでは、両コミュニティの代表者にも自己紹介を求めたいのだが、ジャック。彼女はやはり来てないのか？」

「はい。ウイラは滅多なことでは領地から離れないので。まあ、しかし彼が来ることが分かっていたら別でしたがね」

「彼」

ジャックの視線のを辿るとそこには、無表情で無機質な不動のカズマがいた。

他の『ノーネーム』メンバーもカズマを見るが何もわからなかった。なら、初対面のサラは言わずもがな。

「。そうか、それは残念だな。でも、暁の彼女もいないようだが」

「ああ、彼女でしたらご心配なく。少々、寄り道してから来るそうですので後で合流しますよ。しかし、こちら空振りのようですがね」

「空振り」

「ヤホホホ、こちらの話です」

再びカズマに視線を向けていたジャックはそう笑いはぐらかしたのだった。

◇◇◇

「ノーネーム」農園の小道にある休憩所となる予定の場所

ジンたちが「主催者」と挨拶をしている頃、十六夜の昔話は一段落していた。

「——と、まあこんな感じか？それで、話を聞いた感想を聞かせてもらおうか？」

「ん、そうだね。十六夜君のお義母さんは随分と面白い人だったことが印象に残ったね。正直、ちよつと羨ましいね、色々。それにしても、シヨタの十六夜君か。きつと今と違って可愛かったんだらうなwwww」

「当然だろ、何て言つたて俺だからな！つーか、お前シヨタの範囲広くねえか？」

「そんなこと言つたら十六夜君もでしょ。レテイシアちゃんつてどう見ても外見12、3歳くらいなのにロリつてどうなのよ」

「私はそういうのは、個人によつて違うと思うぞ」

このレテイシアのこの言葉には二人とも同意見であった。

コーキは、ミルクティーをスプーンでぐるぐるとかき混ぜながらニヤツと笑った。

「でもさ、仮に十六夜君定義でレテイシアちゃんとカズマが付き合い始めたらカズマつてロリコンだよな？wwwwww」

「カズマはロリコン!？」

「真に受けるなレティシア。でも、あの無表情&クールでロリコンってマジおもしろいな。一生そのネタで弄れる自信あるわ、俺wwwwww」

「あはっはっは！だよね。もしもさ、もしもだよ？もしも、カズマが本当にロリコンだったらレティシアちゃんはと思う？軽蔑する？気持ち悪いって思う？嫌いになつたりする？」

「いや、軽蔑とかはしないで。そういうのは十人十色という言葉があるからな。でも、カズマが私を好いてくれるなら例えロリコンでも構わないかな」

レティシアは少し頬を赤く染めながらそう言った。

この答えにコーキと十六夜は顔を見合わせ、

「ねえ、十六夜君。僕、何かすごくカズマを殴りたくなつたよ」

「奇遇だな。俺もだぜ」

「待て、二人共！何故カズマが殴られなければならないんだ!？」

「何かムカついたから!」

「最低だな!!」

「と、まあ冗談として」

「本当か」

とジト目で二人を見るレティシア。

「ホントホント。で、僕思うんだけど次のデートで勝負したら？」

「なっ！しょ、勝負つてつまりお前はこ、告白しろって言っているのかコーキ!??!」

「いや、だつてき。カズマのここと超×2好きなんでしょ？」

「ま、まあそれはそうなんだが。でも、カズマは私のことどう思っているかわからないし・恥ずかしいし」

「あ、そこは大丈夫。カズマは、レティシアちゃんのことどうとも思っていないから（笑）」
そう言った瞬間レティシアは膝を抱えてうつぶむいてブツブツと負の言葉を言い始めた。

「そこで落ち込まないで!!!大丈夫だからどうとも思っていないって言うのは、嫌いではないって言ったかっただけです！」

「まあ、あれだ。コーキが言いたいのは、嫌いじゃないから告つても断わられる理由がないし、一回そういうのをはつきりさせてモノにしろってことだ。別に両思いじゃないと彼カノ関係になれないわけじゃないしな」

その言葉にコーキは全力で肯定してレティシアを励ましているのを見ると、こちらに歩いてくる女性が一人。

女性、厳密に言えばまだ少女の部類だろう。だが、しかし少女の雪のように白い肌や整った顔立ちを見ると女性といったの方が似合う。

「おいおい、お前誰だ？何勝手に他所のコミュニティの敷地に入っているんだ？」
 「ん。ああ、すまない。本抛の館に言ったら君たちが農園の方にいると狐の子が言っていたので入らせてもらった」

「どうやら不法侵入というわけではなく、十六夜たちに会いに来た客だったみたいだ。」

「これは失礼した。丁度、紅茶とかもあるし立ち話もなんだ座つてはな——」
 そうぜ、と続けようとした時、ガタツと大きな音がした。

見ると来客に今気づいたんだろうコーキが、まるで幽霊でも見たような顔をして少女を見ていた。

隣のレティシアも初めてみるコーキの表情に何事かと少女とコーキの間を視線が行ったり来たりする。

先に言葉を発したのは少女の方だった。

「久しぶりだな、コーキ。お前の活躍は、私の耳にも届いているぞ」
 と微笑みながら言う。

それに対しコーキは、『ありえない』や『そんなことは絶対に』『でも、間違いない』
 といったことをブツブツと呟くと、

「何で何でここににいるの!?お姉ちゃん」

信じられないと言った口調でそう言ったのだった。

第5話 強襲の巨人

「ノーネーム」農園の小道にある休憩所になる予定の場所

「それにしても驚いたぜ！まさか、来客したのがコーキの姉だなんてな」

「十六夜君、君わざと言ってるよね？解つてて言ってるよね？この人はカズマの姉ちゃん。レーネ・K・エノモトだよ」

その言葉に十六夜は笑い、レティシアは「えっ!?カズマの・お姉様？」と素で驚いた。そして本人であるカズマの姉は、飲んでいた紅茶をソーサーに置くと、

「はじめまして。私の名前は、レーネ・K・エノモト。さつきコーキが言つた通りカズマの姉だ。よろしく頼むよ」

そう自己紹介をしたレーネをレティシアはじつと見る。

雪のように白い肌、綺麗な黒髪そして赤い瞳。そして、顔立ちや冷静そうな雰囲気はやっぱりカズマに似ている。いや、カズマが似ているのだろう。違うところは、せいぜい瞳に光があるかないかだ。

「それで、こっちが僕たち「ノーネーム」最強の逆廻十六夜君」

「逆廻十六夜様だぜ！よろしくな、レーネ。それにしても本当にカズマに似ているな。」

あいつ、髪伸ばしたら双子みたいになるんじゃないか

「どうだろうな。私とカズマとでは、身長が違うからな。それにしてもいきなり、呼び捨てかい十六夜君？」

「別に気にしないだろう？」

「まあね。君の話はよく聞いてるよ、ジャックから。なんでも、神格保有者を素手で倒したとかなんとか」

「ジャック？ 姉ちゃんって今どこのコミュニティに所属してるの？」

「ん、ああ言い忘れていた。今は『ウィス・オ・ウィスプ』所属している。火龍誕生祭の時は、ジャックとアーシャが世話になったそうだな。コミュニティの一員として礼を言わしてもらおう。ありがとう」

と頭を下げる。

「うーん、何か姉ちゃんに頭下げられるって変な感じ。まっ、いいや。ほい、こちらが純血の吸血鬼でメイドのレティシアードラクレアちゃん」

「は、はじめまして、レ、レティシアードラクレアと言います。おみ、お見知りおきを！」

「よろしく、レティシア君。ところで、コーキ。彼女はなぜすごく緊張しているんだ？」
「えーと、そのレティシアちゃんにも色々事情があるんだよ」

「そうか。私が原因というわけじゃないのだな。良かった」

（いや、本当は姉ちゃんだから超緊張してるんだけどね。それにしてもレティシアちゃんも気が早いな〜）

といつもの笑顔の裏でそう思った。

なお、本人のレティシアは囁んだこととかで絶賛赤面中である。

「そういえば、カズマってそっちの本拠でバイトしていたよね。つまり、姉ちゃんがいること知ってたってことだよな？全然教えてくれなかつたんだけど」

「いや、あいつは知らないぞ。私は、火龍誕生祭の少し前からウイラの代理として西側にいたからな。こっちにも本拠に帰らず、直接来たんだ。それにジャツクの奴、実際に行けばサプライズになるとかでカズマに私のこと話していない」

「ヤハハハ。あのカボチャらしいな、オイ」

「それで、カズマはどこにいる？あと、コミュニケーションのリーダーの確か・ジン・ラッセル君も、挨拶をしておきたいのだが。実も言うとあまり時間がないのだ。この後、ジャツクたちと『アンダーウッド』で合流する約束になっているんだ」

「ああ、ええと、せっかく寄ってもらった姉ちゃんには悪いけど、カズマもジン君も今その『アンダーウッド』にいるよ。ついでに他にも久遠飛鳥ちゃんと春日部耀ちゃん、そして『箱庭の貴族』の黒ウサギちゃんも」

そうコーキは、申し訳なさそうに言ったのだった。

◇◇◇

“アンダーウツドの地下都市”カズマ・N・エノモトの個室

とりあえず、一時解散となったので割り振られていた個室に入ったカズマはさっさと荷物を置き、帯刀していた刀を壁に立て掛けると水樹の根を掘り出して藁葺きのように敷き詰めたベットに倒れこんだ。

なお、もちろん直接ではなくシーツの上にある。

そして、瞳を閉じると“主催者”^{ホスト}への挨拶が終わった後のことを振り返った。

“主催者”への挨拶が終わった後、厳密に言えば終わる直前に『対黒ウサギ型プラント・ブラック★ラビットイーター（イーターの意味がR-18方面）』が発注されていたことが解り、黒ウサギに引つ張られる形で地下都市の最下層・展示保管庫に移動。

それを雷撃の槍で貫いた後は、主に女性陣につれ回される形で出店巡りをした。

そして先ほど宿に帰ってき、一時解散となった。

こう振り返ると、やはり白夜又はあの時焼き殺しておくべきだったなと思うカズマであった。

それにしても、カズマは暇だった。

いつもなら夕食の準備をしなければならないし、こんな風に寝ていたらレティシアが

起こしに来るのだがそんな必要も呼びにくる者もない。

なら、錬金術師らしく研究をすれば良いと思うかもしれないがこちらに来て国家錬金術師になるといふ何となくでもあった目標がなくなってしまう。ついでに言えば、この前箱庭に来てからの研究したかったことはもう研究し終わった。

その成果である自分の刀、いや剣を見る。

前までは、刀と呼んで問題のなかったが今では西洋の直剣と東洋の刀が9：1とほとんど片刃のちよつと反つた剣だ。

刀身は前よりも広くなり、刃の色も黒と赤。柄も白から紫へと変わっている。他にも恩恵付与により前の刀よりも切れ味も強度も段違いに上がっている。

この新しい剣を制作するためにカズマは「ウィル・オ・ウィスプ」に行っていたのだ。本当だったら場所などの貸し出しに對する対価がハーミットとしての仕事だったのだが、滞在中に変態ストーカー魔王に襲われたり家事をしたりしていたらいつの間にかチャラになった上に逆にお礼という名のバイト代が貰えることになっていた。

世の中不思議である。

さて、何はともあれ現在が暇なのに変わりはない。

ので、何かしようと思わず自分の行動パターンに従いカズマは眠ることにしたのだ。た。

まあ、そう長くは寝ていられなかったのだがね。

何故かって？

巨人の進撃が始まったからだ。

パチリ、カズマはまるで機械のように目を覚ました。

脳内は寝起きの低血圧ではなく、クリア。システムオールグリーンである。

素早く起き上がり、ランプの近くに置いておいたギフトカードを回収。

——地震のような激震が響き渡る。

立て掛けてある剣を手を持ったその時、宿舍の壁をブチ破って巨大な腕が現れた。

その瞬間には、抜剣。腕に向かって走り出していった。

「アクセラレイト
加速」

一瞬で腕を駆け登り、巨人の頭よりも高く跳び上がった。

そこでようやく加速する意識の中、カズマは巨人の全体を把握することが出来た。

全長約9m、片手に長刀を持っており、顔に仮面を付けていた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——！！！」

頭を振り猛々しい声を上げ、長刀を宿舍に振り下ろそうとする巨人。

その巨人にカズマは車輪のように高速回転し、巨人の仮面を肉を骨を内臓を斬り裂い

た。

ぼとぼとと内臓を溢しながら倒れる巨人の返り血を大量に浴びながらカズマは冷静に分析する。

先ほどの斬撃は仮面ごと頭をカチ割るつもりで行ったのだが、結果は斬り裂くことしか出来ず身体まで斬ってしまった。

巨人を殺すには、ちよつと軽すぎる。

そこで巨人が壊した瓦礫に剣を軽く刺し、錬成。

鏢にあたる部分に刻まれた錬成陣が光り、稲妻がいくつも走る。瓦礫は分解され、剣の一部として再構築された。

そして錬成された剣は長さ2 m幅30 cm、片刃の対巨人用の大剣と化していた。

もはや、人の扱える代物ではない。

しかし、それをカズマは片手で何度か振ると肩に担いだ。

「カズマさん、大丈夫ですか!？」

とこちらに走って来たのは黒ウサギだ。

「問題ない」

「そうですかあ。『ノーネーム』が全員無事で黒ウサギは一安心です♪って、安心して
いる場合じゃありませんでしたね!!カズマさん、これは魔王の残党による襲撃です!」

「巨人のことか？」

「YES！すぐに地表に向かつて、耀さんと飛鳥さんと合流してください！黒ウサギも都市内の巨人を倒したらすぐに向かいますので!!」

「巨人なら駆逐した、ほら」

と指した後ろには足や手などがなかったり、腹を斬り裂かれ内臓が飛び出した死体が大量にあった。

「ギャー——!!!何ですか、このグロテスクな状況はつ!!!」

「えっ、どこが？」

そう言いもう一度倒した巨人の死体の山見る。

頭がカチ割れ、シワのよった脳が見えている死体。

身体の肉が削がれ白い骨が所々見えている死体。

目の下から頬のあたりまで斬り裂かれて目玉が垂れ下がっている死体。

腹部を斬り裂かれ、腸が水路に垂れ下がり綺麗なピンク色の死体。

飛び出した内臓が脈を打っている死体。

カズマには、どこがグロテスクなのか分からなかった。

「とにかく、出るぞで」

「え、ちよ、カズマさん！説明して下さい——!!!」

カズマは今だに説明を求める黒ウサギを抱き抱えると加速し、壁を垂直に登って地表へと出たのだった。

◇◇◇

地下都市から出ると、そこは乱戦状態だった。

「これは、酷い状況ですね。数では『アンダーウッド』皆様が有利ですが、こうも混乱
しては、」

「どうする、二手に別れるか？」

「そうですね。黒ウサギは、サラ様の所に参りますのでカズマさんは耀さんたちの所へ
！」

「了解」

返事し、黒ウサギを下ろすとカズマは屋根の上を駆け出した。

屋根から屋根へと飛び移りながら飛鳥と耀を捜していると、

「ウオオオオオオオ——！」

進行方向に二体と

「殺れ！相手はただ図体の大きいだけだぞ!!」

「そんなことは、分かっただよ！」

「灯りを消せ！奴らは夜目が効かない！」

「待て！ “二翼”には夜目の効かない奴らがいる！」

「構ってられるかっ！このままじゃ、叩き潰されて終わりだぞ!!」

“アンダーウッド”の烏合の衆。本来なら連携のとれるはずなのだろうが、実際に強襲をされてこのザマではただのクズだ。

助ける、何て一瞬も考えなかったが邪魔だったので排除することにした。

「加速」
アクセラレート

加速したカズマはダンツと屋根から跳び、虫のように集っている獣人たちの間を抜け片手で無造作に大剣を振るった。

それだけで左腕が切断され、左腹部が斬り裂かれた。

そんなことに目もくれず、瞬時に反対の建物の壁を蹴りもう一体の方へと接近。

両手で持ち、横に一闪。カズマが着地したときには首が左腕が落ちて巨人は二体共絶命した。

そして、再び肩に大剣を担ぐと突然の出来事に呆けている獣人に構わず走り去った。

「何だったんだ、今の。」

「俺の目でも黒い何か動いたことしかわかんなかったぜ。」

「あんなのが何でこんな下層にいるんだよ!?!」

さて、そんな事を言われているカズマの視界に巨人と戦う紅い鉄人形が入った。

状態は良くない。幾重もの鎖が巻き付いていてデイーンの動きを鈍らしている。つまり、主である飛鳥が危険と言うことだ。

瞬時にそれを理解し、そちらに向かおうしたが急に濃霧が視界を覆い始める。

あきらかに敵の何らかのギフトによる妨害だった。

「チツ、〃加速〃」

カズマは覆う前に見たのを参考に加速し高速で走り抜ける。

そして、デイーンを囲んでいる端の巨人の背中に肩に担いだ大剣で斜めに全力で振り下ろした。

ズシャと斬り裂きながらその大剣による遠心力で飛び上がり、巨人の包囲のど真ん中へと着地をする。

それと、同時に大剣を地面に突き刺した。

ここまでの時間、0.5秒。

そののさらに0.5秒後には濃霧の中で蒼い閃光が瞬いた。

◇◇◇

飛鳥は突然の閃光に目を閉じていたが、ようやく目を開くことが出来るようになった。

そして目にしたのは



地中から生えた岩の槍に貫かれ、身体中をズタズタに斬り裂かれた巨人の屍だった。

その光景に口を開きかけ、

「飛鳥！」

「か、春日部さん、きゃつ！」

耀に抱きつかれた。

耀方面で言えば、飛鳥を助けようとしていた耀は無事な彼女を見て思わず飛び込んでしまったのだ。

「よかった。でもあの状況で無傷なんて、やっぱり飛鳥は凄い。」

「当然よ」と言いたいところだけど、私が倒したわけじゃないのよ」

「え？」

「。周りを見ればわかるわ」

飛鳥の声に促され周りを見る耀。

そして彼女が言った言葉は、飛鳥もこの光景を見て言おうとしていた言葉だった。

「嘘、」

飛鳥も初めその光景を見て驚いた。突然の閃光で視界が奪われ、回復するまで数十分。

その間に巨人が皆殺しにされたのだ。正直信じられない、飛鳥は自分の目を疑ったほ

どだ。

でも、それが可能な人を飛鳥は知っている。

が、二人もは知らない。

巨人は二通りの殺害方法で死んでいた。

もしかしたら十六夜なら出来るかもしれないが彼ではないと直感でそう思った。

一つ目は、身体の一部が切断して、いたりズタズタに斬り裂かれていたりしていた。

二つ目は、頭・首・心臓を的確に突き裂かれていた。

「まさか・全ての巨人族を、でも、。」

その事実を把握した耀は、息を呑んだ。

「——けだ、フェイス」

「久しぶりですね、カズマ。貴方が声を掛けるとは、珍しい」

「別に、どうでもよかったが巨人を殺すのを手伝ってくれたんだ。礼を言う」

「お気にせず。これが私の務めですから」

そんな会話が聞こえたのは、デインの目の前からだった。

そこには、普通の人間では扱えないような大剣を肩に担いだカズマと純白の綺麗な髪を頭上で纏め、白いドレススカートと白銀の鎧に身を包み白黒の舞踏仮面を身に付けた女性が立っていた。

二人の共通点は、余す事なく巨人族の返り血に染まっていることだ。耀もその二人を唾然と見ていた。格が違う、そう認めるしかなかった。

第6話 人体錬成

とある空に浮かぶ古城

「暇。すつごく暇過ぎるんだけどー。てか、何で地上に下りたらダメなの？超面白いものが見れるっていうのに。」

「そう言いエンヴィーは、真っ黒い粒子で出来たソファで起き上がった。」

「仕方ないだろ。ダメなものはダメなんだからさ。暇なら、俺とチェスしようぜ！」

携帯型のチェス版を片手に鏡磨が誘う。

「えー、別にいいけどさー。今からまたアウラが奇襲かけるんでしょ。それ見に行きたいんだけど。」

「ダメだぞ。そんなに見たいのか？」

「そりやもう、あのいつも偉そうにしている幻獣のバカどもが奇襲されて面白い程混乱して全然機能しないんだ！そして、烏合の衆となり果てたアイツらは敗残兵で混血の超低級の巨人族に無様に潰される！こんな屈辱の死を前にしたプライド高い幻獣どもはいったいどんな顔をするか。ああ、想像するだけで唾える!!」

「熱弁ご苦労。お前、ホント性格曲がっているな」

「他人の不幸は蜜の味ってね♪」

笑いながらエンヴィーはチエスの駒を並べていく。

ここで今まで黙って本を読んでいた三人目が口を開いた。

「あなたの場合そんな可愛いものではないでしょう、腹黒エンヴィー」

「何？喧嘩売ってんの、おチビな白^{あきら}？」

「いえ、そう言うわけではないですよ。ただ、事実を言っただけです」

そう言うのは、黒い粒子で出来た一人用のソファアに座った銀髪碧眼の少女だ。

「やっぱ喧嘩売ってんじゃない。今ならこのエンヴィー様が高く買ってあげてもいいけど？」

「おいおいおい、喧嘩は止めてくれよ。殿下とリンに怒られるんだから」

「いや、本気にしないで鏡磨。ただの言葉遊びだよ」

白は、タメ口で言うのと再びエンヴィー方を向き、

「でも、エンヴィーあなたはトロイヤ作戦が終了する頃には地上に下りるでしょう。その後の方が多くの血が流れてあなた好みだと思いますけど。それでは、ダメなのですか？」

「分かってないねー、白。超低級の巨人だからいいんだよ、超低級だから。分身体とはいえ最強種である龍の一部。幻獣が勝てないのが当たり前。それじゃ、面白くない。絶対

勝てる雑魚に殺されるから良いんだよ」

「そう言うものですかね」

白は興味なさそうにそう言うと、再び本へと視線を落としたのだった。

◇◇

“アンダーウッド” 収穫本陣

巨人殲滅後、カズマはそこにいた。

他にも、ジンに黒ウサギ、ジャックやアーシャもいる。

彼らは今回の襲撃について “主催者” に説明を求めていた。

さて、ぶちやけさせてもらえばカズマはこの会話に参加していない。

というわけで、何時ものようにまとめさせてもらう。

- 1, 今回攻撃してきた巨人族は十年前に襲撃してきた魔王の残党である。
- 2, 第三者が干渉している可能性有り。
- 3, 残党の狙いは、視るだけで死の恩恵を与える “バロールの死眼”。
- 4, “黒死斑の魔王” と同時期現れた魔王に討たれ南の “階層支配者” は現在不在である。

5, 今回こ収穫祭は、 “龍角を持つ鷲獅子” の五桁昇格と “階層支配者” の任命賭けたゲームである。

6、力を貸してくれた上に、多くの武功を立てたどちらかのコミュニティに報酬として「バロールの死眼」を与える。

大体こんな感じである。

あと、ちよつとした会話も記しておこう。

「なあ、カズマ。あんた何時までその格好してるんだ？」

黒ウサギたちとサラが会話をしている間、暇なアーシャが話しかけてきた。

「何のこと？」

「その血まみれの格好のことだよ。血が乾いてきてちよつとグロい感じになってんぞ。どうせ、ここに居ても暇なら風呂に入ってきた方が良くないじゃねーか？」

アーシャに言われ手を見てみると、確かに赤黒く乾いていて動かす度にヒビが入る。

「ああ、それとその大剣そろそろ元に戻したら？もう、巨人族はフェイスとあんたが全部倒したんだし」

何気にもう馴れて違和感を感じていなかったが、ずっと大剣を担いだままだった。

軽くバジツと稲妻が走ると、まるで装甲が取れるようにして中から元の大きさの剣が現れた。

剣を鞘に戻し、周りに落ちている金属パーツを集めアーシャを見ながら、

「いる？」

「処理するのが面倒だから私に押し付けようとしてないか？」

とジト目で見返される。

「そんなことはない」

「今の間は何だ！今の間！」

「別に」

カズマは何時もの無表情でそう返す。

「で、いるのいないの？」

「貰うよ。ただで材料貰うようなもんだしな。ああ、でも運ぶなら別のに錬成してくれ」

「何がいい？」

「ハンマー」

「了解」

そして、錬成したハンマーを渡した。

「あれ？このデザイン、ウイラ姐のと同じじゃね？」

「嫌？」

「そう言うわけじゃないけど」

「そう」

カズマはそう言うと、部屋を出ていった。

アーシヤは、カズマにもらったハンマーを両手に持ちながら、
(ウイラ姐、こんな大ききくても喜んでくれるかな?)
と考えていた。

◇◇◇

“アンダーウッド”浴室

カズマが血を洗い流し、浴槽に浸かっていると揺れを感じた。

(地震?)

一瞬そう考えたが、よく耳を澄ますと“アンダーウッド”内が何やら騒がしい。

そこからのことと先ほどのことを照らし合わせれば答えは一つである。

浴槽から立ち上がろうとしてフェイス・レスがいることを思い出した。

カズマとしては、参加しなくていいならしたくないのだが、そうもいかない。

カズマは浴槽を出て、入る前に血液分解しといった服を手早く着る。

そして、剣を装備すると窓から斜め上に飛び出した。

そのまま木の表面を走りある程度登ると、剣を突き刺す。

地表358mから見た“アンダーウッド”は予想通りだった。

あつちこつちから巨人に攻められて住民たちは悲鳴の大合唱。

巨人の数は軽く500は越えている。

それに対し先ほどの巨人族の強襲により戦闘担当の幻獣たちの中で現在戦闘行動出来るは、ほんの僅か。

しかし、数の暴力で攻め込まれているのではない。

現に攻撃を受けてないのに次々と倒れていく。

——ロン

微かに琴線を弾く音が聞こえた。

カズマはその音に耳を澄ませようとして危うく落ちかけた。

物理的にも精神的にも。

カズマは柄を強く握りながら状況の整理をし、理解した。

一番やつかいなのは、先ほど意識を持つていかれそうになった琴線を弾く音だ。

さつき、見つけたのだがフェイスと豎琴を持ったローブを纏った何者かが闘っていた。

多分、フェイスもこの豎琴の音色に邪魔をされ攻めあぐねているのだろう。

もしかしたら、近いほど効果が強くなるのかもしれない。

それはともかく、勝利条件は解った。

カズマは水樹から剣を抜くと、戦場へと飛び降りた。

その時、何処からかポツリポツリと雨音が近づいていたのだった。

◇◇◇

“アンダーウッド”西の森

戦場、といか“アンダーウッド”全域の天気が急に崩れた。

雨は横殴りに降り、風は建物を吹き飛ばしそうなくらい強い。まさに暴風雨^{スコール}。

僅かに残っている幻獣たちは、一歩間違えば自分が吹き飛ばされてしまいそうになっている。

そんな中でも巨人たちの進撃は止まらない。

現在、どうにか前線を支えているのはフェイス・レス一人。

竖琴を持った人物は逃走し、姿を消したが音色は消えなかった。

そして、カズマはあきらかに他の巨人とは違うリーダー格の巨人と闘っていた。

そのリーダー格の巨人は体長15mと大きく、燃えていたのだ。厳密に言うと身体中を炎で包まれている。

そして、周りには衛星のように右回転の竜巻と左回転の竜巻が交互に4つ回っていた。

カズマはその竜巻と竜巻の間を力技で侵入し、対巨人用に錬成した大剣で腕を切り落とそうとした。

が、身体は他の巨人よりも大きいのに他の巨人よりも素早く腕を動かしてこれを回避。

そして、そのまま腕を振りかぶり、じゅわと雨を一瞬で水蒸気に変える炎の拳を突き出した。

カズマは木の幹に着地と同時に蹴り、全力で跳躍して何とか避ける。

そこにさらに追い討ちで、雷がいくつも落ちてくる。

激しい閃光に視界がホワイトアウトした同時にすぐ後ろから爆発音のような音。

まるでスタングレネードが炸裂したみたいだ。

カズマはどうかか地面に着地をすると、すぐに走り出す。

その中で、あの巨人について考える。

さっきの雷はあきらかにカズマを狙って落ちてきた。

つまり、天候を操る類いのギフトを所持していてこの暴風雨も竜巻もそれが原因である。

ズドンという足音と水が蒸発するじゅと立てて業火の巨人がカズマを追ってくる。

カズマはそれと同時に反転、一瞬で距離を詰め右足に向けて大剣を振り切断。

その勢いを利用して左足も切断。

「コオオオオオオオオオオ!!!」

ズドオオンと巨人は倒れるが、腕を使い上半身を起き上がらせる。

そして、片方の手でカズマを潰さんと叩き突けてくる。

その間に切断された両足が火の粉に分解され、それが再び巨人の足を再構築する。

足が完全に修復されると立ち上がり今度は踏み潰そうとその巨体から信じられない速さでカズマを狙う。

実はこれと似たやりとりはもう18回目だ。

腕も足も切断しても、切断された方が分解され再び再構築する。

身体を切り裂いてもすぐに傷口自体が塞がる。

さらに一度、切断した足や腕の断面を見たがそこには肉体は存在しなかった。

ただ炎が集まって燃えていたのだ。

そう、カズマが相手をしているこの巨人は炎を纏っているのではなく、炎その物が質量を持ち巨人の形をして動いているのだ。

そんな生物を知らないし、カズマの知っている限り神話、グリム童話等にも存在しない。

つまり、カズマには殺せないと言うことだ。

でも、カズマは考える。いくら箱庭といえど、どんな不思議な現象だろうと生物だろうと絶対にロジックがある。

それを見つげるためにまだ斬ったことがない首を狙うが俊敏な動きで避けられてしまふ。

余程斬られたくないらしい。

ここでカズマは勝負に出ることにした。

ダンツと踏み込んだ瞬間、加速している状態から更に加速する。

そして、炎そのものの巨人の足を螺旋を描きながら登る。

靴底のゴムが溶けるよりも速く。身体が燃えるよりも速く。熱が伝わるよりも速く。

刹那の間に妨害されないように両腕を肩から切断。

雷がいくつも落ちようとするが、もう遅い。カズマが腕を振るう方が速かった。

速かった。速かった。速かった。はずだった。

ポロン、ポロン、ポロロン♪

豎琴の音がした。耳元で。

綺麗な音色だった。綺麗過ぎて意識が持っていかれそうなくらい。

そして、豎琴を持ったローブを着た何者かが笑った。

ズドオオオオン。カズマに雷が直撃した。

「ガハッ」

落ちかかっていた意識が無理やり起こされる。

そして、視界に入ったのは空中に投げ出されたカズマを地面に叩きつけようと迫る巨大な炎の手。

(マズッ)

防御しようとするが身体が麻痺をして動かない。

さらに雷に打たれた時に手を放してしまったのだろう、大剣もない。

そして、ここは空中。走る地面もなければ、盾を錬成する材料もない。

ボゴン、そんな音と共にカズマは地面に叩きつけられクレーターの中心となった。

痛い。熱い。カズマが受け取ったのはそんな身体の危険を知らせる信号だった。

視界は半分がブラックアウト。嗅覚は生物が焼ける臭いを捉えていた。

相変わらずの暴風雨。火傷している身体を冷やすのには良いがちよつと強すぎる。

半分しかない視界の端には、左腕を再構築している業火の巨人姿がある。

片方だけを集中して修復する。そんな芸当も彼(彼女?)は出来たらしい。

右腕を引き絞り、拳が構えられる。

どうやら、生きているのがバレてしまったようだ。

逃げる。そんな選択肢はない。

身体中の骨という骨が折れ、砕けている。内臓もいくつかが破裂していた。

死ぬ。これは決定事項だった。

でも、カズマは恐怖を感じない。別に悔いがないとかそういうわけでのことではなく。

とにかく、終演は終焉。人生という舞台に幕を下ろす時間だ。

そして、燃え盛る巨大な炎の拳が振り下ろされ、クレーターをより深くする衝撃とじゅわと何かが焼ける音がした。

業火の巨人が操る竜巻の防壁内

暴風が吹き荒れ、雨が叩きつけるように降っていたがここまでの出来事の一部始終を見ていたエンヴィーは、

「あは！あははははははははは！！あはっはっはっは！あー、お腹痛いwwwwww」

笑っていた。心底楽しそうに腹を抱えて嗤っていた。

「いや、まさか・失敗しても良かったのに。カミサマなんて自分で言つといてこのザマって、ホント嗤えるwwwwww」

そんなことを言いながらエンヴィーが一頻り笑い終わる頃には、先ほどまでの暴風雨が嘘のように消え綺麗な星空が見えていた。

エンヴィーは、ようやく二度目の巨人族の襲撃を退けた“アンダーウッド”を見なが

らこう言った。

「ゼーんぶ、計算通り♥？」

R e : b r e a k

“管理人さん”さんが入室しました。

管理人さん：おっ久々！みんな元気してた？管理さんだよん！

管理人さん：って、誰もいないか。せつかく、アップデートして使える新機能を教えに来たのに

管理人さん：うーん、でもおかしいな。この時間帯はいつもみんな揃って雑談しているのにな

管理人さん：まー、でも当然かな。正直、逆にこの時間にチャットしていたら“アンダーウッド”に行っていないってことだもんね

管理人さん：それにしても、キアラもトーマもカノの真由美もそろって運がないな

管理人さん：せつかくの収穫祭なのに“魔王ドラキュラ”の襲来で台無しだよ

管理人さん：あ、でも別にレティシアのことを悪く言っているわけじゃないんだよ。レティシアはカズマのことが大好きな可愛い女の子だもんね

管理人さん：かといつて、あれは殿下たちが悪いとも一概に言えないんだよ

管理人さん：ところでさ。さっきからこのチャットルームを覗いているのってだ

れーかーなあ？

管理人さん：なーんて嘘ウソ々ww。分かってるって読者のみんながこれを見ているのは当たり前だよ

管理人さん：物体とかってのは他者により観測することで存在していると証明されるものって言うからね

管理人さん：さっきから何コイツ一人ごと言ってるんだ？って思っている人もいるだろうから軽く自己紹介をしよう

管理人さん：では、改めまして、僕のチャットアプリのご使用ありがとうございます

管理人さん：アカ名から分かるように僕は、このチャットアプリの開発者であり管理人さんだよ！

管理人さん：自己紹介になってねえし！って思った人。その認識は正解だよwwww
管理人さん：いやいや、最近LINEとかTwitterとか見ると普通にリアル情報が閲覧出来るんだけど、そういう人って僕はバカだと思っただよ（有名人以外のんだよ）

管理人さん：おっと、話がどうでもいい方にそれかけたね。ともかく、僕は現実と
仮想はしっかり別ける派なんだよ。ゴメンね

管理人さん：だから、僕のことは不思議な管理人さんとも思ってくれればいいよ
 管理人さん：きてきて、この世界のカズマはどうやら死ぬ運命みたいだね。ちよつと、
 可哀想

管理人さん：でも、それは仕方のないことだね。世界っていうのは残酷なものだし、運命っていうのも残酷なものだ

管理人さん：よく運命は自分の力で切り開くものっていうけど、それって本当は選択次第ってことなんだよね

管理人さん：ほら、よく後悔する時って「あの時、ああしていれば。」って思うでしょ？

管理人さん：それはつまり、その時別の選択した未来が存在するっていうこと

管理人さん：世界樹って知ってる？北歐神話の奴じゃないよ

管理人さん：世界を樹の枝に見立てて、無限に枝分かれしていくさまのことだよ

管理人さん：要するに、カズマが死んだのは自分の選択ミス。自業自得ってこと

管理人さん：もちろん、カズマが死なない未来もあればそもそも錬金術師じゃないカズマもあるよ

管理人さん：例えば、一人称が「僕」で天然系の優しい感じで、弄り過ぎるすぐと泣いちゃうカズマ

管理人さん：ちなみに何故か年上にモテるよ！

管理人さん：艦娘と呼ばれる武装少女たちがいる世界では、工場で工員として働いていたね

管理人さん：何気にコーキとかアーシャとか十六夜も働いているよ

管理人さん：僕としては、工場長がジャック・オー・ランタンなどがミソだけど

管理人さん：他にも21世紀で普通の学校生活を送っている一真。正直、僕としてはこっちの方がしっくりくるね

管理人さん：これが羨ましいことに彼女持ちのリア充なんだよな。爆発しろ

管理人さん：あ、学校生活で思い出したけど。十六夜にはどの世界でも驚かせられるね

管理人さん：一発で「魔王ルシファー」を召喚したり、史上最年少の聖天竜騎士アーキ・ドラグナーだったり、日本最強の自動人形オートマトンの使い手だったりするもんな

管理人さん：ちなみに学校に行っている世界なら何時も光輝と主席の座を争っているんだよね

管理人さん：おっと、僕としたことが間違つて漢字で名前書いてしまっているね

管理人さん：でも、まあ読めない人なんていないから問題ないよね？

管理人さん：そう言えば第三次世界大戦後、魔法が当たり前になった世界では光輝つて九高なんだよな。一真は一高なのに

管理人さん：ああ、でもそんなこと言ったら十六夜や飛鳥、耀なんてどの国立魔法大
学付属高校にもいないもんな

管理人さん：その世界の一真は、確か日常と非日常を愛している変わった一真だった
な

管理人さん：都会に憧れ、池袋の街にやって出てきて、非日常の日々に憧れていた彼
とはまた違った感じなんだよね

管理人さん：彼は、無邪気過ぎたんだよ。でも、一真は違う。世界の残酷さと闇の深
さを知っている

管理人さん：知っているからこそ、裏の工作もしながら非日常と日常を楽しんでいる
管理人さん：というか、非日常トラブルに愛されているとしか思えない友達がいるから、その
友達の周りに網を張っていれば良いだけけどね

管理人さん：あれ？ここまでペラペラ喋って来たけど、この世界とは無関係なことが
多かつた気が

管理人さん：と言うわけで、閑話休題

管理人さん：例えば、物語の主役が死んだとしよう

管理人さん：そうなった場合、物語はどうなると思う？

管理人さん：本来、主役の死は物語閉幕を意味することが多い。というか、それがほとんどだ

管理人さん：だから、主役の死＝エンドという認識は間違っではない

管理人さん：でも、それは多数決のようなもので。本当はもう一つ道があることを誰もが忘れていくことが多いんだよね

管理人さん：だから、主役の死は一つの問いかけだと僕は思っている

管理人さん：コンテニューしますか？ YES / NO

管理人さん：さながら、ゲームのような問いかけを物語の紡ぎ手にしている

管理人さん：そう、主役が死んだところで物語は終わりやしない！

管理人さん：だって代わりの主役を連れて来れば良いだけのことだから！

管理人さん：さて、ここまで言えば僕が何が言いたいか君達ならわかるはずだ

管理人さん：この物語は「YES」を選んだ世界だ。物語はまだまだ終わらない

管理人さん：ふあ、あ、うん

管理人さん：ここまで頑張っつて一人で喋ってみたけど、そろそろ疲れてきたな

管理人さん：なーんかまだ話さないといけないことがあった気がするけど、まあいい

や

管理人さん：丁度、ルームメイトがシャワー使い終わったみたいだし

管理人さん：そうだな。次、もしかた僕がこんな風に喋ることがあるのならその時は

管理人さん：零音さんや鏡磨、白の咄が良さそうだね

管理人さん：えっ？今、僕がいる世界？

管理人さん：うーん。簡単に言うと、日本の天才科学者が開発したパスワードスーツが最強兵器となっている世界かな？

管理人さん：そんなことより、ここまで僕の長い独り言を聞いてくれてありがとね

“マックス”さんが入室しました。

マックス：(表示出来ません) さーん！ただいま帰って参りました！

管理人さん：……

マックス：あれ？もしかして、ボク何かマズイことしました

管理人さん：したよ、まったく。せつかく、退室しようとしてたのに。何しに来たの？

マックス：いえいえ、丁度バトーさん達の所から帰って来たら(表示出来ません)さんがチャットで一人で喋っていたので、可哀想だなと思って来ちゃいました！

管理人さん：確かに話し相手はいないけど、見ている人がいるから可哀想じゃないし

!

マックス：あ、本当ですねぇ。30人ぐらいこのチャットルームを覗いている

管理人さん：とりあえず、僕はもう退室するから今日のログ消しといて。それじゃ！

“管理人さん”さんが退室しました。

マックス：命令は了解されました！

“マックス”さんが退室しました。

今日の履歴が削除されました。

第7話 もう一人の主人公

“アンダーウッド” 東南の平野

ヤツホー、みんな元気？

僕は元気だよ！

今は、何か襲撃されたことによりちよつと予定を早めてアンダーウッドに来ているんだ。

あ、僕以外にも十六夜君と姉ちゃん、レティシアちゃんも来てるよ。

そう言えば、カズマ知らない？

今、どこにいるか分かんないんだよね。黒ウサギちゃんも主催者と話している時に風呂入りに行ったとか何とか言っていたけど。

まあ、流石に襲撃されていてもお風呂入り続けるような人間じゃないから耀ちゃん達とは違った方向で戦っていたと思うよ。

幻獣の皆さんにカズマが前線に居なかったか聞きたかったけど、それどころじゃないからね。後から聞くことにしよう。

え？何でカズマを探しているかって？

あー、ごめんごめん。まだ黒い契約書類ギアスロールの文面を載せてなかったね。

黒い“契約書類”だから、巨人族の次は魔王が襲来したんだよ。ともかく、文面を見
てみよう。

『ギフトゲーム名 “SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMP
I R E K I N G”

・プレイヤー一覧

・獣の帯に巻かれた全ての生命体。

※但し獣の帯が消失した場合、無期限でゲームを一時中断とする。

・プレイヤー側敗北条件

・なし（死亡も敗北と認めず）

・プレイヤー側禁止事項

・なし

・プレイヤー側ペナルティ事項

・ゲームマスターと交戦した全てのプレイヤーは制限時間を設ける。

・時間制限は十日毎にリセットされ繰り返し返される。

・ペナルティは“串刺し刑”“磔刑”“焚刑”の中からランダムに選出。

・解除方法はゲームクリア及び中断された際のみ適用。

※プレイヤーの死亡は解除条件に含まれず、永続的にペナルティが課せられる。

・ホストマスター側 勝利条件

・なし

・プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスター・“魔王ドラキュラ”の殺害。

二、ゲームマスター・“レティシアIIドラクレア”の殺害。

三、砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ。

四、玉座に正された獣の帯を導に、鎖に繋がれた革命主導者の心臓を撃て。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“印”

いや、もうこの“契約書類”を読んだ時にはゲームをクリアして、レティシアちゃんを助ける白馬の王子役はカズマしかいないって思ったよ。

こんなこと言ったら本人は嫌がるだろうけど。

でも、レティシアちゃんが喜ぶなら無理矢理でもさせたいね。僕は恋するレティシア

ちゃんの味方だから。

ああ、それと十六夜君から聞いたんだけど、レティシアちゃんが拐われる時に「十三番目の太陽を撃て」って言って言ったんだって。何か、それがこのゲームをクリアする唯一の方法らしい。

十三番目の太陽って。十二ならすぐに思いつくことがあるんだけどね。ほら、みんな知ってる黄道十二星座。

でも、十三番目ってなんだろう？ 実は隠し星座があるのかなあああああ危なっ

!!!

今、逃げなかったら投げられた巨人に潰されるところだった!!

「ちよつとー十六夜君！ 君は僕を殺す気か!? もうちよつと周りに気を付けて闘つてよ！」

「ヤハハハ！ お前なら潰される前にケシ炭に出来るんじゃないやねえか？ オラツ！」

十六夜君は笑いながらも巨人をワンパンでノックアウトさせる。

相変わらずのオーバースペック。

現在僕と十六夜君は、このギフトゲームが開始されたと同時に三度の強襲をかけた巨人族と交戦中。

交戦中というか、僕にとっては射的ゲームのような一方的なことだけだね。

あ、十六夜君！そのコースはダメ！

「さつき、言ったばっかでしょうが十六夜君！今度は“アンダーウッド”に突き刺さちやつてるじゃないか！」

「おっ！ホントだ。あの大樹と比べると巨人つても小さいものだな」

「呑気な！たく、みんなに迷惑をかけちやダメでしょうが」

僕はトリガーを引く。

すると、僕が作った道に沿い紅蓮の炎が吹き荒れ巨人を焼き付くす。

全焼させるのはメンドーだから足を炭化するぐらいにして討ち取る数を優先する。

そのせいで、さつきから平野のあっちこちで火事が起きているのは秘密だよ☆

特に姉ちゃんには。バレたら殺される。

なお、その姉ちゃんは西の森でリーダト格と思われる体長約15m程の燃えている巨人と戦っている。

その巨人は二度目の強襲の時にもいたらしいけど、その時は竜巻を操っていたとか。でも、竜巻のたの字もないね。

そういうえば、燃えているって表現は正しくないね。どっちかって言うと、発しているとか纏っているとかだね。

箱庭ってあんな巨人もいるんだ。やっぱり、面白い。

でも、
・ ・ ・ ・
姉ちゃんの敵じゃない。

ほら、あの巨体が宙を舞っている。

おお、あんなに大きいと倒れる時の迫力がすごい。

ちなみに姉ちゃんは武器を使わない。

素手だよ、素手。まあ、十六夜君も素手で戦っているけどあれは例外。

姉ちゃんのギフトは「コード・アンソウ正体不明」みたいな規格外のギフト、とまではいかないけど

かなり強力なのを持っているらしい。

あ、姉ちゃんが巨人の心臓辺りを貫いた。

うーん、どうやら死んでしまったようだ。纏っていた炎が火の粉となって散っていく。

って、あれ？身体無くな？

えっ、じゃあ何？炎の集合体だったの、あの巨人？

僕は頭の中を疑問符が埋めつくし始めたので、今の思考を捨て目の前の巨人をケシ炭にすることに集中することにした。

炎の巨人については後で考えればいいからね。

ここまでの運びは予定通り。

黒ウサギちゃんが審議決議を受理させるまで、一騎当千の僕と十六夜が東南の巨人族

を倒し、西の森に巨人たちを率いて現れた炎の巨人を姉ちゃんが相手をする（可能なら討伐する）。

そして、他の巨人たちは幻獣の皆さんが戦うって感じ。

正直、噂に聞く龍の純血とバトらないといけない状況にならなくて安心している。

鱗が変化した化け物たちは、まあ、飛鳥ちゃんとか耀ちゃんとかの巻き込まれた人たちに任せよう。

ともかく、僕は僕のお仕事お仕事♪

と、行きたがったのだが炎の巨人が半分も散ってない頃、西側を攻めていた巨人族全てが一撃で真つ二つに斬り殺されたことが僕の頭に引つ掛かっていた。

◇◇◇

「いや、にしても巨人って言ってもただ大きいだけだったね」

「そうだな。でもまあ、所詮巨人ってのは字を読んだ通りに巨大な人のことを指すから。仕方ないぜ」

「でもでも、少しは面白そうなのがいちしょ？」

「まあな。でも、せっかくの獲物をお前の姉に獲られちゃったけどな」

「またまた。そんなこと言いながら、本当は姉ちゃんの実力が知りたくて形だけ抵抗して譲ったくせに」

「さーて、何のことかな？俺にはさっぱり解らないぜ」

と笑いながら言う十六夜君。

「あーでも、あの炎の巨人って何だったのかな。何かの神話とかにいるの？」

「ああ、確か北歐神話のムスペルヘイムで、炎の剣持っている炎の巨人が門番をやっていたはずだ」

「ん？でも、チラチラ見ていた感じ剣なんて使ってなかった気がするけど」

「確かに使ってなかったな。たまたま使ってなかったのか、それとも別の何かなのか。ちなみに、後者なら俺も知らねえ」

「その北歐の炎の巨人って本体があつて燃えているの？それとも、炎そのものが巨人を形作っているのかな？」

「どうだろうな。でも、俺が言うように本当にムスペルヘイムの門番ならこうも簡単に倒されねえと思うぜ。なんてったって、フレイヤの双子の兄にして豊穰神のフレイを倒しているんだからな」

「というか、本当に倒したのかも解らないんだけどねえ」

という風に、巨人族を倒し終わった僕たちはあれこれ話ながら姉ちゃんのいる西の森の方に向かっていた。

「お、レーネがいたぞ」

「本当だ。おーい、姉ちゃん！」

と手を振るところこちらに気づいたみたいだ。

「どうやら、君たちにとって巨人族など敵ではないようだな」

「まあな。でも、魔王とのゲームのウォーミングアップぐらいにはなったぜ」

「というか、姉ちゃんは相変わらずだね。あのリーダー格の巨人を一人で倒すなんて」

「フフ、お前もやろうと思えばあれぐらいは倒せるんじゃないかコーク？」

「うーん、どうだろうねえ。いくら得意分野でも、そう簡単には出来ないよ」

「そうか。それで、十六夜君。どうなんだ？」

「どうって、何のことだ？」

「ん、君がああの箱庭でも珍しい炎の巨人を私に譲ったのは、私の实力を見たかったからじゃないのか？ 私はまだ君と会って間もないが、君はあれを倒せると解るし面白そうなことを理由も無しに人に譲るような人間ではないと思っただがね」

姉ちゃんは余裕の笑みを浮かべる。

「で、実際のところはどうかだったんだ。君の評価を教えてくださいませんか？」

実を言うと僕も十六夜君がどんな評価をするか気になっていた。

僕にとって姉ちゃんは圧倒的に強い。昔はイタズラとかしてよく土に埋められたりしたっけ？

懐かしいなく。忘れよう（全力で）。

「カズマの姉って聞いてある程度は予想していたが、予想以上に面白そうじゃねえか。あの炎に包まれた巨体をまさか素手で倒すなんてな。俺と正面から戦える奴は少ないから嬉しいぜ！出来れば、近いうちにギフトゲームで争いてえ！」

「それは、同感だ。私もこの下層で君のようにデタラメな強さを持った人を見たのは二人目だ。君とのギフトゲーム楽しみにしているよ」

「そのためにも、早くレティシアちゃんを助けて収穫祭を再開させないとね！」

「当たり前だ。どこのどいつかは知らないが、ウチの超金髪美少女メイドを勝手に使うとはいい度胸してるだぜ」

「おつ、十六夜君の顔がワルだよん！学ラン着てるし、完全にビジュアルが不良だよこの人！」

「と、忘れるところだったがああ巨人を全部真つ二つにしたの。あれは、あんたのギフトか？」

「ああ、ちよつと待ってくれ。まだ話すなら歩きながら話そうじゃあないか。そろそろゲームクリアに向けての準備が進められているはずだ。私はもつと情報が欲しいからね」

「あ、うん」

「そうだな」

とまあ、ここからは「アンダーウッド」の収穫祭本陣營に向かつて歩きながら。

「で、姉ちゃんなの？」

「いや、違う。私もそれを君たちに聞いたかつたんだ。十六夜君以外にも君のコミュニケーションには優秀な人材がいると聞いているがその内の誰ではないのか？」

「違うぜ。お嬢様は絶対そんなことは出来ないし、いくら春日部でもここまでは出来ないはずだ」

「そうか。フム、確かにそんな芸当が出来なくはないのがあるが流石に彼女でもな。そもそも、得物が違う。まあ、その何者かのおかげで森火事は消火されたんだ。お礼ぐらい言いたいものだな」

「でもちよつと、嫌な臭いがするけどね」

「ちよつとどころじゃねえだろうが！」

と十六夜君がツツコミを入れてくる。実際生き物が焼けたこの臭いは、正直吐きそう
だ。

「これの犯人実は、カズマだったりしてwww」

「ヤハハハ、それはないだろ」

「フフ、本当だったら私は褒めてやっていいぞ」

と三人で笑っていると、チラツと白い何かが見界の端を通り過ぎた。瞬間、目の前のことが額縁がくぶちの向こうのように感じられた。頭が冷えた。

異常なほどに温度の下がった僕の頭が静かに演算を行い、答えを弾き出す。

その答えは、予想通りであった。

これなら、あの一撃で巨人を皆殺しなんてことに説明がつく。

「キ？おい、コーキどうした？」

「あ・ああ、ごめん姉ちゃん。どうしたの？」

「いや、笑っていたかと思っただけだ。いきなり怖い顔になったからな。何かあったのかと思っただけだが。」

「別に何も無いよ。僕ちよつと寄り道してから行くから先に行つて欲しいなあなんて考えただけだよ」

「考えたじゃなくて、実行する気満々じゃねえか」

「まねえ（笑）。というわけで、すぐ追い付くから先に行つてて」

「はあ、仕方ないな。早く戻つてこいよ」

「分かつてるつて。んじゃ、ね！」

「おう。ついでにカズマを見つけたら連れて来いよ」

「了解！」

と僕は何時のも笑顔のまま二人と別れた。

そのまま瓦礫になったり崩れていたりする街を中を歩いて行く。

これが龍から分裂した奴らの仕業なのか三度による巨人の襲撃によるものなのかは僕に判断出来ない。

ただ、人一人。獣一匹もない壊れた街は、どうにも不気味だ。

そして、比較的壊れていない建物と建物の間。

月の光もほとんど射さない。そんな薄暗い裏路地に彼は立っていた。

純白という言葉が似合うほどに白い髪に鮮やかな翡翠色の瞳を持つ少年が僕を待っていた。

彼は、その僕をよく知っている顔を歪ませ狂氣的な笑みを浮かべながら僕にこう言った。

「久しぶりだなア、コーキ・C・マユズミ」

これが僕が白カズマとの二度目の出会いだった。

第8話 デリート・オア・アライブ

“アンダーウッド” 街の裏路地

「久しぶりって僕は君なんかと一生会いたくなかったけどね」

「オイオイオイ、オレも随分と嫌われてたもんだなア」

「君の3年ぶりの世間話に付き合う気はないよ。こつちも忙しいからね」

「ああ？ “魔王ドラキュラ” のことか？」

「そうだよ、それ。単刀直入に聞く。君は後どれくらいで引つ込むの？」

「もう、オレは戻らないぜ」

「なっ!??! おい、ちよつと待て！ お前が戻らないってどういうことだ!?!」

「戻る必要がないんだって言ってんだよ。魂を表に出せるだけは回復したからな」

「なら、カズマはどうなったツ!? 今までその身体を守ってきたカズマは!?!」

「錬金術師ならもう用済みだ。必要ねエ。アイツがどうなったかは、クツクツクツク」

その笑いが、声が僕の神経を逆撫でる。僕は苛立ちのあまりに、白カズマの襟を掴んだ。

「ふざけんなっ!!! お前が瀕死で活動出来なかったから造ったカズマを必要がなくなつた

から捨てたのかよ!!自称カミサマが聞いて呆れる」

そう僕は怒鳴ってつけたが白カズマはさつきと変わらずニヤニヤと人をバカにした目で見てくる。

「クツクツク、なアに熱くなってんだ、オマエは?別に誰も錬金術師を消したなんて言っていないだろオが」

「チツ。なら、カズマはまだ生きているんだな?そうなんだな?これからカズマをどうする気なんだ!」

「だから熱くなるンじゃねエよ。ここは、箱庭だ。功績に対してそれ相応の恩恵が与えられる」

「何が言いたい?」

「等価交換、だろ?なア錬金術師」

白カズマのニイと嗤ったこの顔が僕は最高に嫌いだ。



——眼を開けると、何も無く白い空があった。

天井を見ている、というわけではなく、ただ何も無い真っ白な空間が永遠と続いてい

る感じだ。

頭を少し動かすと、真っ赤な彼岸花が何本も咲いていた。

どうやら、俺は彼岸花畑にでも寝ているらしい。

「死んだのか？」

記憶が曖昧だがここで眼を開ける前の記憶は、炎そのものの巨人に焼き潰される瞬間で途切れていた。

では、ここはどこか。天国か地獄か。はたまた、そんな世界はなくてただ永遠と続く無の世界なのか。

いや、無の世界はないな。彼岸花があるし。

再び視線を真っ白な空に戻すと、何かが俺を覗き込んでいた。

何か、そう何かとしか表現しようのない者。黒い粒子のようなものが輪郭を作り人の形をしていたのだ。

顔とかは無く、全て白い。輪郭の粒子が無かったらこの空間では視覚での認識は無理だろう。

というか、コイツはいつからいた？ここはどこだ？等の聞きたいことがいくつあつたがとりあえず、

「俺は死んだのか？」

「いいや、オマエは死んでねエよ錬金術師。オマエが死ぬ前に門にオレが引きずり込んだからな。クッククック」

白い何かは笑いながら答えた。

「門？引きずり込んだ？何を言っているんだ、お前は？というか、誰だ？」

「オイオイ、これで会うのは二度目だけエ錬金術師。まア、立ってみろよ」

その言葉に従い立ち上がってみる。そして、周りを見渡してみた。

右も左も360度真つ白な世界。あるのは、およそ直径1kmの真つ赤な彼岸花畑。

あと、少し浮遊した巨大な二枚の石板——いや、扉が存在していた。

「どオだ、少しは何か自分で理解出来たか？」

「ここは箱庭とは違う空間であること。門とお前が呼んだものはおそらくあの無地の扉。この二つは理解した。だが、お前が何なのかは解らない。もう一度聞く。誰だ？」

「オレは、オマエの『世界』。あるいは『宇宙』。あるいは『神』。あるいは『真理』。あるいは『全』。そして、オレは『生みの親』だ」

そう言いながら白い何かは俺の額を軽く小突いた。

瞬間、俺の頭の中に情報が流れ込んできた。それと同時に思い出したのは巨人に潰されそうになった時の出来事だ。

拳が振り下ろされ、目の前まで迫っていた。

終わったと思ったがその時、

「無様だなア、錬金術師」

と声がしたのだ。

「そして、一瞬のうちに光で錬成陣が描かれ、俺の身体は分解され箱庭から消失した。」

「俺は流れてきた情報、記憶を整理し最適化させる。そして、呆然と自分の手を見ながら呟いた。

「俺はカズマ・N・エノモトではない。カズマなんて人間はどうに死んでいる。そうだな、英雄アキレス？」

「ああ、そオだ。オマエはカズマ」と呼ばれた奴の死体を依り代にしたオレが、休眠状態の間に身体を守るために造った「神造魂」。死体に残っていた記憶と残留思念を使つてなア」

そんな自分の真実を聞かされたが俺は相変わらず無感情だ。普通の奴ならイカれていたかもしれない。「自分」という重要な心の柱が崩壊していくのだから。

「それにしても、驚かねエな。もう少しリアクションはとかねエのかよ、ああ？」

「ない。本当はお前がそう造つたんじやないのか？」

「はっ、気づいていたのかよ。やっぱり、天然と神造の線引きは必要だろオが」

「否定はしない」

「ここまでは、さつき流し込まれた情報の確認。そして、ここからが俺にとっての本题である。」

「アキレス、お前がこのことを話したって役目は終わったということだな。俺は、消去されるのか？」

消去、死ではなく消去。そちらの方がしつくりくる。俺は肉体も感情もなく、終わった人生を続けるための二人目の主人公。英雄アキレスが休眠から覚めるまで依り代を守るシステムのようなものだ。

だから、消去。

「そうだ。オマエはもう用済みだ。劳いの言葉でも言つてさつさと消去する」

俺は予想通りの回答に、死の宣告に恐怖を感じなかった。

あるのは、無。何も感じない無機質な人形がいた。

だが、アキレスの言葉はそこで終わりではなかった。

「が、そうもいかねエ。オマエは身体を守った上に、箱庭までオレを送ってくれたんだからな。」

——お前にチャンスをやるぜ、鍊金術師」

瞬間、俺の後ろにあつた門がギイイと音を立てながら開くといくつもの黒い手が伸び

て身体を掴んだ。

それはすごく強い力で門の中へと引きずり込もうとする。

「おいアキレス！言ってることとやってることが違うだろッ!!!クソッ、何がチャンスだ！門の中の奴を止めろッ！」

門の中ではギョロリと瞳が一つ俺を見ていた。

それは無機質な俺に何とも言えない焦りを感じさせてた。

あれは、根本的にヤバイ。ないはずものが内側に強制的に作られる。

「オイオイ、取り乱すなんて錬金術師らしくねエぞ。クッククック」

ギ、ギチギチイと門は無理やり閉じようとする。その残り僅かな隙間の向こうで、

「まア、オレの信条は『ねだるな、勝ち取れ、さすれば与えられん』だ。自分で勝ち取れ

錬金術師」

ゴオン、門は閉じた。

『ギフトゲーム名 “DOLL ALCHEMIST”』

・プレイヤー一覧

・ “神造魂” カズマ・N・エノモト

・ゲームマスター

・カズマ・N・エノモト

- ・クリア条件

- ・“カズマ”を見つける。

- ・敗北条件

- ・十二回ゲームオーバーになった場合。

- ・ゲームオーバー条件

- ・制限時間を一時間とし、その経過。

- ・戦意喪失によるゲームの続行不能。

- ・プレイヤー側ペナルティ事項

- ・ゲームオーバー毎にゲームに関する記憶をリセットする。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とゲームマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

“アキ

レス“印”

◇◇◇

僕はカズマの現状と彼が存在を賭けたギフトゲームの内容を白カズマに聞いた。

正直、僕にもゲームの攻略方法は解らなかつたし、仮に解つたとしてもカズマを助けることは出来ない。

なら、何をする？

答えは簡単だ。

目の前の bad endへの道を happy endに変えること。

例えば、胸クソ悪い奴と協力することになっても。

というわけで、

「ねえ、白カズマ。もう一度確認するけど、君はこのギフトゲームに参加してくれるんだよね？」

「ああ、そうだ。どオセ、錬金術師のギフトゲームが終わるまでここを離れられないからな。暇潰しに遊んでやるよ」

そこで、さつきまで水路でも見て顔を出る限り見ないように白カズマの話を聞いていた僕は、白カズマの異変に気付いた。

「君、左目どうしたの？色変わってるし、何か文字盤が浮かんで時計になってるし」
「ああ？これか？」

そう言いながら自分の左目を指す。

僕がカズマの話を聞く前は確かに左目も右目と同じ翡翠色だった。

けど、今はカズマと同じ赤く光の無い瞳になっていて、左右で瞳の色の違うオッドアイ化している。

さらにその瞳にはギリシャ数字の文字盤が浮かんでおり、長針と短針が時を刻んでいる。

「これは、錬金術師の残り時間を表している」

瞳の指す時間は1時28分を指している。

リスポーンは12回。制限時間は一時間。

なるほど、そういう仕組み——つて、針が動き出した！

「おお、錬金術師がゲームオーバーになりやがったア。残りは10回だな。クツクツク」
短針と長針は回り、2時を指すと再び時を刻み出した。

カズマ・一体何があったかは分からないが彼の精神は一度折れた。

が、そのことも忘れ彼はもう一度ゲームをリスタートする。再び精神が折られるかもしれないのに。

ホント、嫌な奴。

「まあ、いいや。ところでこのゲームで『遊んでやるよ』とか上から目線で言ってたけど、どうやって攻略する気なの？」

そう聞くと、白カズマは空を見上げながら質問を質問で返された。

「オマエは吸血鬼どもがどオやって箱庭に来たか知っているか？」

「いや、知らないけど。吸血鬼って初めから箱庭にいたんじゃないの？」

「いいや、違う。吸血鬼つてのは、何らかの理由で世界を追われて来た外来種だ。そして、箱庭に来る際に奴ら一族は空を飛ぶ城と共に来たと聞いている」

つまり、このゲームの謎解きをするためには箱庭での吸血鬼の始まりの場所であるそこに行つた方が良いということだ。

そして、先ほどから白カズマの視線の先には、浮遊城アインク——もとい、浮遊している古城があつた。

危ない危ない。こんな時でも、21世紀の傑作に思考がもつていかれそうだったよ
(笑)

そういうえば、雷鳴鳴り響く暗雲が周りを覆っているから龍の巢にも見えるなく。

ラピユタあるかな？

「が、一つ問題があるんだが、あそこまで行く手段がねエ」

「はい？」

「だから、あそこまで行く手段がねなつてんだよ」

へ？マジ何言つてんのこのカミサマ。

「君、空飛べたり走れたりしないの」

「オマエ、俺を何だと思つているんだ？」

ええ、そこはカミサマなんだから何とかしてよ！この役立たず。
うん、これを口にしたら僕瞬殺されるね。

「しようがないな。駄神な君のためにも一肌脱いであげよう」

「テメエ、死にたいのかああ!?!」

おっと、失言失言。ともかく、ついに僕の新しいギフトの出番のようだ。

「ちよつと、待ってて準備するから」

僕はそう言い、パチンパチンパチンと指を三回鳴らした。

これが僕の左耳に装着しているギフト、ヘッドフォンファズ 脳内魔導起機の起動合図。

瞬間、ヘッドフォンから爆音が流れ出す。

リズムにビートにメロディ。

それに乗って呪いの歌が僕の脳幹を激しく揺さぶる。

呪いが記憶領域をダブダブに満たし、脳内メモリが千切れんばかりにブーストして魔法を使う準備が完了する。

「あ？」

白カズマが、不思議そうな顔をする。

僕はリズムをとるように、まるで指揮棒を振るように指を宙空に踊らす。すると立体的な光が空中を泳ぐ。

その光で、僕は“脳内魔導起機”を操作していく。

“脳内魔導起機”の中には自分で取捨選択した六種類の魔法歌を入れることができる。

僕はそれとは別にプリセットとして入っている二種類の歌の片方を選択、起動する。魔法の歌で僕の脳漿がダブダブになっていく。

脳内では呪いの唄がヘッドフォンから再生され続けている。繰り返し繰り返し、丁寧に呪いが歌い上げられていく。

『侵入、潜入、不法侵入♪』

侵入、潜入——』

網膜の裏に表れる座標を浮遊している古城に合わせる。

あとは、魔法を発動するためのトリガーである呪文を言うだけである古城の中にいるはずだ。

「ハッ、随分と面白エギフトを手に入れているンじゃねエかオイ！」

「まだ試験的に運用しているものだけどね。まあ、役に立つなら感謝感謝」

「これがなかったら僕もあそこに行く方法無いもんね。」

「準備はいい？」

「誰にももの言ってやがんだ」

クズ野郎です、つてね。

「じゃあ、行くよ。ダイブスイッチ」

刹那。

僕たちの体は分解され、古城の中に転送された。

第9話 知る者知らざる者

——ギフトゲーム “SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMPIRE KING” が始める数分前

“アンダーウッド” 収穫祭本陣営

収穫祭本陣営二度に渡る巨人の強襲の後始末に追われて大忙しだった。

しかし、本陣営の中でも貴賓室は静かなものだった。

その部屋には貴重なギフトである “バロールの死眼” と巨人を指導者であった者から奪った “黄金の豎琴” が保管されている。

そこに “^{ドラコ}龍角を持つ^{ライオン}鷲獅子” の議長で “一本角” の頭首でもあるサラの姿は当然なく、見張りである幻獣が二匹——いや、人化の術を使っているので二人いた。

「なあ、俺たちここでつつ立ってていいのかな。やっぱ、後処理手伝った方が良くないか？」

「確かにそうかもしれないが、もしも “黄金の豎琴” を取り返しにくるかもしれないだろ」

「でも、あの凶体が大きいことしか取り柄の巨人族が来たら分かるだろ」

「バカ。お前聞いてないのか？この “黄金の豎琴” を使ってた奴って普通の人間サイズ

だったんだよ」

「マジツ？俺、地下都市で戦ってたから知らなかったぜ」

その時、貴賓室のドアが開き二人の交代の兵士がやって来た。

「そろそろ、交代だよ」

「おつ、これで後片付けに参加できる！」

「元気だな、お前。休息はちゃんと取った方がいいぞ」

「そうだそうだ。休息は効率の良い労働の基本だよ」

「さつきから、コイツ後処理のことばっか言ってるんだ」

「当たり前だろ。ここでつつ立てるよりは良いぜ」

「はいはい、ともかく交代だ」

「さつきと変わった変わった」

「分かったよ。ちよつと休んでくる」

「二応気をつけろよ」

こうして、警備は入れ替わった。

「いや、にしても『バロールの死眼』なんてよくも手に入ったよね」

「そうだな。だが、残念なことはこのギフトを使える者がいないことだな」

「だね。死に関連した奴なんていないもんな」

「ああ、そうだな」

「あ、そうだ。ちよつと来てくれない？」

「ん、何だ？」

そう言いながら、懐から紙を出したもう一人の兵士に歩みよる。

「いや、ちよつとね。おやすみしてもらおうと思つて★」

瞬間、歩みよつた兵士の鳩尾に膝蹴りを入れた。

「うぐつ!!!」

とうめき声上げ気絶した。

「あはっ！弱すぎ〜」

兵士は笑いながら気絶した兵士を床に落とした。

「さあーて、豎琴と死眼でももらつていくかな。てか、死眼つて見た目ただの石ころじゃ
ん」

そう言う兵士の姿はいつの間にか変わり、エンヴィーがそこにいた。

エンヴィーは「黄金の豎琴」持ち、「バロールの死眼」ギフトカードにしまうと、

「血の文をもつともつともおおつと、深く刻みつけないと。さあさあ、アンダーウッド

“の役者の皆さんまだまだ楽しい愉しい舞台は終わってないよ。はは、ははははは。あはははは！”

そう笑いながら貴賓室去るエンヴィーの姿は、ローブを纏った女の姿に変わっていた。

◇◇◇

さて、正直君たちも何の変化も同じ話を聞くのはつまらないだろう？

だから私はいつものようにいつものごとくゲームの攻略方針の話し合いについてを短くまとめさせてもらおう。

ああ、台詞一つも無ければ誰が語っているか分かりにくいか。

私は、レーネ。 “ウィル・オ・ウイスプ” のレーネ・K・エノモト。私はカズマの姉だ。

では、そろそろ話し合いの結果を報告させてもらおう。

- 1, “黄金の豎琴” が奪い返された際に “バロールの死眼” も盗まれた
- 2, 犯人は警備の兵士に化けていたとのこと
- 3, それ以外は、不明
- 4, 次に今回の魔王の襲撃と同時に東と北にも魔王が現れた
- 5, 現在箱庭に同時に三体の魔王が出現していることから魔王の連盟が存在する可能

性が有り

6, 魔王連盟(仮称)の狙いは「階層支配者」フロアマスタを活動不能にし、アンダーエリアマスタ全権階層支配者」を決めさせることだと推測される

7, ここまでの項目の思考は保留とし、目の前のゲームに集中するとする

8, 浮遊城には「六本傷」の重役や「ノーネーム」の主力一人、「アンダーウッド」の住人たちがいるとのこと

9, それを踏まえ、「アンダーウッド」を巨人族から守る部隊と浮遊城に乗り込み救出兼ゲームクリアを目指す部隊に戦力を分ける

10, 二日後に準備を整え浮遊城に乗り込むという感じで初日の会合は終わったのだった。

長くなってしまったな、すまない。

「アンダーウッド」最高主賓室

「貴女が防衛に回った理由を聞いてもよろしいですか？」

フェイス・レスは唐突にそう質問してきた。

ここは「ウィル・オ・ウィスプ」の最高主賓室、と言ってもいるのは私とフェイス二人だけだが。

ジャックもアーシャも巨龍の魔物が拐った子供たちを追って浮遊城に行ってしまった。
ている。

と、フェイスの質問に答ええないといけないな。

「単純な話、ゲームクリアを目指す部隊には十六夜君がいれば問題ない。彼は文武両道だからね。私の場合割りりと武寄りだから防衛・まあ巨人族を倒す方が適している」

「確かにそうですね。しかし、コミュニティの仲間としてジャックとアーシャは心配ではないのですか？」

心配もなにも今は審議決議だから魔王は手出しできないだろうに。

まあ、そんな単純なことを彼女が聞いているのではないことは分かっている。

「全く心配をしていないと言えば嘘になるが、彼らなら大丈夫だろう。今頃、城の中を回って子供たちを保護しているかもしれんな」

「そうかもしれないね」

そこで会話が終わったので二人では広すぎる部屋に沈黙が訪れた。

。

あ、そうだ。

「なあ、フェイス。君は確か私よりも早くから『アンダーウッド』に来ていたな？」

「ええ、その通りですが何か？」

「いや、どうやら私の弟もこの『アンダーウッド』に来ていてな。まだ、会っていないんだが知らないか？」

「カズマ・N・エノモトのことですね。彼なら、貴女が来る前の二度目の強襲の際に西の森にて戦闘をしていたのを見たのが最後です」

「二応、『アンダーウッド』にはいるみたいだな」

「そういえば、会合の場にはカズマと春日部耀以外にあと一人いませんでしたね」

「コーキか。あいつは、カズマを探しに途中で別れたのんだが。いったい、何処をほつつき歩いているのやら」

まあ、私の弟だからそう簡単に死にはしないし負けもしない。でも、ちょっと心配だ。いったいどこで何をしているのだ、私の弟たちよ。

私はそう心配をしながら、先ほどから感じられるざわざわとした『気』のことが頭に引つ掛かっていたのだった。

◇◇◇

カズマ^{人形}は走っていた。夕焼けに染まった本棚の間を。

探さないと、早く探さないと世界が終わってしまう。早くしないと日が沈んでしま

早く本を見つけないと、世界がカズマ^{人形}を溶かしてしまう。
 全てを無に還してしまおう。

世界が終わるまで残り13分。時間がない。

人形は黄昏の中を走る。

そして、やつと見つけた。深い、深海のような青黒い表紙の本を。
 存在^{カズマ}が書かれた本を。

手に取ってページを開く。

そこには、

■ ■ ■ 何も書かれていなかった。

それがカズマ^{人形}。それが人形^{カズマ}。

言葉のない本。何も描かれていない本。それが紛い物^俺。

何も残りカス。何でもない神造魂^俺。

カズマはカズマ^僕を見つけることが出来なかった。

消えていく。消えていく。世界が消えていく。

全てがなくなり無へと還っていく。

そして、人形の糸が切れた。

リスタートまで、残り12秒

■ ■ ■



「アンダーウッド」上空。吸血鬼の古城・城下街

「PUGYAAAAAaaaaa!!!」

「PUGYAAAAAaaaa!!!」

「あー、あー、あー何なのあれは!?!吸血鬼にとつてゴキミみたいなもの!?!」

「いいから、手エ動かせ」

一回分解され、古城で再構築された僕たちを待っていたのは血塊と苔の集合体のような赤黒い怪物だった。

人の形をしており動きが速い。しかし、体は脆く一体一体はさして脅威ではない。

けど、それが何百体も集まれば別の話。

さつきから燃やしても燃やしても湧いてくる。あつちこつちでは怪物が燃え上がり

松明のように城下街を明るく照らしている。

なお、白力ズマは錬成陣無しに手を合わせただけで槍を作り無双をしていた。

「PUGTa」

「GYa」

「雑魚が何体集まろオが雑魚は雑魚だ!」

右斜めから槍を振り下ろし、一気に二体切り裂く。

「随分と余裕だね!? そんなこと言ってるわりに押されてるのは僕たちだよ!」

「あ? 分かんねエのか? こんな状況いつでも覆せるつってんだよ」

「そもそも、君はこれが何なのか知らないの!」

「冬獣夏草だ。生き物や死骸を苗床に繁殖する菌糸類」

「対処法は!」

「苗床を破壊するか、焼き尽くすか」

全く役立たねー! せめて、どこか隠れられる場所があれば、覆せるなら

さっさと覆せよ!

そういうえば、これらつて多分全部死体を苗床にしているよね?

吸血鬼つて何でこんなに多く死んでるのかな?

「さアて、スクラップの時間だア!」

白カズマは槍を横風ぎに振り冬獣夏草を撥ね飛ばすと、槍を放り捨てた。

パン、と手を合わせ地面に手を突く。

瞬間、錬成陣ではない陣が浮かび中から一本の木製の槍が召喚された。

パシツとその槍を掴み構える。そして、彼はこう呟いた。

「来い、ムスペルヘイム」

瞬間、ポツオオと音を立て炎が溢れ出した。それと同時に空気が白カズマのところに

すごい勢いで流れ込む。

恐らく、炎の温度が高過ぎるためだろう。上昇気流が発生している。

僕でもこんな高温な炎は出せない。精々、1000℃くらいが限度だろう。

白カズマは大きく振りかぶり、

第六宇宙速度で身体の全てを使い投擲した。

槍は衝撃波だけで冬獣夏草の群れを吹き飛ばし、溢れ出る炎で跡形も無く全てを消した。

その勢いはすごく、城下街の建物を貫き、挙げ句の果てには城の外壁を崩し溶かしながら突き進んだ。

「すごい。」

つい、声に出してそう言ってしまった。

槍の通った道の敷石は溶け溶岩のようにごぼごぼと音を立てていた。建物も右に同じ。

凄まじい破壊力だった。それ以外何も言えない。

僕が呆然としてみると、白カズマはそのままスタスタと歩いて城の方に歩いていく。

何気に溶岩の上を歩いているのに何で靴すら溶けないの？

というか、僕を置いていく気!?

「ちよつとー、白カズマ。僕は普通の人間だから溶岩の上なんて歩けないんですけどー？」

「ンなもの、先に城の中に魔法で入れればいいだろ。言っておくが、分解されるのもうゴメンだ」

あ、そつかー。ダイブスイッチを使えば一瞬で中に入れるんだつた。

あー、でも白カズマの気持ちも少し分かるなく。分解されて再構築されるのつて頭痛くなるんだよね。

そうと決まれば。パチンと僕は指を鳴らした。

『侵入、潜入、不法侵入♪』

侵入、潜入——』

座標を白カズマが開けた城壁の奥（場内）にして、と。

「ダイブスイッチ」

今日二回目の分解をされ、今度は城内に転送され再構築された。

「よし、到着。つてこれ・中もかなり壊してるねえ。うっかり、ゲームのヒントごと壊したりしてないよね」

「そんなへまするかよ」

「おつ、速いね。流石と言えば流石。ともかくその根拠は？」

「勘だ」

不安しかねー！と僕が思っていると、

「あ・コーキ」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ありやいや、耀ちゃん？何で君がここに？」

「コーキも拐われてきたんじゃないの？」

「え、何に？」

「鱗の怪物」

「全然。じゃあ、耀ちゃんは拐われたってこと？」

「ううん。私は拐われた人たちを助けるために自分で来た」

「じゃ、捜索中だった？」

「それも、違う。皆見つけて今、ジャックとアーシャが守ってる」

「ほー、『ウイル・オ・ウイスプ』の二人もいるんだ」

「うん、それでさつきすつごい衝撃が来たから偵察に来たらコーキがいた」

「なるほどなるほど。すつごい衝撃って何だろうね」

と隣にいる白力ズマを見ると、「チツ」と舌打ちをしてそっぽを向かれた。

「ところで、その人誰？」

あれ？なんて説明しよう。何気に僕の方が舌打ちしてそっぽ向きたいよ。彼のことを一から説明するなんて絶対にしたくないからね。ともかく、一旦ここににいる人たち全員と合流するとしますか。

第10話 神憑り

《レギオンマスター
地域支配者》

に任命され、《サウザンドアイズ》から帰宅後

私とハーミットは雑巾で窓ガラスを拭いていた。

本当なら宴のために料理をしなさいといけなかつたのだが、黒ウサギがすると言うので掃除をしている。

ふきふき。ふきふき。チラツ。

つい、隣で同じように窓を拭いているハーミットを見てしまう。

今まで、ちよつと離れたところから見ていることはあつたが今回は距離も理由も一味違った。

かわいい♪

そうすごくかわいいのだ。今のハーミットは魔女の帽子とかは身に着けておらず、深緑のエプロンに赤の三角巾を被っているのだ。まさにお掃除スタイル。

しかも、体が小さいため窓を拭くにも全身を使わなければならず、その様子は「よしよ、よいしょ」という声が聞こえてきそうで、ものすごく愛らしい。

ああ、カズマ。お前は何でそんなに愛らしいんだ♪

「さつきからじつと見てるけど、何か用？」

ハーミットは窓を拭きながら言った。

「あ、いや・その・。特に用があるわけではないが」

見ていたのがバレたのはちよつと恥ずかしい。

だが、ここで会話を自分から切るわけにはいかない。

何て言おう？何を言ったらいいんだ？えーと、えーと、

「か、カズマには元の世界で好きな女の子とかいたのか!?」

「はっ?」

何を言っているんだ、私!?!?

いくら会話を繋ぐためだからって何を聞いているんだ!

ああ、カズマの手が止めてしまっている。

これでYESなんて返ってきたら私は告白する前に失恋してしまうではないか!!

一応コーキに聞いたことはあるが、こればかりは本人のみぞ知ること。

コーキが気づいていないだけかもしれない。だから、いつかさりげなく聞いてみよう

と思っていたが。

「えーと、いきなり何で?」

止まったのは少しの間でハーミットは窓拭きを再開させた。

「いや、ほらコーキが『初めて女の子に好きになってもらえた』とかなんとか言っていたら？」

「言つてたっけ？」

「言つてた。それで、そのく、カズマは元の世界で好きな人とかいたのかな〜つて思つただけだ！他意は無い！絶対無い！」

「あ、そうなの。別に好きな子とかいなかったよ。そもそもボクは友達が少ないからね。」

「そうなのか！それは良かった！本当に良かった！」

「えっ、ボクが友達が少ないのが、良かったの？というか、ちよつと酷くない!？」

ああ、でもここで喜んで終わるな私。あくまで前の世界の話だ。まだ、聞くことがある。

頑張れ私！この流れなら聞いても不自然じゃない。

「じゃあ、こつちに来てから好きな人とか、気になる人つていたり、するの、かな？」

恥ずかしい。元の世界のを聞くよりも、恥ずかしい。しかも、ドキドキする。顔も熱い。

でも、それを乗り越えないといけない時がある！

と、頭の中も熱くなっているとハーミットはすぐに質問に答えず、窓の淵から飛び下

りた。

そして、水を入れたバケツに雑巾を入れじやぶじやぶと軽く洗いだした。

「ねえ、レチイシア」

「な、何だ」

「今日のレチイシアはお喋りな上に随分と踏み込んだ質問してくるね」

ギクツ！マ、マズイ！カズマが怒った！カズマが怒った！どどどうしよう!?

流石に踏み込み過ぎた。実を言うと何時もよりカズマに話しかけているのも事実だ。

もしかして、私ウザイって思われた

「何でかな。理由を教えてください」

やっぱり怒ってる？怒っているかな？

そんな心配をしながらも私はギリギリ嘘ではない理由を思いついた。

「その別に、人型のカズマが悪いわけではないぞ。でも、今のその姿の方が親しみやすいというか、話しかけやすいというか」

本当に嘘ではない。実際、ハーミットのカズマは口数も多く感情が豊かで親しみやすい。しかも、可愛らしい猫の姿なので尚更だ。

ハーミットは私の答えに目を丸くして、手をぽんつと打った。

「なるほど！そういうえば、そうだった！そうだったんだ!!そもそも、この姿は『ウイル

オ・ウイスプ」のマスコットとして使っているから親しみやすいのは当然だ。うんうん、納得納得。ゴメンね、レティシア。何か変なこと聞いて」

「いや、いい。私こそ、すまない。踏み込み過ぎた質問をした」

「別に気にしなくていいよ。ねえ、レティシアって猫好き？」

ハーミットは可愛く首を傾げながらそう聞いてきた。

きつと、カズマは私が猫が好きだからずっと抱っこしていたり話しかけたりしていたと思っているのだろう。

まあ、それも理由の一つだけだな。

「好き」。大好き」

「そっか」

カズマは柔らかく笑い、私も笑う。

そんな穏やかな時間。そんな何気ない時間。そんな戻れない日常。

これは、夢。私が見る少し幸せな夢。

死を前にした最後の夢

◇◇◇

吸血鬼の古城・城下街

「おつ、耀。お帰り！さっきの衝撃なんだった？」

「この人が冬獣夏草を掃討した音だった」

「マジで？何かスゲー奴連れてきた？」

「かもね」

「ヤホホホ！丁度、食事の準備が出来てます。春日部嬢もコーキ殿もそこの方も食事をしながら話し合しましょう」

「うん」

「OK」

さて、耀ちゃんの力でふわふわ浮きながら移動し、やっと目的に到着。

そこには、そこそこの人数子どもたちと一人（一匹）の老猫にジャックとアーシャちゃんがいいた。

ちなみに僕たち心境は少し二歩進んで三歩下がるだ。

干し肉焼いた簡易な料理と水も貰う。それが全員にまわると、この中で進行役に一番適しているジャックが作戦会議を始めた。

「では、新しく仲間も増えましたし、さっきまで話していたことの説明をしますね。と、言いましても特に何かあるわけではありませんがね、ヤホホホ」

「えつとさ。じゃあ、皆つて何でまだここにいるの？耀ちゃんから子供を助けに来たこととは聞いていたけど、見たところ見つけているじゃん。何で危険なここにいるの？」

「ええ、本来ならそうするんですが、どうやらここにいる私たちは全員ペナルティの対象となつて居るのですよ」

「でも、ペナルティつてゲームマスターと戦わないとなんないはずだよ。ジャックや耀ちゃんならまだしも子供たちがなるなんて。」

「ええ、そのお気持ちは分かりますがゲームマスター、あの巨龍の分裂体と接触しただけで子供たちはペナルティの対象となつています」

「つまり？」

「ペナルティの対象となつて居る以上このまま大人しくしているのは得策ではないと判断し、私たちはゲームのクリアを目指すことにしました」

「なるほどなるほど。そつちのことわかったよ。僕たちもゲームをクリアしに来たからね。協力するよ」

「それつて、サラとか十六夜も来るつてこと？」

「ここで耀ちゃんが質問をしてきた。当然の疑問と言えばそうだね。」

十六夜君とかが来るなら百人力だもんね。

「それは分かんないな。僕たち、今独立して動いているから向こうの動き分かんないし」

「そう。それは残念。でも、コーキはどうやってここに来たの？」

「それは、後でね☆」

今は作戦会議。そういうのは後回し後回し♪

「そんじゃ、方針も決まったし。って小僧共に名乗ってなかったな。俺の名前はガロロ
 Ⅱガンダツクだ」

「これはどうも！耀ちゃんと同じコミュニケーションのコーキ・C・マユズミと言います」

僕に「よろしくな、小僧」と笑いながら言うガロロさんは、気の良いおじいさんみただ。好感が持てる。

次に僕の隣で干し肉をプチリつと食い千切っている白カズマに視線を向ける。

ちかみにガロロさんだけでなく、紹介を保留にしていた耀ちゃんやジャック、アーシャも彼が何者か気になっているようだ。

そして、白カズマは面倒くさそうにこう言った。

「オレの名前は、カズマ・N・エノモトだ」

「えっ?」

「はっ?」

「ヤホっ?」

「あ?この小僧有名人か何かか?」

ガロロさん以外はその名前に驚いた。まあ、当然。というか、何でそっち名乗った!?

「カズマってこんな真つ白な奴だったけ？」

「いや、確かその彼とは真反対の黒っぽかったはずですよ？」

「ストレスで白くなった？」

「いや、それはないだろ。肌の色まで変わってんだぞ」

とあーだこーだ言う、カズマのことを知っている三人。

「ちよつと、それじゃなくて君の名前を名乗りなよ！」

「ああ？こつちの方が面倒くせエ説明しなくて済むだろ」

「いいから、早く！」

「チツ、アキレスだ」

「アキレス？それって、ギリシヤ神話の」

「英雄じゃねえか!？」

驚き声を上げるアーシヤ。

「そいつは偽名か？」

それとは反対に、ガロロさんは冷静に値踏みするような目で白カズマを見る。

「いいや、真名だ」

「それじゃ、白い小僧は二人目の英雄アキレスってことか？」

「それも違う、オレは正真正銘アキレスだ」

「それはおかしいぞ。詳しくはあまり知らんねえが『英雄』アキレスはデイストピアとの戦いで死亡しているはずだ」

「それは大体合ってるよ、ガロロさん。でも、実際はデイストピア戦で身体を木つ端微塵にされて外界に逃げごふあ！」

語尾が・おか・しいのは・殴られた・から。ぐふつ！

僕は一発でK.Oされた上に更に一発くらった。死ぬ。

「細かいことはどオでもいいんだ。オレの名前さえ分かればいいんだろ」

「いや、ちよつと待てお前！さらつと流しやがったけど、お前はカズマなのか？」

ここでツツコンで来たのはアーシャちゃん。ついでに耀ちゃんもジャックも「正直に言え」って目してる。

そりや、気になるよね。

「だったら、どオした。確かにさつきまでは、オマエたちが知ってる『カズマ』がこの身体を操作していたが、今はオレがこの身体の主導権を握っている」

「つまり、カズマの身体には今の白いカズマと私たちが知っている黒いカズマの二人がいて、今は白い方がメインになっている。みたいないな」

「耀、お前理解出来てないから落ち着いてるけど、カズマは神憑りかみがかだったんだぞ！この下層でどれだけすごいことか分かってんのか？」

「そんなにすごいの?」

「ええ、アーシャの言う通りです。カズマさんが神憑りだったってことは、"ノーネーム" は知らない内に神霊を仲間にしていたということですよ」

「耀嬢ちゃん分かるものに例えると、核兵器を手に入れたみたいなものだな」

「なるほど。分かりやすいけど、ガロさん核兵器分かるの?」

「伊達に年を食ってないからな、ハッハッハ」

まあ、本程度の知識しかないけど核兵器って世界を滅ぼしかねないものだから何らかの形で箱庭にも存在してそうだもんね。というか、そろそろ脱線し過ぎてきたな。

というわけで、閑話休題。

「んじゃまあ、謎解きをしますか!」

「では、今現在でゲームの仮説などをお持ちの方はいらっしやいますか?」

すると、耀ちゃんが手を上げた。

「はい、春日部嬢」

「このギフトゲームのタイトル" SUN SYNCHRONOUS ORBIT"を直訳すると、太陽同期軌道になる。えっと、簡単に言うと、太陽と特定の角度を保って飛ぶ、人工衛星の軌道のことを指す言葉になるんだ」

「じ、人工衛星ですか!」

突然、声を荒げるジャック。

さてさて、僕には「人工衛星」なるものがどんなモノなのか知らないから彼がなぜ驚いているか分からない。

けど、さっきの耀ちゃんの説明の『太陽同期軌道』と『太陽と特定の角度を保って飛ぶ、人工衛星の軌道』って言葉からなんとなく想像出来た。

つまり、耀ちゃんが言いたかったのは「公転軌道」みたいなもの。そして、「人工衛星」はその軌道を回る人工物。

じゃあ、その「人工衛星」ってこのゲームでは何っていう当然の疑問が出てくる。

考えられるのは——と考えている内にも話は続いて行っているね。

「太陽」と、その「軌道」に係するゲーム内容か。とすれば耀嬢ちゃんは、「獣の帯」を「獣帯」^{ゾディアック}として読み解いているのかい?」

「ゾディアック?」

僕とアーシャちゃんの声が揃った。どうやら、僕だけが分からないわけではないらしい。

「獣帯」とは、「黄金帯」や「黄金十二宮」を指す別称ですよ」

お! どうやら読みは合ってたっぽい。やっぱり、黄道十二星座が絡んでいた。

そして「軌道」つてのは、十中八九黄道のことだね。

そこが分かれればこの謎は楽勝だ。今まで途切れていた思考の線が全て繋がった。

「そういうことか！分かったよ、分かったよ！耀ちゃんが何を言いたいか分かったよ！」

「え、マジ？私全然分かんないんだけど。」

「そうかな？ここまで言われたら、分かると思うけど。耀ちゃんが言っていたのは、第三勝利条件の解釈だよな？」

「うん。第三の勝利条件「砕かれた星空を集め、獣の帯を玉座に捧げよ」が示す意味は、獣帯によつて分割された十二の星座を集め、玉座に捧げろ」つていうことじゃないかな？」

最後の方が頼りなさそうに言った耀ちゃん。もつと自信を持つていいのに。

僕なんて、直感みたいなものでこの謎解いてたんだから。ちなみに第四勝利条件の謎はとつくに解けている。

でも、実行するのはあまり現実的じゃないんだよね、これが。あ、十六夜君がいたなら別だけど。

「ヤホホホ・グッドですよ、春日部嬢！今の推理は多くのワードに符号します！」

「で、でも「星座を集めろ」つていうのはどういう意味なのか分からないし。」

「それは、手の込んだミスリードでもなければ合っているぞ。」

そう言ったのは、寝転がった白カズマだった。

いや、君自分の話題と食事が終わった瞬間寝転がるって真面目にやる気ないでしょ！
と、ツツコもうと思ったがそこで彼が片手で石を投げては受け止め、投げては受け止めてるのが目についた。

つまり、和で言えばお手玉。洋で言えばジャグリングをしていた。

それを一つを耀ちちゃんたちに、もう一つを僕に投げて寄こした。

その石には十二宮の天秤座が刻まれている。多分、耀ちちゃんにも刻まれているのだろう。
ろっ。

「ねえ、アキレスさん。これをどこで？」

「これは雑魚共を掃除している時に拾ったんだよ。『獣の帯』に『星空』、大方黄道十二宮が関係していることは読めていた。だから、役に立つかも知れねえから回収したんだ」

白カズマは起き上がりながら、どうでも良さそうに言う。

「よっしゃー！これで春日部お嬢ちゃんの推理が正しい可能性がぐんと上がったな！早速他の連中にも協力してもらって欠片を探してもらおう！」

膝を叩き、豪快に笑って音頭を取るガロ口さん。

これで今後の方針は決まった。僕たちは、砕かれた星座を求めて城下街への探索に乗

り出したのだった。

第11話 北側第二位

吸血鬼の古城・黄道の玉座

玉座の間に続く階段の踊り場に陣取っていた、黒いローブを纏ったアウラは水晶球で地上を覗き見ていた。

「殿下。『アンダーウッド』が動きました」

「そうか。そろそろ頃合いだと思っていた。迎え撃つ準備は出来ているか？」

「勿論ですわ。城下街には吸血鬼の死骸に冬獣夏草を散布してあります。苗床が良いですし、今頃は全区画を埋め尽くしているでしょう」

口元を押さえ、クスクスと笑うアウラ。殿下も頷いて返す。これに口を挟んだのは白あきとだ。

「それ、もう全滅とかしていませんよね？ 炎の槍を放った者がこの古城に侵入しているのなら冬獣夏草なんて、一瞬で灰になっているかもしれないよ」

「その話なら侵入している者はいない、という結論になったでしょう。そもそもこの城に近づけば影に襲われ、そう簡単に侵入出来ない。それに仮に影が撃破された場合は、すぐに分かるわ」

「アウラの言う通りだ。今の『アンダーウッド』の動きとつじつまが合わない。それに侵入するなら未だに城内に入つてこない何故だ？ 罠だとしても何のアクションがないのはおかしい」

「確かにそうかも知れませんが警戒するに越したことはないと言いたかったです。何かあるのかが分からないのがここですからね」

「この考えにリンが肯定した。」

「その白ちゃんの考えに私は賛成だよ！ 殿下もアウラさんも頭固すぎ。もう少し柔軟にしない？」

「いや、リンもこの結論に反対どころか賛成していただろ？」

「賛成はしたけど、そこまでガチガチに考えてないよ。それに私やアウラさん、グーおじ様に白ちゃんの存在が知れるのはいいの」

「えっ、俺は？ 俺は頭数に入つてないのか？ おーい」

「そういう鏡磨を黙殺。」

「でも殿下の存在を感じられるのは危険。殿下は私達の切り札なんだから、こんなゲームで存在を知られちゃダメ。だから、この古城に参加者が侵入している可能性は絶対考慮した方がいい」

「。リンの話は分かった。もしも参加者が侵入していたら厄介だ。それはグー爺と

白、鏡磨に任せる。二人はそろそろエンヴィーと合流し、*“アンダーウッド”*を叩く準備をしろ」

『承りました』

「了解しました」

「任されたぜ」

「それじゃ、殿下も気をつけてね。くれぐれも誰かに悟られないように。白ちゃんもまたね」

「ええ、頑張つて来てくださいいね」

バイバイと手を振るリンに白も手を振り返した。

それを見ていた鏡磨は殿下と同じように階段に座り込む。

「それで、こっちはどうするんだ？全員で搜索するの？」

「いや、用心する越したことはないから今回の探索をするんだ。メインはグー爺がしろ」

『御意』

「白はグー爺の補佐を。鏡磨は最終的なバックアップをしろ」

「うわつ、場合によって何もすることがない」

「仕方ないよ。場所が悪い」

「諦めろ、鏡磨。仕方がないことだ。ああ、そうだ」

殿下は思い出したようにグライアに近づき、ニヤリと笑った。

「例の『生命の目録』の所持者だが。案外、ソイツが城に乗り込んで来ているんじゃないか？」

『まさか』

「根拠はない。ただそうだったら面白いと思っただけだ」

『白、今回は手出しするな』

「ああ、グー爺のスイツチが入りましたね。一応、補佐しろと殿下は言いましたがいいのですか？」

「構わん。全てグー爺に任せる」

殿下はそう言うと言もなく闇に溶けて姿を消した。

「まあ、グー爺なら私が補佐するまでもないですよ。でも、もし『生命の目録』の所持者がいたら、露払いでもか見物でもしているので安心していてください」

(ハズレでも侵入者がいるのは当たっているんですけどね)

と白は言いながら思った。

「ああ、そうしてくれ。では行くぞ」

「それじゃ、鏡磨。行ってくるよ」

白は、すうと鏡磨に近づき頬に軽く口づけをするとグライアの後に続いて回廊の闇に

消えていった。

一人残された鏡磨は口づけをされた頬に手を当てながら、

「白は相変わらずクールだな。」

と嬉しそうに呟くのだった。

◇◇◇

“アンダーウッド” 最高主賓室

「始まったようだ」

「そのようですね」

フェイス・レスは立ち上がると巨人族が攻めてきている方向の窓を見る。

「どうやら今回は前回や前々回のようには行きそうにないですね」

「そうだな。あきらかに気の数も増えている。しかも一ヶ所にこんなに。」

「およその数は？」

「10、いや20万はいる」

「貴女はどうしますか？」

「私はあの気の集まりが気になっているんだ。何か嫌な予感がする。私はそちらを確認

をするつもりだ」

「そうですね。では、ご武運を」

そう言い残しフェイスは部屋を出ていった。

レーネはもう一度気を探ってみるが、やはり20万近くの気が一ヶ所に集まっておりその周りを大きな気（おそらく巨人の）が10ぐらい感じられた。

彼女はシン国で気の流れについて少し修行をしているのでこういうことがわかるのだ。

だが、彼女は自分の技術はまだまだと思っているのもそれに自信が持てない。

だから、フェイスに協力も求めず一人で確認することにした。強さにはそれなりの自信があつたからだ。

「しかし、あのバカ共はこんな時にどこで何をしているんだ。」

そう呟きながらレーネは部屋を出ていったのだった。

◇◇◇

「キアラ」さんが入室しました。

キアラ：すみません。今、誰か「アンダーウッド」にいる人はいませんか？

真由美：もちろん、いますよ☆

真由美：いや、キアラさん。今、魔王が襲来しているのにチャットなんて不謹慎で

すねwww

キアラ：貴女に言われたくないですよ。というか、無事だったんですね

キアラ：死ねば良かったのに（ボソツ

真由美：あは！相変わらず、酷いデスネ

キアラ：そんなことはどうでもいいです。

キアラ：それより、今どんな状態になっているか詳しく教えてくれませんか？

真由美：はい？当事者であるからキアラさんの知っている以上のことは教えられませんよ

キアラ：そうでなく、攻略がどこまで進んでいてどんな行動をするのかを知りたいんです

キアラ：私のコミュニティはあまり大きくないのでイマイチ情報が足りないんですよ
真由美：あはははは！そうですか、コミュニティが小さいんですか！どうしよういかなく。教えてあげてもいいですけどねwwww

キアラ：ふざけるのも大概にしろ！今がどういう状況か分かっているんでしよう!!!??

真由美：ごめんなさい。今回は素直に謝ります

真由美：しかし、私もあまり詳しくないので推測を交えて話します

真由美：いいですよ？

キアラ：謝るぐらいなら初めから教えてください。あと、それで構いません。少しでも情報が欲しいので

真由美：では、まず現在あの浮遊している古城に拐われた人々がいるのはご存知ですか？

キアラ：え、そもそも古城に拐われた人ってなんですか！？

真由美：どうやら、鱗の化物が回収される時にどんな手違いか運ばれた人達がいるんです

キアラ：それだと、残存している戦力を結集して短期決戦に出るんですね

キアラ：でも、もしもしですよ。もし、また巨人族が攻めて来たときは大丈夫なんですか？

真由美：流石にそれも想定しているでしょう。私の予想では、あの“ノーネーム”の主力が一人攻略部隊に。もう一人が防衛に回ると思っています

キアラ：それに“箱庭貴族”は防衛でしょうね。あと、フェイス・レスや暁のも防衛に回ってくれるとさらに安心できますね

真由美：どーでしょう。私、どちらもあまり知らないですよ。だから、行動パターンが読めません

真由美：まあ、そうそう“アンダーウッド”が攻め落とされることはないでしょうから安心してください

キアラ：はい、ありがとうございます（――）
 真由美：最後に、予想でもなんでもないことですが「ノーネーム」のメンバーが何人かもう古城に侵入しているとか何とか

◇◇◇

「アンダーウッド」西の森

「さてと、「アンダーウッド」方はどんな感じかなー？」

エンヴィーは樹の天辺から双眼鏡で「アンダーウッド」の様子を傍観していた。

「ははは、三回目だつてのにもう見張りの奴らほぼ全滅してるよ。プライドだけで根性がないー。三回目だよ、三回目。普通な対策ぐらいするよね〜♪」

双眼鏡を少し上に向けて倍率を上げる。

「アンダーウッド」の天辺では、緋色の髪「箱庭の貴族」とリンが戦闘を行っていた。

「はあー、あれが「箱庭の貴族」か。初めてみたな。でもいくら強力なギフトを持っていてもリンには勝てないよ、兎さん（笑）」

今度は向きを変えてみると、儀式をしているアウラと黒斑の服を着た少女が見えた。

「あのオバサン何モタモタしてるんだよ。さつさと、このエンヴィー様が盗んできた「バロールの死眼」を使えばいいのに！んって、何で勧誘してんの？ああ、あれが役に

立たなかつたクズ魔王か。しかも、隷属されたのかよ。あーあ、そんな奴マジいらないから。さっさとしなよ。オ」

バサンと続けようとした時だった。

視界がブラックアウトした。

いや、違う。双眼鏡の拡大した視界いっぱいには何か大きいモノで遮られたのだ。

「何?」

言つた時には、すぐ近くにバキバキバキバ、ズシャアア!と巨人族の大質量がぶつ飛んできた。

エンヴィーは瞬時に跳躍するし、次々飛んでくる巨体を避ける。

「アハハ・リンやオバサンの所に行かず、このエンヴィー様を狙ってくるなんてセンスあるなあ」

本来なら、エンヴィーの役目は“バロールの死眼”を盗んで来たことで終わっていて“アンダーウッド”が潰されるのを高みの見物しているはずだったが、そうもいかなくなつた。

エンヴィーは巨人族の巨体により樹木が折れ出来た剥げた地面に着地するとすぐ近くで声がした。

「お前は何だ?」

声がした方を見ると、ほんの3mほど離れた倒木の上に少女が佇んでいた。

「ん、お姉さんこそ誰よ？ そう言うのって自分から名乗るべきじゃないの？」

「私は『ウィル・オ・ウイスプ』所属、レーネ・K・エノモトだ」

「あは！ こりやすごい！ 北側第二位の暁のレーネだ！ はっは、そんな有名人がこのエンヴィー様に何の用？」

「エンヴィー・嫉妬か。キリスト教・カトリックの七つの大罪、嫉妬の罪の具現化か対応する悪魔、またはそれを背負った者といったところだろうか？」

「どうだろうね。お姉さんの想像に任せるよ」

「まあ、いい。エンヴィー、君にもう一度問う。お前は何か？ 中に何人いる？」

この言葉にエンヴィーは、人を食ったような表情だけは変えずに殺気を放ち始めた。

「そんなこと、どうでもいいんじゃない。お姉さんの目の前にいるのは敵。ただそれで良んじゃない、の！」

エンヴィーは一瞬でレーネの懐に入り込み、

「ははっ！」

右手を変化させた剣で斬りつけた。

手に肉が裂ける心地良い感覚が——しなかった。

代わりに来たのは、キイイインという甲高い金属音と厚い鉄板にでも斬りつけた感

覚。

「確かにお前の言う通りだが、戦闘を優位に進めるにはそれだけではダメだな。ああ、それと私には基本的に刃物は通用しないから無駄だぞ」

レーネは左腕で刃を受けめながら言った。

「では、次はこちらだ」

その言うと共に右腕の力を急に抜き、身体を沈み込ませる。

力押しで斬ろうとしていたエンヴィーは前のみになつてしまい、そこをレーネの回し蹴りがクリティカルヒットした。

「かはっ!!!」

バキ、バキバキと木に激突してはそれをへし折りながらぶつ飛ぶエンヴィー。

その姿ははまるで大砲の弾のようだった。

何本もの木を薙ぎ倒してようやく止まると、

「ゲホツ、ゲホツ。ああ、流石は北側第二位だ。それなりにやるようだ。」

「おや、殺さないように手加減していたがまさか意識があるとは驚いた」

「でも、あくまでそれだよ、お姉さん。そんなんじやこのエンヴィー様は殺せないよ！」

エンヴィーはまるでさっきの攻撃のダメージが無いように普通に立ち上がり、ニヤリ

と笑った。

「どうやら、そうらしいな。久しぶりに私も本気を出すとしよう」

「フフフ。お姉さんは刃は効かないって言っていたけど、他の攻撃は効くってことだよ
ね？なら、それをじっくり探しながら痛めつけてボロ雑巾のようにしてやるよ」

「はっ！なら、私はその前にお前を倒すだけだ！」

「殺ってみろよ、人間！」

レーネは砲弾のように跳躍し拳を引き絞る。エンヴィーはそれをで向かい討とうと
両腕を変形させる。

両者の死闘はまだ、始まったばかりだ。

第12話 人造人間は殺せない

“アンダーウッド” 西の森

ガキン、ドゴ、ガツ。そのな打撃音幾つも連続して響き渡る。

「ほらほらほら！これならどうだ！」

そう言いエンヴィーは眼には見えないが電気の帯びた両手ハンマーで殴りかかる。

レーネはそれを正面から打ち返そうし触れ、苦悶の声を漏らす。

「くっ！」

「はは！電気は有効」

「はあああ！」

が、それも一瞬。レーネは気合いと共に拳に力を込め打ち返すと同時にもう一つの拳でエンヴィーの顔を狙う。

しかし、エンヴィーは素早く首を動かしその砲弾のごとき一撃をかわす。

そして、そのままバックステップで距離をとった。

「そろそろお姉さんのギフトの仕組みが分かってきたよ。さあ、どうする？土下座して謝るなら見逃してあげてもいいけど？」

「こちらこそお前のギフトがどういいうものか分かったぞ」

「ハッ、嘘だね。お姉さんがこのエンヴィーのギフトがどういいうものか理解していない。まあ、仮に理解したところで勝つことは出来ないwww」

レーネは舌打ちをしたかった。

実際のところエンヴィーのギフトがどういいうものなのかイマイチ分かっていなかった。

初めは体の各部を武器に変化させるものかと思っていたが、今度は電気を帯だした。他のギフトを使った形跡はない。これは確かだ。

だから、これがどういいうギフトであるのかはやっぱりわからないし弱点も分からない。

それに今ではレーネに電気が有効ということが分かり、全身に電気を帯びている。

素手が今の武器であるレーネでは手が出しにくい。

レーネのギフト“剛力招来・超力招来”は自身の身体を構成する単子を超高度物質化するギフトである。

それにより筋力を数千倍にまで強化することができ、強靱な身体と臂力を手に入れてくる。

簡単に言えば、身体を硬化していることのでかなりの攻撃力と防御力を持っているとい

うことだ。

しかし、あくまで硬化しているようなものだから物理攻撃にしか強くないし攻撃も物理特化だ。

だから、電気や熱には弱いし実体のないものには攻撃をすることが出来ない。仕方がないな、レーネはそう思い懐から鏢いくつか取り出し瞬時に投擲した。

「ははは、そんなの当たらないよ」

エンヴィーは横に飛ぶことでこれをやすやすと避ける。

「それは、やってみないとわからないだろう？」

レーネは休む間もなく、鏢を取り出してはエンヴィーに向かって投擲していく。

それをエンヴィーはまるで猿のように木々を利用した三次元的な移動で全て避ける。

その回避行動は着実にレーネとの距離を縮めていった。

そして、ついに間の距離10mまで縮めるとエンヴィーはレーネに向かって一直線に走り勝負に出た。

エンヴィーは飛んでくる鏢を左腕を剣にし弾き、右腕の電気を帯びた拳を握りしめる。

それをレーネは懐から鏢を取り出しながらバックステップでその一撃を避けようとする。

エンヴィーの腕のリーチ的に絶対に届かない。しかし、こちらの攻撃が確実に当てられる絶妙な距離。

「はああ!!」

気合いと共に全力の蹴りが——当たる直前。

ヒウツとエンヴィーの腕が蛇のように伸びレーネの首に巻き付いた。

「うあ あ あ あ あ あ!!」

「どうだい？お姉さん達みたいなのニンゲンには出来ないことですよ？」

ギチ、ギチギチとエンヴィーは感電して苦しむレーネを笑いながら締め上げていく。

「さあ、今なら死に方を選ばせてあげるよ。と言つても二択しかないけどねwwwwww」

このまま絞め殺されたい？それとも電圧を上げて感電死したい？」

「ぐうう」

レーネは電気に苦しみながらもエンヴィーの腕を振りほどこうと手足を動かしてもがくが全然力が入っていない。

「それにしても、北側第2の暁のレーネがこんなんじや第1のウイラも高が知れたもんだな。あ、お姉さんと同じコミュニティだったけ？『ウイル・オ・ウイスプ』って意外と大したこゝわす」ああ？何か言つた？聞こえないよお姉さん」

「その傲慢さが身を壊すのだ、エンヴィー！」

「何言つて——」

その瞬間エンヴィーの足下が蒼く光った。

と、認識した時には幾つもの樹から生えたトゲがエンヴィーの身体を貫いていた。

「ぐはっ。何で。だ？」

「ゴホツゴホツ。なに、大したことじゃない。確かに私は基本あのギフトしか使つて

いないが他のギフトもあるということだ」

レーネは地面に座り落ち、軽くせき込みながら吐血するエンヴィーを見上げる。

「もう一つのギフトは『錬丹術』。これは面白いことに遠隔錬成というものが出来るのだ。そのために、お前に当たりもしない鏢を何本も投げたというわけだ」

そう言うレーネの足元には、二重の円の中に五芒星が描かれその頂点には一本ずつ鏢が刺さっていた。

「はっ。罠だったのかよ」

「ああ、そうだ。エンヴィー、取引をしないか？このまま出血し続けたら死んでしまう。

もし、お前たちのことを話してくれるなら今すぐ治療しよう。捕虜としての扱いも出来るだけ優遇する」

「もし、断つたら」

「お前の頭をぶち抜く」

「は！殺れるもんなら殺ってみろ！」

「そうか。それは、残念だ」

その声と共に錬成陣が光り、エンヴィーの頭をグシュと貫いた。

「ふう。人を殺すのはやはり気分が良いものではないな。当たり前ではあるが」

レーネは立ち上がると、パンパンと服の汚れを払った。

横目でチラッとだけ串刺しにされたエンヴィーを見る。

「さて、休んでいる暇はない。黒ウサギ君の加勢をしないとイケないとなー」

気合いを入れ直し、黒ウサギとリンと呼ばれた少女が戦闘をしている方を目指して走ろうとした時だった。

パリー。そんな電気が弾けるような小さな音がした。

と、同時に寒気がした。ザワザワとした嫌な感じ——そうまるで無数の人のようなものが苦しみ蠢いているようなそんな気配だ。

レーネがエンヴィーを「アンダーウッド」で知覚した時と同じだが、近くにいるせいか鮮明に気を読める。

本能的に串刺しエンヴィーの死体から距離をとり、何が起きても対応出来るよう構える。

バチ、バチと幾つもの紅い稲妻がエンヴィーの身体を走り抜ける。

「言つたでしょ、お姉さん。『殺れるもんなら殺つてみる』って。こんなんじやこのエンヴィーは殺せない」

バキバキと次々に身体を貫いていたトゲがへし折られ、傷がみるみるうちに修復されていく。

「やはりお前、中に何人いる!？」

「可笑しいなあ。可笑しいなあ。何でお姉さん分かるの？」

エンヴィーはわざとらしくそう言いながら笑っていたが——

「やっぱここで死んどくか、ニンゲン？」

一瞬で表情を変え、先ほどの戦闘の時とは段違いのプレッシャーを、殺気を放ち始めた。

レーネはそのプレッシャーに飲まれそうなるがどうにか踏みとどまる。本能は警鐘をうるさいほど鳴らしている。

相性は悪い上に殺したつて死なない。下手をしたら不死かもしれない。対処法不明。該当する伝承等は記憶のデータベースにない。

「良いねえその顔。クッククック。さあ、こつから第二ラウンドの始まりだ」

これは本気でマズイことになったな、とレーネは冷や汗を流したのだった。

◇◇◇

私の人生を一言で言うのなら、「あーあ」だ。

だってそうだろう？こうなつてしまつては、もうどうしようもない。

仮に私を殺すという勝利条件以外のでクリアしてもどのみち私は死ぬ。

仕方のないことだ。なんか、ネガティブつて思うかもしれないがそれが現実。

心残り？

そんなの「無い」つて言つたら嘘になるに決まつている。

私だつてまだまだ生きていたいし、まだ誰も見たことのないような絶景を見てみたいし、心踊るようなギフトゲームにも参加したい。

そりやね・そりや・私だつて女だ。好きな人と素敵な恋をして、結婚して幸せな家庭とか築けたら本当に最高だった。

でも、何か・もう「あーあ」つて感じ。

そもそも、好きな人？

いた。過去形だ。

今さら伝えておけば良かったなんて思つてる自分に自己嫌悪。

勇気を出せなかった私にちよつと自己嫌悪。

ホントこんな事になるなら言つておけば良かった。

そういえば、彼は私のことを本当はどう思っていたのだろうか。

コーキは、どうとも思っていないと言っていたが。

実際はどうだったのだろうか？

少しくらい好意を持たれていたら嬉しい。

嫌われていたら、死にたい。死んで背後霊か守護霊にでもなつて一生一緒にいたい。

私だつて、私なりに好意を持つてもらおうと努力した。頑張つた。色々頑張つたんだぞ！

好みを知るために観察したり、少しでも意識してくれるよう一緒に家事したり火龍誕生祭では一緒に回つたりして、その、でデートっぽいこともした／／。本当なら今回の収穫祭も、て、あれ？振り返つてみれば、何か私の行動つて自分の欲求を満たすための行動の割合が多い気がするかも？

なんか不安になつてきた。

確かに、つい感情に流されてぎゅつてしたりモフモフしたりした時もあったが。

嫌がつてたけど、あれは照れだよな？彼はツンデレなだけで本当に嫌がつてはなかつ

たよな？

というか、カズマつてツンデレっぽいけどクーデレでもあるのかな？

まあ、今更なことだな。

結局、彼のデレたところを見られなかったし、今以上のもっと深い関係になることは出来なかったと思うとやっぱり「あーあ」だ。

後悔しないで死ぬる人生、憧れるなあ。私もそんな人生を歩みたかった。

もし、来世があつたら「私」にはどこにでもいる普通の「人間」としての幸せな人生を送つて欲しいものだ。

もうこれくらいいいかな？

私も一応人間に比べたら長く生きていたし、気がかりだった黒ウサギとジン達ともまた少しではあるけど一緒に過ごすことが出来た。

コミュニケーションことは十六夜や飛鳥達がいれば安心だ。

もう私がいなくてもやっていける。なんてたつて彼らは前代未聞の「問題児」だからな！

それに私の生きたいっていう我儘で多くの人たちを殺したくない。仲間なんてもつてのほかだ。

もう嫌なんだ、同士を殺すのは。

だから終わろう。あのゲームと一緒に私も。

。

.....
あ、でもやっぱり嫌だな。

このまま死ぬのは。

もうダメだとしても、諦めないといけなくても、せめて私の想いを伝えたい。

本当はもう伝えることなんて出来ないこと、分かっている。

例え、返事を聞けなくたって構わない。

もしご都合主義にでも何でもいいから奇跡が起きてもう一度会うことが出来たなら、私はこの心に溢れているどうしようもない想いを伝えよう。

この言葉に想いを込めて、

——カズマ大好き。愛してる

第13話 偽装の錬金術師

吸血鬼の古城・黄道の玉座

レティシアが目を覚ますと、石造りの独特な匂いが鼻腔を刺激した。

その匂いは何処となく懐かしい気がする。どうやら知っている場所らしい。

明かりのない部屋は薄暗く、頭上を見ると天井には煌びやかな水晶が敷き詰められていた。

「黄道の玉座……。やはり此処に——」

「お、レティシアちゃん。起きた？」

ハツと周囲を見回す。

そこにはコーキに耀、そしてジャックとガロロ、あと何処かで会ったことがある気がする白髪の少年がいた。

カズマはいない、それに少し（ホントはかなり）がっかりしてしまうレティシア。

やはりそんな都合の良いことなど起きないと、思った。

「コーキ、耀、ジャック……。それに、ガロロか」

「おう、懐かしいなレティシア。二十年ぶりぐらいか？」

「そうだな。それくらいになるかもしれない」

「あらら？ガロロさんとレティシアちゃんって知り合いだったの？」

「おうよ。小僧で言う『旧ノーネーム』とは同じ連盟だったからな。知り合いっていう

より、戦友だ」

「へえ、やっぱり前はすごかったんだねえ」

としみじみと言うコークィ。

「そ、それはそうとガロロ。お前は此処で何を」

「そりゃ、アンタのゲームをクリアしに来たに決まってるだろ？なあ、耀嬢ちゃん」

「うん。解けたのは第三勝利条件だけけど」

耀はそう言いながら石室の壁を念入りに調べている。

暫くすると、何か窪みを押すような音が聞こえた。

「あった。コークィ、方角は？」

「そっちは処女宮だね。そこを基準に十二等分すると」

ガコンと何かが填まる音がした。

レティシアは自分の元居城にそんな仕掛けがあったのかと驚いた。

「それは私たちの神殿に安置されていたものじゃないか。一体何を」

「レティシアはゲームの内容を知ってるんじゃないの？」

「実はこのゲームだが、他人に任せて作らせたものでな。本来の『主権者権限』^{ホストマスター}のゲーム内容とは大幅にかけ離れているんだ」

「へえ、他の人に作ってもらったことって出来るんだ。じゃあやっぱり、この仕掛けはゲームと無関係か」

コーキはまた一つ欠片を填める。

「ねえ、レティシア。この空飛ぶお城って、元々——じゃなくて、えつと「ある一定の軌道のある一定の期間で何度も周回する城」そう、それだったんじゃないかな？」

途中コーキによる助けが出された耀の質問レティシアは驚いた。

「あ、ああ。よく分かったな。我々吸血鬼は世界の系統樹が乱れないように監視する種族だったからな」

「そう。なら監視衛星だったんだね。うん、そこは分からなかったな」

「あは！僕は知ってたけどね！」

「コーキ。今良いところなんだから水差さないで」

「ええ？でも、僕これでも最近雑学にしかならないからって適当に覚えていた神話とか童話とかを勉強してるんだよ？特にそれらに登場する種族とかが箱庭ではどんな感じか？ってのを中心に。耀ちゃんもご飯のことばかり考えてないで少しは勉強でもしたら、僕に水を差されずにカツコ良くキメれるよ☆」

この言葉に耀はかなりムカツときたが、事実であるのでコーキを睨むことしか出来なかった。

「ゴホン。私が今填めているのは二つ目の解答の“砕かれた星空”、天球儀の欠片だよ」
「これはタイトルを太陽同期軌道と変換させて第三勝利条件の“獣の帯”を見れば、それが“黄金十二宮”を指していることが分かるよね？それに“砕かれた星空”のワードも会わせると天体分割法のことも指していることが分かる。では、どうやって十二宮を捧げる？勝利条件は“捧げる”ってあるから捧げられる物ってことだよ？そう考えたら天球儀って答えになったわけ」

「な、なんと。素晴らしい！見事だ！見直したぞ二人とも!!」

「ありがとう。でも、このゲーム解けたのはガロロさんやジャック、他のみんなが協力してくれたから。それに。」

耀はここで言葉を切ると、それをコーキが引き継ぐ。

「実際、天球儀っていうのにいたったのはその白いののお陰なんだよね。嫌なことに」
その時のコーキの不機嫌そうな顔に、珍しいことだなとレティシアは思いながら白い彼を見た。

やはりその顔は何処かで会ったことがあったことがあるような気がした。

「よオ、吸血姫。こんな感じで話すのは初めてだな」

「その言い方」。やはり君とは何処かで会っているのか?」

「さアな? 会っていると言えば会っているが会ってねエと言えば会ってねエ」

随分と曖昧な答えだ。でも、彼のような特徴的な人物に会っていればそうそう忘れられないと思う。

真つ白な肌と髪。瞳は左右で色の違うオッドアイは、右が翡翠色で左が赤。

その左の瞳にはギリシヤ数字が刻まれており、針が時を刻んでいる。

「まだ分かんねエのか? オマエは大好きな錬金術師の顔を忘れちゃうのか、ああ?」
「!?!?!」

「何処かで会った気がする? 当然だア。この顔はオマエが毎日見てる錬金術師^カのだからな」

レティシアは意味が分からなかったが確かによくよく見てみると、色は違えど髪型や体つきなどが一緒だ。

(どういふことだ!?! この少年は、コーキと同じ変身系のギフト所持者か? いや、それなら)

と白カズマの言葉の真意を探るため頭を巡らしながらも、レティシアの心の中では消えかけていた焰が燃え上がりそうになっていた。

「あーあーあー! 君は何でそう混乱を招くことをするかなあ? ちょっと、こっち来い」

「ンだよ、事実を言っただけだからオが」

「良いから、来いってんだよ!」

コーキは白カズマのフードを掴むとズルズルと引きずっていく。

「ちよつと待つてく、「悪いけど、嫌だ」」

「レティシアちゃんがすごく気になるのは当然だね。本当なら今すぐ説明したいけど、状況が状況だけにね。今説明することは出来ないの。でも、このギフトゲームが終わったら全話すから。それまで待つててね!」

そう何時もの笑顔で言うと、コーキは白カズマを引きずって玉座から出ていった。

レティシアは止めることが出来なかった。彼の笑顔の裏に影を感じたから。

(でも、このギフトゲームが終わってからは遅いんだ。)

◇◇◇

「君はやっかいごとを二つも同時に起こす気なの?」

コーキは玉座を出て回廊をしばらく歩くと、そう言いながら振り返った。

「そんなつもりはねエよ。でも、時間がねエのも確かなことだ」

「それは、引つ込む気になったってこと? なら、許すけど」

「そうじゃねエ。吸血姫の時間の話だ」

「ん? それどういう意味? というか、何でレティシアちゃんには話そうとしたの?」

「死者に花を、だ。よく契約書類ギアスロールを思い出してみる。あんなペナルティをつけてんのノーリスクなわけねエだろ」

「確かにギフトゲームも多少等価交換な部分はあるけど……まさか!」

「あくまで推測だ。それで、オマエはどオするんだ?」

「どうするも何もゲームをクリアしないと大勢の人が死ぬし、クリアしてもレティシアちゃんが死ぬ?」

コーキはそう自分で言って笑った。

「ぶつ、ぶはははは! ナニそのラノベやゲームみたいな選択? 大を取るか小を取るか。仲間のために多くの人を見殺しにするかしないか」

「諦めんのか?」

「状況から見るとこのままゲームをクリアするのが最小限の被害で最大の人々を『アンダーウッド』を守る。きつとレティシアちゃんはこのことを知っているだろうし、ゲームクリアしてもらいたいから話さなかったと思う。本人がその結末を望んでいる上に多くの人を救えるからこれは正しい選択だと思うし、仕方のないことだとも思える。結局、レティシアちゃんを殺してみんなを救う。それが最善策だよ」

コーキは己の無力さを噛みしめるようにうつむいていると、

「————GYEEEEEEYAAAAAaaaaaa」

a E E E E E E E E E Y A A A A a a a a a a a a!!」

と古城に巨龍の雄叫びが響き、雷雲の稲光が差し込んだ。

「ああ、再開されたんだ。もう諦めるしかない——いや、それじゃダメだ」

「僕は医者だ。そして錬金術師だ」

「本当の医者は、患者の命を諦めたりは絶対にしない。最後まで最善を尽くして患者を助けようとする」

「本当の錬金術師、研究者は自分の納得のいく方法が見つかるまで思考を停滞などさせない」

「はっ、バットエンドなんてゴメンだね。0じゃなければ、歩み続ける。それが錬金術師だ」

その瞳には焰がついていた——ように見えただけだった。

「——という風に熱く求める方が好きかな、君としては？」

まるでさつきまで熱く語っていたのが嘘のように何時もの意地の悪い笑顔でそう聞く。

「チツ、そういうのを言っちゃまうところがオマエの面白くねエところだ」

「いやいや、正直君の力なんて借りたくないんだけど、さっきの言葉だつて完全に嘘じゃないんだよ。だから、可能性を少しでも上げるためにも、レティシアちゃんのため

にも仕方ないじゃん」

それに、と続ける。

「君の主義だったか信条だったかをこれまでの行動を見るに……。君、意外とこのゲームクリアする気満々でしょ？」

「ああ、？ンなことアねエ。オレはただ暇潰しに参加しているだけだ。勘違いすんじゃないぞ、殺すぞ」

「ハイハイ。ともかく、僕は第四勝利条件を満たしに行くよ」

コーキは知っていたのだ。最強種を召喚するのに多くは器と星の主権が必要ということ。

巨龍の核がレイシアであることも。しかし、圧倒的に彼には力が足りなかった。

レイシアを巨龍から引きずり出す力も、それに至るための力も。

そもそも最強種にただの人間が戦いを挑むことが自殺行為だ。

でも、嫌なことだが、心の底から嫌なことだが、最高に嫌なことに白カズマがいる。

それが切り札だ。彼は、笑顔のためなら何でも使う男だ。

「で、君はどうするんだい？」

挑発するように笑いかける。

「クソが！そういうのを言うのが面白くねエつってんだろオが」

そんな白カズマの不機嫌そうな顔を見て楽しんでる時だった。

『———そこまでだ、小娘ッ!!!』

「———した。———日部———下が———い!」

そのあとに雄叫びやあきらかな戦闘音がコーキたちの方にまで響いてくる。

「げっ、ここで黒幕からの邪魔が来たか。まあ当然と言えば当然だね」

「ゴタゴタ言つてねエでテメエは助けに行けよ」

「いや、君もでしょ!」

「ハッ、オマエの目は節穴かア?」

コーキはムカツときたがよく見ると、髪の色が徐々に変わっていつている。

それに合わせて白カズマの動きも鈍くなっていた。

にやけそうになるのを我慢しようとするが勝手に口角が上がってしまう。

ニヤニヤ。ニヤニヤ。

「ざまあみろ(笑) カズマの勝ちだ! 大人しく君はここに居るんだね♪」

「言つておくが、鍊金術師が消えんのが回避されるだけでオレはいなくならねエからな」

「そんなことどーでもいいよ。カズマが生き残ったそれだけで十分!」

コーキは白カズマを置いて耀たちのいる玉座の間に走った。

「耀ちゃん！ジャック！ガロ口さん！」

「コーキ殿！無事でしたか!?!」

コーキの来た通路とは違う通路を行こうとしていたジャックがいた。

「僕は大丈夫。それより状況は？」

「春日部嬢が黒いグリフォンと戦っています。私たちはその間に勝利条件を完全に満たすため十三番目の星座を探しに行きます」

貴方はどうしますか？、ジャックは言外に問う。

「それが何だか分かってる？」

「ええ、大体の目星はついてます」

「OK！なら、そっちは任せました！」

「ヤホホホ、任せられました。ご武運を」

そう言いコーキはジャックは別れた。

玉座に入るなり周りを見渡して状況を理解する。

一瞬だけレティシアと目を合わせ、すぐに出来て真新しい大きな壁の穴に向かってノーストツプで駆けていく。?

「この穴城下町まで続いているのかな」というか、敵がグリフォンってやっぱこっちの方がいいよね」

ギフトカードから愛用のショットガンを出し、いつでも使えるようにリロードする。「見えた！って、耀ちゃんが防戦一方になってるし!?しかも向こうの方が飛行能力が上だ。」

耀は城の周りを飛び、黒いグリフォンからの攻撃を避けるだけで背一杯といった様子だ。

コーキはトリガーにかけていた指を引く。

チツ、チツ、チツと音を立て飛ぶ火花は途中で灼熱の爆炎となり、生き物のようになり黒いグリフォンに――

「グー爺の邪魔をしないでください。マユズミさん」

そんな声と共に黒い影のような斬撃が飛来し、炎を両断した。

コーキは瞬時に体の向きを変え、斬撃の飛んできた方を警戒する。

コツ、コツと足音が響き渡る。

月明かりの影から姿を表したのは、身体よりも大きな漆黒の鎌を持った銀髪碧眼の少女。

彼女、北山 あきと 白は微笑みながらこう言った。

「初めまして、お会い出来て光栄です。偽装の錬金術師、コーキ・C・マユズミ」

第14話 ドツペルゲンガー

「ふむ、なるほど。色々とツツコミたいことはあるけど、あいにく僕はポケだからね。そういうのはやらないよ」

「そうなのですか。知っていましたけど、それは残念ですね。僕としてはツツコミに対して丁寧に答えるっていう方が都合が良いのですけどね」

「単刀直入に言うよ。僕の邪魔をしないで。正直、僕は女の子と戦うのって嫌いなんだよね。それが美少女なら尚更だよ」

「お褒めに預かり光栄です。噂通りの方のようですね。しかし、僕もグー爺の邪魔をされるのは困るのですよ」

空を舞う一匹と一人を見上げながら白は続ける。

「別にこの戦いの邪魔をしないのなら、僕も争う理由はありません。なんだったら、貴方にとつて興味深い話でもしましょうか？」

「へえ、興味深い話ね。それって、君が僕の名前を知っていることや謎の二つ名についてのことかな、銀髪ちゃん？」

「ええ、そうです。ああ、それと僕の名前は北山 白（しろ）って言います。以後お見知りおき

を」

「こちらこそ。よろしくね、白ちゃん」

「下の名前の上にちゃん付けですか。まあ、そういうところがマユズミさんの良さでしようね」

そう溜め息を吐きながら、大鎌の刃を下ろす。

もちろん、コーキもショットガンの銃口を下げるが仕舞いはしない。

コーキの考えは簡単だ。

あの炎も斬る大鎌の斬撃は厄介な上に仕組みもよくわからない。

自分は近接戦闘は不向きだ。それに対して相手は、ニコニコしているがそれなりの場を踏んでいると見える。

なら、耀には悪いが隙を窺うっていうのが最善策だろう。

それに耀なら自分が加勢しなくても勝てるのではないか、という期待もある。

という風な諸々の考えから話に応じることにした。

「それじゃさあ、まず君は今回の黒幕の一人なんだよね？」

「ええ、そうです。言って置きますけれど、火龍誕生祭に僕たちは関与してませんよ」

「ふうん、君たちは関与してないね。まあ、どの範囲なのか知らないけど今はいいや。

そんなじゃ、何で僕のことを知っているの？名前以外にも性格やギフトとかの個人情報

知っていいような気がするんだけどな」

「ええ、ご想像の通り。ある程度のごことは貴方のことも貴方の相方であるカズマ・N・エノモトさんのことも知っています」

「へえ、カズマのことも調べたんだ」

「調べた、というより僕がいた世界のアメストリス国ではそれなりの有名人ですから自然と噂は耳にしていました。マユズミさん、先ほどの二つ名が貴方のだということは薄々分かつているのではないですか？」

「まあ、何となくはね。でも、僕は国家錬金術師じゃないよ。それから考えられるのは、君は未来人ということ。違うかな、白ちゃん？」

「ご名答。流石です、マユズミさん」

白は尊敬の念のこもった瞳でコーキを見ながら続ける。

「貴方の言う通り私は1916年のアメストリス国から箱庭に来ました。貴方は1914年に国家錬金術師資格試験で見事合格し、二つな「偽装」を与えられるはずでした」
「そっか。あと一年だったか。というか「偽装」ってなんか偽物みたいな二つなだよ
ね。何ゆえそんな二つ名なの？」

「さあ、それは私も知りません」

「カズマは？その流れだと、カズマも合格してそうなんだけど」

「もちろんエノモトさんも合格していますよ。二つ名は鉄^{くろがね}」。鉄の錬金術師です」
 「うっはー！カッコいい！いいな、カズマは！そんな良い二つ名もらちゃってさ」

「確かに二つ名はちよつと残念かも知れませんが知名度ではマユズミさんの方が上ですので安心してください」

「それはまた何で？」

「筆記試験で満点を叩き出して合格したからです！あのエドワード・エルリックですら出来なかつたことを成し遂げたのですから。当然、注目はされましたよ」

「そっか、僕筆記試験満点だったんだ。そりゃ、注目されるよね。というか、エドワード君みたいに注目されるなんて照れるなあ。」

コーキは、あははと笑いながら頭をかき、白はうふふと笑う。

「いや、確かに面白いな。しかも、白ちゃんて僕たちのこと尊敬してるみたいだし、それはそれで嬉しいなあ」

と心を和ませて、今度はずっと気になっていたことを聞く。

「ねえ、ところでさあ。何でアメストリス国にいるのかな？」

「それはどういう意味ですか？」

「だって白ちゃんさ。どう見たって西洋人じゃん。なのに名前が和名ってちぐはぐ過ぎるよ」

「ああ、それですか。簡単な話です。僕は日本では珍しいハーフだから名前が和なのに外見が洋なのです」

「ああー、そっか！そういうこともありえるんだった！21世紀じゃ珍しくないらしいけど」

指をパチンと鳴らして納得するコーキ。

「じゃあ、君は遠路遙々極東の国から何をしにきたんだい？」

「そんなこと聞くまでもないでしょう。錬金術大国であるアメリクスに来る理由など、それを学ぶため以外ありませんよ」

「なるほど、君は留学生として来たんだね。だから国家錬金術師に詳しいんだ」

「ええ、まあそんな感じですよ。それではいかがでしたか、僕の話は？見た感じ楽しんでいただけたようで結構ですが、どうやらまだ時間があるみたいですね。他に質問とかありませんか？」

耀と黒いグリフオンの戦いは空から市街地へと場所を変えている。

「うーん、そうだね。何かないかなー？」

とコーキは考える。が、これはフェイクだ。

コーキの脳は先ほど指を鳴らしたことより選択された曲でダブダブだった。

『一瞬♪刹那♪刹那の時間♪』

時間の刹那が一瞬の刹那♪一瞬♪刹那——」

「あ！あったあった！大事なことを白ちゃんに確認するのを忘れてたよ」
また指をパチンし、攻撃魔法を高速起動する。

「何を確認したいのですか？彼女がいるかとか身長がどれだけ伸びるかですか？」
「ううん、違うよ。確認したいことはねえ——加速スイッチ」

「!!」

そう呟いた時からコーキは神速で動き始める。効果時間は一秒もない。
でも、神の領域に達している彼には十分だ。

「断頭スイッチ」

振りかぶった手に白銀の斧が姿を現す。

断頭スイッチ。それは名の如く断頭をする為の片手斧を呼び出す攻撃魔法。

スキルは「威力拡張」。断頭使用としたときのみ攻撃がはね上がるのだ。

ザシユツ！ゴトツ・。

呆気ないものだ。少女を断頭したコーキの感想はそれだけだった。

殺さなくても良かったかもしれない。よく話し合えば退いてくれたかもしれない。
きつと彼女はコーキの姿が消えたと思っただろう。

その時には頭が宙を舞っていた。痛みは無かったと思う。

それがコーキの最大限の配慮だった。

この声を聞くまでは、

『女の子と戦うのつて嫌いなんだよね』と言つてませんでしたか、マユズミさん？」

コーキの左側。そこには先ほどと変わらず、大鎌を持った白が立っていた。

すぐに断頭した頭と身体を見た。

それは真つ黒に塗り潰した影のようになっていた。

「重ねて聞きますが、ドツペルゲンガーつてご存知ですか？」

ボオツ！と影の身体が爆せ、幾重もの影の刃となりコーキに襲いかかる。

それを右手の斧で全て弾き返えしながら、ヘッドフォンファズ「脳内魔導起機」を操作していく。

「ふむ。どうやらその左耳のヘッドフォンが新しいギフトのようですね」

「そうだよ、バレちゃしようがないね！それにしてもドツペルゲンガーつてことはさつ

き殺したのは偽物つてわけだね？」

「ええ、そうですね。ここの城を守っている影よりも断然性能はこちらが上です」

いつの間にか黒い影の頭も身体も消えさつていた。

自分と白。一対一の今なら切り殺せる。

コーキは確かに女の子と戦うは嫌いといったが、殺らないとは言っていない。

「反重力スイッチ！」

そうトリガーコードを叫んだ瞬間、身構えていた白の小柄な体が空に引つ張られ体勢を崩した。

反重力スイッチは一瞬だけ重力を好きな向きに出来る防衛魔法。

一瞬しか効果がないが今はそれ十分。コーキは一気に白との距離を詰め、叩き斬ろうとするが

「随分と多彩なギフトのようですが、それはこちらも同じです」

あろうことか足の着かない空中で傾いた姿勢を、自分の影からアンカーのような物を出して固定し、逆にこちらの首を刈ろうと大鎌を振るう。

「ちっ!!」

コーキはすぐに軌道を変え、迫るりくる死神の刃を受け止める。

ガキイーン!と金属の刃同士がぶつかり合いギチギチとつばぜり合いをする。

「質問いいかな? さっきの続きなんだけどさ」

「おや? あれはフェイクだったと思ってましたが」

「いや、そういうわけでもない。実際根本的にこの質問をしないといけなかつたんだよ」

「この状態で長話をしていると、斬り殺されますよ?」

白は大鎌を握る手に力を込めていく。

すると、リーチも短く片手で振るうこと前提の武器では押されていくのは当たり前だ。

「ううううう！た、単純な話だよ！この話を信じるにたる根拠がないそれだけだ」

「信用してもらえないことは悲しいことですね。では、どうしたら信じてもらえますか？」

「それこそ君は分かっているんじゃないかな？僕たちの、アメストリスの錬金術を使えばいい」

「やはり、そうですね、か！」

瞬間、白の影から鋭い刃が突き出しコーキの心臓を貫こうとする。

コーキは斧を手放すと全力で横に跳ぶことでこれを回避。

しかし、着地点に先回りされていた白に柄で殴られてしまう。

「ぐふっ!!がっ!？」

そして、さらに柄で殴った流れでぐるりと回った白に蹴り飛ばされた。

「残念ですが、僕には錬金術を使うことは出来ません」

白は悲しそうな、羨ましそうな顔で言う。

「箱庭こぼしに来る過程で門を通りました。門の向こう側であるここでは使うことは出来ません。だから、余計に羨ましいのですよ。マユズミさんもエノモトさんも」

「それは、どういふこと？」

コーキは蹴られたところを押さえながら立ち上がり、問う。

コーキの知っている限りここに来る方法は召喚されることだ。

だから、箱庭に来たら「恩恵」^{ギフト}が使えるなくなる何て理解出来なかつた。

「僕は誰かに召喚されたわけではなく、自分の意思で箱庭に来たわけでもありません。結果として箱庭に来てしまったのです。恐らく通行料として「恩恵」という名の代価を支払わされてね。」

「だからどういふこと？」

「『真理の扉』。その先には一体何があるんでしょうね？その扉の前にたつた時、貴方は一体何を持っていかれるのでしょうか？うふふふ」

そう言いながら微笑む白は不気味だった。病んでる気がした。

コーキの問いに答えているようで答えていないような言葉。

しかし、そんな端から見ると意味不明言葉も仮説を立てるぐらいには十分だった。

「まあ、詳しいことはエノモトさんにも聞いてください。あの人は丁度扉の向こうですから」

「なるほどね。大体読めたよ」

コーキは元の血をぬぐう。

先ほどの白の言葉で成立した。

「どういう条件かは知らないけど、君たち白カズマにきつかけを与えたな？その『真理の扉』なるもののために」

「ええ、私たちがしたことは背中を押すようなことだけです。後は勝手に開けてくれるので」

「そして、僕にも『真理の扉』を開けさせたい。ねえ、君たちは一体僕たちで何をやる気なの？」

「さあ、何でしょうね？すみませんがそこまで教えることは出来ません。それと、無理しないでください。骨は折れていませんでしょうが、内出血がそれなりに起こっているでしょう？貴方は体の耐久性は普通の人間と同レベルですから」

「それはどーも。でも、僕だって男だよ。やられっぱなしじゃ、格好つかないじゃん」
あはは！と笑ってみせるが内心はそれほど良くない。

殴られた脇腹あたりが息をする度にズキズキ痛む。きつと服の下は青くなっているだろう。

それでも、『脳内魔導起機』を操作していく。

『首なし♪顔無し♪頭上♪』

言語道断問答無用の死♪首なし——』

呪いの歌が白に聞こえるほどの爆音で流れる。魔法をギリギリまでブーストしていき、

頭が、脳が悲鳴を上げる。内側から爆せてしまいそうだ。

でも、この娘をここで殺すにはこれくらいでもまだまだ足りない。

「全く。貴方では僕の相手にならないことは分かっているのでしょうか？下手をしたら殺してしまいますよ」

コーキの本気を感じた白も大鎌を構え、己の影を立体的に展開する。

テリトリーに入った瞬間串刺しにされる。

それでも、コーキは走った。

「断頭スイッチー」

白銀の斧を手に影のテリトリーに踏み込む。

先ほどとは段違いのスピードでいくつも影が槍のように、刃のように襲いかかる。が、それを加速スイッチを使っていないコーキはそれを避ける。

当然避けきれないものもあるがそれは致命傷だけを防ぎ、走り抜ける。

(思った通りだ。急所を狙った攻撃は本気じゃない。回避出来るようになってる)

コーキは確信した。彼女は自分を殺すことは出来ない。これはハリボテだ。おそろしく、
“真理の扉”絡みの事情であろう。

が、しかしそれはボゴンという破壊音と同時にもつと大きな炎によって飲み込まれた。

「熱っ!!!」

コーキと白の間を分断するように突き刺さった巨大な火柱——もとい、炎の巨人の腕に炎は取り込まれたのだ。

その腕は煌々と燃え上がっており、コーキの肌をピリピリと焼いていく。

「ああ、残念ですけど……」までのようですね。貴方とお話出来てとても楽しかったですよ。それではまた会いましょう、コーキ・C・マユズミさん」

腕の向こうからそんな言葉が聞こえてくる。

「待ってッー」

コーキは錬金術を使い酸素濃度を濃くしようとしたが、それよりも早く巨人の腕から熱風が吹き荒れ、やむやく顔を腕で覆い守る。

腕の隙間から辛うじて、炎そのものの手が動き白のいる方向を握るのが見える。

瞬間、炎そのものが弾けた。たまらず目を閉じる。

そして、次に目を開けるとそこには誰もいなかった。

ただ、融解した大きな穴や戦闘の跡だけが先ほどのことを現実であると証明していた。

「逃げられちゃったか。まあ、なんと言うか。超疲れたー！ー！ー！」

・ コーキはそう叫ぶとバタリと倒れた。

「痛だだだだ!!!忘れてたけど、超痛い!うおおお!」

・ そしてゴロゴロと転がって悶絶した。

「あー、これアザとかになっちゃうかな?そしたら、嫌だなー。絆創膏スイツチ」

治療をしながら市街地に繋がる大穴を眺めていると、老猫にカボチャ頭、木霊の少女が歩いて来る。

そして、その後ろには見慣れた金髪少年が茶髪の少女をおんぶしていた。二人共ボロボロだ。

「あーあ。ちよつとくらい休ませてくれよ」

・ コーキはそうぼやきながら起き上がった。

第15話 EUREKA

吸血鬼の古城・黄金の玉座

「——つうのが、オマエの知っている『カズマ』って奴の正体だ。衝撃的だったか、吸血姫？」

「いや、そうでもない。逆にこれでカズマの多少不可思議な部分に説明がついた。最後に本当の話を聞いたのは嬉しかった」

コーキと別れた後、白カズマは遅れて玉座の間に戻ると寝転がっていたのだ。

そして、玉座に縛られているレティシアの要望でカズマについて語ったのだった。

「カズマはまだ、話しているのか？」

そう本来ならすぐに終わる入れ替わりが未だに終わっていないのは、白カズマ曰くカズマが「カズマ」と話しているからだそうだ。

それでも徐々に入れ替わりが強制的に行われていつているのが目に見えて分かる。

「ああ、でもそう時間はかからねエよ。それよりも、テメエは諦めるのか？」

「仕方がないことだろう。これはこのゲームが始まったと同時に決まっていたことだ」

「そオカイ。吸血姫がそれでいいのならオレがとやかく言うことじゃねエ」

「ああ、すまないな。それと、すぐにバれてしまうがこのことに関する記憶は共有しないでくれ。頼む」

「錬金術師の記憶をオレが共有するのは当然だが、その逆はありえねえよ」

「はは、そうか。ありがとう」

そう言うレティシアをつまらなそうな目で白カズマは見ていた。

◇◇◇

真つ白な空間にポツンと一つだけある入院患者のベットに寝ている10歳にも満たない少年いた。その空間には心電図の規則正しい音が鳴り響く。

カズマの手には深海のようなブラックブルーの本と優しそうなライトブルーの本の計二冊があった。

この本を見つけるのに9回もゲームオーバーになってしまった。

記憶はないが12回ある内の半分以上を失敗したと気づいた時には、もうこのまま消えようかと考えた程だ。

人間みたいに『消滅^死の運命』に抗ったし、心残りなんてないから。

そもそも、カズマはクリア条件に書かれた“カズマ”の解釈を勘違いしていた。

“カズマ”を生前のカズマとして考えていたのだ。

生前のカズマはあまり生まれつき心臓を患っていた。

突発的に発作を起こしてしまいうタイプでそのまま死に至るかもしれないものだ。治療法はない。世に言う不治の病だった。

だからと言ってずっと入院暮らしをしていたのとかではない。

他の子と同じで、定期的に病院に通っている以外至って普通の生活を送っていた。まあ、それでも性格からしてあまり活発ではなかったので趣味は読書だった。

こういうことからカズマは、人か本かの形で「カズマ」は図書館にいと考えた。図書館の場所などすぐに分かった。

なぜならゲーム盤は、世界の終焉がラジオで流れ悲鳴や怒号で埋めつくされたカズマの生まれた街だったからだ。

ありえないくらい広くなっている無人の図書館の中をひたすら走り続けた。

そしてようやくブラックブルーの本を見つけた。それでクリアだと思った。でも、違った。そこには何も書かれていなかった。存在していなかった。

眩む。目眩がする。内側から崩れていく。消えていく。

その中でやけに頭がガンガンと痛かった。まるで抗うように、踏みとどまれというかのよう。

警鐘が鳴り響いていた。

再び走った。まだ何か見落としてないか。まだ足りないものがあるのではないかと。

何も無いはずなのに、喪失感に襲われながら走って、走って、走って——見つけた。もう一つの本、ライトブルーの本を。

つまるところ、ギアスロール「契約書類」のクリア条件に書かれていた「カズマ」とは、生前のカズマと現在の造られたカズマを合わせたものを指していた。

そして、ライトブルーの本には一文、

『初めましてもう一人の僕』と書かれていた。

「やあ、カズマ。こうやって自分と話すことがあるなんてね、思わなかったよね」
「ああ」

「そんなところに立ってないでこっちに来なよ」

「真つ白な空間の中にポツンと患者用のベットがあった。」

「」

「カズマ？」

「カズマはしばし動かなかったが、すぐに音もなくベットの近くに置いてあった椅子に座った。」

「改めて、会えて嬉しいよ。もう一人の僕」

「そう、なのか？」

「うん。さつきに言っておくと、僕はあの日に死んだ僕の残留思念だから警戒しないでいいし、変な気とか使わなくていいよ」

「だが」

「変な気を使わなくて良いってば。僕は別に君に恨みとか憎悪とかそんなの全く感じないから。君は何も悪くない。それは生前のカズマとして僕が誓う。でも、仕方がないとは思うよ。今まで感じたことのないものを感じているんだからね」

「感情」

「そう、それだよ。知識があつても感じたことがないとそれが何なのかは分からないし、どうしたらいいかもわからない。でも、君はそれで良いんだよ。ちよつと遅いかもしれないけど、これからの生活でそれらを理解していけるんだから」

「どうだろう。俺は確かに人間に近づいたかもしれない。けど、所詮は紛い物だ。これだつて借り物だしな」

と自分身体を指す。

「自分をあくまで人間と認めないのとはかくとして、その身体を借り物なんて言わないですよ。それはもう僕の身体じゃないし、君と一緒に成長していったんだ。もう立派に君のものだよ」

そして僕のは身体こつちだ、と十歳にもみたくない彼は笑いながら言う。

「それに君は紛い物なんかじゃない。人間ていうのは神様が創ったものなんだよ。だって、一緒だ」

「お前忘れたのか？神は人が信仰してるから存在してるんだ。だからその考えが全てじゃない」

「卵が先か鶏が先かって問題のこと？」

「ああ、だから本当に神に創られた人間っていうのは存在しない。ましてや、魂だけだなんて。」

カズマは大きな溜め息を吐く。

「そんなのでも、とりあえずは良いって気がしている。何だか不思議だ」

「そうかな？人ってどこかで妥協するものだよ。完璧なんてそうそう出来るものじゃないよ」

「確かにな。というか、こうして見ると俺ってネガティブな気がする」

「ネガティブじゃなくてちよつと頑固なだけじゃないかな。箱庭に来てからとか見ても協調性とかなかったし」

「大体一人で出来るからな」

「そう言えるのは、ちよつとオトナっぽくて憧れるなあ。それに冷静なことか冷酷なこととかもカッコ良くて羨ましいよ。今の僕とは正反対だ」

「そうだな。お前は柔らかくて優しそうだ。というか、冷酷つて褒めてないだろ！」

「ははは！いや、そうじゃないんだ。僕つて優柔不断だから捨てれる強さは羨ましいよ」

「優柔不断だったか？」

「うん。多分そうだと思うよ」

小さなカズマはそう言い笑うと、

「さて、そろそろ時間が無くなってきたね。もう一度言うけど、君は君のまままでいて良いんだよ。今の君は紛い物とかじゃなく真正銘のカズマ・N・エノモトなんだから」

「分かつてる」

「それと、友達はいっぱい作った方が良いよ。そうすれば、君はその友達から感情というものを実体験しながら理解することが出来るはずだ」

「友達ねえ……。今さら俺に作れるもかな？」

「可能だよ。友達作るのに『今さら』なんてない。そして、友達も大事だけどレティシアのことは特に大事にしてね」

「はあ、また何で？」

「大体予想してるでしょ」

「まあな。俺は今も鈍くはない」

「だよ。それじゃあ、出口はあっちだよ」

小さなカズマが指を指した先には、無地の大きな扉があった。

それは、あの引きずり込まれた扉だ。

今もあの中でインストールされた“真理”は頭の中に鮮明に残っている。

カズマは立ち上がると、一步一步と歩いて扉に近づいていく。

ふと立ち止まる。

そして振り返ると、小さなカズマはベッドの上から手を振っている。

「なあ、お前は——」

「うん。君がここを出ていけば僕は消える。でも、君の一部になるだけだから大丈夫だ

」

そう優しく微笑む。

カズマは再び歩き、扉の前に立った。

すると、ギイイと音を立て扉が開かれる。

その中から瞳が開き、カズマを見ると幾つもの手が伸びてきて絡まりついていく。

「最後に」

カズマは振り返らない。

「最後にコーキに伝えてくれないかな？ 僕のために頑張って医術を勉強してくれてありがとう。そして、死んじやってごめんって」

次の瞬間には扉の中に引きずり込まれた。

返事はする必要などない。

言わなくても同じカズマなんだから分かるはずだ。

そして、カズマは目を覚ました。

◇◇◇

カズマは、目蓋を開けるとぼんやりと石の地面を見つめる。

しばらくすると焦点が合うと顔を上げた。

「カズマ、気がついたのか!？」

そんな声が後ろから聞こえた。

首をのけ反らせて見ると、黒いドレスを着たレティシアが心配そうに見ていた。

そこで自分が玉座を背にしていたことに気づいた。

「ああ。大丈夫だ。問題ない」

カズマはそう言い立ち上がると、伸びをした。

「やっと起きたか。寝坊助のカズマ君?」

「ああ?」

そう声が出した方を見れば、ボロボロの十六夜がニヤニヤしながらこちらを見ていた。

「おっかー、カズマ。流石だね。戻って来ると信じてたよん!」

コーキは十六夜の傷の手当てをしている。

その隣では包帯を巻かれた耀が、

「本当にカズマだった。」

と呟いている。

「なあ、カズマ。お前は今、どういう状況か理解しているのか？お前の中のカミサマに教えてもらったか？」

「いや、全然。あいつはそこまで都合の良さそうな存在じゃない」

「ならコイツを見れば、分かると思うぜ」

十六夜は少しボロくなってる今回のゲームの「契約書類」を渡した。

「いや、いくらなんでも『契約書類』だけ渡しても意味わかんないでしょ」

「いやいや、そっちこそ何言ってるんだコーキ？これさえ見れば、大体わかんたろ」

十六夜の言う通りカズマは理解した。

「理解した。それで？」

「外には、ゲーム開始と同時に巨龍が現れた。そして、第三勝利条件はあとこの欠片を埋めれば終わる」

投げ渡された欠片を手にカズマは窪みを探す。

「そういえば、レティシア。もしかしたらって思ったんだが、外の巨龍ってお前自身じゃ

ないのか?」

何気なく言った十六夜の言葉にその場にいた全員が驚いた。

「よく分かったな。その通りだ」

「ど、どういうこと?」

「ああ、やっぱそうだったんだ。明らかにこのゲームは損得勘定みたいなゲームバランスが少し歪だからね。そんな気がしてたんだよー」

コーキの答えとは言えない独り言に耀が疑問符を浮かべていると、カズマは窪みを見つけた。

「ちよつといいか、レテイシア」

「どうしたカズマ?」

「この欠片を填めて勝利条件を満たせば、このゲームは何の問題も起きず終わるんだな?」

カズマの相変わらずの光なき虚ろな瞳からは何の感情も感じられない。

「ああ、そうだ。勝利条件を満たせば巨龍も消える。私も無力化されてゲームセットだ」

カズマはしばし思索しているのか動かず、ようやく手の欠片を填めた。

『ギフトゲーム名 SUN SYNCHRONOUS ORBIT in VAMP

I R E K I N G

勝者・参加者側コミュニティノ一ネーム

敗者・ ”

*上記の結果をもちまして、今ゲームは終了となります。

尚、第三勝利条件達成に伴って十二分後・大天幕の開放を行います。

それまではロスタイムとさせていただきますので、何卒ご了承下さい。

夜行種は死の恐れもありますので、七七五九一七五外門より退避して下さい。

い。

参加者の皆様はお疲れ様

でした』

「.....どういうこと?」

「耀には意味が分からなかった。何度『契約書類』を読み直しても内容は変わらない。

「其処に書いてある通りだ。今から十二分後に箱庭の大天幕が開放され、太陽の光が降り注ぐ。その光で巨龍は太陽の軌道へと姿を消すはずだ」

大天幕がなくなり、太陽の光が直に降り注ぐことは吸血鬼であるレティシアの死を意味している。

つまり、このゲームはどの勝利条件を満たそうとしても彼女は死ぬことになっている

ということだ。

「騙すようなことをしてすまなかつたな。でも、どうか分かつてくれ。私はもう二度と
同士を殺したくはないのだ」

「そう僕く笑うレティシアに耀はこれ以上何も言えなかつた。

レティシアは耀、十六夜、コーキと順に顔を見てカズマでその視線は止まつた。

深呼吸を一つし顔を引き締めようとして、無理だつたのか悲しそうな笑みを浮かべた。

「カズマ。最後にお前に伝えておきたいことがある。こんなことになつてしまつてもう遅すぎて手遅れだが、私は「嫌だ」・カズマ?」

レティシアは呆然とした。シヨツクだつた。言葉にすることすら許されなかつた。

その当の本人のカズマは鋭い目付きでレティシアを見ていた。

「正直、今ここでお前の遺言めいた最後の言葉なんか聞くつもりはない」

淡々と言葉を述べながらカズマは玉座に歩いていく。

「レティシア、お前はそのまま諦めて潔くされるがままに死にたいのか?」

「カズマ、何を何を言っているんだ!? そんなわけないツ! しかし、これは仕方のないことだ! このゲームを一秒でも早く終わらさなければ、その分苦しむ人が死人が増えていく。もしかしたら、お前たちを殺していたかもしれないんだ。そう思うとゾツとす

る。言っただろう、私はもう同士を殺したくなんかないんだって」

「なら、問おう。お前はその同士に、仲間を殺すという苦しみを味あわせたいのか？」

「何が——!?!」

「だって、そうだろう？このまま何もせずレティシアが死ぬところを見ているだけっていうのは、俺たちが殺したをも同然じゃないか」

「それは違う！違うぞ！」

「ああ、違うと思う。でも、残された奴らのことを考えろ。何か他に救う方法があつたんじゃないか。あそこで何かしていたら結末は変わったのではないか。そもそも、再び魔王何かにならなくて済んだんじゃないか。そんな後悔と悲しみの深い傷をの痛みを味あわせたいのか？」

「違う違う違う違う違う!!これは私の過去の罪だ！お前たちに責任はない！だから後悔する必要もない！私は！私は、ただ。」

「人間っていうのはそれでも後悔をして悲しみ勝手に心に傷を負うものだ。死人に口無し。お前は自ら口を塞ぐのか？」

何故そんなこと言うのか。この問いに、言葉に何の意味があるのか。

全然レティシアにはカズマが分からなかった。

悲しかった。悔しかった。でも、少し嬉しくて、心が痛い。

ポロポロと涙が出てきた。

レティシアだって生きたい、死にたくない、大切な仲間を悲しませたくない。でも、圧倒的な運命という力に抗うすべなど持っていない。

圧倒的にどうしようもないのに、

「なら——なら、どうしたら良かったと言うのだッ!? 私は一体どうしたら良かったと言うのだ!!!」

その顔をくしゃくしゃにしながらの問いの答えは、至ってシンプルで彼らしくないものだった。

「そんなの俺たちに頼めばいいんじゃないか。助けてくれて」

彼のことを現実主義者リアリスストだと思っていた。でも、今の発言は自殺行為と同等である。

レティシアが「バカカッ!」と怒鳴ろうとした時、突然カズマの肩に腕が絡まれた。

「おうおう、随分と言うようになったじゃねえかカズマ」

「いやいや、ついにデレ期の到来ですかにやー?」

いつの間にか隣には、十六夜とコーキがいてニヤニヤと笑っていた。

「正気かお前たちッ!? それが自殺行為であると何でわからん!」

「それはお前だろうがこの駄メイド。何一人で悲劇のヒロイン演じてんだ? そんなの俺たちが見たい結末じゃねえ」

「そうそう。僕はそんな悲劇を喜劇に変えるためにここにいるんだから。というか、忘れたの？僕たちは、空前絶後の予想不能な最強問題児だよ」

「そんな俺らがこれくらいに状況もひっくり返せないと思われなんて舐められたもんだぜ」

フツと笑う二人の間に挟まれているカズマはうんざりしたようにため息を吐くと、

「まあ、そういうわけだ。俺たちを信じて助けてさせてくれないか、レティシア？」
「そう言いカズマは手を指し出した。」

レティシアは躊躇した。自分にこの手を握る資格があるのか、と。

「でも少し、ほんの少しでも希望を持つてもいいと言うのなら。まだ生きていいと言うのなら。」

レティシアは手を伸ばし、

「はい」

両手でその手を大切そうに包み込むと掠れた声でそう応えた。

「また涙が溢れて止まらなかった。これが喜びの涙なのか同土を失うかもしれない不安の涙なのか、はたまた別の思いから来るものなのか今のレティシアには分からない。」

そんな彼女をオッドアイのカズマは優しく撫でた。

第16話 人形の錬金術師

吸血鬼の古城・最端の崖

カズマたちは、レティシアの返事を聞いた後すぐに古城の端に移動した。

ちなみに先ほどから耀は少しご機嫌斜めだ。

どうやら先ほどの問答に自分だけ仲間外れにされていたのが原因らしい。

「ねえ。もう機嫌直してよ耀ちゃん。悪かったから」

「私も問題児の一員なのに。」

「ごめんごめん。悪かったって」

「ほっとけコーキ。時間がない。春日部を除いた俺たちでレティシアを救うぞ」

「ごめんなさい。機嫌直すから。怒ってないから。私もレティシアを助けさせて！」

必死にそう言う耀を見て、十六夜は愉快そうに笑った。

「時間がないからさっさとするぞ」

「分かっているって。というか、その左目ってアイツのだよね？」

「アキレスさんが出ていた時と逆になってる」

耀の言う通り今のカズマは右目は元々の彼の色だが、左目はアキレスと同じ翡翠色に

文字盤が浮かび長針と短針が時を刻んでいる。まさにアキレスが出ていた時とは逆に瞳の色が逆になっている。

「それがどんなギフトかは気になるところだが、レティシアを助けられるぐらいのもんならだろ？」

「ああ」

「なら、レティシアのことは任せたぞカズマ。よしお前らやるぞ」

十六夜は拳を出す。それに習いコーキも耀も拳を出して待つ。

「ほら、カズマ」

「分かっている」

何時もの彼ならノるはずないことだが、三人は分かっていた。

今の彼ならノってくれると。

カズマも拳を出す。十六夜もコーキも、耀でさえ口元が吊り上がり自然と笑みを作る。

「あの自暴自棄になっている駄メイドを完膚なきまで救ってやるぞッ！」

「「「おお！」」」

四人は気合い共に互いに拳をぶつけ合った。

これで作戦決行の合図は鳴った。

十六夜はさっそくコーキのフードを掴むと、

「俺たちはお嬢様を手伝いにいくぞ、コーキ！ヤハハハハ」

「え、ちよ、待つ、僕生身！人間！死ぬ！ここから飛び降りたらあああああ

ああああああ——!!!」

そんなコーキの言葉に意味はなく、コーキは人生二度目のヒモ無しバンジーを体験したのだった。

残ったカズマと耀はコーキたちが落ちていった方も見ながら、

「惜しい人を亡くしたね」

「ああ、まったくだ。コーキの良いところはいなくなれば、静かになることだな」

「そうだよね。たまにちよつとウザいしマジ死ぬって何度も思った」

「」

「」

しばし沈黙すると、

「南無三」

二人は手を合わせたのだった。

「よし、出来た！」

耀の履いていた革のロングブーツは白銀の装甲に包まれ、その先端からは燦爛とした光を放つ翼が生えていた。

「お待たせ。行こうカズマ・カズマ？」

カズマは何を考えているのか分からない何時もの瞳で耀のブーツを見ていた。

「いや、やっぱりみんな成長していくものだなって思っただけだよ」

「うん。カズマも具体的には言えないけど、何か変わった気がする」

「それ動物的な勘？」

「多分、そんな感じかな。匂いってというか雰囲気？とにかく何か変わったと思うよ」

「そう。そうだと、いいな」

外を見ると巨龍が降下し始めている。

「私が今出来るのはあの巨龍の所まで連れていくことだけ。あとは任せた」

「ああ。それじゃあ、行こう」

うん、と耀は頷いた。

◇◇◇

“アンダーウッド” 大樹の麓

雄叫びと共に大樹へと突進を仕掛ける巨龍を迎え撃つために飛鳥はデインを最大にまで巨大化させていた。

十六夜はそれを聞くとボゴツ！とクレーターを残し飛び出して行った。

「デーン聞いていたわね？十秒で描きなさい」

「DEEEN!!」

デーンは飛鳥の言葉通り十秒で錬成陣を描ききった。

「終わったわコーキ君。でもこんな大質量の錬成って一人で出来るの？」

「そ・れ・は、やってみなくちゃ分かんないでしょ！」

パアンと手を合わせ、錬成陣に触れると陣が光り出した。幾つもの稲妻が走り、地面が盛り上がる。

そして、分解され再構築されたものは巨大な泥の壁だった。

デーンよりも巨大で分厚い。しかも、ねちゃつとした流体だ。

「こんなので止められるの？」

「いや、無理だろうね。って来た来た！飛鳥ちゃんはその泥山の後ろで構えてて。あれが抜けたところに一発強烈なの頼むよ」

コーキはしやがみ込み荒い息をしていた。その姿がどういいう原理か泡の様に消えた。直感で退避したのだと飛鳥は理解した。

巨龍は十六夜の奮闘により始めほどより突進の威力は少なくなっていたが十分に強力だ。

「GYEEEEEEEEEEEEEEYAAAAAaaaaaAAAAA!!!」

雄叫びを上げながら一直線に進んでいく。その先にある泥の山など眼中にはない。

頭からその泥に突っ込んだ。分厚いのにほんの数秒で飛鳥の前の面から顔を出す。

すぎに飛び出してくると思いいーに命令を飛ばそうとしたが、あきらかに遅い。

目に見えて巨龍の動きは遅くなっている。

理由はイマイチ分からないがこれを勝機と見た。

『全力の一撃を放てーいん!!』

「DEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

飛鳥のありつた力の力の乗った命令は、応え、全力の拳を巨龍の顎目掛けて打ち上げた。

巨龍はそのまま天に向かって駆け上がっていく。

それと同時に大天幕の解放が重なり、「アンダーウッド」を覆っていた暗雲が霧散し

ていく。

その光景は、一つの芸術作品だった。

コーキはそんな光景を半壊した建物の上から見ていた。

「泥など非ニュートン流体の一種ダイラタント流体は、前断速度の大きさにともない粘土が不連続に増加する。つまりは、早く動こうとすればするほど堅くなるってわけだ

よ

巨龍の姿が太陽の陽射しの中に溶けていく。

それを追いかける一つの輝きだあつた。

追走していく白銀の光から飛び出したカズマは。パァン！と手を合わせた。

空中に稲妻が走り二振りの剣が錬成される。

それを掴むとカズマは眼を見開いた。

「マキシマム最速!!!」

カズマは一筋の影となつて巨龍の心臓を貫いた。

巨龍に断末魔はなく、急速に光りの中へと消えていく。

巨龍の心臓から助け出したもう一つの太陽——大切な仲間レティシアを日光から守るように抱き締めながら人形は呟いた。

「案外こんな人生も、悪いものじゃない」

第17話 人形に恋した吸血鬼

“アンダーウッド”主賓室・大樹の水門

レティシアは程よい喧騒と賑わいの音で目を覚ました。

あれからどれくらい眠っていたのだろう。窓から射し込む太陽の光がこの上なく心地いい。

ふとそこでベットの隣に誰かが腰かけているのに気づいた。

それはカズ——

「ん・ああ、レティシアちゃん起きたんだ。もうちよつと遅かったらタイミングバツチりだつたのにな。ゴメンね、僕で」

「ドキは、あはははと笑いながら読んでいたライトノベルを閉じた。

私の思っていたことは筒抜けだったらしい。

「謝らないでくれ。もしかして、ずつと起きるのを待つてくれてたのか？」

彼はまだこんなに若いのに立派な医者だ。その可能性は十分にある。

「ずつとじゃないよ。交代制でみんな待つてたんだよ。ちなみに体に異常はないよ。ただ二日ぐらい寝ていただけ」

「そうか。それは後で皆に礼を言わないといけないな。それにしても二日も寝ていたのか」

「二日も、じゃなくてたつた二日だよ。レティシアちゃんはずつと働いていた上に今回のような騒動があつたんだからもつと休むべきなんだよ。そうしないと、体壊しちゃうぞー!」

そんな風に軽い説教のような医者ありがたい言葉を聞いていると、コンコンとドアがノックされた。

「おつ、来たみたいだね」

コーキがニヤリと笑う。ドアを開け顔を出したのは両目の赤いカズマだった。

「そろそろ交代の時間、ってレティシア起きたんだ」

「うん。ついさつきねー。それじゃあ、カズマ来たし僕は黒ウサギちゃん達にでも知らせに行ってくるよ」

「それなら俺が——」

「いやいや、カズマは僕が皆呼んで来るまでレティシアちゃんの話し相手でもしてて。色々聞きたいことがあるらしいし」

それを聞いてカズマは目線で「本当か?」と確認を取ってきたので私は笑みを隠しきれずにちよつと笑いながら頷いた。

流石はコーキ。気を利かせて二人きりの時間を自然に作ってくれた。

このチャンスを生かさなければ。

「そんじや、ごゆつくり♪」

そう言い残して彼は部屋を出ていった。

それと入れ替わるようにベットの隣にカズマは座った。

「体調の方はどう？見た感じ問題なさそうだけど」

「ああ、特に異常という異常もないな。でも、さつきコーキにはもう少し休んでろって言われてしまったよ」

「あんなこともあったし、休息をとるにも丁度良いからだろ。しかも、ここは環境が良
い」

「そうだな。確かにここは緑に囲まれていたりしていて療養には持つてこいの場所だ
な。外が賑やかなのは復興作業か？」

「うん。それもがあるが収穫祭が一からやり直されらしい。その準備もあるからだと思
うよ」

それはすごいことだし喜ばしいことでもあった。

きつと、私のせいで無茶苦茶にしてみましたからもう中止されるものだと思ってい
が
。

「アンダーウッド」は力強いのだな。ちよつと安心した。

「なあ、カズマ」

「ん？」

「私が玉座に繋がれている間に何があつたか話くないか？」

「あー、えーつと。それって中の奴から聞いてないのか？ コーキがレティシアには説明してたつぽいって言つてたけど。」

「確かに白カズマからお前どんなことがあつて何をしていたか簡単には聞いた」

「なら——」

「いや、それは白カズマの視点からの説明だ。私はそんな難問も突破してきたカズマ自身から聞きたい。ダメか？」

ちよつと上目遣いで攻めてみる。

カズマはしばし悩んだ後、しぶしぶと言つた風に語つてくれた。

「——人形か。確かにそう言つた方が腑に落ちるが、それはちよつと自虐的だと思うぞ」

「そう思うかもしれないが、実際に俺を人間と定義するのはどうかと思う。人形と言えぱやっぱりしつくりくるし、俺はこれはこれで気に入っているから俺は人形で良いんだ

と思う」

「でも！それでも、カズマは人間だ。少なくとも私はそう認識するしそう思う。これは絶対だ」

そうカズマは人間だ。ここ来る前の別れた時のカズマも人間だが、今のカズマはより一層人間ぽくなっている。

雰囲気は口調、表情なんかは前の淡々としていたのから今はその全てが柔らかくなり生きている。

現に今も嬉しき半分、呆れが半分といった表情をしている。

カズマは変わった。今日の前にいるのは無機質な人形ではなく、どこにでもいる少年だ。

「ありがとう、レティシア。そう言ってくれて嬉しいよ」

「———っ!!!」

私はこの時のことを生涯忘れることはないだろう。

カズマが笑った。初めて笑ってくれた。私だけに笑ってくれた。

なんて優しくて柔らかい笑顔。胸の中に愛おしいと気持ちが溢れて止まらない。

「———カズマ」

今、改めて私はカズマに惚れた。この人を好きになつて良かった。

「私、レティシアードラクレアはカズマ・N・エノモト——あなたのことが大好きです」
不思議なものだ。きつと想いを告げるときはもつと動揺するものだろうと思つてい
たが。

実際は、頭の中はすごくクリアだった。ただ自分の鼓動とこのどうしようもない想
いが溢れるだけ。

多分、私の頬は紅く染まっているだろうがそれ以上にカズマの顔が真っ赤だった。

フフ、赤面のカズマも可愛い。またレア顔ゲットだな。

「えっと、その・俺は」

カズマは完全に混乱しているのか何かを言おうとしては口を開けては閉じる。

金魚みたいだな。

「カズマ」

「あ、え、何？」

「返事を聞かせてもらえないかな？」

直球で言った。本当はもつと考える時間があつた方がいいかもしれないが、私はすぐ
に答えが聞きたかつた。

カズマも答えが出たのか、真面目な顔になって何かを言おうとしたが、

「俺は——」「レティシア様！起きられたと聞きましたがお体は大丈夫ですか!？」

そこで、ボタン！と扉を勢い良く開けて黒ウサギが飛び込んできた。

「レティシア様お体の調子はどうか!?どこか痛いところなどありませんか!？」

「ちよつと黒ウサギ。そんなにけたたましく質問をしたらレティシアも迷惑よ」

それに続くように、飛鳥や耀、十六夜やジンが部屋に入ってきた。

いきなり人の増えた部屋の中をカズマを探す。すると、コーキからニヤニヤされながら話しかけられているのを見つけた。

さつき赤面していたのが嘘のように淡々とした無表情に戻っているカズマ。

「レティシア様、お顔が赤いようですがお熱でもあるのですか?」

私はというと、この通り。黒ウサギは私の額に手を当て熱を測る。

「やはり少し熱があるようですね。無理をせずにお休みになってください!」

「ああ、いや私は」

「レティシア様はもつと御自分を大事にしてください。日頃から色々頑張つてらっしゃるんですから。こういう時ぐらいゆつくりお休みになつてください」

そう言つて黒ウサギは強制的に私を寝かせ、布団を被せる。

「黒ウサギの言う通りレティシアは少し休んだ方がいいよ」

「そうよ。貴女の頑張りはみんなよく知っているわ」

どうやらこれ以上抵抗は無意味だ。

もう一度見れば、今度は十六夜もニヤニヤしながら会話に混ざり、ジンは不幸にも巻き込まれているみただった。

「では、レティシア様。またお見舞いに来ますね」

「またね」

「ちゃんと休むのよ。ほら、十六夜君たち帰るわよ」

女性陣はそのまま男性陣を引つ張つて退室していった。

男性陣が来た意味って何だったんだらう？

それはともかく、カズマは部屋を出ていくまで無表情のままだった。

それがどういふことかはともかく、彼のことからあの告白の返事がうやむやになる

ことは無いだらう。

告白。そう私はついにカズマに好きって言ったんだ。

今更になつてその実感を感じる。何とも言えない達成感と高揚感。

「えへ、えへへへへへ♪」

顔がにやけるのが止まらない。そして私は枕を代わりに抱き締めながらふと不安になつた。

もし、拒絶されたらどうしよう。嫌いっていわれたらどうしよう。

失恋したらどうしよう、と急に頭の中が不安でいっぱいになる。

でもカズマは明らかに動揺していたし、脈がないわけじゃない。

「大丈夫。大丈夫。大丈夫」

私は自分に言い聞かせるように何度も口ずさんだ。

そして頭を振って不安を追い出した。

どうせなら楽しいことを考えよう。悪いことを考えるよりもそれがいい。

きつと大丈夫だ。私は頑張った。十分な対価を払ったはずだ。

だから、大丈夫。

私はそう結論づけて、カズマとどんな風に収穫祭を見て回るかなどのこれからのことに思いを馳せるのだった。

◇◇◇

目を覚ますと、窓からの月明かりに包まれていた。

どうやらあれこれ妄想している内にいつの間にか寝てしまっていたらしい。

ふと枕元を見ると一通の置き手紙があった。

差出人は言うまでもないカズマだった。

やつぱりそういうところはしつかりしているなあ、と思いながら手紙の封を開ける。

そして、少しの間その手紙を開けるのを躊躇った。

動かなければ先に進めない。時間が経っても書いてあることは変わらない。

そう自分に言い聞かせ、私は手紙を開いた。

『前略。レティシアへ』

まず、こういういう大事なことの返事を手紙であることを許して欲しい。本当は直接面と向かつて答えなきやいけないことは分かっているが、今の俺はどうにもお前とまともに話せそうにない。

それはともかく、本題を単刀直入に言わせてもらえば

レティシアの想いに俺は応えることは出来ない。

でも、勘違いしないでくれ。俺はお前のことは嫌いじゃない。むしろ好きだ、と思う。

しかし、それはloveであるかと言われたら俺にはわからない。そもそも、俺は感情がどういふものかは知っていても、実際はどんな感じなのかはわからない。普通の人間ですら親愛と恋愛の線引きが難しいらしいが、俺はその普通の人間が当たり前に感じる感情すらわからない。

そんな俺が半端な俺がレティシアの想いに応えるのは、上手く言えないが失礼な気がする。

すまない、レティシア。でもね、嬉しいんだと思う。いや、嬉しかった。

こんな俺を好きだと言ってくれて本当にありがとう。

カズマ・N・エノモトより』

——代価と言うものは何かと少し足りないものだ。

コーキのベッド↑空っぽ

十六夜のベッド↑空っぽ

ジンのベッド↑布団ごと空っぽ

ああ、何となくジンの現在の状態が鮮明にイメージできた。

そして、今のカズマにはあえていつも空気を読まない二人の気まぐれが裏めしかつた。

「クズ共があ。」

カズマはガツクリと項垂れた。

「で、何でここにいろか説明してもらおうかレティシア？」

「ん、私がいたらダメなのか」

「いや、そう言うわけじゃないけどさあ」

カズマは上体を起こし、頭を掻きながら、

「確か俺って昨日、お前にとっては今日かもしれないがフツたと思うんだけど。」

「ああ、確かに私はお前にフラられた。正直に言えば、さつきまで泣いてたんだ。あまりにも悲しくてね」

そう言うレティシアの顔をまだ本調子じゃない目を擦ってよく見てみれば、涙の流れ

た跡が残っていた。

「じゃあ何でここにいるんだよ。フツた俺の顔なんか見たくないのが普通じゃないのか？」

「そういう場合もあるかもしれないが、私は違うということだ。というか、一回フられたぐらいで諦めるほど軽い気持ちじゃない」

そうレティシアははつきりと断言した。

「そもそもだな。仮に諦めるとして、あんな手紙の内容じゃ諦めるわけにはいかないだろ。あんな優しきで満ちた手紙じゃあ。それに私のことが嫌いじゃないんだろ？」

「うん、嫌いじゃない。というか、そのことは手紙に書いてたはずだけど」

「直接口から聞きたいんだ。私こと、その好きか？」

「好き。好きあることに変わりはないが、それはlike以上であることしか言えない。だから、レティシア。お前のことを異性として好きかと問われたら俺は答えることは出来ない」

「じゃあ何で顔が赤いんだ？」

そこでカズマは自分が赤面していることに気づいた。

本当にlikeならここまで動揺しないのではないか？

理由を自問自答するが、やはり分からない。

「何でだろ?」

「フッフ、さあな。私にも分からない。でも、カズマかわいい。もつと見ていたい」

「近い近い近いっ!」
レティシアは、まるで獲物を追い詰める肉食獣のようにジリジリと顔を近づけてくる。

「もつと赤くなつた。フッフ」

カズマはそれから逃れようと後ずさるが、すぐに壁に背中がつく。

自分でもどうしようもないぐらい調子が狂いまくる。

「結局、お前は何が言いたいんだレティシアは!?!」

この問いにレティシアは真正面からこう答えた。

「愛感情が分からないって言うなら私が教えてやる。だから私のものになれカズマ!」

一瞬、カズマは頭の中が真っ白になつた。

そして、理解した。強引な命令な言い方だが、これも愛の言葉であると。

かつとさつきよりも顔が赤くなるのが自分でも分かる。

一回告白されているとか関係ない。こんなこと全然慣れない。

「それにだな。別に絶対両思いじゃないと付き合ったらダメだなんてことはないんだぞ。えつと、ちよつとしたお試し期間みたくもあつて、本当に好きなのか確かめ

るって意味でもある。だから、その」

さらに、さつきまで余裕はどこへやら、レティシアは急にもじもじとし始めた。

「そしてそんなレティシアを、カズマは不覚にも可愛いと思つてしまった。

「ズルい。なんかズルいよ。レティシア」

「恋にズルも卑怯もないんだよ、カズマ。それでそれはどういう意味、なのか？」

「負け。負けたよ。俺の負けだ、レティシア」

両手を上げてカズマは降参した。

「お前の提案を受け入れるよ。つまりえっと、よろしくお願いします。つて言えばいいのかな？」

「良いんだな？本当に良いんだな!?私で良いんだな!？」

「おいおい、ここまで言つどいて今さらそんな質問するなよ」

「はは、それもそうだな。こちらこそ不東者ですが、よろしくお願いします」

そう言つてレティシアは満面の笑みでそう言った。

ちなみにこの後「その台詞つて結婚した時とかに言うものじゃなかったっけ？」というカズマの疑問はスルーされた。

「とは言つてみたものの、特に何も変わった気がしないな」

「それはそうだろ。だって、まだ五分も経ってないもん」

「レティシアはどう?何か変わった気がするか?」

「私か?私は、今人生で最高に満ち足りているよ。というか、今日も프라れたら自殺を考えようかと思っていた」

「そうなの?」

「ああ、完全な失恋〓私の死ぬ時だ」

「大袈裟な。何でそんなに俺に執着するんだ?」

「それを聞くか?」

「えっと、ダメな質問だった?それなら悪い。謝るよ」

「いや、全然ダメな質問じゃないぞ。でも、今ここでそれを語る勇氣は私に残されていない。さっきの使い果たしてしまったからな」

「やっぱり、告白するってすごい勇氣があるものなの?」

「すっごいいるぞ」

「そうか」

「うん」

「どころでさあ」

「」

「.....」

「どころでさあ、レティシア」

「どうした？」

「——お前いつまで俺の上に乗ってんの？」

そうレティシアはさつきの獣が獲物を追い詰めるように迫ったまんまカズマの上に乗っていた。

「それより、知っているかカズマ？ 私たちのようにこれから結婚を確定として付き合う者はキスをするんだ」

「話逸らした上に嘘つくな！ 流石に知識のない俺でもそれは違うことぐらいわかるわ！ つーか、追加で変な言葉足してんじやねえ！」

「はて、なんのことやら？ というわけで、キスをするぞ」

「話聞けッ！ どこが、というわけで、だ！ って、来るな来るな来るな！」

「キスう~~~~~」

「はーなーれーろーこのバカ野郎がッ!!!」

「恥ずかしいがらなくても誰も見てないのに.....」

レティシアはカズマから強制的に引き剥がされた。

「何かお前の提案に乗ったのが、間違いだった気がしてきた。あと、寂しそうな顔してもダメだからな」

「むー、ケチ」

「ケチで結構」

「まあいいか」

意外とすんなり諦めたレティシアにカズマは疑問を覚えた。

それを察したレティシアはすぐにちよつと笑いながら答えた。

「今日はこうしてカズマと付き合えるようになっただけで上々。キスマで出来れば最高だなって思ってただけなんだ。だから、今はこれで満足している。それに楽しみは後にとっておけばいい」

「俺は前途多難な気がしてならないんだけどな」

「そう言わないでくれ。私だって完璧な人間ではないんだ。それと、もう一つ提案があるんだが」

「なんだよ? 聞くだけ聞くけど?」

「„アンダーウッド”に出発する前にした私との約束覚えているか?」

「ああ、収穫祭と一緒に回ろうってやつか」

「うん、それだ。その、今日行かないか? デート」

「あー、えーと、デートって。。別に予定もないからいいけどさあ。でも、お前病み上がりだろ？無理したらダメだ」

そう言つてカズマはレティシアの頭を撫でる。

「えへへ。病み上がりつて言つても、元々何ともないからな。それに三日近く寝ていたんだ。もう私は十分元気だよ。心配してくれてたのは嬉しい。ありがとう」

「別に。倒れでもされたら困るだけだ」

「そうと決まれば、さっそく準備をしないと。それにしても、」

「どうした？」

「いや、こうもカズマをデートに誘う日が来るなんてなつて思つて」

「。。ともかく、着替えるから」

「わかった」

「そう言うとうようやくレティシアはカズマの上から退いた。

「カズマはベットから立ち上がり、着替えを出した。

「そしてパジャマ代わりのTシャツに手をかけたところで、

「(じいじいじいじい)」

「振り返らなくても分かる。それくらい見つめられていた。

「。。あのレティシア、そんなに見られたら着替えにくいんだけど」

「私のことは気にしないでくれ。いないものだと思って着替えてくれていい構わないぞ」ハアハア

「そういうことはせめて真顔で言いやがれ! 何に期待してんだよてめえはよ!」

「そんな! 下心なんて全くない。私は純粹にカズマの生着替えが見たいだけだ!!」キラキラ

「純粹つて付けばなんでも許されると思うなよ」

「むー、見たところで減るもんじゃないし」

「そういう問題じゃねえ。お前だつて着替えてるところじつと見られたら嫌だろ?」

「いや、カズマになら着替えているどころか、寝ているところや入浴しているところなど全てをを見て欲しい!」

「むしろ見せたい人ツ!!!?」

恍惚した表情でそう言うレティシアにカズマは頭を抱えていると、コンコンとノックがされた。

「誰だろう? コーキたちがもう戻っていたのか?」

「さあな。悪いんだけど、レティシア。ちよつと変わりに出てくれない? 俺その間に着替えるからさ」

「んー了解した」

レティシアはちよつと残念そうな顔をして立ち上がると、ドアに歩いていった。
(どうにか上手く誤魔化せた)

カズマは今の内にとすぐに着替える。

この部屋に訪ねてくる時点で、用があるのはカズマと十六夜、コーキにジンしかない。
もしかしたらを考えて、ドアの方で受け答えしているレティシアと尋ね人の会話を聞きながら急ぐ。

『——様!』

「ん、レティ——だったな。君も——」

「い、いえそん——ありま——。お姉——その傷——?」

「——ちよつと手強い——な。心配する——すぐ治るさ。私なんか——大変だった——」

「本当に私は——」

この感じからしてレティシアの知っている人のようだ。

それにしても訪問者の声をどこかで聞いたことがあるが、思い出せない。

昔よく聞いた声だったと思うのだが。

そのモヤモヤとした感じは訪問者である彼女の一言で簡単に解決と同時に危険へと変わった。

「いや、それにしてもカズマに用が合ったのだが、どうやら部屋を間違えてしまったらしい。すまないな、レティシア君」

その言葉を聞いた瞬間、カズマはドアへと走りレティシアの首根つこを掴んで後ろに放り投げる。

「きゃっ!」

「ん——?」

訪問者の驚きの声やレティシアの可愛らしい悲鳴など無視してすぐに扉を閉め、鍵を閉める。

さらに錬金術を使い壁を溶接させる。

これまでの所要時間0・5秒。

「い、いきなり何をするんだカズマ?」

目測通りベットの上に投げられたレティシアから抗議と疑問の二重の意味の声が出る。

「事情は後で説明する!それより、ここは——おわっ!」

言葉の途中で、背中を預けていたドアが爆せたように突き破られ吹き飛ばされた。

カズマは木片と共に転がり倒れる。

「私も随分と嫌われてしまったようだな」

訪問者は自ら開けた穴ドアを通り部屋の中に入ってくる。

「久しぶりだな、私の可愛い可愛い弟よ」

「久しぶり、俺の綺麗な綺麗な姉さん」

訪問者、レーネ・K・エノモトは笑顔あくまで笑顔だった。見る者に絶対零度の恐怖を与える笑顔で優しくこう言った。

「さて、これはどういうことか説明してもらおうか、カ・ズ・マ？」

カズマはひきつった笑みを浮かべながら、人生初の恐怖を体験したのだった。

（俺、死んだ。）

クロナ＝クロニクル争奪戦 発端

「クロナ＝クロニクル争奪戦」開催日より二日前、「六本傷」カフェテラス
太陽の光が容赦なく降り注ぐここ「アンダーウッド」は暑すぎるぐらいの快晴だっ
た。

のどかな自然に大きな湖。その湖では、近々行われる「ヒツポキャンプの騎手」のため
に練習している者や単純に涼みに来ている者たちでそれなりに賑わっていた。

その近くにあるこのカフェテラスはそれなりに立地がいいのだろう、混雑しない程度
に程よく客が入って和やかな雰囲気だ。

ある一ヶ所のテーブルを除いては。

「ふむ、なるほど。君たち、いや君の言い分は理解したよレティシア君」

レーネは表面上は冷静そうだが、明らかに絶対零度の怒気が漏れていた。
怪我で巻いている包帯のせいではないいつもの三割増しで迫力がある。

「しかし、その上で言わせてもらおう。——私は断じて認めないッ！」

「何ですかお姉様!?どこが気に入らないと言うのですか!？」

「落ち着けレティシア」

「でも、」

「いいから座れ。姉さんもちゃんと理由くらい話してくれるから。なっ?」

レティシアはとりあず椅子に座り直して、氷の溶けて少し水っぽいコーヒを飲んで頭を冷やす。

「それで何で認めてくれないのですか?」

「簡潔に一言で言えば、レティシア君。君がカズマに相応しくないからだ」

「それはまた、何故そう言えるのですか? 私とお姉様は、まだ会うのは二度目でしょう?」

「すまないが、この前のギフトゲームの時に君について調べさせてもらった」

「いえ、それは仕方のないことです」

「そう言ってくれると助かる。それとは別だが、元とは言え魔王だった者に私の弟を渡すわけにはいかないな」

「ちよつと待て姉さん! あれは——」

「分かつている。私が言っているのはそれではなく、そのもつと前の話だ」

「それだつてレティシアには理由があるからそんなことをしたはずだ」

「相変わらず優しいな、お前は」

レーネは懐かしむように微笑む。

「優しくない。ただ一緒のコミュニティである程度生活していればそれくらい分かる。レイシアは悪い奴じゃない。それに魔王だったからとかそんなこと言うの姉さんらしくもないよ」

「ああ、私も不本意だ。過去にその人が何をしたかで、その人物を決めつけるのは偏見だ。しかし、箱庭には父さんも母さんもいない。となると必然的に順番から言っても身内である私が立場上前の親みたいなものなんだよ。ここまで言えば分かるだろ？私はお前が心配で心配でしかたない」

「話逸れるけど、そう言うならこの手枷外せよバカ姉!!」

「え、だってそれ外したらお前逃げるだろ？」

「とおぜんだろ！人押さえ付けて拘束する奴から逃げない奴なんているか!!」

怒鳴るカズマだがレーネはキョトンとした顔で見ているだけで外してくれない。

ちなみに手枷は、両手を合わせて錬金術が使えないようにされている。

「私にはここにいない父さんと母さんの代わりにお前が立派な大人になるのを見届ける義務がある」

「あ、話し続けるんだ」

「それにらしくないのは、お前もだよカズマ」

「はあ？」

「少し考えれば分かる。気持ちが変わらないカズマに恋愛感情やそれ以外の感情を教える？それはもちろん必要なことであり、感謝すべきことだ。しかし、それをお前に恋愛感情を持つている彼女がやることはもはや洗脳と同意義だと思わないか？」

「本来自然と発生するその感情を学習していく内にその指導者を。つて、流石にそんなわけないよ。なつ、レティシア？」

「サツ」

「何で目を逸らす？」

「いやー別に。そんなことこれっぽちしか考えてないから安心してくれ」

「これっぽちしか？」

「少しぐらい、ほんのちよつこだけ。そんな考えがあつたような無かつたような」

「(じいじいじいじい)」

「いや、だから」

「(じいじいじいじいじい)」

「う、うう。そんなじつと私を見ないでくれ」

「(じいじいじいじいじいじい)」

「ごめんなさい。ありました」

「そう認めたレティシアは嘘を見破られた小さな子供のようだ。」

カズマは自分で問い詰めたものの頭が痛かった。

「やはりな。カズマ、これが彼女の本性だ。私が認めない理由は分かってもらえただろうか？」

この言葉にレティシアは当然としてカズマもぐうの音も出ない。

レーネは余裕そうに紅茶を飲んでこっちの敗北宣言を待っている。

「とうるか姉さん。そもそも姉さんが認める人っているの？」

「ん？もちろんいるぞ」

これにはカズマもちよつと驚いた。

実はカズマが元の世界で女の子に告白された件数が0な理由はレーネにあった。

レーネはカズマを狙って近寄る女を秘密りにかつ本人が傷つかないように排除して
いたからだ。

「一体誰ですかッ!？」

「フフ。ウイラだ」

「ウイラって、あのウイラ!？」

「ああ、そうだ。私のコミュニティ、ウイル・オ・ウイスプ」のリーダー、ウイラⅡザⅡ
イグニファトウスだ。そうだ！今すぐ「ノーネーム」を抜けてこっちに来いカズマ」

「はあああ!!?!?!ふざけんなよバカ姉！確かに「ノーネーム」に固執する理由は特に無いけ
!!?!?!」

ど！」

「オイ」

すかさずレティシアのツツコミが入るが無視。

「そもそも、そんなことウイラの意志も無いのに勝手にアンタが決めて良いことじゃないだろ！」

「つまりウイラにその気があれば問題ない、ということだろ？」

「いや、いやいや！無い、無いだろ！あれはそういうのじゃなくて、ただ。」

「確かにウイラは童顔な上に、無邪気な子供のような一面も持っている。だから、ただ懐いていると思われても仕方がない。でも、あれは彼女なりの好意の表れだったということだよ」

これは結構な衝撃的事実だった。

カズマが「ウイス・オ・ウイスプ」に滞在していた頃、ウイラは何かとくつついて来ていた。

それをカズマは、猫好きあるいは他の子供たちと同じく懐いているだけだと思つてた。

というか、何で好意を持たれたのか全く心当たりが無い。

だから、さつきからレティシアの無言の圧力は理不尽だと思つた。

そんなことを悶々と考えている間も話は進んでいく。

「さてと、私の主張はこのようなものだが理解してもらえるだろうか？」

「理解はしましたが、承諾しかねます」

「君ならそう言うと思ったよ」

そう言いながらレーネは席を立つ。

「結局はこうなるのですね」

レティシアも席を立つ。

空気はピリピリと殺気を纏っていく。

「私も大変不本意だよ」

瞬間、周りの客には消えたように見えた。

そして、次の瞬間にはドゴオ！という大気を揺るがす音と共に湖の上に現れたのだ
た。

◇◇◇

ドゴツ！メキツ！グシャ！ドオン！

そんな破壊音が鳴り響く中カズマのところへ一人の店員がやって来た。

「どうも、黒猫の常連さん！」

言わずもがな。ニヤニヤしながらやってきたのは、「六本傷」のカフェでお馴染み猫

店員「ことキャロ口だ。」

「それにしても常連さんも中々隅におけませんね〜w w w」

「はあ。面白がつてないでこれ外してくれよ」

「ところで、お姉さんとレティシアアさんどちらが本命ですか？」

「そんなことどうでもいいから外してくれ」

「片や金髪美少女吸血鬼、もう片や黒髪美人のお姉さん。その二人が一人の男を奪い合うー！これぞ修羅場！まさに修羅場！これって修羅場つてやつですよ常連さん？ですよね？ですよね？私、リアルで見るのって初めてなんですよー！というか、こんな面白い見せ物台無しなんて出来ませんよ！」

「あの常連さん？」

「あ、あのー。急にハイライトの消えた眼で見られると怖いのですが」

「——ない」

「はい？」

「耳とその尻尾どつちがいらない？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！すぐにノコギリ持って来ます」

から少々お待ちくださいい〜!!」

脱兎の如く店内に入っていくキャロロ。

とりあえずはこれで大丈夫だろう。

そう思い今なお激戦が行われている湖の方を見る。

影の翼で空を飛ぶレティシアにレーネは爆発的な跳躍力で応戦していた。

一見空を飛べるレティシアが優勢に見えるが先ほどから槍を数本ばかり鉄屑にされている。

今は「龍の遺影」を使って攻めているが、それでもレーネにかすり傷を負わず程度しか効かない。

（あんな包帯ぐるぐる巻いといて動いて良いの?というか、動きにくくないのだろうか?）

と疑問に思い、

（まあ、姉さんなら大丈夫だろうし何でもアリだもんな）

自答していると、

「双方、そこまでじゃッ!」

とどこかで聞き覚えのある声が聞こえた。

見ると、レーネとレティシアの間に邪魔をするように白夜叉^{おとながた}大人型が立っていた。

「邪魔をするな白夜叉！お前は関係ないだろう！」

レティシアが抗議の声を上げ、

「ほう・彼女がかの白夜王か」

レ・ネはレティシアの影の上に立ちながら値踏みをするような目で見る。

「確かにお主の言う通りじゃ。しかし、こうも公衆の面前で争われては止めぬわけに

はいかんじやろ？」

これにはレティシアは何も言い返せなかった。

しかし、ここで止めなければ姉特権でカズマを“ウィル・オ・ウィスプ”に引き抜かれてしまう。

どうしたらいいんだ。そんな心中を察してか白夜叉は次にこう言った。

「大方の事情はそのカズマの状況を見れば分かる。その上で言わせてもらおう。なぜ直接争う？ここは何処だ？修羅神仏が住まう箱庭であろう？ならば、どうやって決めるかは明白じやろ」

「つまり、白夜叉殿はギフトゲームで決めろと言いたいのだな？」

「そうじゃ。それにギフトゲームで決めるならお主らも文句無かろう？」

「無論だ」

「レティシアはどうじゃ？このギフトゲームの舞台なら私が手配するぞ」

白夜叉のこの言葉は、簡単に言えば大々的にギフトゲームを開催して観客の前で白黒はつきり付けるのはどうだ？ということだ。

もちろん、これはレティシアにとつても悪い話ではない。勝てるかは分からないどころか相性は良くないが。

それを差し引いてもこのゲームをする意味は十分にある。

「もちろん、私もやるに決まってるだろう白夜叉」

白夜叉はそのやる気に満ちた目を見て大きく頷くと、

「ここに『カズマ・N・エノモト争奪戦』の開催を宣言する!!!!」

瞬間、光輝く『ギアスロール契約書類』が『アンダーウッド』中にばら蒔かれた。

「……は？」

こうしてカズマの所有権を巡る争いが行われることとなったのだ。

『ギフトゲーム名』 『クロナ=クロニクル争奪戦』

・参加条件

・受付を済ませた先着四百名とする。

・ルール

・始めに百名ずつ四ブロックに分かれ予選バトルロワイヤルを行う。

・なおブロックはクジで決めるものとする。

- ・各ブロック原則勝者一名が決勝トーナメントに進むこととする。

勝利条件

- ・最後まで勝ち残れ。

敗北条件

- ・リングアウトまたは戦闘行動の続行不能。

- ・上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、ギフトゲームを開催します。

『サウザンドアイズ』印』

これは余談だが、実は白夜叉もカズマを北側に連れて行かれると困るのであった。

クロナⅡクロニクル争奪戦 前編

『皆様大変長らくお待たせいたしました！これより“アンダーウッド”収穫祭特別ギフトゲーム “クロナⅡクロニクル争奪戦”を初めさせてもらいたいと思います！進行及び審判は“サウザンドアイズ”専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギが務めさせてもらいますっ♪』

「うおおおおおおお！この日を待ってたぞおおおおおおおおおお!!!」

「ついに！ついに生クロナちゃんを俺のものにいいいいいいいいいい!!!」

「クロナちゃんは私のものよおおおおおおおおおお!!! 誰にも絶対に渡さない！クロナちゃんは私の嫁！」

会場の熱気とテンションに黒ウサギは若干のデジャブを覚えて、自慢のウサ耳がへによつとなつてしまう。

それと同時に、どうか先ほどから当の本人に同情が絶えない。

『なお、実況は“ノーネーム”所属、偽装の錬金術師コーキ・C・マユズミさん。解説は今回のギフトゲームの主催者でもある“サウザンドアイズ”の白夜叉様でお送りいたしますー!』

『どうも、皆さん！ご紹介通り今回実況をさせてもらいますコーキと言います。よろしく。ぶつちやけ、実況と言うよりほぼコメントするだけだどご勘弁くださいいな☆』

『同じく紹介された通り、解説をする白夜叉じや。固苦しい挨拶など聞きたくなかろう？すぐに終わらせてやりたいのは山々だがこれだけは言っておかなければならない。』

——皆の衆、クロナⅡクロニクルが好きか?!?!』

「「「うおおおおおおお!!」」」

『クロナⅡクロニクルが欲しいか?!?!』

「「「イエエエエエエツスウウウウウウウツツツ!!」」」

『男だと知ってもかツ?!?!』

「「「当たり前だああああああああ!!」」」

「うむ。おんしらの熱意は十分に伝わった。あとは、あやつの開始宣言でこのゲームは始まる。」

クロナⅡクロニクル。それは話によれば、ある日投稿された一つの写真集がきっかけでネット世界で今最も人気のあるモデルの名だ。

衣装は、巫女服やメイド服のコスプレからTシャツやスカートなどの普段着まで何でも着こなしている。

特に人気な理由は、無表情でクールな感じが色々と妄想をかきたてて堪らないこのこ

何も出来ない。

つまり、チエックメイトというわけだ。俺は無駄なことは基本的にしない。キャラが変わったかもしれないが、俺は俺。根本は変わらない。ならその人形の俺がとる行動は、

「——もう好きにしろ」

虚ろな目で淡々とそう言った。

その瞬間すごい歓声が上がった。

これで俺を奪い合うギフトゲームの始まりだ。

こういうの何？私のために争わないで、とか言えばいい？

ああ、どうでもいいことだが。

◇◇◇

「アンダーウッド」特設闘技場

『まもなく予選バトルロワイヤルAブロック開始の時刻となります。Aブロックの参加者の皆さんは速やかにバトルフィールドにご入場ください』

『白夜叉ちゃんとしてはAブロックで注目すべき誰かいる？』

『そうじゃな。普通ならコミュニティの力を伸ばすためにカズマを奪いに来たガチ勢共でじゃろうが、私はあえてクロナ親衛隊のメンバーじゃな。そやつらが一見単純に見え

「このギフトゲームをどう勝ち残るのか楽しみじゃ!」

『クロナ親衛つてそんなのあったけ?』

『いや、今私が名付けた。メンバーはここにおけるカズマの熱狂的なファン共じゃ』

『ふむふむ。白夜叉ちゃんやんが裏でいくなら、僕は王道中の王道でいこうかな。このゲームが開催される元凶一人にして純血の吸血鬼メイド、レティシアⅡドラクレアちゃん! やっぱ彼女は注目しよ!』

そんな放送が流れている頃、当の本人のレティシアは賞品が置いてある場所——カズマのいる場所にいた。

「それじゃあカズマ、ちよつと待っていてくれ。すぐに皆殺しにして迎えに来るから♪」

「いや、ちよつと待て! 十六夜とか春日部も殺す気ツ!」

「えっ、そうだが? 当然だろ? 変なことを言うなあカズマは」

あははとレティシアは心底楽しそうに笑う。

こんな大騒ぎに発展したのに文句一つ言わないから不思議に思っていたが

「それじゃあ、カズマ行ってくる。大好きだよ」

「殺すなよ! 絶対殺すなよ!」

この言葉にレティシアは返事せず、ただウフフフフという不気味な笑い声を発しながら去っていく。

(レティシアつてもしかして、狂ってる?)

カズマは心配に思った。自分が。

◇◇◇

『それでは予選バトルロワイヤルAブロック始めッ!』

黒ウサギの合図でバトルフィールドから怒涛のごとく叫び声とする。

一人は手に持った剣で隣の槍使いに斬りかかり、また一匹は己の自慢の爪で死角から切り裂く。

完全な乱戦状態と化していた。

次の瞬間までは。

「ぎゃあああああああああ!」

「何だあ——」

「うあああああああああ!」

突如として発生した黒い竜巻が発生した。

それは周りの者たちを吹き飛ばし、飲み込んだ者には鋭い刃が待ち受けている。

簡単に言うともミキサーの中に入れられるようなものだ。

「ブンブンとカズマに集ってうるさいハエたちだ。お前たちがカズマに触れたら穢れてしまう。カズマは私だけ、誰の物でもない私のだけの物。私のカズマに近づく害虫はみ

阿鼻叫喚の大合唱が終わり、やがて静かになったフィールドの上にはポツンと一人の少女が立っていた。

その返り血を浴び微笑む姿は、まさに吸血鬼の姫という言葉がにびったり合うような愛らしく美しかった。

『……』 ↑口があいている

『……』 ↑口があいている

『はっ！しまった！あまりの惨状にすっかり実況をするのを忘れておった！』

『いや、ホント完全に見惚れてた。レティシアちゃん発狂するぐらい怒ってたんだね。もしかしたら、明日ズタズタに切り裂かれた白夜叉ちゃんの死体が発見されるかもww』

ww』

『それ笑い事じゃすまんぞ！にしても、レティシアやつ……』

何やらブツブツと呟き出す白夜叉。

そこでやつと口があいたまんまフリーズしていた黒ウサギは我に帰った。

『し、試合終了ー！バトルロワイヤルAブロック勝者、レティシアードラクレア！』

こうして予選Aブロックは終わったが、あまりの惨状に観客も予選前のようなハイテンションではいられなかった。

なお、重体の者ばかりだが死人は出てないらしい。

それが、レティシアの配慮によるものかカズマの言葉によるものかは分からない。
当のカズマは、

()

血まみれのレティシアに魅せられていた。

◇◇◇

予選Bブロック

さっきのAブロックの惨劇を打ち消すように観客は歓声を上げて会場は盛り上がっている。

そんな中真つ当な決して虐殺などない闘いの中にレーネはいた。

彼女の耳には多数の中に混じった仲間の応援が鮮明に聞こえる。

「レイ姐！そんな奴らぶっ飛ばしちまえー！」

「レンレンファイト〜！」

「頑張ってくださいい〜！」

自然と頬が緩む。

わざわざウイラまで本拠から応援に来てくれたんだ。負けるわけにはいかない。

二日前に比べたら包帯の量も少なくなっているがやはりどう見ても怪我人なレーネ。

しかし、その程度彼女の強さは変わらない。

向かってくる者を殴り飛ばし、斬りかかってくる者の刃を蹴り折り、炎やら雷やらは爆発的な脚力で全て避ける。

このブロックにいる者では傷一つ付けられない。

そして、最後の一人がリングアウトとなった。

『予選バトルロワイヤルBブロック勝者、レーネ・K・エノモト!』

会場のさらに大きな歓声に包み込まれるが、レーネは興奮一つしていなかった。

予選の別れ方を見たときから彼女は決勝トーナメントこそ本当の闘いがあると見据えている。

言つては悪いがこの予選は、所詮準備運動だ。

初めはこんなこととなった原因である白夜叉に怒りを感じていたが、よく考えればこのゲームに勝てば正式にカズマを引き抜ける。

姉弟揃って同じコミュニティに所属出来るし、コミュニティのみんなも喜ぶ、そしてあの吸血鬼から守れると一石二鳥どころか一石三鳥ぐらいになる。

そう考えれば、このギフトゲームは悪くない。いや、好都合だ。

「悪いがもう少し我慢していてくれ。私の弟よ」

レーネは肩にかかった髪を振り払うと颯爽と去っていった。

クロナ＝クロニクル争奪戦 中編

『ぶっちゃけると、このCブロックが一番楽しみだったんだ』

『うむ。Cブロックは熱き漢の闘いが見れそうじゃのう』

『まさか真反対の北側から来るなんて僕も予想外だったよ。ははは』

『じゃがサラがこちらにおるから噂ぐらい聞きつけてもおかしくはあるまい』

『それもそうだね。でも、あの人を送り込んで来るってマンドラさん分かってるう！』

『そして、このブロックには“ノーネーム”最大の問題児がおる。そやつとあやつ・どちらかが強いのか気になっておった者も多くいただろう。ここにその夢の組み合わせが実現したツ！いぎ、始めよ！予選バトルロワイヤルCブロックうツ！』

『「うおおおおおおおおお！！」』

そんな風に白夜叉たちのアナウンスで大盛上がりになっているのを見て十六夜は笑っていた。

「オイオイ、随分と煽ってんじゃねえよ白夜叉。これは一応バトルロワイヤルって名目だぜ？」

「しかし、十六夜殿。時にして観客の期待に応えるのも一興とは思いませんか？」

「アンタがそう言うとは思わなかったぜ少佐殿。それに俺に敬語はいらぬぜ」

「いえ、マンドラ殿から『ノーネーム』の方々には失礼のないよう言われているのでそれは出来ませぬ」

「はっ、そうかい」

と十六夜は答えながら内心、失礼のないようとか言つて仲間を奪いに行かせていることに苦笑する。

「おそらく、この場にいる者は皆様々なギフトゲームに挑んできた良き武人たちであろう。しかし、その中で十六夜殿。貴方は強い。我輩も一人の武人として貴方との闘いを望んでいるのです」

「そこまで言われたら、俺も断るわけにはいかないな。まあ、実は俺もアンタとは一度闘つてみたかったんだ。まさかこんな舞台でやることになるとはなあ」

十六夜はニヤリと不敵に笑う。

さつきから笑つてばかりだ。それだけ楽しみということだ。

両者はそれぞれ拳を握り構える。

「その前にしなければならぬことがあるようだけだな！」

「そうですね！」

二人同時に反転、後ろから奇襲を仕掛けた者どもを殴り飛ばす。

『いやー、流石は少佐と十六夜君だ！わかってるう！』

『無双にしてはちと数が少ないがどれだけ消耗せずに倒せるかが最後の勝敗を別けるじゃろうな。というか、もっとぶっ飛ばせやヤツホウウオオオオオ！』

「ハツ、テメエの望み通り全員で相手してやるぞガキイッ！」

「ブツ殺すッ！」

「人間風情がッ!!調子乗ってんじゃねえぞ!!」

「爆せろッ！」

『気持ちいいぐらいの怒声を上げて数十人が襲いかかるが、』

「ハツ、しやらくせえ!!!」

『出たあああああ!!!十六夜君の第三宇宙速度で放たれる蹴り!その風圧だけで、ゴミのように参加者が吹っ飛んでいくぞッ!』

「見よッ!これぞアームストロング家に代々伝わりし芸術的錬金法ッ!」

『おおっと!反対側では、少佐の錬金術で地面から石像が飛び出してキター!』

『うむ。よく見ると一体一体の石像の作りは精巧で筋肉が美しく表現されておるのう』

・。芸術的錬金法、言うだけのことはあるということじゃな』

『あれ?白夜叉ちゃん見るの初めてだっけ?』

『火龍誕生祭の時は閉じ込められておったからの』

『そっか、そういうえばそうだった。というか、白夜叉ちゃんつて筋肉美も理解出来る人だったんだ。てつきり、女の子の裸にしか興味がないと思ってたよ』

『おんし何気に酷いなッ！確かに黒ウサギのように豊満な胸や、飛鳥のように発展途上のなんとも言えない良さのあ『何公衆の面前でセクハラ放送しているんですかこの駄神様アアアアアア!!!』』

スパーンと見事なハリセン裁きをみせる黒ウサギ。

審判の仕事にそういう仕事はないが、彼女が止めなくて誰が止める？

そんな現実には黒ウサギは心の中でしくしく泣きながら審判に戻っていった。

『オツホン。ともかく、私は芸術の理解者じゃからな。男の像でもしつかりと良さは分かる』

『ふーん、なるほどね』

「うおおおおおおお!!!」

『そんなこんな話している内に二人を除いた最後の一人が地面に埋まった!』

『ついに始まるぞ!』

『残り二人い!』

シュッ、シュッシュッ!

その身体の大きさからは想像の出来ない軽いフットワークの攻撃。

十六夜はそれを避けながらこちらもボクシングの真似て拳を数発打ち込むが全て避けられる。

蹴りに拳のコンビネーションで十六夜は攻めていくが、的確に防がれる。

そんな攻防を両者はすでに10分近くしていた。

(少佐の攻撃パターンは大体読めたぜ。基本の体術はナツクルダスターを着けた両拳のみ。身体が大きい分、比例して腕のリーチも長いが距離さえとれば——)

大きく飛んで少佐の距離をとる。

それに反応して、少佐が拳を地面に打ち込む。

そこを起点に連鎖的に杭がせり出してくる。

(錬金術で応戦してくる。ハッ、マジで良いコンビネーションだぜ)

自分に出てきた杭を片っ端から全力で蹴り砕く。

十六夜の全力、つまり蹴り砕かれた礫は第三宇宙速度で打ち出されたも同意義というわけだ。

「何のこれしきッ!」

少佐のこの行動には十六夜も驚いた。

銃弾の雨霰なんて言葉では緩い速さで飛んで来る石礫を打ち返して来たのだ。

「マジかよッ!?!」

そう口にした時には打ち返された上に錬成された大小様々な杭が迫っていた。その全てを捌ききることは十六夜でも出来なかった。

致命傷になるもの、急所へのは全て碎き落としたが、細々とした小さな杭が腕や足に突き刺さっていた。

「ハッ・せつかく新調したばかりの服なのにもうボロボロじゃねえか」

「それは・不運でしたな。それにしても、今のを耐えるとは流石は十六夜殿でありますな」

「抜かせ。俺が言うのもアレだが、アンタ本当に人間かよ？ つーか、本当は何かギフト隠しているんじゃないか？」

「もちろん、純度100%筋肉で出来た人間でありますぞ。ギフトと呼べるものはありませんが、あえて言うならちよつと無理が出来るぐらいでしょうか」

「その時点で、アンタは十分超人だよ少佐」

ハア・ハア・ゼエ・ゼエ。

お互いに倒れるまでではないが、ボロボロ。

でも、どうしようもなく楽しかった。

「アンタとの闘い、最高に面白かったぜアームストロング少佐」

「我輩こそ貴殿と闘えて良かった」

言葉にするまでもなく分かっていた。

次の一撃で全てが終わると。

十六夜は腰を低くして足を半歩引いた。

少佐は拳を握り直し、構えた。

観客も静まりかえり、会場から音が消える。

皆が固唾を呑んで見守る中、両者は同時に動いた。

地面を全力で蹴り、真っ正面から接近。

「はあああああッ!!!」

「うおおおおおッ!!!」

そして、全力の漢と漢の拳が衝突した。

ボゴオン!!!と凄まじい威力に地面は砕け、フィールドを土埃が舞う。

大多数の観客には、拳がぶつかり合った瞬間爆発したように見えただろう。

『必殺の一撃同士のぶつかり合い!』

『次に立っていた者こそ勝者じゃ!』

そう白夜叉が言った次の瞬間——二人は吹き飛んだ!

「うお!」

「ぬう!」

受け身ととり、瞬時に起き上がろうとしたが

『試合終了ー!』

「なっ!? おい、黒ウサ——」

黒ウサギの抗議の声を上げようとして、気づいた。

十六夜がいるのはフィールドの外だった。

見ると少佐も同じくフィールドの外。

つまり、

『予選バトルロワイヤルCブロック、勝者無し!』

引き分けてことだ。

「あーあ、終わっちまったか。どうせなら白黒はつきりつけたかったぜ」

割れんばかりの歓声の中、もう自分で呟いて、笑う。終わってしまったものは仕方な

い。

楽しめたのだから文句を言つてはバチが当たる。

十六夜は立ち上がり、最高の対戦相手だった少佐の元へ歩いて行ったのだった。

クロナⅡクロニクル争奪戦 後編

さてと、このバカみたいなギフトゲームの話も前編、中編と進んで最後の後編だ。

ちよつと待て後編なのに予選すら終わってないぞ、と思っている読者もいるだろうがそこは毎度同じみのカットさせてもらう。

そもそも、作者がこのギフトゲームを企画したのは面白そうだったからって理由が大きいそれぞれもう一つ、少佐VS十六夜の闘いを書いてみたかったからだそうだ。

マジふざけんなんよって話だけど、また愚痴を言い出すとキリが無いので以下作者死ねで略とする。

結果から言って予選バトルロワイヤルDブロックの勝者は春日部だ。

しかし、春日部は決勝を棄権した。

いや、当然と言えば当然だ。

あの姉さんとレティシアバーサーカーと闘いたがる酔狂な人間は十六夜ぐらいだろう。

というわけで、残りの試合は姉さんVSレティシアだけとなった。

そして、現在は予選が終わり決勝までの間の休み時間だ。

◇◇◇

「カズマさん！頼まれていたのアレ、回収して来ましたー！」

「ありがとう黒ウサギ」

「いえいえ、これくらい安いものです！それに黒ウサギとカズマさんは振り回され役じゃないですか」

「うん、そうだね。ほんとにありがとう黒ウサギ。仲間がいて本当に良かった。」

「はい、黒ウサギも一人ならとうの昔に挫けていたと思いますが、カズマさんと同じ境遇の仲間がいてくるからどうにか頑張れてマス。」

「これからもよろしく。」

「はい。」

ズーンと重く悲しい空気に包まれる二人。

カズマはため息を吐き。

黒ウサギにいたっては、若干涙目だ。

さて、空気をリセットするための閑話休題つと。

「これがアンケート結果です」

そう言つて黒ウサギは持つていたアンケート用紙の束をカズマに見せた。

このアンケートはカズマが開会式後に黒ウサギに頼んで作ってもらい、100人に回答してもらった物だ。

アンケート項目は二つだけ。

『Q1, クロナ=クロニクルの正体が男だと分かり嫌いになりましたか? YES or NO』

『Q2, Q1の回答の理由を簡単に答えてください』

両手を拘束されているため一人で見れないカズマの代わりに黒ウサギがアンケート用紙を一枚ずつ捲っていく。

『Q1, NO Q2, 例え男だとしても可愛ければ問題ないよね!』

『Q1, NO Q2, 嫌いになる理由が見当たらない。もし、嫌いとか言った奴はいたらそいつはクズ』

『Q1, NO Q2, 嫌いになんてなるわけないじゃないかですか!!!日本には「こんな可愛い子が女の子なわけがない」って言葉があることを知らないんですか!?!』

『Q1, NO Q2, クロさんクロさんクロさんクロさんクロさんクロさんクロさんクロさん』

『Q1, NO Q2, むしろGJ!男の子だと知ってもっと好きになりました!私と付き合ってください!!!』

『Q1, NO Q2. 男の娘なんてどストライク過ぎる!これはもう運命だ!結婚しよう』

『Q1, NO Q2, 性別なんてどうでもいい。クロナニクル、僕と結婚してくれ
!』

『Q1, NO Q2, I love you!!』
付き合ってください

『Q1, NO Q2, 男も守備範囲ならぜひ俺と付き合ってください、お願いします!』
『Q1, NO Q2, ハイライトが消えたのクロナちゃんも超可愛い! ヤンデレクロナ
ちゃんに束縛されたい!』

『Q1, NO Q2, クーカワなクロナちゃんを犯して泣かせたい! ああ、そのまま私だ
けの物なって!』

『Q1, NO Q2, クロナさんとデートしたいです! 私と一緒にクール系ファッション
の服とか買いにショッピングに行ってください! もちろん、可愛い服も買いませう
!』

『Q1, NO Q2, こんな綺麗な娘と結婚出来る上に、子作り出来るなんて私女に生ま
れて良かったー!!!』
!!』
!!』
!!』

以下求婚、交際の申し込みなどが87件。

」

「えっと、カズマさん。あまり気を落とさないでください。黒ウサギも同じようなアン

」

ケートをしたら八割はセクハラな内容だと思えますので。本当に気にしないでください。大丈夫です。黒ウサギの目が黒い内には仲間の手など出させません！」

黒ウサギの必死の慰めの言葉で再起動したカズマは、淡々と無機質にこう呟いた。

「この世界は間違っている。」

◇◇◇

『さて、皆さん。残念なことに、宴もたけなわ終わりが迫っています。残すとこあと一試合』

『決勝を残すのみとなった。いやはや、早いものじゃなあ。ここまで波乱なギフトゲームは久しぶりじゃ。さて、ファイナレを飾る二人は必然的に決まっておったようじゃな』

『この「クロナ＝クロニクル争奪戦」の発端である彼女たちが最後を飾る。うん、これは本当に運命だったのかもしれない』

静かになった会場に二人のアナウンスだけが響く。

レーネは静かに立ち、拳を握って開く。

目の前のレイシアは、幾分か狂気が薄くなっている。

予選で発散したのだろうか。いや、今はそんなことどうでもいいか。

ただ彼女は静かにレーネの一挙一動を全てを観察している。

このままではレティシアには勝ち目がないのは、二日前に分かっていた。だから、レーネに付け入る隙がないか闘い方を模索している。

『それじゃあ、そろそろ幕を下ろそうか』

『二人がどんな最後を見せてくれるか、特と見せてもらおう。』クロナールクロニクル争奪戦” 決勝戦開始ッ！』

◇◇◇

ドン！ド、ドドドン！ポココココッ！バシイ！カツカカカツ！

ギフトゲームでは、空を飛べないからと言ってハンデや制限など起きない。

ご存じの通り、悪いのは空も飛べない方だ。

なら、空を飛ぶレティシアに対してレーネはどうしたか。

彼女が錬丹術師であることを、考えれば簡単なことだ。

平たかったバトルフィールドは見る影もない。

空に向かって34本の太い石柱が立ち、至るところに砲身が見れる。

柱は砕けてたり貫かれてたりしている。地面には幾つもの武具が突き刺さっていた。

そして、また一つ――。

レティシアは確実に追い込まれていた。

二日前のように翼を展開し、「龍の遺影」による近く中攻撃と武具の投擲で攻めていた。

もちろん、レーネに手持ちの武具程度では傷一つ付けられないことは分かっている。無いよりはマシだと思っていた。

しかし、その読みは甘かった。

二日前にレーネと争った場所は湖だった。その時レーネはただの跳躍で接近して闘っていた。

だが、今回の舞台はしつかりとした地面がある場所。それが大きく違った。

(来る・ッ！)

レーネは全力で柱を駆け登りながらあらぬ場所へ五本の鏢を投擲。

そして、それを目で追うレティシアに抜かって砲弾のように接近。

殴り落とそうとするがそれをレティシアはサイドステップのように水平移動で避け、影の槍で追撃する。

しかし、レーネは空中で体勢をズラして一本目の槍を避けつつそれを掴んで引つ張った。

「う、あ、あ！」

ぐんつといきなりのことに対処出来ず引つ張られたレティシアに踵落としをするが、

それを瞬時に翼を収納して重力に身を任せることにより紙一重で回避する。

「はあああああッ!」

そこに上からレーネが手や足をフル活用した連打をかけてくる。

それを影でいなしたり、受け止めたりしていく。

このデタラメなように計算された攻撃にレイシアは苛立ち募る。

レイシアが右や左に逸れて再び高度を上げれないように、的確に攻撃をしかけていくのだ。

右に逸れようとする左拳が、左に逸れようとする右拳がという風に。

一発でも受ければ致命傷間違いなし。賭けをするには分が悪すぎる。

さらに悪いことに、影でいなすものの完全には出来ないので攻撃を一撃一撃受け止めるごとに落下スピードは加速していく。

あつという間に、レーネのテリトリ巨大な石柱の森の中に入ってしまう。

「ハッ!!」

レーネは全力の右ストレートを打ち込み、影の反動を生かして一本の石柱に向かって飛ぶ。

その間に何十本もの を投げた。

レイシアは一気に加速した落下速度を、翼の展開で軽減して逆に上昇にもってい

く。

全速力でこの森から出ないと、少しでも高度を上げないと危険だ。

しかし、レティシアが森を抜けるよりも、当然レーネが陣を描き五本の鏢を刺す方が速い。

バシィツ！と何処かで音がした気がした。瞬間には、

スパツ。ほとんど反射神経で撃ち込まれた砲弾を斬った。

それは始まりの合図だった。

ドドドツ！ガドドドドツ！ドオン！ドオン！ヒュルルル、ボゴオン！

レーネの錬金術（錬丹術）はカズマの錬金術と違って遠隔錬成が出来る、レティシアはそんなことが可能だと当然知らなかった。

鏢で作用点となる陣を作らないといけないやら、起点となる錬成陣には構築式をしつかり描かなければならないなどの縛りはあるようだが十二分に脅威だった。

初めはレティシアもレーネが投擲して作る陣の場所を覚えようとした。

しかし、それは石柱が増え森と化し、さらに無数に増えていく陣の数など200を超えたあたりからもうどれがどれだか分からなくなってしまうた。

機関銃のような銃身が、バリスタのような砲台が、ドリル状の杭が撃ち出される砲身が全てレティシアに向かって火を吹く。

それをレティシアは影をミキサーのように高速回転させ、大量に撃ち込まれる弾を切り刻む。[!]

「くっ」

が、その隙間を抜けて来た矢が一本突き刺さった。

咄嗟にギフトカードから剣を出して斬り伏せる。

これでテリトリに引つ張られるのは何度目かであるが、確実に前回よりも数が増えている。

(10、9、8、7)

影を操り、剣を振るいながらレティシアはカウントを始めた。

カズマたちと違って遠隔錬成が出来ようとも、力を消費することに変わりはない。数が増えれば更に消耗する。恐らくもう数秒でこの集中砲火は止まる。

そして、レーネは直接攻撃に出るはずだ。

ここまでの戦いで、パターンは読めた。

(2、1・0——今だッ！)

予想通り集中砲火はピタリと止まった。

瞬間、目一杯翼をはためかせて飛び出した。

全力で最速で最短で、しかしレーネが何処から跳んで来ても回避出来るように注意し

ながら飛んだ。

(何処だ。何処からだ。今度は何処から来る。?)

石柱の森の出口まであとほんの少し。ここを抜ければ、レティシアのテリトリーだ。しかし——、そこにいた。ただ何をするわけでもなく、石柱の天辺に優雅に脚を組んで座っていた。

「チエツクメイトだ。レティシア君」

(やばっ。)

そう思った時には、ほとんど無音で三本の鎖鎌が迫っていた。

いや、三本だけでじゃない。四方八方から逃げ道を塞ぐように鎖鎌が飛んで来る。

初めの二本ぐらいは避けた。だが、避けた先で一本。それを降りほどこうとして二本。

もがけばもがくほど、身体に鎖が絡み続ける。

レーネは、陣から手を放すと柱から飛び降りた。

そしてレティシアに絡み付いた鎖の先を数本掴むとバキバキと鎖を引き千切りながら地面に向かって全力で叩き落とした。

「かはッ!!!」

衝撃で強制的に肺から酸素が出される。

確実に骨が何本も折れたり砕けたりした。

もしかしたら、内臓もやられているかもしれない。

酸素を求めて肺を動かすが全然入ってこない。

「ゴポツ、バア」

挙げ句には血が込み上げてきた。

いくら吸血鬼と言えど、これは堪えた。

起き上がろうと手をついて重い身体を起こそうとする。

その紅くボヤけた視界の先ではレーネが見下ろしながら陣に手を翳すかきのが見えた。

瞬間、石柱全てが根元から爆発した。

それはまるで大木が倒れるようにゆっくりとぶつかり合いながら倒れていく。

石柱は瓦礫となつて落ちてくる。

レイシアはそれをただ呆然と見ていることしか出来なかつた。

ズズウウンと土煙を上げながら崩壊した瓦礫の上にレーネは着地した。

彼女は自分が足場にしていた石柱が倒れる瞬間跳躍することによつて崩壊から免れていた。

当たりはまだ土煙が舞っているがそれも直に晴れるだろう。

観客は石柱の森が形成された時点で映像中継に切り替わっている。

まあ、そんなことはどうでもいいことだ。

ボゴ、ドオン！という音を立てて瓦礫が一部吹き飛んだ。

「はあ・はあはあ・」

これはレーネにとつて予想通りのことだ。

吸血鬼がこれぐらいで死ぬはずがない。

しかし、ダメージ0というわけでもない。

この死なない程度にダメージを与えて攻撃が避けられないぐらい弱らせるのが目的だったが、どうやらうまくいったようだ。

流石に殺すのは、カズマが悲しみそうだからな。

さて、肩で息をしているレティシアはきつと意識が朦朧としていてもう飛ぶことも動くことも難しいだろう。

あとは簡単だ。軽く殴ってフィールドから出せば決着がつく。

影を多少動かされても、然程問題出はない。

レーネは一、二回リズムをとるように足踏みをするると砲弾のように跳び、一瞬でレティシアに迫った。

拳を打ち込もうとするレーネに対してレティシアは腕を動かした。

（影で攻撃を阻害するつもりか。だが、押しきるッ！）
問答無用でレーネは拳を放った。

その次の瞬間、宙を舞っていたのはレーネの方だった。
それに観客の誰もが驚いた。

レティシアがとつた行動は単純なものだ。腕を掴んで引つ張る、それだけだ。
それだけで、レーネは運動方向がズレてレティシアに投げ飛ばされる形になったのだ。

日本で言うところの“一本背負い”だ。

こういう技をレーネは知っていたはずだ。シンの体術は、相手の力を利用して戦う“柔法”が基本なのだから。

レーネは自分のスピードのせいで、そのまま砲弾の観客席に張られた防壁に激突した。

そして、レーネはそのまま重力に引かれ地面へと落ちた。

『し、試合終了ー！ツッ！ギフトゲーム“クロナックロニクル争奪戦”を制したのは“ノーネーム”所属、レティシア“ドラクレア”!!』

次の瞬間、会場は歓喜の渦に飲み込まれたのだった。

クロナⅡクロニクル 後日談

“アンダーウッド”

ランタンには火が灯り、街も人もみんな明るく陽気に魅える。

至る所に夜店や出店が出ており、料理や工芸品、作物など色々な物が売られていて、目で鼻で口で客を楽しませている。

（急がないと、急がないと時間に遅れてしまう。）

そんなお祭り状態と化した“アンダーウッド”の街中をレティシアは走っていた。

本当は時間に余裕を持って出発するつもりだったが、予想外に部屋から抜け出すのに時間がかかってしまったのだ。

それもこれも、レティシアが怪我人だからだ。

腕や足、見えない所は胸やお腹までも包帯でぐるぐる巻きである。

一応、傷は全て塞がっているものの怪我人は怪我人。

外出は禁じられていた。

しかし、カズマとの約束の前ではそんなことはどうでもいいことだ。

今日のギフトゲームでレーネは一旦カズマから手を引くこととなったが、それだけで

レティシアは安心出来なかった。

だから日を改めた方が良いと言うカズマの提案を押しきって今日にしたのだ。

けれど、やっぱり本調子じゃない上に右目が包帯で覆われて視界が半分なため、

「うわっ！」

「うおっ、と」

人にぶつかってしまった。

そのまま転けてしまいそうになるが、ギリギリでぶつかった相手が受け止めてくれた。

「大丈夫か？人を探してよそ見してたからぶつかっちゃった、すまん」

「あ、ああ。いや、こちらこそすまない」

そこでレティシアは初めてぶつかった相手を見た。

年は十六夜ぐらいだろう。緑色のパーカーを着た東洋系の少年だった。

「お互い様だな。にしても、こんな怪我してるのに外出するなんて危ないぞ？」

「ああ、でもどうしても守りたい約束があるんだ」

「なるほどねえ。約束か？」

「そう、約束。つて、しまった時間が！す、すまないが私はこれでッ！」

そう言ってレティシアは慌てて走って行く。

その姿が人混みの中に消えていくまで少年はレティシアを見ていた。

「元氣そうでなにより」。出来れば、もう二度と関わらないことを祈る。まあ、エノモトさんがいる限りそういかないんだけどな」

いきなり、そう呟く少年の視界が何者かによつて塞がれた。

「僕というものがありませんながら浮気かな、鏡磨？」

その声は少年——鳥居 鏡磨の探していた人物だった。

「何でそうなんだよ。ちよつと、様子を見てただけだろ。そもそも俺は無実な奴を巻き込むのに反対だったんだから」

そう言いながら振り返ると目の前には銀髪碧眼ツインテールの少女、北山 白が二人もいた。

鏡磨はこれから白の嫉妬具合を察した。

「だから、巻き込んだものその後が気になって見ていたと？」

「・・・そうだよ。というか、そもそもわざわざ祭りに行くなら別々に行く必要なかったんじゃないか？」

「嫌だなあ。待ち合わせしてた方が、デートって雰囲気が出るからに決まっているでしょ」

「鏡磨はもうちよつとそういうところ勉強した方がいいよ。じゃないと、いつまで経つ

ても可愛いまんまだよ？」

そんな風に二人の白は可愛らしい笑顔を浮かべながら交互に話す。

「はあ。これでも、一応勉強してるんだけどな」

「本当に？」

「本当に？」

「ああ、もちろん」

「なら、僕がして欲しいこと分かるよね？」

「やらないといけないこと分かるよね？」

そう言う白たちの顔はいつの間にか笑顔は笑顔でも、小悪魔的な笑みに変わっていた。

彼女たちは不規則に鏡磨の周りを回ると、

「どちらが本物でしょうかゲーム！」

「愛の力で当ててよね、鏡磨？」

「もし間違えたら今日寝かさないから覚悟してよね、鏡磨？」

どうして白がそんなに不機嫌なのか鏡磨には全然分からなかった。

一つ言えるとしたら、鏡磨は今日のカズマのことを不幸と思っていたが自分はこの理不尽な二択問題だけで十分不幸なことである。

乙女心とは不思議である。

◇◇◇

「アンダーウッド」広場

そこには客が座って食べられる用に沢山のイスとテーブルが設置されており、仮設のフードコートと化していた。

その一角にカズマとレティシアはいた。

「それにしても、意味不明なクソギフトゲームだったなあ。まったく」

「まあ、そう言うな。結果としてコミュニケーションを移籍せずに済んで良かったじゃないか」

「よく言うよ。あんなギリギリな勝ち方しといて。」

カズマはそう言いながら熱々な肉を一切れ食べる。

「仕方ないだろう？だって、お姉様の物理特化のあのギフトはレベルが高くてチートだもん。全盛期の私ならともかく、今の私じゃどうしようもない。それでもカズマのために、カズマのために頑張ったんだから」

レティシアは口を尖らせながら、「カズマのために」と強調しながら言う。

「頑張ったも何もお前だった発狂してただけだよ？おかげで、予選の時に医療班の人たちフル回転だったらしいぞ」

「全部白夜叉が悪い。私は、悪くないもん！白黒はつきりつけさせてくれる言うから、任

せたらあんな無駄に大規模化上に、勝手に参加者増すしカズマを見世物にするし。正直、カズマ以外全部壊れて消えればいいって思ったのは私のせいじゃない！」

「でも、この発端考えたら自業自得だよな。そんな怪我までしてバカみたい」

「ならカズマは私じゃなくてお姉様に勝つて欲しかったんだな!?せうかく頑張ったのに誉め言葉もないし、ダメ出しばかりして。ああ!もう!」

今日のレティシアは疲労やら何やらで短期だった。

でも、本当の事でもあるので怒りをカズマにぶつけるにぶつけない。

レティシアはヤケ気味に食べ物をいっぱい口に入れると酒で一氣に流し込むと、突っ伏した。

カズマはそれを見て、怪我人が酒飲んで大丈夫かとかなどちよつと心配になってきた。

「うう。もうやだ。いくらなんでも酷すぎるよう。ひつく、私はただ一緒にいたいだけなの」

傷口を抉られるようなギフトゲーム＋カズマコミュニティ移籍の危機＋勝てる見込みの少ない相手とのギリギリの戦い、そしてそこに優しくしてくれると思ったカズマからのダメ出しときてレティシアの心も精神もぼろぼろだった。

それを何となく察していたもののついつい言い過ぎてしまった自分にカズマは

ちよつと後悔。でも、反省はしていない。

泣かせてしまったのはカズマ自身。なら、責任は取らなければならなかった。

はあ、仕方がないことだと自分にカズマは言い聞かせながらイスをずらして突っ伏してシクシクと泣くレティシアの隣に座り直した。

「ほら、起きろレティシア。そして、一気飲みなんかするから酔っぱらうんだよ。……しっかりしろ、泣くなつて」

「うう、やだ！ 酔っぱらたつていいじゃないか！ 祭りなんだぞ、シラフでやつてられるかッ！」

若干意味が分からないことを喚きながらレティシアは起こそうをするカズマに反抗する。

「そもそも、カズマもカズマだ！ こんなにハッキリ言ってるのにまだ何も言ってくれないのか！ バカ、カズマのバカ！」

「なら、とりあえず起きろつてんだ！」

そう言つてテーブルにしがみつくレティシアをカズマは無理矢理引き剥がし、起こさせた。

「!?!」

そして、鼻がぶつかりそうなくらい顔を近づけてしっかり目と目を合わせた。

「俺はね、レティシア。俺なんかのせいで、怪我して欲しくなかったんだ」

「ダメ出しばかりしてたのは、あのギフトゲームでちよつとイライラしてたからなんだ。レティシアは悪くないのに当たってごめん。感謝している、ありがとう」

「本当に？ 本当にそう思っているのか？」

「もちろん。レティシアに怪我して欲しくなかった理由はもう一つあるんだ」

「それは」

「嫁入り前の女なのに傷が残ったら大変だろうってやつ。本の受け売りだけ」

あまりにカズマらしいかなる言葉にレティシアはキョトンとしてしまった。でも、すぐにその顔は笑顔になった。

「あは、あつはつはつは！ その心配ならいらぬ。何故なら例え傷があつて売れ残つても、カズマが私を嫁に貰ってくれるからだ」

と、どこか自信満々に言うレティシア。

「半永久的に不老不死な吸血鬼おに売れ残りなんてないだろ？」

「そうとも限らんよ。外見は老けなくても、中身はどんどん老けていくからな」

「言つとくけど、俺が嫁にもらうなんて保証何処にも無いからな」

「ははは。そう言いながら、結局カズマは受け入れてくれるよ。だって、優しいからね」

この言葉にカズマは「俺は優しくない。だから保証もない」と言い返すことしか出来なかった。

ともかく、レティシアの顔に笑顔が戻ったからよしとした。

肩に置いていた手を退かして元の位置に戻ろうとした時、

「ねえ、カズマ。」

唐突に名前を呼ばれ、手を握られた。

レティシアを見ると、目を閉じて少し唇をつき出すようにしている。

その意味が分からないカズマではない。何を求められているのか分からないほど無知ではない。

相手は酔っぱらいであるが、それが気の迷いでないことは間違いない。きっと、シラフでもレティシアはそうしてきただろう。

だから、こそカズマに逃げ道は無かった。

さっきの慰めの言葉みたいに相手が勝手に誤解するに仕向ける方法は使えない。人形は完全にお手上げだった。

そんな状況を黒ウサギは少し離れたテーブルから見聞きしていた。

「レティシア様、お酒が入って大胆になってますね。」

「何言つてんだ黒ウサギ？あいつは元々結構大胆だろ」

「青春でありますな！」キラキラキラ

「それよりも、展開早過ぎじゃないかしら？ね、春日部さん」
「もぐもぐもぐもぐもぐもぐ」

耀はそんな光景など、どうでもいいらしく一心不乱に料理を食べている。

飛鳥はそんな姿を見てちよつと笑い、視線を二人に戻す。

「恋愛に展開の早い遅いもねえよ。本人たちの気持ち次第だ。でも、今回はお嬢様の言う通りだぜ」

「十六夜君が恋愛を語るなんて何か変な感じね」

「失礼だな、お嬢様はつて・やつぱりな」

「れ、レティシア様が頭突きされましたッ!？」

レティシアを頭突きカズマは、「バーカ」と言いながら元の位置に戻っていく。
それに対してレティシアが抗議の声を上げる。

「ああら。あれじゃあ、男女が逆ね」

これには「ウンウン」と四人とも同意した。

「そういえば、こういうのに一番反応しそうなコーキさんも白夜叉様も見当たりませんが、一体どうなされたのでしょうか？」

と、ふと思いい出した黒ウサギ言った。

「黒ウサギ殿の言う通りコーキ・C・マユズミの姿が見えませんな」

「そうね。こんな面白いことあの二人が見逃すわけがないわ」

「もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ」コクコクコク

「ああ、それなら」

十六夜は何気なくたこ焼きのような料理を一口に運びながらこう言った。

「あいつら恨みを結構買ってるから、どっかの暗殺人形に殺^やらてるんだろ。はむ、もぐもぐ」

それだけで、誰が犯人で二人がどんな状態か容易に想像出来た。

「ゴクン。まっ、自業自得ってやつだ」

エピローグ

“マックス”さんが入室しました。

マックス：おや？おやおやー？今日は、カノさん一人だけのようですねえ

カノ：どうも、マックスさん

カノ：はい、言う通りさつきから皆さんを待っているのですが誰も来なくて退屈してました

マックス：皆さんどうされたんでしょうか??

カノ：多分、皆さん“アンダーウッド”の収穫祭を満喫しているんでしょう

マックス：収穫祭かあ、楽しそうですね。どんな感じのお祭りなんです？

カノ：そうですねえ。基本的な所は他の収穫祭と同じですが、

カノ：前夜祭から始まり、本祭、そして後夜祭までそれなりの日数であるのが私的に印象深いですね

マックス：それなりの日数でどれくらいですか？

カノ：確か、全部で約一ヶ月ぐらいでしたっけ

マックス：一ヶ月もツ!?それじゃあまるで毎日お祭りみたいじゃないですか!?

カノ：やつぱりそう思いますよね。俺も開催期間の長さにはちよつとびつくりしました

マックス：カノさん、カノさん！

カノ：はい、どうしましたマックスさん？

マックス：今、webで記事見ていたんですが、

マックス：“クロナークロニクル争奪戦”ってすごい盛り上がったギフトゲームが今日あつたんですよね？

マックス：カノさん直に見ていたんでしょう!?どうな感じだったんですか!?ぜひ、教えてください！（ウキウキワクワク）

カノ：あ、はい。見ていたと言えば、見ていたんですがね

カノ：何の因果か。超特等席みたいところで直に見てました（笑）

マックス：特等席いッ!?これ観客が多すぎて観れない人もいっぱいいたって書いてるのにッ!?

マックス：それなのに更に上の超特等席だなんてすごい!すごいじゃないですか、カノさん!

カノ：いえ、そんなに良いものじゃなかったですよ。はは

マックス：えっ?そうだったんですか?

カノ：ああ、ギフトゲーム自体の見ごたえはすごかったですよ？

カノ：いきなり予選Aブロックでは、バーサーカーによる一方的な殲滅で虚をつかれましたし

カノ：Bブロックは、美しく舞うように次々と参加者を倒していくレーネさんを見るのが出来ました

マックス：北側第二位のレーネ・K・エノモトさんですね。綺麗な人ですよ

カノ：はい。そのBブロックに対して、Cブロックは熱き漢たちの闘いでした

カノ：俺にとってもその闘いは、手に汗握る熱き闘いでしたね。たまには、ああいうのも良いものです

マックス：記事にも、ここ稀に見る熱き闘いつて書いてました！

マックス：あ

カノ：どうしました？

マックス：ボクから聞いてせっかく話してもらっていたのにすみませんが、

マックス：ボクちよつとしないといけないことができました。

カノ：落ちますか？

マックス：はい、ごめんなさい

マックス：でも、最後に聞きたいことがあるんですがいいですか？

カノ：構いませんよ。何ですか？

マックス：記事の最後のまとめに、

『今回のギフトゲームで男だという驚きの真実が明らかになったクロナ様だが、やはり彼はクールビューティーであり、彼女は男の娘ヒロインであることは揺るがない真実だった』

つてあつたんですがどういう意味ですか？

第四章 錬金術師たちの研究レポート

観察対象 北山 白 episode 1

五四五五外門 “煌焰の都” 境界門アストラルゲート付近

巨大ペンダントランプに照らされた “サラマンドラ” の本拠地のある都市を、殿下とリン、アウラに人の姿のグライア、そして鏡磨きようまと白あきらの一行は至つて普通に歩いていた。そう何の変装や姿を隠したりもせずに堂々と。

「すごいな！あの巨大なランプ一つでこの都市全域の気候を温暖にしているなんて……」
「ランプと言うより擬似太陽と言っても過言じゃないだろう」

「そうですね。太陽と言つても色的には夕焼けですが」

● そう殿下の言葉に相槌を打ちながら、白は都市を眺める。

「何だかこの都市は黄昏色なせいで、もの寂しさを僕は感じますね」

● そんなセンチメンタルな言葉に

「うわっ」

「なーに言つてんの白ちゃん！あつちとかそことか工房とかあつてすつごく活気あるよ。全然寂しそうななんかじゃなよ？」

リンは、どーん！と勢いよく白に抱きつきながら言う。

「いや、そんなことは見れば分かりますよリン。そうじゃなくてですわね。こう、美しい風景を見て感じるものはないんですか？というか、何で僕を抱き締めてるんですか？あなたは」

「だって、白ちゃんの抱き心地最高なんだもん。シルクのような肌触りの綺麗な銀髪に、手入れの行き届いたスベスベなお肌。そして、スラックとしたした体型だけど触れてみると予想以上に柔らかい体。こんなの抱き締めずにはいられないよ！揉まずにはいられない！そもそも、そんな抱き心地抜群な白ちゃんが悪いんだよ？」

「そんな無駄な評価いりませんから離れてください。そして、どさくさに紛れて変な所揉まないでください！ほらさつさと、はーなーれーろー！」

白は抱きついて離れないリンをどうにかこうにか引き剥がそうとするが、リンもリンで意地でも放さない。

むしろ、もつと絡みついていこうとしている。

そんな光景を見ながら鏡磨はある疑問を口にした。

「なあ、何で女子同士ってスキンシップが激しいんだろうな？正直ちよつと目のやり場に困る時があるっていうか、色々危ないって見えるか？」

「鏡磨。俺には一方的にリンが白に絡んでいるように見るのは気のせいかな。それと、

アレはスキンシップが激しいのか？」

「多分。俺たち男子に比べたら激しい方だと思う。まあ、いつものことだから流石に慣れたけどな」

「その通りだが、今俺たちがこんな堂々としていられるのはリンのお陰だからな。少しぐらい好きにさせとこう」

そう殿下の言った通り、今こうして一行が堂々とのんびりしてられるもの彼女のギフトのお陰だ。

リンのギフト「アキレス・ハイ」は概念的な「距離」を操作するギフトだ。それを使えば、他の人からはまるで遠くにいる誰かという風に認識され、ほとんど記憶も意識さえもされることはない。

というわけで、殿下も鏡磨も白に絡みつくリンのことはほつといて迎えに来ているはずのある人物を探し始めた。

「グライア、アウラいたか？」

「いえ。彼にはちゃんと到着時間を伝えてるのでこの付近にいるはずです」

「でも、いないな。あの人の服装ってこの都市だと目立つからわかるはずなのに」

「ええ、その通りなのにいつも探すのが大変だなんてどういう理屈かしら。しかも、あつちはこっちの存在に気づいているっていうのにもこちらが見つけるまで声かけな

「いって——」

というアウラの愚痴を軽く聞き流しながら鏡磨はキョロキョロと辺りを見渡すがやはりあの人はいない。

そもそも、境界門の近くは人通りも多いので人を探するのは困難だ。

鏡磨が半分諦めた時だった。

「フン。見つけたぞ」

グライアは人混みの奥を睨み付けるように見ている。

その視線を辿ると人混みの中こちらを見て笑っている和装の少年がいた。

少年もこちらが見つめたことに気づき歩いて来る。

そして、四人の前に立つとこう言った。

「やあ、ようやく見つけたか。このまま見つからないんじゃないかちよつとヒヤヒヤしてしまったよ」

「そういうなら次から普通に迎えることだな。こんな時間の無駄なことをしてなんの意味がある？」

「そう怒らないでくれよグライア。これもちよつとしたゲームさ」

殿下は一步前に出ると和装の少年にこう言った。

「今回も世話になるな。草薙レンカ」

「いやいや、おいちゃんこそよろしくな。白髪のあんちゃん」

外見に似つかわしくない喋り方ををする和装の少年、草薙レンカ。
彼は、隠れ屋という商売をしている侍だ。

観察対象 北山 白 episode 2

殿下の一行は草薙レンカの案内で「煌焔の都」のインスタントハウスに向かっていた。

隠れ屋の仕事を簡単に説明するならば、公的機関に見つかりたくない人たちに拠点となる場所（家やら部屋やら）を確保、そして提供するというものだ。

まあ、そんな仕事なわけで色々とダークサイドのコミニティとも知り合いだったりする。

その中でも殿下たちは特別でレンカは、もはや仲間のようなものだった。

さて、さつきも言った通り彼らは今レンカの用意した滞在場所に向かっている。

その中で白は少し不機嫌そうな声で鏡磨を責める。

「僕がリンに揉みくちやにされて困ったのに、助けてくれないなんて鏡磨は随分と冷たいね。ま、人間なんてものは実際薄情なもので自分の都合のいいときしか助けてくれないなんて知ってたけど」

「悪かった。俺が悪かったって！本当は俺も白を助けようとしたけど、殿下にリンのお陰でこうやって歩けるんだから少し好きにさせようって言われたんだ。仕方ないだろ。」

實際こうやってられるのってリンのギフトのお陰なんだし。」

「嘘つき。それだけじゃないよね。僕たちを変な目で見ていたの知ってるんだよ」

「いや、見てない！見てないから！そんな目で見てないからッ！」

と鏡磨は必死に否定はするが、本当は女の子と女の子が絡みあっている姿はとても目の保養になったことなんてことは言えない。

「へえー、そうなんだ（棒）」

「ホントだからな」

「へえー（棒）」

「ホントに」

「ふーん（棒）」

「ホントですからね」

「あ、そう」

全くもって鏡磨の言葉を信じる気ゼロな白の対応に焦る。

本当のことなんか言えないし、どうやったら白の機嫌を直るのか鏡磨にはわからない。かかった。

鳥居鏡磨は一体どうしたら北山白の機嫌を直せるのか？

考えれば考えるほど何も思いつかない。

そんな風に鏡磨が悩んでいると、

「フフツ」

笑い声がした。

見れば、さつきまで不機嫌な顔をしていた白が意地の悪い笑みを浮かべていた。

そこで鏡磨は全てを察した。

そう、白が不機嫌な顔をしていたのはわざとだ。

そしてそれに騙された鏡磨が機嫌を直そうと足掻いて悩む様を見て笑っていたのだ。

つまり、いつものようにからかわれたのだ。

「白、おまつ。」

「パニック寸前まで悩んでいる鏡磨も、なかなか面白かったよ。でも、どうせならオロオロしている可愛い鏡磨も見たかったなあ」

そう言っているところを笑う白に対して、鏡磨は安心感と共に脱力した。

「はあ、良かった」

「フフフツ。僕があんな些細なことで機嫌を悪くすると本気で思ったの？ さすがにそこまで心が狭くないよ。まあ、そんなことより」

「そんなことってお前え。」

本気だった鏡磨としては、一連のことを軽く流されてゲンナリしてしまう。

「どつちに興奮していたの？」

「はっ？」

「いや、だからどつちに興奮していたのかって聞いてるの？」

「さも当然のように何聞いてんの!!？」

「鏡磨は、僕がリンに絡まれているの見て興奮してたよね？『目の保養になるな』みたいな顔してたよ」

「しかも、やつぱりバレてた!!」

白は妖しく笑いながら鏡磨の腕に体をわざと当てるように絡みついてくる。

まだ女性らしい体つきに成長中の身体でも、腕に柔らかい感触がしっかり伝わってきて意識してしまう。

「それで鏡磨はどつちに興奮していたの？もちろん、僕に決まっているよね？僕以外ありえないよね？リンなんか興奮するはずないよね？仲間とか年齢とか関係なく女は女だ。他の女とか見たって何とも思わないよね？興味もないよね？だって鏡磨は僕のものだし、鏡磨を愛してるのは僕だけなんだよ。他の女なんか見ないで僕を、僕だけを見ていたらいいんだ。だから、鏡磨」

白は綺麗な、それはとても綺麗な碧い瞳で見つめながら質問をする。

「——僕に見て興奮してくれただよね？」

そんな和やかな二人のやりとりを見ていたレンカは、

「いや、相変わらず鏡磨と白ちゃんは仲がいいなあ。おいちゃんも、若い二人が青春してるの見てると嬉しくなるな」

と遠い目をしながら言った。

「ふむ。なるほど。ああいうのが『青春をしている』っていうのか」

「そうそう。白髪のおんちゃんも、いつかいい人見つけて青春するといいよ。おいちゃん応援してるから」

「いいな！私もあんな風に白ちゃんに愛を囁いてもらいたいよ！やつぱり鏡磨を殺^やるか。」

「あれがそんな和やかなものに見えないの私だけかしら？むしろ、殺伐とした雰囲気を感じてるのは私だけかしら？」

「フン。騒ぐほどのことじゃないだろ。時たま見る光景だ。それと、リン。刃を納めろ」

そんな風になんやかんやと談笑している内にとある一軒家の前へと辿り着いた。

「さて、長旅ご苦労さん。ようこそ、ここが新しい君たちの隠れ家だ」

そう言つてレンカは扉を開けた。

観察対象 北山 白 episode 3

「煌焔の都」、レンカのセーブハウス

「ただいま」

と陽気声で言うのと、

「お帰りなさい、レンカさん。そ、それと皆さん、いらっしやい、です」

中から鮮やかな蒼の漢服を着た少女が出てきた。

「今回もまた世話になるんな。仲間共々よろしく頼む」

「は、はい。また皆さんに会えて嬉しいです。よろしくお願い、します」

と挙動不審になっている彼女は唯一のレンカのコミュニティのメンバー、名を竜吉公主りゅうききょうしゅと言う。

天帝（中国の最高神）と西王母（女神で仙人の長）の娘という超弩級サラブレッドなエリート仙人である。

と言っても、中身は外見年齢通り16歳のまだまだ夢見る少女。

そして、さつきから喋り方がちよつと変なのはレンカ以外に超人見知りであるからだ。

「そんじやみんな、上がって上がって。コウちゃん、みんなにお茶お願い」

「はい、わかりました」

「お茶などよりも先に部屋に案内してくれ。いい加減人の姿をしているのは疲れた」

「ん、そうかい。なら、おいちゃんが案内しよう。今回もグライア専用の部屋を作ってるんだ」

そう言つてレンカはグライアを連れて二階へ上がって行つた。

残つた5人は公主の案内でリビングに向かつた。

それぞれが適当に座り寛ぎ始める。

「あ、あの・みなさん。お風呂も沸かしておきましたので、お入りになりたい方はどうぞ」

と緊張しきつた声がキツチンからした。

「レディファーストとか言うわけじゃないけど、入つて来たらいいんじゃないか白?」

「鏡磨がそう言うなら、私が白ちゃんと二人きりで「いや、僕は結構だよ」

何故か応えるリンの声を遮つて白は言った。

「夕食の後にもゆつくり入るから」

「ええ、何で? せっかく鏡磨が言ってるんだから入ろうよ。あんまり人の優しさを無下したら失礼だよ、白ちゃん」

「リン。お風呂にそんなに入りたくないなら、今から一人で入って来て良いですよ？」

「白ちゃんがいないと意味ないの！」

「私は後でゆつくり浸かるのでいいです」

「じゃあ、私もその時一緒に入るね」

「いや、入れませんからね？リンと一緒に入ったら変なところ触ってくるでしょう」

「あれは純粹に体を洗ってあげているだけだよ。そういうところに汚れて貯まりやすいんだから。仕方ないよ。うん、仕方ない。下心とか全くない。そこでちよつと手が滑ってエッチなハプニングが起きるのも仕方のないことなんだよ、白ちゃん」

「ハプニングとか言っとけば何でも許されると思わない方がいいですよ、リン」

「テヘツ☆」

と笑って誤魔化すリン。

白はやれやれといった感じで肩をすくめた。

「アウラさんはどうします。先入りますか？」

「私も白と同じで後でいいわ。ですから、殿下。入浴されて来たらどうでしょうか？」

「そうだな。誰も入らないというものせつかく風呂の準備をしてくれていた竜吉公主に

悪い」

「そ、そんな気にしなくていいですよ、殿下さんっ。後で入ってもらえるのならそれで

その綺麗だけど闇を抱えた碧い瞳についてドキツとしてしまう。

リンの瞳には白だけが映り、白の瞳にはリンしか映していない。

そんな状況がずっと続けばいいと思う。

でも、このまま何も応えないのは白に悪い。

「ううん、何でもないよ白ちゃん！ちよつと呪つてただけだから」

「何だ、呪つてただけですか」

「そうそう♪」

「なら、良かったです」

そう言つて二人は笑い合う。

「知らぬが花と言うか。白はいつになつたら気づくのかしら？」

そんな光景を見ていたアウラはそう呟いた。

「何か面白いことでもあつたのかい？結構結構。若い子は笑顔が一番」

グライアの案内が終わつたレンカがリビングに入つて来た。

「あの、お待たせしてしまつてすみません。」

と丁度お茶の準備を終えた竜吉公主が、お茶とお茶菓子を持ってきた。

「ああ、悪いけどコウちゃん。おいちゃんの分のお茶はいらないよ」

「どこかお出掛けになるんですか？」

「借りてる工房にね。白ちゃん、おいちゃんが頼んでた物あるかい？」

「ええ、もちろん。正直、容易たやすかったですよ。あの神珍鉄オートマトンの自動人形主が力不足でしたからね。巨人で手一杯で切り取られたことにも気づいてませんでしたよ」

「それは仕方ないさ。神珍鉄は伸縮性が高いからね。少しくらい無くなっても問題ないのさ」

「とりあえず、お約束してました品です」

白は懐から15cm定規ほどの大ききをした紅い金属片をレンカに渡した。

レンカは受け取ると、その金属片を裏返したりして観察する。

「うん、間違いなく神珍鉄だ。というわけで、おいちゃんは今晚いないから」

「でしたら、お夕食はどうなさるんですか？」

「んー、多分集中しているから——」

「了解いたしました。でも、——」

そんな会話をしながら竜吉公主はレンカを見送るためにリビングを出ていった。

まもなくして、

「いつてらっしゃい。良い物が出来ることを祈っております」

「おう！行ってきます」

という声と扉の閉まる音がした。

竜吉公主はリビングに戻つて来ると、何も乗っていないお盆を見て驚いた。

「えっ？一つ余るはずなのに。」

用意した湯のみは自分の分も入れて全部で五つ。レンカの分も淹れてたので一つ余るはずだ。

「何を慌てているのかしら？」

とアウラが聞いてくる。

「い、いえ、レンカさんを含めてお茶を淹れたのに無くなつて。」

「全部でいくつ？」

「五つです」

「なら、丁度ここにいる全員分よ？」

「ほえっ？何を言ってるんですか。」

「信じられないなら、単純に数えなさい」

そう促されて慌てて人数を数える。

「アウラさん、リンちゃん、白ちゃん、白ちゃん。そして、私。——ん、白ちゃんと白ちゃん。」

竜吉公主は自分の目を疑つて、一度目を擦る。

そして、もう一回見る。が、幻覚は消えない。目の錯覚でもなさそうだ。

添付レポート party night

クリスマス。それはイエス・キリストの誕生を祝う祭りのことである。

しかし、それは時代が進むにつれて本来の意味を失っていった。

今ではほとんどがパーティーをする日だったり、大切な人と過ごす日だったりする。

だから何だ、という話であるが。

つまり、

人も神と一緒に賑やかなことが大好きなことだ。

◇◇◇

“ノーネーム”本拠地、広間

飛鳥は様々な物で飾られてクリスマス一色に染まった広間を見渡して頷いた。

今日は12月25日——ではなくて12月29日。

本来ならクリスマスなどもう終わっているはずだが、“ノーネーム”のクリスマスは終わってなかったのだ。

実はクリスマスである12月25日はあまりの多忙さにパーティーなどしている余裕などなかった。

やっと全てが片付いたのはその二日後。

ジンは、「今年はクリスマスパーティーが出来ると思ったけど残念だったな。その分、正月は盛大にしよう」など思っていたが、

「何言ってるのジン君？やるわよ、クリスマスパーティー」

「えっ？」

「あんだけ働いたんだぜ？いっちよ派手にパーティーして騒いでも文句ないよな御チビ？」

「えっ？えっ？」

「準備は任せて」

「えっ？えっ？えっ？」

「日にち的には、クリスマスパーティー兼忘年会かな？それじゃあ、各自準備を進めよう！」

「「おおっ！」」

といった感じでジンが状況をうまく理解できてない内に、怒濤のごとく問題児たちがパーティーの準備を始めたのだ。

理解した時に時既に遅かった。

そして、今日はそのクリスマスパーティー兼忘年会の開催日だ。

飛鳥の担当は、総務。全体の準備を見て開催日に間に合わせるようにすること。そして、招待状を送るのも彼女の仕事だ。

送ったのは、「ウイル・オ・ウイスプ」、六本傷、そして嫌々だったが一応「ペルセウス」の三つのコミュニティ。

この三つは「アンダーウッド」でジンが交渉の末、作ることでみた同盟に参加してくれたコミュニティだ（約一コミュニティを除く）。

「ウイル・オ・ウイスプ」は主要メンバーが出席、「六本傷」は代表として猫店員とキャロロが出席、「ペルセウス」は当然欠席という感じだ。

なお、キャロロはすでに来ており、飾り付け担当の耀と話をしている。

「それで、三毛猫さんたら——」

「うん。三毛猫はそういうの——」

さて、飾り付け良し。次は料理の確認だ。

いくつかの料理はすでに完成しておりテーブルの上に美しく飾られている。

流石は十六夜だ。

今回のシェフたちは、メイド三人組＋十六夜＆黒ウサギ。

食材はコーキが良い物を安く交渉して仕入れて来たのを使い、レティシアをメインとしたメイド組が調理し、それを十六夜と黒ウサギがサポートしている。

「ツリーOK!飾り付けOK!料理も順次準備OK!さあ、これでクリスマスパーティーを始めれるわ!」

とその時、チリンチリーンと来客を告げるベルの音がした。

「あ、黒ウサギ。私が出迎えるから大丈夫よ」

丁度料理を運んできていた黒ウサギをそう言うて制して、飛鳥は玄関に向かった。

玄関を開けると、

「「メリークリスマス!!!」」

「メリークリスマス!いらっしやい、アーシャ、ジャック、レーネさん」

「「ウイル・オ・ウイスプ」を代表して、今回はパーティーへの招待していただき感謝する」

「そんな堅苦しい挨拶なんていらないわ。だって、今日はパーティーなんだから」

「では、遠慮なく入らせてもらおうよ」

「パーティーだ!パーティーだ!」

「こらこらアーシャ。はしやいぎ過ぎるのはダメですヨ」

三人が中に入ると玄関を閉め、広間へ案内する。

「そういえば、ジャック。そっちのリーダーは、確かウイラって言ったわよね?彼女も今日来るのでしょうか?どこにいるのかしら?」

「それでしたら、飛鳥嬢。私の後ろに、後ろに、いませんね」

「どうしようジャックさん？またウイラ姐がいない!？」

「落ち着けアーシヤ。きつとこの館のどつかにいるはずだよ」

「ヤホホ、レーネの言う通りです。きつとこの館のどこかにいますよ。だって、ここには彼がいますから」

「あ、そつか。なら心配ないね」

そこで広間の扉を開けながら、飛鳥は振り返った。

「言つてなかつたかしら？今日、カズマ君はお休みよ？」

「「えっ?」」

◇◇◇

白髪に翡翠色の瞳。アキレスはパーティーに出席するため、ではなく単純に腹がすいたから部屋を出て一階へと向かっていた。

今日は彼が表に出る日で、現在カズマは「真理の扉」の前にいる。

時たまこんな風にアキレスは表に出ては好きなように生活している。

「そオいや、今日はパーティーとかだったな」

廊下には厨房から美味しそうな匂いがした。

今のアキレスはエネルギーのほとんどを身体の修復に使っているため、こういうご馳

走とかは嬉しい限りだ。

アキレスが階段にさしかかった時だった。

ズカシユ。

そんな鈍器で殴られた音がした。

アキレスは無言で床に落ちた凶器に手をやった。

ギロリ。

気配のした方を獣のような鋭い目付きで見た。

が、誰もいない。そのまま辺りをゆっくり見回していくと、

「ヒイツー！」

「そこだ」

シユンとアキレスが消えた次の瞬間には、ドサツという人が倒れる音がした。

「さアて、人に鈍器投げつけるなんて随分いい度胸してンじゃねエか？人にンなことするなら同じことされても文句ねエ——て、何だコイツ？」

「うう、カズカズ怖い・カズカズ怒った・。今まで怒ったことなかったのに・。」

と取り抑えられている少女、ウイラは涙目だった。

カズマの記憶領域にアクセスして、ようやくアキレスは納得した。

許されるかは別として、ウイラには気になる相手鈍器を投げる悪癖があるらしい。

そして、どうやらアキレスのことを知らないようでカズマが怒っていると思つてゐたいだ。

涙目で怯える少女とそれを無理矢理床に押しさえ付けてる自分。

「チツ」

アキレスに女を虐めるような趣味もないし、これじゃあ悪者はアキレスみたいだ。

力を緩め立ち上がると、

「二度とオレに投げンじゃねエぞ、木っ端悪魔が」

そう吐き捨て立ち去ろうするアキレス。

「待つて！」

振り返るとまだちよつと怯えた感じのウイラが真っ直ぐこちらを見ていた。

「あなたはカズカズ？ 身体の感触とか匂いとか一緒だったけど、何か違う気がする」

「オレは錬金術師じゃねエよ。ンなこと今頃気づいたのかよ」

「でも、身体はカズカズの。あなたは誰？ カズカズはどこにいるの？ ねえ、カズカズは？」

正直この問いに答えるの心底面倒だが、答えなくてもウイラはきつとしつこく聞いて来ることはカズマの記憶を覗いたことで予想できた。

メンドクサイ、本当にメンドクサイ。メンドクサイ奴は嫌いだ。

「クソツたれ」

そう言つてアキレスは瞳を閉じた。

◇◇◇

「ノーネーム」本拠地、広間

パーティーは始まった。コーキがどこからか調達してきた音楽を録音再生するスノウボールからBGMが流れている。

料理も大体出揃つたようで、厨房にいたメイド組もパーティーに参加しつつ給仕をしている。

よくもまあこんな盛大なパーティーを開いたもんだと思つた。

そもそも、アキレスもアキレスだ。いきなり「真理の扉」の前の彼岸花畑で寝ていたと思つたら表世界に戻されていた。

そして、なぜか床に座り込んでいたウイラに抱きつかれて何か「いつものカズカズだ！」って何かよくわからないことになっていた。

で、現在のカズマだがウイラがいつも通りくつついてくるのでそのまま広間に行った。ラレティシアに見られたのだ。

「どうしたのカズカズ？」

と途中で立ち止まったカズマにしつかり抱きついて離れないウイラがキョトンと聞

いてくる。

「多分、レティシアが怒ってる。気がする」

レティシアはツカツカと足早にこちらに向かってくると、

「白カズマが気をきかせて交代してくれたのか？それはともかくとして、カズマもパーティーに参加できてよかった。今夜は一緒に楽しもう」

「あ、うん。そうだね」

怒ってると思つたのに、こうもニッコリと言われるのは予想外だった。

まるでウイラのことなど見えてないようだ。

「というわけだからカズマから離れてくれるか？ウイラザイグニファトウス」

前言撤回。やっぱり超怒つてた。しつかり見えていた。

でも、次にウイラが何て答えるかはカズマもわかっていた。

「ヤダ。今日は久しぶりにカズカズと一緒に過ごせるんだから邪魔しないで」

取られまいとカズマの腕を強く抱き締める。そのせいで彼女の童顔のわりに豊かな胸がより一層カズマの腕に押し付けられる。

それを見てレティシアの顔が引きつる。

正直、全然怒りを隠せてないから無理に笑顔作らなくていいのにと現実逃避気味にカズマは考える。

「おうおう、いい感じに修羅場じゃねえか！ヤハハ、もつとやれ！」

「レティシア、ファイトー！頑張るのよ」

「そんな奴に負けんなウイラ姐！」

「黒猫の常連さんもファイトなのです！」

外野が完全にこれを余興として楽しんでるのが憎たらしい。

「そうか。警告はしたからな？」

レティシアの影が立体的に浮き上がり鋭い槍となつて構えられる。

「脅しても無駄。私は譲る気はない」

そう言うウイラは、彼女にしては珍しく闘志を燃やしていた。

睨み合う二人。多分、ほんの少しのきっかけで闘いは始まるだろう。

それは別に構わないが、そこに全力に巻き込まれる位置にカズマがいることを忘れて
いるのでないだろうか？

彼はしっかりと腕をウイラに抱かれているため逃げる事ができない。

周りの者は固唾を飲んで見守っている。

そして、両者がギフトを行使しようとした時だった。

「そこまでだ、二人共!!」

ビリ、ビリビリと空間自体が震えたように響き渡る。

話し声は無くなりクリスマスソングだけが広間の中を流れる。

槍を静しさせたレイシアが、地獄の業火の召喚を中断したウイラが、声の主であるレーネの方を向く。

レーネは飲み干して空になったグラスをテーブルに置く。

そして三人の所に歩み寄ると、静かに言う。

「今日はパーティーであるからにして、ある程度の『騒ぎ』は許容しよう。しかし、それも笑い話にできる範囲でだ」

ウイラの方を見ながら、

「ウイラ。君はこの『ノーネーム』の本拠を灰にする気か？こんな所で地獄の業火を召喚すればどんな被害が出るか分からない君ではあるまい。譲れないものがあることは分かる。しかし、冷静さを失い過ぎだバカ者」

■ 声を張り上げずに、しかして怒りを感じる静かな声色で叱る。

■ 「はい、ごめんなさい。レンレン」

■ ウイラはしゅんと小さくなっていた。

「次にレイシア君、君だ。いくら警告をしたからとはいえずぐに実力行使をしようとするのは、いささか短絡的過ぎやしないか？私が思うに、君は本来もつと冷静に物事を見れるはずだがカズマ関連になると途端に視野が狭くなる。これは君の欠点だな。今

後、直さない大きな失敗してしまうぞ」

「レティシアは何も言い返すことはできなかった。

考えれば「クロナークロニクル争奪戦」の時も今回も冷静さに欠いていた。

このまま止められなければ、せつかく飛鳥たちが準備したパーティーをぶち壊していたかもしれない。

そう考えると自分が愚か者に思えてきた。

レティシアはただただ無言で立っていることしかできなかった。

「そして、最後はカズマだ」

「——えっ？俺?!」

まさか自分まで説教の対象にされているとは思ってなかったカズマはビックリした。

「自分は関係ないと思ったか？バカ者め。これの原因はお前だから無関係なわけではないだろう。そもそも、お前が何も話そうともせず流れに身を任せていたのが悪い。お前が二人の会話に参加し、間を取り持てばこんなことにならなかつたかもしれない。これを期に人としつかりコミュニケーションを取るようにしろ」

「はい」

色々理不尽な気もしたが、全体的には今後人間っぽくなるために必要なことだと思っ

ので頷く。

「さて、せつかくのパーティーだったのに水を差して悪かった。続けてくれたまえ」
パンパンと軽く手を叩いてそうレーネが告げると、またガヤガヤと騒ぎ始めた。

そんな中でカズマは一つため息を吐いた。

腕にはさつきから落ち込んだままのウイラがくつついている。

レティシアも下を向いて落ち込んでいるようでパーティーが再開されたというのに動いていない。

それをレーネも見えていたようで、

「ウイラ、レティシア君。二人共こっちに来てくれまいか？せつかくのパーティーだと
言うのに暗い顔のままなのはあまりに不憫だ」

そう言つて二人を部屋の端に呼ぶレーネ。

ウイラは「また後でカズカズ」と言つて離れていった。

それに対してレティシアはつ立ったままだった。

ここでまたカズマはため息を吐くと、レティシアの側に行った。

「行かないのか？姉さん呼んでるぞ」

「あ、ああ。そうだな。うん。」

「まったくお前は。さつきの事なんか気にするな。姉さんが止めなくても他の誰かが

止めたし、もし闘って壊してしまっても俺が直して笑い話にしてやったさ。誰にでもそんな時はあるんだって」

「でも、ん・んう」

反論しようとしたレティシアをカズマは頭を撫でて黙らせた。

何やら抗議の目を向けられるが上目遣いになって可愛いだけだった。

「レティシア君、早くしてくれ。そうしないと、ウイラが君たちの間に割り込んでくるぞ？」

と再びレーネから声がかかる。

「ほら、早く行ってこい」

「あ」

手を離すと名残惜しそうにしていたが、促すとすぐにレーネの元へと向かった。

「いかがですか？」

適当にパーティーをするみんなを眺めているとジャックがグラスを差し出してきたので、礼を言って受け取る。

「レティシア嬢は相変わらず貴方にご執心のようですね」

「ん、まあそうだな」

「まさかウイラとあんなことになるとは、かなりヒヤツとしましたよ」

「ジャツクならいつでも止められたんじゃないのか？」

「ヤホホ、ご冗談を。彼女が本気を出したらいくら私でも止めることなど到底できません」

「つまり、今回はその本気だった・と？」

「ええ、そうです。カズマさんも知っているでしょう。ウイラが自ら闘志を燃やすことなど無いと」

「まあね」

「それほど、貴方のことを好んでいるんですよ。どうです、"ウィル・オ・ウイスプ"にきてくれませんか？カズマさん。私たちは勿論、子供たちも喜びます。待遇だつて悪くありませんよ」

ジャツクのあまりにストレートな言葉にちよつと驚いた。

まさかジャツクからも誘われるなんて意外だった。

何か笑えてしまう。

「でも、まあ「ストオオオオオオオオオッ！！！！」

とカズマの言葉をかき消すように叫びながら飛鳥が飛び込んで来た。

そして、カズマをジャツクから守るように間立った。

「『ノーネーム』は勧誘禁止よっ！いくらジャックでも禁止!!ダメなものはダメなんだからね!!!」

どうやら飛鳥はジャックの勧誘の話が聞こえてカズマを守るために来たようだった。そう言えば、『アンダーウッド』でサラに耀が勧誘されて大変だったとか言っていたことがあつたなあ。

多分、それで勧誘に敏感になったのだろう。

「ヤホホホホ。別に私、勧誘などしていませんが。ただ提案をしていただけですヨ?」
「とぼけても無駄よ!ちゃんと私はこの耳で聞いたんだからね。そもそも、サラさんの時もそんな風に——」

と飛鳥がジャックを責めている間にカズマは場所を変えた。

食べ物置いてあるテーブルを見ると、所々に白雪とペストが作ったであろう少し不恰好な料理もあつた。

でも、大体のものがカバーされているので全体としては問題ない。

そんな料理を適当に食べているとアーシヤがやって来た。

「よっ、カズマ」

「今度はアーシヤか」

「今度はって何だよ今度はって。私は別にジャックさんが失敗した時の予備じゃねーし」

「それで、何の用だ？」モグモグ

「用がなけりや話かけちゃダメってか？」ヨコカラウバウ

「別に。でも、耀とかキャロロはどうした？さつきまで一緒だったろ」キニシナイ

「ああ、耀なら今食事で忙しいみたい。キャロロはあのザマだよ」モグモグ

と指差された先には、幸せそうに酔い潰れて寝ているキャロロがいた。

そして、よく見ると近くに「猫ごろし」と書かれた酒瓶が転がっている。

さらによく見るとジンも酔い潰れていた。そして、恐らく犯人である十六夜はハイテ

ンションな黒ウサギと飲んでいた。

もしかしてあの時の飛鳥のちよつと過剰な反応って酔ってたから？

ともかく、あそこには近づかないことにした。

「そんでどうだった？」

「どうだったって、何が？」

「何がって決まってるだろ。ウイラ姐のおっぱいどうだった？」

「ん、何て？」

「だから、ウイラ姐のおっぱいの感触どうだったって聞いてんだよ。お前の腕にウイラ

姐のが当たってたのは知ってるんだぞ」

「何でそんなこと聞くんだ？」

ちなみに当たっていたのは事実だ。

「だって、私のは外見相応っていうかまだまだ小さいじゃん。耀もまな板だし。レイ姐はスレンダーで大きい部類ではないし。大きいのがってどんな感じか気になるじゃん？」

「いや、そんなの知らないし。気にならないし」

「ケチケチしないで、教えてくれよ。頼むから」

「そんな気になるなら、自分で確かめてくればいいだろ」

「いや、ウイラ姐にそこんとこ説明しても理解できねーし。かといって、普通触ったらセクハラだろ」

「そう思うなら諦めろ」

「クソ、教えてくれてもいいじゃんかよ！別に変態とか思ったりしないから」

「そういう問題じゃないっての」

とアーシャと雑談をしていると、

「カズマ。ちよつといいか？」

「話しは終わったの姉さん？」

「ああ、もちろん。平和的に終わらせて来たさ」

「平和的って逆に不吉な言い方だなレイ姐」

「そう思うかい？まあ、いい。アーシャ悪いがカズマを借りて行っていいか？」

「構わないぜ。というか、返さなくていいよ。姉弟水入らずで話して来な！」

「ありがとう、アーシャ」

そう言つて離れるレーネについて行き、広間を出た。

◇◇◇

廊下は冬の冷気で冷えていてパーティーの熱気と暖が合わさり暑かった肌に心地いい。

「ふう。ここは涼しくていいな。」

「姉さんもしかして飲んでる？」

「ん、ちよつとだけ。せつかくのパーティーだし、それくらい見逃してくれ」

「まっ、箱庭にアルコールの摂取に関する法律なんて無いからとやかくは言わないけど。

ほどほどにね」

「もちろんだよ。でも、コミュニケーションの代表として行くと嫌でも飲まないといけない場面がある。大人の付き合いってやつさ」

そう言つて笑う。やっぱりちよつと酔っぱらっているようだ。

「それで。わざわざ場所を変えてするような話って何？」

「別に大したことじゃないさ。この前は一方的に事情を聞いただけだったからな。今度は私の事情を説明するべきかなって思っただけだよ。等価交換だ、等価交換」

「なるほど。そういうことか」

非常に納得のいくことだった。錬金術師的に。

「じゃあ、何でも聞いてくれたまえ」

「いつから箱庭に？」

「二年前。気がついたら『煌焔の都』の街中にいたんだ。懐かしいな。フッフ、あの時の驚きは人生最大だったよ」

「なぜ『ウィル・オ・ウィスプ』に？」

「とりあえずその日暮らしてギフトゲームに参加していたらハンマーが飛んで来てな。それからの付き合いだよ」

「姉さんもやっぱり投げられたんだ」

「まあな。あの悪癖を治そうとはしてはみたが、結果はご覧の通りだ。一度ついた癖は中々治るものではないな。」

「まあ、俺当たったことないけど」

「何だと!?!」

「いや、そこまで隙だらけで生活しなければ当たらないだろ」

「そういう問題じゃない！じゃあ何だ。お前はいつも一瞬たりとも気を抜かずに生活しているのかッ!!」

「そうなるかな、多分。あ、でもたまに作者からのジャミングがかかる」

「くっ！我が弟ながら恐ろしい奴よ。なんてな、フフフ」

とわざとらしく演技して笑う。

カズマは苦笑しながら肩をすくめた。

さて、これくらいでいいだろう。お遊びはここまでだ。

「それじゃあ次の質問——」

「ああ、何だ？」

「——何で錬金術使わないの？」

「あ、ああ。それは「嘘はいらない」

「重ねて質問すれば、どうやって姉さんは箱庭に来たの？」

そうこの質問とさつきは質問は同意義だ。

「姉さんはもしかして錬金術が使えないんじゃないの？」

「やっぱり気づいてたか」

やれやれといった調子で答えるレーネ。

「当たり前。『クロナニクルニクル争奪戦』の時姉さんは、陣を書いた上に龍脈のパス

を形成する触媒が必要な錬丹術ばかりを使っていた。一工程増えて錬金術より時間がかかるというのに。そもそも、錬丹術は医療方面に発展した錬金術だ。ああいう戦闘では、わざわざ使うメリットはない。遠隔錬成は魅力的かもしれないけど、錬丹術しか使わないのはおかしい。どうせなら二つを切り替えて使った方が効率的だ」

「その切り替えて戦うという方法に気づいてないという可能性は？」

「ほぼゼロだ。姉さんはそこまでバカじゃない」

パチパチパチとレーネは拍手をする。

そして、嬉しいような悲しいような笑みを浮かべる。

「正解だ。お前の推測は正しい。なぜ私が錬金術を失ったかを含めてな」

「簡単に説明をしよう」

「お前の知つての通り私はシン国で錬丹術を学んでいた」

「その宮殿の錬丹術研究所とでも言うような施設にいたんだ」

「今はどうなっているか知らないが、その頃皇帝陛下殿の具合が悪くてね。治る気配が

全然なかったんだ

「そこでその施設では様々な方法を試して、陛下が回復するよう全力で模索していた

「中には無茶な術式もあつてね

「私その無茶な術に巻き込まれたのさ」

「術はかなり大がかりなものだったから私以外も何人もの人が巻き込まれていた。」

「腕から分解されて身体がなくなっていくのを見て寒気がしたよ。私は死ぬんだ、と」

「恐怖？確かに周りは阿鼻叫喚だったけど、私はそれよりも悔しかったね」

「こんなところで死んでしまうことに」

「そして気づくと私は門の前に立っていた」

「扉・いや、私を見たあれは門だった。扉じゃないあの造りは確実に門だ」

「門が開くとそこから無数の瞳がこちらを見ていた」

「赤子のような無邪気な笑い声をして、いくつもの手が私を掴んで引きずり込んだ」

「中では、頭が割れてしまいそうな程の大量の情報を無理矢理入れられたよ」

「その最中に唐突に私は理解した。これが『真理』だと」

「そして、気づくと私は『煌焔の都』の街中に立っていたと言うわけさ」

「今にして思えば、あれは通行料だっただろうな。あの門を潜り抜ける」

レーネはそう締めくくった。

でも、カズマは違和感しかなかった。

自分の見た『真理の門』。あれは錬金術師の、誰の中にもある存在。

それをギフトとして行使できるかは別問題として、そう彼の中の『真理』が囁いていた。

だがしかし、レーネは門と断言したこと。そして本来才能を駆使してギフトゲームに挑み、生活する箱庭に流れ着いたというのに、その才能が失われるなど。

レーネは他のギフトがあつたから良かったものの、もしそれが唯一のギフトだったらと考えると恐ろしい。

「まあ、深く考えても仕方のないことだ。そろそろ中に入ろう。十分にお前と話もできたし涼めた」

肩をポンツと軽く叩かれてカズマは思考の海から出た。

確かにレーネの言う通り今あれこれあれこれ考えても答えは出ない。でも、今後調べておく必要はあるなと思った。

「ちよつと待って姉さん」

「どうした？」

広間の扉に手をかけていたレーネは振り返りながら聞き返した。

実はさっきの質問は二番目に聞きたかつた質問だ。

本当に聞きたかつたこと。この前「アンダーウッド」で再開してからずっと疑問に思っていたこと。

「姉さん、いやレーネ・K・エノモト。アンタは何故俺のことを弟と呼ぶ？」

「はは。何を言っているんだ、お前は。私の弟だからに決まっているじゃないか」

「いいや、分かっているはずだ。アンタの弟のカズマ・N・エノモトはもう死んでいる。俺はその身体に入っているだけの別人。厳密に言えば、俺は弟じゃない」

カズマは先ほどまで弟として話していたが、今は死んだ身体と記憶と残留思念で作られた人形、カズマとして話している。

それが察したレーネは真面目な顔つきでカズマの話を聞いている。

「なのに……。それを分かっているはずなのに何故アンタは未だに俺のことを弟と呼ぶんだ？ 弟の身体を勝手に使つて成り済ましていたんだ。それは死者の冒瀆に等しい。俺はアンタに恨まれていても仕方がないんだ。例え、殺されたとしても、それは俺が生み出された時から背負っていた罪に対する罰だ。本当は、どうだったんだ？ 弟のフリをしようのうのう生きる俺を見て本当はどう思っていたんだ、レーネ」

カズマは言い切った。本当に聞きたかったこと。聞いておかなければならなかったことを。

これは逃げることなんてできないことだ。

「確かにお前の言う通りだ。お前は私の本当の弟とは言えない」

静かな感情の読み取れない声色だった。

レーネは組んでいた腕を解くと、右手をカズマへと伸ばしていく。

カズマは何もせず、ただ受け入れる。

殴られても頭蓋を割られても構わない。彼女には何をされても仕方がないからだ。カズマはそれほどのことをしてしていると自覚している。

——ポンツ。

しかし、予想外にもその右手は優しく頭に置かれた。さらに頭を撫でられる。

「だとしても、お前は私の弟だ。誰が何と言おうと私が弟と言うんだから、お前は私の弟だカズマ」

「姉さん」

カズマには分からなかった。一体どういった思考の末彼女がこう言っているのか。

カズマの中の『普通の人間』の行動ではない。やつぱり、人間とは思議なものだ。

「お前だって記憶にあるだろう。昔よくこうやって頭を撫でていたことを」

「まさか、この歳になって撫でられるとは思わなかったけどね」

何だかカズマはこうされるのが嬉しいよう恥ずかしいような感じがして、結果拗ねたようにそつぽを向いた。

そんなカズマを見てレーネは微笑んだ。

「さあ、中に戻るぞ。意外と長居をしてみましたな」

「ああ、そうだね」

扉を開けると中から先ほどよりも、賑やかに騒ぐ音が聞こえる。

「そういえばいい忘れていたが、この後ウイラとレティシア君を同じ時間相手してもらおうぞ」

「はあっ!?!」

「休戦協定を結ばせるにはこうするしかなかったんだよ。つまり、」

レーネにしては珍しく意地の悪い顔をしながら、

「私はまだ諦めていないと言うことだよ。お前に相応しいのはウイラだ」

カズマのパーティーはまだまだこれからが本番のようだった。

添付レポート アカウント名 カノ

“カノ”さんが入室しました。

カノ：こんばんは、皆さん

トーマ：こんばんは。

真由美：こんばんはー！

管理人さん：チャオっす！

キアラ：ばんは

カノ：あれ、今年は去年より年越しメンバー多いですね。というか、噂の管理人さんだ

管理人さん：はい！ども、初めまして。いつも、ボクのアプリを使っていたいただきありがとーございませう！

カノ：いいいえ、このアプリのお陰で楽しい時間を過ごせています。こちらこそ感謝です！

真由美：さーて、初対面同士の挨拶が終わったところではつじめますよー!!!

管理人さん：イエーイ！

トーマ：イエーイ。

キアラ：で、何でまた私たちが年末版番外編に出てるんですか？

カノ：イエーイ！

真由美：本当にキアラさんは乗り悪いですねー。こんな時ぐらい空気読まない、友達いなくなっちゃいますよ？

キアラ：ご心配なく。敢えて空気読んでないだけですから。とりあえず、真由美さんはウザイから初日の出と共に死んでください

真由美：残念ながら私は吸血鬼じゃないですwww

管理人さん：それにしてもみんなは、今年も残すこと数時間となったのにチャットするなんて暇人だね

管理人さん：まあ、そんなの個人の自由だけだね

キアラ：暇も何も、特に用事がなければこの時間はチャットするのが日課ですからね
カノ：でも、俺はもうちよつとしたら落ちます

真由美：安定のスルーwww（ヤケ）

トーマ：つまり、今年の年越しチャットはしないってことですか？

カノ：すみませんが、そうなりますね。コミユニティの仲間に今年は一緒に年越しそうと誘われまして

管理人さん：それってもしかして
管理人さん：彼女さんですかあ？

キアラ：!?

トーマ：なんと!?

真由美：まあさあさあさあ？

カノ：な、何なんですすかいきなりッ!?

管理人さん：あれ？違いますか？彼氏さんでした？

カノ：そこじゃないです！管理人さんは私の性別何だと思ってるんですか!?

管理人さん：男の娘（笑）

キアラ：礼儀正しい後輩

トーマ：純情。

真由美：ツンデレww

カノ：後半三人は性別ですらない!?

真由美：いやいや、男の娘を性別と認めているカノさん自体がツツコミ対象でしょう

ww

キアラ：で、どうなんです？彼女さん何ですか？（ワクワク

カノ：それ、答えないと いけませんか？

管理人さん：そりやね

真由美：とーぜん！

キアラ：気になりますしね

トーマ：実は、自分も。

カノ：え。

真由美：ほらほら〜♪

管理人さん：早く〜♪

キアラ：カノさん！

トーマ：ソワソワ

カノ：今日はこれで失礼します！皆さん良いお年を！

キアラ：あ

〃カノ〃さんが退出しました。

真由美：あらあら〜、逃げられちゃいましたね

管理人さん：残念だなく。話聞きたかったのに

キアラ：私もカノさんの恋ばな聞きたかったです

トーマ：皆さん、彼女ということが前提なんですね。

◇◇◇

「ノーネーム」本拠、カズマの部屋

「バンツッ!と何かが力任せに閉じられる音がした。

「おいおい、それ確か精密な物つて言つてなかつたか? そんな乱暴に扱ったら壊れてしまふぞ?」

ベットのうえでゴロゴロしていたレティシアが言う。

「別にいいんだよ。壊れたら直すだけなんだから」

カズマはパソコンのような端末を少し乱暴に引き出しの中に仕舞う。

そんなカズマの様子を見てレティシアは笑う。

はあとカズマはため息を吐いた。

すると、後ろから二本の腕が伸びてきてカズマを抱き締めた。

「本当に可愛い奴だな、カズマは」

今のレティシアはいつも結っているリボンを外しているため大人の姿だった。

そんな彼女が我が子を抱く母親のように優しく抱き締めていた。

「何かあったのか?」

「うるさいなあ」

そんな今となつては、たまに見せてくれる年相応な反応に顔が綻ぶ。

本当に、本当に愛しくてたまらない。いつもはつれないけど、こうやって素直な時が

ある。どっちの時も、愛しい。

そんな彼と一緒に過ごすことができること。こんな幸せ、私には勿体ない。

でも、甘えてしまう。だって、彼は私を生かしたのだからそれくらい責任とつてもらっていいよね？

レティシアは上機嫌に笑いながらそつと呟いた。

「ありがとう、カズマ」

付属レポート

図書館にはヤバイ奴がいる

前編

都立図書館、館内

「煌焔の都」に来てから数日が経ったある日、殿下・リン・鏡磨・白の四人はレンカが今アルバイトをしている都立図書館に来ていた。

「流石は都立と言うだけあって大きいですね」

「外のデザインと違って本の森って雰囲気だ」

「良いデザインだな」

と殿下、リン、白の感想。

鏡磨はと言うと

「すげえ。」

初めて見る図書館の光景に圧倒されていた。

見渡す限り本、本、本。上を見れば吹き抜けとなっていて二階にもたくさんの本棚が見える。

「鏡磨は図書館に来るのは初めてか？」

「ああ、俺の時代にはそんな大層な物無かったからな。あったとしても図書室とかそう

いうレベルだったぜ。」

鏡磨は輝いた目でもう一度図書館の中を見渡す。

「なあ、見て回って来ていいか？」

「ええ、構いませんよ。ね、リン」

「うん、ここから別行動するのは予定の範囲ないだからね。殿下は一人で大丈夫？」

「いくら何でも見くびり過ぎだ、リン。俺も一人歩けることぐらいできる」

「じゃあ聞くけど、図書館でのマナーは？」

「無闇に話さず静かにする。他人の読書の邪魔をしない。だろ？」

「その通り！それじゃあ、各自三時間後にあそこにあるカウンター前に集合です。解散

していいよー」

リンがそう言うと、さっそく鏡磨は探検を開始した。

まずは本を見ると言うより内装がどうなっているか見るため、本棚と本棚の間を抜けて歩いていく。

そこで後ろから白が付いて来ていることに気づいた。

「どうしたんだ、白？本探しにいかないのか？」

「いや、僕はリンと違って読みたい本があつて来たわけじゃないし、鏡磨に付いて行くことがなつて思つて」

「ああ。悪い。白。付いて来ないでくれないか？」
「何で？」

白は小首を傾げながら聞いてくる。

それに鏡磨は照れ笑いながら答える。

「何か今の俺って自分で分かるぐらいすぐくはしゃいでいるんだ。俺的未開拓領域を前に冒険心が擽られるって言うか、なんとと言うか。あそこはどうなっているのかここはどうなっているかとか色々気になるんだ。こんな綺麗で見たことないデザイン建物に、そんな俺を近くで年下の白に見られるのは、ちよつと。すごく恥ずかしいかな、はは」

「だから付いて来るな、と？」

「そう。悪いけどな」

と鏡磨は頬をかきながら言う。

「鏡磨がそういうなら分かったよ」

「ありがとう、白」

「別にいいよ。それに鏡磨が恥じることは何も無いよ。そりや初めてのことってワクワクしてはしゃいでしまうことって誰にでもあるさ。僕はそんなピュアな心の鏡磨も好きだよ」

ニッコリと微笑みながら白は言った。

「それにしても、鏡磨が探検終わるまで暇になったしまったな」

「なら、殿下みたいに読む本探したらいいんじゃないか？」

「それもそうだね。適当に探して、鏡磨が探検終わった頃また探すよ」

「おう！それじゃー！」

「また後で」

鏡磨は探検へ、白は時間を潰しに向かったのだった。

◇◇◇

都立図書館、二階

リンは、とある本のジャンルの区画にいた。

本のジャンルは「ギフトゲーム」。

これまで行われた大型のギフトゲームや魔王とのギフトゲームから有名コミュニティのギフトゲームまでの「キアスロール契約書類」の内容や攻略記録などがまとめられた本が置いてある区画だ。

なお、そんな難しい本ばかりではなく子供向けタイプの本も置いてある。

リンは自分の身長よりもずっと大きな本棚のもとに立つと、ラベルを見て高難易度のギフトゲームの本をいくつか手に取る。取れない高さにあるものは近くにある梯子を

持つてくる。

「あとはこの本ぐらいでいいかな。あつ」

本を取ろうとしたが、ほんのちよつとの差で本を抜き取られてしまった。

見るとケモミミ金髪の女性が本の表紙を見て確認をしていた。

「シャロ。本あつた。」

「ナイス、クレア！」

そこに五冊ほどの厚めの本を重そうに抱えた金髪少女がやってきた。

「とりあえず、ここら辺で内容調査してみるか。全く過去の魔王とのギフトゲームを大
体洗うなんて中々ハードな注文してくれるよナー」

「仕方ない。クレアも頑張る。だから。シャロも頑張ろ？」

そう言つて少女が抱えていた本五冊をヒョイツと片手で持つとスタスタと近くの机
に向かつて歩いていった。

そこまで見てはつと思ひ出して急いで梯子を下りて、まだ梯子の下辺りにいた少女の
方に声をかけた。

「あの、すみません」

「ん、何ダ？」

「さつきこの本棚から持つていった本、読み終わったら私に渡してくれませんか？」

借りるとかを聞かないのは、ギフトゲームの記録本は基本持ち出し禁止だからだ。

「ああ、別に構わないゾ？つて、もしかして目の前でクレアが持つてつちやたりしたカ？」

「ええ、まあ。」

「そいつは悪かった！あいつは、弱肉強食、早い者勝ちつてところがあつてそういうとこ気が回らないんだ。オイラからもクレアの奴に注意しておくから許してやってくれよナ。」

「い、いえ私もいくつか本をキープしているので気にしないでください」

手を合わせて謝る少女に慌てて梯子の下に置いておいた本を見せる。

少女は本のタイトルを見て感心したような顔で言った。

「へー、まだ幼いのに随分と難しい本を読むんだナ。オネーサン感心しちゃうナ」

「いや、そんな大したこと。」

「いやいや、すごいことだと思うゾ？そうだ。どうせなら一緒に机使わないカ？そっちの方が読み終わつたらすぐ渡せるゾ」

リンはその提案に一瞬考えたが、確かにそっちの方が効率的だと思い相席させてもらうことにした。

机が向かい合わせで縦にいくつも置かれた場所には、ちらほらと座つて読書に没頭し

ている人がいた。

その一番端でケモミミ金髪の女性、クレアが本を広げていた。

ケモミミがピクピクと動くと、頭だけこちらを向いた。

「シャロ。その子。誰？」

そう聞く顔は無表情だ。

こう見ると座っているが、身長がとても高いことが分かる。

多分、180cmぐらいあるんじゃないだろうか。

しかもケープの間から少し見えるのだが、出るところがすっごい出てて大きい。

将来は彼女のようなスタイルになりたいなと思いつながらリンは椅子に座った。

「彼女の名前は」。そういえば、オイラも知らなかったナ。まあ、ここは年長者として

オイラたちから名乗るべきだよナ」

そう言って改めてこちらを向くと、

「オイラの名前は、シャロ。クレアとは姉妹で情報屋をやっているんだ。よろしくナ！」

「クレアは。クレア。よろしく」

「リンと言います。よろしくお願ひします」

「よろしく、リンちゃん。ちなみにさつき名乗った名前は愛称で本名じゃないんだぜ？」

「愛称？」

「ああ、仕事も方もこつちの名で通っているからナ。だから、愛称の方を名乗られてもらったってわけだ」

「ここで笑顔からいきなり神妙な顔つきになると一つの質問を投げかけた。

「ところで、リンちゃんはオイラとクレアどっちがオネーサンに見える？」

「えっ、そりゃあクレアさんの方じゃないですか？」

「本気で？」

「ええ」

「間違いなく」

「いや、どう見てもそうでしょう」

「やっぱりそうなのカ」

「ガーンっと思いつきり凹んでしまうシャロ。」

「そのまま机に突っ伏しながらブツブツと呟き出した。

「そりゃあオイラだつて初めは、クレアより背は高かったさ。なのに、いつの間にか同じになつて、追い越されて、気づけば身長184cmとか超デカくなつてたんダ。しかも、我が妹ながら超グラマラスなナイスボディ。それに比べオイラはご覧の通りのお子様ボディさ。世界とは残酷ものだな。はは」

「シャロ。迷惑。○○○図書館」

クレアは落ち込んでいる姉のことなど気にせず、黙々と資料に目を通していく。

さっきの呟きを要約すると自分の方が姉なのに女性的にも身体的にも発育が良い妹と一緒にいると自分の方が妹と勘違いされる、ということだ。

そんなことは軽く聞き流しながらリンは彼女らがキープしている資料のタイトルをチエツクしていた。

それはどれも魔王のギフトゲームの資料だった。

なぜ情報屋の彼女らがそんな資料を読み込んでいるのか？

可能性は二つ。

一つ目は、「ギフトゲームの攻略のコツ」の情報を売るために調べている。

二つ目は、誰かに依頼されて調べているか。

前者は、難易度が高いギフトゲームである魔王の資料から導くのはありそうだけど、魔王のギフトゲームだけってというのが不可解だ。

だから、後者。このタイミンクと場所からから見ても過去のギフトゲームに「ウロボロス」の影がないか調べるよう依頼されたというのが妥当だろう。

さつきまで、本当はあの鏡磨邪魔者がないから白ちゃんと図書館デートしたかったとか考えて、ゲームメイカーとしての勉強もしないと白ちゃんをサポートできないから仕方ないよね。ああ、でもやっぱり白ちゃんとイチャイチャしたい！

などとりと煩惱がいっぱいだったが、目の前の障害を前に頭が完全に切り替わった。

さつきのシヨックがまだ抜けないのか暗い表情で資料を眺めているシヤロ。

クレアはたまに耳をピクピク動かしながら無表情で黙々と資料を読んでいる。

リンは本を読んでいるフリをしながらちよつと笑った。

シヤロたちは目の前にいるリンが「ウロボロス」のメンバーであることなど夢にも思っていないだろう。

なら、この場を利用して情報を引き出してやろう。思わぬところで、大物を釣り上げたかもしれない。

リンは資料を置くと、年相応の好奇心に突き動かされたフリをして二人に声をかけた。

「あのお・ところでお二人はなぜ——」



都立図書館、一階

(さて、暇潰しにでもなればって思ったけど、特に面白いような本はないな)
 評論文や随筆に興味のない白は、少しは興味のある小説コーナーにいた。

本の背表紙を眺めるように本棚と本棚の間を歩いていく。

そうしていると、小説のジャンルが変わった。

タイトルから察するにファンタジー系の本の場所だ。

白はそれらの本を見て、フツと笑った。

(ここは修羅神仏が住まい、^{ギフト}恩恵という宛ら魔法のアイテムや能力が実在する箱庭。一歩外に出ればこんな本に書かれているよりもファンタジーな世界が広がっているって。うのに、何でこんな本がいっぱいあるんだろ。ホント無意味だよ、あはは)

そんな風なことを思いながら本棚を眺めていると、
「何か本をお探ですか？お客様」

声をかけられた。

見ると、この図書館の職員である亜龍の女性が微笑えんでいた。

「いえ、そう言うわけではなく、ちょっと面白い本がないかなと適当に見ただけです」

「でしたら、私がお手伝いしましょうか？」

「いえ、お構い無く。自分のペースで探しますから」

「そうおっしゃらずに。きつと貴女の気に入る本を見つけます」

職員の女性は中々引き下がってくれない。

きつと彼女は真面目で仕事熱心な好感の持てる職員なのだろうが、熱心過ぎてちよっ

としつこい。

彼女には悪いが、白ははつきりと拒絶の言葉を言つてその場を去ることにした。

その女性が本当に職員だったならば。

「いい加減、そんな芝居止めたらどうですか、エンヴィー？」

瞬間、女性がニヤリと笑つた。

「あはは、どうしてバレた？このエンヴィー様の変身は完璧だったはずだけど」

「簡単です。ここは公共の場ですよ？お客様という言い方はあまり使わないでしょう。

あなたの変身している亜龍の年齢からみて僕のことには『お嬢さん』とか、もっと柔らかい呼び方をすると思つたからです」

「本当にそれだけ？」

「あとは、直感ですよ。 アストラルゲート境界門” 抜けたらいきなりいなくなつてましたが、何してた

んですか？」

「別に。ラストおばさんのところに報告とここの現状を聞いてきただけ」

「ああ、そういうばここにはラストとグラトニーがいましたね」

「そうそう、またあいつ太つてたよww」

エンヴィーは愉しそうに笑いながら言つた。

「まったく。そんなに素丸出しにしていたら、怪しまれますよ。というか、その姿の彼

女が可哀想です」

「ハッ、出たよ。人間お得意の同情。本当は、他人なんかどうでもいいクセによくやるよねえ」

「それで私が一人の時に来たということは、他に聞かれたくない話があるんでしょう。さっさと話してください」

「あれ？ 機嫌損ねちやつた？ ごめんごめん。あんまりにも滑稽なもんだったからねw。なーんて冗談はここまでにして」

エンヴィーは一拍空けてこう言った。

「鉄のを殺せ」

それを聞いた時、冷静に考えてエンヴィーの、いや「ウロボロス」の意志がわからなかった。

そんなことに意味は無く、メリットどころかデメリットしかないからだ。

「ほお、それはまた何故ですか？ 彼は大切な人柱でしょうに。それに現在確認されている人柱は、候補も入れて五人」

「鉄の錬金術師、カズマ・N・エノモト」

「偽装の錬金術師、コーキ・C・マユズミ」

「鋼の錬金術師、エドワード・エルリック」

「その鎧の弟、アルフォンス・エルリック」

「そして、僕。候補を入れてやつとこの数なのに、何故殺さないといけないんですか？」
白は本棚に背を預けながら問う。

「何でも、鉄のはお父様の計画に勤づいたみたいだ。そんなもって、いくつか研究所を壊された。まったく、別に無能な研究者ばつかのあんな最底辺の施設どうでも良かったんだけどね。アイツ、中の英雄の力使つたらしい」

「そう簡単に力を貸してくれそうな性格ではないと思つてましたが、それは検討違いだったようですね」

「ああ、そこが一番の面倒なことだよ。お父様はその英雄が邪魔することを恐れている。ましてや、神群にチクって動かされたら最悪だ。その可能性を摘むためにお父様は鉄のを殺すよう言っている。それに——」

エンヴィーは心底愉しそうな笑みを浮かべる。

「鉄の錬金術師はもう用済みだ。なんてたって、人柱が三人も見つかったんだからね！」
「!!？」

白は素直に驚いた。錬金術師でさえ珍しいのに人柱が三人もこの早い段階で見つかるなんて？

「一体誰が？」

「二人目が、イズミ・カーティス。エルリック兄弟の師匠だ。師弟揃って人柱とは随分と中がよろしいことでww。二人目が、ヴァン・ホーエンハイム。プライドの奴が、要注
意人物とか言っていたな。そして、三人目はお前と同じロスドドリフターズ、レーネ・
K・エノモト。良かったな仲間じゃないか」

につこりと嗤うエンヴィーの顔をしていたが、白はそんなもの見ていなかった。

通常箱庭にやってくる方法は召喚されることだが、稀に自ら何らかの方法で次元を超え、この箱庭に流れ着く者達がいる。それがカテゴリーD、ドリフターズだ。

その中でも異質なギフトを代償として箱庭に流れ着いた者。本来ギフトで競い合いながら生活する箱庭に辿り着き、ギフトを失いし者。それをカテゴリーLD、ロスドドリフターズと呼ばれている。

白が錬金術師なのに錬金術が使えないのは、彼女がLDだからである。

僕以外にもいた。僕だけじゃなかった。その事実、その事実、

「同じだから何です？別にどうでもいいことじゃないですか。用件はこれだけですな。なら、私は探し物がありますので」

そう淡白に言うとその場を立ち去ろうとする。

「おい、ちよつと待て。どこ行く気だ？そんな嘘で逃げれると思ってるのか？」

エンヴィーが不機嫌そうな声で呼び止める。

「いえ、嘘じゃありませんよ。今、さつき探し物ができたんです。それに、仕事は引き受けるので安心してください。いくらあなた達でも、神憑り相手には骨が折れますもんね」

「チツ。使うならばあの吸血鬼を使え」

「まあ、カズマさんを殺すなら彼女しかいませんね。了解しました。それでは」

そう言つて白は図書館の奥に消えていった。

エンヴィーはもう一度舌打ちをすると、

「下等生物が見下しやがってっ！」

と吐き捨てた。

付属レポート

図書館にはヤバイ奴がいる

後編

都立図書館、貸し出し・返却カウンター

草薙レンカは、カウンターの席に座って特に何をするでも考えるわけでもなく、利用者を待っていた。

ここの都立図書館に非正規雇用として入って二ヶ月ほど。利用者は多くもなければ、少なくもない。

ほどよく人がやって来るのが、この図書館の良い点だ。

「ん~~~~」

レンカは小さな声で唸りながら背伸びをした。こういう座り仕事中には、適度に歩いたり体をほぐさないとキツイ。

さらに昨日まで借りてる工房に引き込もって神珍鉄を鍛えていたので、体にそれなりの疲労感があった。

(ホント、こちらに流された時、体が若返って良かった良かった。じゃなかったら、今頃爆睡中だったな〜)

実はレンカがこの箱庭に流れ着く前は、こんな十代の若々しい姿ではなかった。

前の世界ではおよそ120年生きていたが、強さを求めて吸血鬼の細胞を埋め込んでいたので不老であった。

話し方が変なのは、細胞を埋め込んだ時が四十代のおじさんだったためでは、なぜ箱庭に流れ付いた際に若返ったのか。

それはおそらくレンカを箱庭に送り込んだ「管理人」と名乗る者が気を効かせてくれたのだろう。

一般的に人間の身体は十代後半から三十代ぐらいまでが全盛期であるから。

さてと、もう一頑張りしますかねと気合いを入れ直していると、

「ちよつと、いいか」

「おお、構わないよ。どうしたんだい？この図書館で困っていることならおいちゃんが力になってあげられるよ。おや？」

尋ねてきた利用者は見知った白髪の少年だった。

「こうしてお前が、副業をしているのを見るのは初めてだな」

「なんだ白髪のおんちゃんか。おいちゃん何か忘れ物でもしたかなあ？コウちゃんの弁当ならちゃんと持ってきたはずだけど」

「違う。忘れ物を届けに来たんじゃない。ここを普通に利用しに来ただけだ」

「ええ？白髪のおんちゃんが？おいちゃん信じられないな」

ニコニコと笑いながらレンカはそう言う。

「とうか、そもそもきみがたつた一人なんてことが珍しいことだよ。こういう場ではいつも誰かが側にいたろ?」

「ああ。今日はリンが白を誘って、その白が誘った鏡磨に誘われて来たんだ」

「成る程。芋づる式に来たというわけか。てつきり、おいちゃんの仕事姿を見に来たかと思つたよ」

「いや、それはないな。絶対はない。リンにそのような意図はなかつたはずだ」

「そこまで否定しなくていいんじゃない。おいちゃんも傷つくよ」

■ 殿下は客観的な推測を言つただけで何故レンカが若干落ち込んでゐるかは分からず、目を丸くした。

レンカはそんな殿下を見て、やれやれと肩を竦めた。まだまだ殿下には「勉強」が必要なようだ。

「それで、他のみんなはどうしたんだい? 近くにいないみたいだけど」

「今は各自自由行動つてことになつてゐる」

「いくら、図書館という一つの施設の中だからつてそれはあまり感心できる行動じゃないね。いや、おいちゃんがいるから敢えてそうしたのかな。そう考えると——おつと、おいちゃんとしたことが無駄に考え込んでしまったな。それで、白髪のおんちゃん

は何の用だい？」

「ここでようやく、一番初めの会話に戻ってきた。」

「図書館は本を借りたり、読んだりするところなんだろう？でも、こうも数が多いと何を読めばいいのかわからなくて。何かオススメの本はあるか？」

「ちなみに、あんちゃんはどうなジャンルの本が好き？」

「好きなジャンルは無い」

「・・・。じゃあ、おいちゃんの生まれ故郷、〝日本〟の本はどうだい？箱庭は結構西欧色が強いし、東洋系なら中国とが有名だ。これを機に、学んでみるのもどうだろう？」

「日本か」。鏡磨からたまに話を聞いていたし、丁度いいな。どこにあるんだ？」

「マイナーだから端の方にあるよ。どれ、おいちゃんが案内しよう」

そう言つてレンカは立ち上がると、奥の方に声をかけカウンターを出てきのだった。

◇◇◇

鏡磨は人生初の図書館を見て回り、人気の無い本棚の前に立っていた。

ジャンルは「日本」。

今日はその内一冊の歴史書を読んでいた。

「随分と懐かしいな」。箱庭の何処かで見れるんじゃないかとは思っていたけど、こんな形になるとは」

鏡磨のしている本は、平安時代の主な出来事、貴族の暮らしなどが絵付きで載った物だった。

鳥居鏡磨は平安時代に生まれた陰陽師の少年である。式神を使役し、悪鬼羅刹を倒す者。

家系は代々貴族に使える誇り高き家柄だった。

その彼は今、ドリフターズとしてこの箱庭にいる。

何とも運命とは分からないものだなどと鏡磨は思った。

クイクイ。

鏡磨が今は帰れない故郷に思いを馳せていると、服を引つ張られた。

振り向くと、白が立っていた。

「どうした、白？もしかして、集合の時間過ぎてて呼びに来たのか？」

もし、そうだったらマズイ。何故か鏡磨はリンから目の敵にされている節があるので、次のゲームメイクの時に生け贄にさせられかねん。

鏡磨が狼狽していると、白は声なく笑いながら首を振った。

「
」
喋っている。白はしつかり喋っているのだが、声が聞こえない。

さながら、口パクをしているようだった。

「ここで、鏡磨はようやく目の前にいるのが白であつて白でないことに気づいた。そうか。また抜け出して来たのか、ドッペル。白にきつく怒られるぞ」

彼女の名前はドッペル。白の分身であり、生霊であり、影である存在。

ギフト「ドッペルゲンガー」そのものである。

『そう言われましても、ドッペルゲンガー」なのでオリジナルとは別に行動することは当たり前なのです。それに、鏡磨さんが直接オリジナルを遠ざけることなんて珍しい。これを見逃す手は無いと思います』

そう言つて（読唇術による読み取り）、ぎゅつと背中腕を回して抱き締めた。

そして、猫のように額を擦り付けながら鏡磨の顔を見上げる。

その表情は拗ねているようだった。

『オリジナルはズルいです。いつでもどこでも、好きな時にあなたに触れられる。話しか出来る。見てもらえる。だから、こんな時ぐらい私が鏡磨さんを独り占めしたいんです。少しだけでいいんです。ダメ、ですか？』

頬を少し紅らめて上目遣いで見つめる。その目はじつと真つ直ぐ鏡磨だけを見ていた。

そんな女の子の頼みを断れる奴がいるだろうか。いや、心無穏本き人形さん以外いない。

「ああ、もちろんだ！白が来るまで一緒にいよう。そして、ついでに一緒に怒られよう」

鏡磨は衝動的にドツペルを抱き締めながらそう言った。

チクリと少し胸が痛んだ。でも、それ以上に彼女を抱き締めていたかった。

ドツペルもドツペルで、今だけは自分だけの鏡磨の感触を堪能していたのだった。

「さて、そう言ったものの何でしょうか？ドツペルも楽しめる方がいいよな。なら、別のところに移動するか？」

ドツペルは首を横に振る。

『いえ、その、出来ればで良いのですが、あなたをいた時代のことを教えてくれませんか。あなたがどのような世界に生まれ、生活していたのか知りたいんです。丁度、ここには資料もいっぱいありますし。オリジナルも知らないあなたのこと、教えてくれませんか？』

ドツペルは期待と不安と多少の後ろめたさが混ざった瞳で見つめている。

前の世界での話。それは禁句タブーでこそないが、暗黙の了解で聞く者はいない。

もう帰れない世界。もしくは、その世界の全てを捨ててやって来た。

そんな者たちに、自分の生まれた世界のことを聞くことなど野暮なことだ。

白も当然、たまに鏡磨が話すのを聞くことはあっても自分から鏡磨に前の世界での話を聞こうなんてしなかった。

「そんな面白い話じゃないぞ？」

『構いません』

「本当にそんなことでいいの？」

『「そんなこと」なんかじゃないです。あ、でも鏡磨さんが話したくないって言うならそれはそれで構いません！本当はこんなこと聞くのは失礼だつて分かっていますので。あのつ、だから、さっきの言葉は忘れて——「そこまで言われたら話さないわけにはいかないな」えっ?』

ドツペルが驚いて顔を上げると、鏡磨がニヤリと笑っていた。

鏡磨はいくつかの本を取り出すと、ドツペルを近くにある長椅子に誘導した。

『ほ、本当にいいんですか?!』

「何言ってるんだ?聞きたいって言ったのはドツペルだろ」

『・はい、そうですね。ありがとうございます』

ドツペルは照れ笑いを浮かべながら座った。

(かわいい。／＼)

出来るだけ冷静を装いながら鏡磨はその隣に腰を下ろす。

そして、適当に本をパラパラと捲っていきながら何から話したものかと悩んだ。

結果として、平安京周辺の地図のページで止まった。

「俺は西暦941年の霜月に生まれたんだ。雪が積もらない程度に降っていたらいいか

ら下旬ぐらいかな。鳥居家は陰陽道としての歴史は浅くて、貴族お抱えとまでいかなかったもちよくちよく呼ばれてたな。下の方の貴族にだけど」

そう自分のことを語る鏡磨にドツペルは寄り添いながら耳を傾けていた。

ドツペルは、オリジナルである白と違って年相応の可愛らしい女の子だ。

いや、別に白が年相応じゃないと言いたいわけではない。

でも、やっぱりクールで少し大人びている白と比べたら若干幼いので、年相応に見える。

彼女は白の分身であり、生霊であり、影であり、ギフトそのものである。そのため白の影響を大きく受ける。

だから、彼女はよく悩み苦しむ。自分の鏡磨に抱く気持ちはオリジナルの影響で偽物ではないのか、と。

否定をしたい。否定したいが、完全に否定することができない。所詮、自分は白の分身なのだから。

苦しくて苦しくて何度も涙を流した。今も幸福感と同時に胸が苦しい。

いつそのことこんな気持ち知らなければ良かった。何で私は自我を持ってしまったのだろう。どうして一人の人間として生まれなかったのか。

助けて欲しかった。でも、これは誰かに助けてもらって解決することじゃないことも

わかっていた。

鏡磨はドツペルのことをどう思っているのだろうか。

白の分身だから、姿が同じだから優しく接してくれているのだろうか。抱き締められるのだろうか。

実際、オリジナルの白とのギャップ萌えでそんな行動をしている節がある。

(本当は私のことなんか・)

「やっぱり、つまらないよな。悪い」

ぼつと顔を上げると、首を振って全力で否定した。

『そんなことないです！全然楽しんでましたよ！ただちよつとぼーつとしゃちゃって。鏡磨さんは悪くないのです！悪いのは、お願いしたのにぼーつとしていた私なのですからっ！』

あまりの早口に鏡磨の読唇術は追い付かなかつたが、ドツペルが言っていることはなんとなく分かった。

「ありがとうな」

『違っ——』

ぼすつとドツペルの上に鏡磨の手が置かれた。そして、なでなでと優しくドツペルの頭を撫でる。

『——気を・使つてたわけじゃ・ないんですからね。あう』

「分かつてるよ、それくらい。でも、ドツペル。俺はさっきのお前がぼーつとしてるんじゃないくて暗く悩んでいるように見えた。何かあるなら俺に話してくれないか？」

心は現金なもので、頭を撫でられる心地よさと自分のことを見て心配されていると分かっただけで喜びで満ちてしまう。さっきまで鏡磨のことを疑っていたくせに、何とも都合の良いものだ。

(ああ、でもどうしようもなく幸せだ、私)

何だか急に悩んでいる自分がバカらしくなった。生霊だの、分身だの、影だの関係なく今の時間を大切にしたい。

せつかく鏡磨と一緒にいれる時間なのだ。不安になるなんてもつたいたない。今の時間を楽しまなくては。

そうドツペルは多少強引に気持ち切り替えた。

「ドツペル？」

『何でもありません。本当にちよつとぼーつとしてただけですの』

「そ、そうか。ドツペルがそういうならそうなんだろう。でも、何かあつたら言えよ。俺の出来ることなら力になるぜ！」

と鏡磨はニヤリと笑った。

それにドツペルも満面の笑みで応えた。

『はー！』

この時、幸せオーラに包まれた二人は気づいていなかった。鏡磨の後ろに白が立っていたことを。

彼女はハイライトの消えた瞳で見下ろしながら、うつとり笑っていた。

そして、まるで蛇が獲物を追いつめるようにゆっくりと鏡磨の首へと腕を伸ばす。

「ぎよ〜う〜ま〜♡」

観察対象 コーキ episode 1

第一話

ぱち・ぱち・ぱち。

コーキの部屋にそんな将棋の駒を指し合う音が響く。

「ところで、コーキ。質問いいですか？」

「別にいいけど、その前に逆にこっちが質問していいかな？」

コーキは少し考える素振りをしてまた一手進める。

「はい、どうぞ」

「別に全然構わないし、白雪ちゃんがやりやすいようにしていいんだけど、何で敬語になってるの？二度目に会った時は普通だったのに」

「そ、その時のことは色々忘れていたんだけど！」

「ええ、でもあの時の白雪ちゃん可愛いかったよ？」

「か、かわいい!?私か? 本当にですか？」

「うん、本当に可愛いかった。色々な意味でwww」

「バカにしますね?!」

白雪はコーキを睨みつける。しかし、それもほんのちよつとのこと。

コーキがこういう時にふざけるような人間であることは、まだ一緒にのコミュニティの仲間として過ごして短い白雪も知っている。

「ゴホン。えー、それで何故私が敬語なのかでしたね」

「あ、答えてくれるんだ」

「簡単なことです。コーキ、貴方と話す時に普段の話し方では失礼だと思ったからです」
「別に僕は気にしないのになく。むしろ、もっとフレンドリーでOKだよ☆」

「それに理由はもう一つあるんです」

「無視い・」

チラツとだけコーキの悲しげな顔を見て白雪は話を続ける。

「あの小僧と、貴方と話す時の話し方が一緒などありえないことです！あんな礼儀知らず生意気でふてぶてしい小僧と、一見いつもニコニコ笑っていてイマイチ掴み所ないですが紳士であるコーキの対応は分けるべきだと判断しました」

「君、本当に十六夜君のこと嫌いだよね」

「当たり前です。何でしたら、今すぐ私の所有権をあの小僧から奪って来てください。

貴方なら出来ます、コーキ！」

「無条件の期待が重いよ。というか、それは僕じゃなくて白雪ちゃん自身が自分で取り

戻さなきゃいけないものだと思うよ。白雪ちゃんは白雪ちゃんのだけのものだからね」
 「もちろんその通りですが、全くもって本当にその通りですが、コーキなら私の所有権をあげても、いいですよ？」

頬を赤らめ恥ずかしそうに言う白雪。

コーキはそんな白雪の顔を直視することができず、

「いや、参ったな。」

とそっぽを向きながら頭をかいた。

◇◇◇

第二話

ばち、はち。ばち。

盤面の戦いが進む音がする中彼らの会話は続く。

「それで、白雪ちゃんが聞きたいことって何？」

「あ、ああ。いえ、聞きたいことって言うよりちよつとした推測を聞いて欲しいのです」

「推測？また、何について？」

「貴方についてですよ、コーキ」

蛇の瞳で彼女はコーキをじつと見つめている。

ちなみに、コーキには白雪に推測されるようなことなど心当たりは全くない。

だって全部しつかり偽装してあるからだ。偽装の錬金術師だけに。

「コーキ、貴方はメイド長のギフトゲームで白猫と行動をしていたそうですね」

「白猫？白猫なんかと一緒に行動していた記憶ないな」

「いつも黒いですが、その時は白かったカズマのことです！」

「ああ、白カズマのことね。うん、嫌なことにあいつが復活しやがってたけど、まあ一緒に行動してたよ」

コーキは明らかに不機嫌そうな声でそう答える。

「その言い方からして、やはり貴方は以前からその白猫のことを知り合いだったんですね」

「知り合いとか言わないで欲しいな。あんなの知り合いですらないし」

「余程嫌いなんですね」

「そりゃあ、大ッ嫌いさ」

不快そうに駒をパシツと置く。

「それで、私は思ってたんですが——」

「——コーキ、貴方は箱庭のこと、ギフトゲームのこと、召喚されること、その他もろもろのこと全て知ってたのではないですか？」

「もし、そうだとしたらどうなの？」

コーキはいつもの掴み所ない笑みで白雪を見る。

「貴方は私たちとは何か違うものを見ているんじゃないですか？ いや、それとも私たちすら知らない何かを知っているのかも」

ここで白雪は一拍あけると、

「貴方は、本当の貴方は何処にいるんですか？」

その問いにコーキはヘラヘラニコニコしながらこう答えた。

「チエックメイト」

「えっ？」

この返答に白雪の頭の中は真っ白になった。

一体何を言っているんだこの人は？

「あ、間違えた。シヨーギは『王手』だったね」

そう言いながらコーキは将棋盤をコツコツと指で叩く。

「う、嘘だ！ だつて、まだ三回目。私が負けるはずが。」

「いやいや、そう驚くことかな？ 一回目で駒の動きを覚えて、二回目で白雪ちゃんの戦術をトレースする。そして今の三回目で倒す。普通のことじゃないかな？」

「全ツ然普通じゃありませんよ。やっぱり、貴方は天才なんですわねコーキ。完敗です。もう将棋では貴方に勝てる気がしません」

！

「でも、白雪ちゃんが新しい戦略でやれば勝てるかもしれないよ?」

「いえ、そう簡単に今までの戦術を捨てて新しい戦術を編み出すなど出来ません」

「そういうものかなあ」

「そういうものです」

と言いつつ二人は駒を集めて片付ける。

「あー、でもつままないな。こういうタイプの遊びは白雪ちゃんと一回しか出来ないなんて」

「そうですね。でも、こういう運がゲームを左右するタイプならずっと遊べるはずですよ」

そうやって白雪は和風絵の描かれた札の束をテーブルに置いた。

「花札って言う日本のカードゲームだったっけ?」

「その通り。では、まずは絵柄の説明から——」

こうしてコーキに話をはぐらかされたことすらを忘れて白雪は花札の説明を始めた。

果たしてあのタイミングで『王手』になったことは偶然なのだろうか?

それを知っているのは本人であるコーキだけだ。

一つ言えるとしたら、二人の仲は良好であると言うことだ。

◇◇◇

第三話

「ノーネーム」本拠、四階

その個室を使う者はほとんどいない。

ジンや黒ウサギは一階に自室を持っており、その他が主に二階を使っている。

どうやら「ノーネーム」には、コミユニティの貢献度が高いほど上の階に自室を持つという習慣があつたそうだが、十六夜たちは「一階まで下りるのが面倒」や「上の階で寝泊まりするメリットがない」などの理由で二階を使っている。

なお、レイシシアも元は上の階に自室を持っていたが「主より位の高いメイドがいるわけないだろ」というよく意味のわからない理由で一階に部屋を持っている。

そんなわけで、四階に近づく者はなく静かだ。

だから、コーキたちはそのフロアに研究室を作った。

まあ、研究室と言つても箱庭で手に入れた研究書や薬品、器具が置いてあつて物置と言つた方がしっくりくるものだが。

その研究室の机についてコーキはガラス棒で黒い粉末と茶色の粉末をかき混ぜていた。

特に危険のあるものではないが、慎重に余りなく混ぜていく。

それが終わると、今度は薬匙を出してそれを木製の筒を複数出して中に均等に入れていく。

中の粉末が漏れ出さないようにしっかりと蓋をすれば完成。

「これでよし。さつそく実験するかあ」

コーキは左手で白衣から探つてギフトカードを出しながら、器用に右手で遮光板のゴーグルを装着する。

ギフトカードからショットガンを取り出し、リロード。

さつき出来たばかりの筒を一本持つと、それを放り投げると同時にトリガーを引いた。

その瞬間、突如その部屋に太陽が出現したかのごとく強い光を放った。

もし、この場にコーキのように光を遮る物もなく直接見た者がいたのなら、その人物の視界は真っ白になり何が起きたか理解出来なかつただろう。

「うん。問題なく機能してくれるね。これで閃光弾の完成だ！」

コーキは外したゴーグルを適当に投げて喜んだ。

これまで彼はマグネシウムと着火材の配合で、最も早く全体に燃烧が広がる割合をずっと模索していた。

初めは大雑把に割合を変えて実験し、その中で最も良かった配合した物を元に今度は少しずつ分量を変えてようやく前回作つた閃光弾で納得のいく物となった。

今回は同時に複数分作つても、効果にズレがないかの最終チェックだったのだ。

「出来たのは全部で十本、で一つ使ったから九本か。ちよつと足りないかな」

コーキは再び椅子に座ると瓶に入った着火材を薬匙ですくい、天秤に乗せていく。

天秤が釣り合ったところで着火材を乳鉢に入れ、天秤の重りを交換する。

「今みたいにゆつたりした時間はもうすぐ終わって忙しくなるし、作れるだけ作らなきゃって、あれ？」

重りの交換が終わってマグネシウムの瓶に薬匙を入れるとほとんど入っていなかった。

「しまったなあ。調合の実験に使い過ぎちゃったか。えーつと、確かもう一瓶あったはずなんだけどなく」

と棚に置いてある瓶のラベルを見ながらあれでもないこれでもないかと探す。

「ああ、これはマジでないな。どこにいったのやら」

と部屋の中を見回していると、燃えないゴミに出す予定の使用済み瓶の中に“Mg”と書かれたラベルを見つけた。

「あ、うん、新しく買いに行こう！」

コーキは明るくそう言つて白衣を脱ぎ捨てると、部屋を出ていった。

「あら、コーキ君。今からお出かけ？」

「街に行くのか？」

階段を下りていると飛鳥と十六夜と会った。

「うん。ちよつと切らしてしまった物があつてね。買い物に」

「そういえばお前最近部屋に籠つてること多かつたよな。何してんだ？」

「閃光弾作り」

「閃光弾か。随分面白いもん作つてんじゃねえか」

「そうかな？作り方自体は簡単だし、ただ光るだけだよ？」

「いやいや、そういう物にはロマンがあるだろ！特に自作には」

「まあ、確かにね」

「私には全然分らないけど、頑張つてねコーキ君」

「うん、そんなじゃあ二人とも」

「おう、帰つて来たら俺にも作らせてくれ」

「気をつけてね」

コーキは二人に手を振ると、階段を下りきり、外へと出たのだった。

街の一角にある、とある雑貨店。ここには日用品から食料、果てはオーダーすれば何でも揃えてくれる。

そのコーキ御用達の店の名前は「ハボック雑貨店」。コーキは今日もここに足を運

んでいたのだった。

「ごめんくーだーさいっ!」

と言つて店に入る。中はそれほど広くなく正面にカウンター、左右の壁には日用品と食料品が置かれた棚があるだけとシンプルな作りだった。

「あれ? 誰もいないんですか? ハボックさーんっ」

いつもカウンターにいるはずのジャン・ハボックの姿が見えなかった。

何度か呼んでいると、

「ちよつと待つててくれ、大将ー!」

と店の奥から声がした。大将つて言うのは常連であるコーキのあだ名である。

しばらくすると、中からタバコをくわえた金髪の男が出てきた。

「おつ、またせたな大将! 今日は何を買いに来たんだ?」

「前にオーダーしたマグネシウム全部使っちゃったからもう二瓶ほど、つてまたタバコ吸つてるの? 早死にするよ」

「そんな俺の人生の楽しみを取り上げたいのか?」

「人生の楽しみがタバコつて言つてて哀しくない?」

「うるせえ、大将のとこみたいに美人揃いじゃないんだから仕方ねえだろ」

「美人つていうか、ウチは美少女揃いだからハボックさんの趣味に合う人いないと思う

よ」

「まあ、確かに美少女っていうのも可愛いだろうけど、あまり年下は趣味じゃないし。やっぱり女じゃないとな」

「女ねえ。そういえば、ウチって大人の女性ってレティシアちゃんと白雪ちゃんだけだな。男にいたっては一人もいない」

「二人はその、大きくて美人なのか」

ハボックは自分の胸の前で何かを持ち上げるような仕草をして問う。

それ対してにコーキはニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「もちろん！そこいらの美人とはわけが違う。二人共かなりの上玉だよっ☆」

マジかよ!!!と歓喜の声を上げ、拳をグツと握るハボック。

「あ、厳密にはちよつと間違えた」

「どういうことだ、大将?」

今度はまるで重要な作戦の詳細を聞くように真面目な顔になる。

コーキはこのハボックの食いつき方に口角が上がってしまいそうになるが、それを真顔に上書きする。

彼はこういうバカ話を大真面目にすることが面白くて好きだ。

「レティシアちゃんは、巨乳ではなかった。でも、スタイルが良くて気品溢れるスーパー

プラチナブロンドの美女。正直、彼女より美しい女性を僕は見たことはない。白雪ちゃんには日本の蛇神様。和服つけてっこうスタイルが分かりにくくなる服だけど、白雪ちゃんの場合その和服を着てもわかるほど大きいんだ。」

「なん・だど!？」

この衝撃的な話にはハボックは思考がフリーズしかけたが、頭を振って回避する。

しかし、それでは足りず頭を押さえながら思考の整理を強引を行った。

「つまり、アレか。金髪超絶美女か和服巨乳美人を選らばなければいけないと言うのか。そんな、そんなの選べるわけねえ。確かに俺はボインが好きだつ。でも、その大将がそこまで評価する金髪美女つてのも捨てがたい。でも、俺は、俺は——」

ハボックはカッと目を見開くところを叫んだ。

「——ボインが大好きなんだああああああああああ!!!」

そう叫んだ彼はどこかスツキリしたようにキリッとした顔をしていた。叫んだこと自体はただのセクハラだが。

「さあ、大将!その白雪ちゃんっていう蛇神様をぜひ紹介してくれっ!」

そうキラキラと少年のような輝いた顔で言う。

それに対してコーキは笑顔でもちろん、

「お断るっ☆」

と返事した。

瞬間、今度こそハボックは思考がフリーズした。

「な、何でだ大将!? 今の話の流れるにそこは紹介してくれるとこだろ?」

「別に誰も紹介してあげるなんて言っていないし。それに白雪ちゃんは僕のもんだからねっ! 誰にも譲ってあげる気は全くないのさ」

「な、なら金髪美女の方は。」

「そっちはウチのカズマ一筋で他に靡くわけないよ」

要するに初めからこの会話に意味はなかったのだ。これはコーキの策。

おいしそうなエサを吊るして期待に胸が膨らんだ瞬間それを奪う。典型的な上げ落とす作戦。

「この腐れ外道がああああああああああああああああ!!!」

ハボック涙の絶叫。しかし、返ってくるのは嘲笑う声だけだった。

「ごめん。ごめん。意地悪が過ぎたよ。謝るから許して! ほら、子供のイタズラと思つて許してよ、ハボックさん」

「うるせえ、お前は俺の心を弄んだ。その罪は子供だからって軽減されないんだよ」

完全にハボツクは拗ねていた。いい大人が子供にからかわれて拗ねていた。なんと大人気ないことだろうか。

「ナレーションうつせーぞツ!!!寄って集って大人イジメてそんなに楽しいのかよっ!?子供だからって許されるわけないんだよ!というか、大人の方が色々傷つきやすかったりするんだよ!覚えとけっ!!」

そう怒鳴ると、ぎじぎじと灰皿に先端が潰れて折れ曲がるほどタバコを擦りつけた。「で、大将は何も買うものもなく冷やかしにきたんのかい。だったら、さっさと帰ってくれ」

「あー、そういえば当初の目的忘れてた。えっと、この前オーダーしたマグネシウムの粉末。まだ在庫ある?」

「マグネシウムってこの前二瓶買って行ったよな?それ全部使ったのか!」

「うん、実験に使ってたら足りなくなっちゃた」

「何の実験だか知らないがすげえ消費量だな。そんなの買うの大将しかいないから、在庫はないぞ」

「取り寄せにどれくらいかかる?」

「四日かな?代金は先にもらうぜ」

「銀貨で払うから、お釣りちょうだい」

ハボックは左手で銀貨を受け取ると、右手でコーキの手にタッチした。
「なにそれ」

「お釣りは無しってことだ、大将。釣りは俺の心の治療費ってことで」

「はあ、このボツタクリ！」

「はっはっは。大人をからかうからだよ」

と悪どく笑う。ハボックはさっきの恨みをちよつと意地悪して晴らそうという魂胆
だった。

が、

「まあ、いいよ。釣りはチツプとして上げるよ」

という予想外の反応に戸惑った。

「お、おい本当にいいのか大将？」

「ん、別にいいよ。お金に困ってるわけじゃないし。ハボックさんには実際色々世話になつてるからね」

その含みのある言い方でハボックはコーキの言いたいことを理解した。

簡単に言うのと、これからも常連としてもつと最良してくれよってことだ。

(随分世渡りが上手いじゃないか、大将)

ハボックはニヤリと笑った。

「わかった。こいつはありがたく受け取っとくぜ」

「そんじや、四日後あたりに取りに来るよ」

「おう、またな！」

コーキは手で挨拶を返してハボック雑貨店を後にしたのだった。

観察対象 コーキ episode 2

はいはい、皆さんどうも！

お久しぶりだね。いつ以来になるかな？

もしかしたら、この物語もう更新されないんじゃないかね？とか思った？

しかーし、残念なことに続きが投稿されるのだ。

というか、今誰が喋ってるかわかる？

あは！僕だよ、僕。この物語の主人公コーキだよ☆

こう考えると小説の長所であり短所であるものがしつかり感じられるね。

雰囲気や口調が似ているキャラが喋っているとまたに混乱してしまうよね。

まあ、そこは筆者の腕の見せ所だけ。

実際どう？

ウチの作者だとわからない時ってないかな？

作者は作者だから当然そこんとこ分かるけど、読者のみんながわかってきてくれるの
か心配みたい。

それはそうと、僕がこうも喋り続けているのにはちゃんと理由があるんだよ？

どうせ僕の喋っていることに意味がないとかなんとか思っているでしょ。

失礼しちゃうなく。僕をだたの天才だと思つてない？

その認識はおいしいね。僕は『遊び』も分かる天才だ。

そうこれも『遊び』。暇だから遊んでいるだけだよ。正直、こうも同じ日々は少々飽きがくるからね。

というわけで、僕は現在手錠で繋がれておりますっ!!!

◇◇◇

「いや、アレだねっ！養豚場の豚を見るような目つてこういうのを言うんだね。はっはっは」

「あら、コーキ君。それだと豚に失礼よ」

「あれ僕つて豚以下つてこと？参つたなく」

「いつものようにヘラヘラニコニコとしているコーキだが、飛鳥は相変わらず冷ややかな目でコーキを見下す。

いつもなら呆れたようにため息を吐くところだが、今回の件はそうはいかない。

その後ろの方ではしくしくと涙を流す黒ウサギ。

「コーキさんは、コーキさんは、例え可能でもそのようなことはなさらないと思つていましたのに。」シクシクシク

「大丈夫だよ、黒ウサギ。大丈夫、きつと大丈夫」

こういう時何を言ったら言いかわからないが、とりあえず耀は慰めていた。さて、そろそろ事情の説明をするとしよう。

「ノーネーム」の本拠地がある箱庭東側の季節は田植えの時期となった。

農園の復興も進み、水田エリアもかなり面積が使用可能となっている。そこで、コミュニティ総出での田植え大会が行われることとなったのだ。

『確かに全員で一気にやった方が効率はいいかもしれないけど、終わった後コミュニティを筋肉痛という地獄が襲うんだけど？それ治療する誰か分かる？対応するの誰かわかる？僕を過労死させたい寸法なワケ？』

と言うマジなコーキの言葉により午前中は女性陣を中心に午後は男性陣を中心で行うこととなった。

そして、先ほど午前のチームと午後のチームが入れ替わった。

ものはついぞと言うもので、女性陣はそのまま汗と泥を洗い流すため「お風呂に入ろう！」ということになった。

しかし、献身的な黒ウサギは本人の強い意志で午後も作業をすつて別れた。

今にして思えばコーキはこの黒ウサギの行動や女性陣の行動を読んでいたんだろう。

結論から言えば、彼は十六夜に追い返された黒ウサギを装って脱衣場に入って来たの

だ。

彼のギフトは完璧だ。飛鳥も耀もみんな気付かず無防備に肌をさらしていた。ガールズ特有のちよつとしたきやつきやうふふなイベントも愉しんだ。

が、そこでコーキの予想外の事態が発生したのだ。

なんと本当に黒ウサギが追いつき返されて浴場にやって来たのだ。

脱衣場のドアを開いた状態で固まっている黒ウサギ。

同じく固まる浴場のみんな。

そして、ギチギチと音が聞こえてきそうな動きで浴場にいる黒ウサギコウに視線が集まる。

「(ぎ)馳走さまでした♪」

この後何が起きたかは語るまでもないだろう。

というわけで、現在に至るといわけだ。

「とりあえず、反省も含めて貴方はこのままにしていくな。私刑死刑の内容が決まったらまた来るからそれまでに遺言でも考えておくことね。それと、ギフトカードとかこのチヨーク類は私が預かっておくわ。一応聞いておくけど、何か弁解とかあるかしら？」

「飛鳥ちゃんのちくばおがッ!!」

「最っ低ッ!!」

そう顔を赤くさせて叫ぶとさっさと部屋を出ていった。それに続き耀たちも退室していった。

きつと別室で何の刑にするか話し合うのだろう。

「いたた、胸の形だけじゃなくて乳首も綺麗だったって褒めようと思ったのにやー。まったく。用心深くギョウトカードと錬成陣を書けないようにチヨークを没収ってどんだけ逃がしたくないの。別に裸を見られた位で大げさだなく。なんてね。羞恥心があつてこそそのエロ。おっぱいも隠さず当然なようにそこにあつてはただの脂肪の固まり、日頃見れないからこそその恩恵っ！ビバエロス!!ビバ美少女!!白夜叉ちゃん万歳！」

と一人叫んだら隣の部屋からドゴンツ!!と警告がきた。

「・・・」

はあと溜め息を吐き、肩を竦める。そして頑丈そうな手錠を見る。

「こんな物、錬金術が使えなくても抜けられるんだよ。久遠」

そう呟いた時にはコーキの姿は、魔女の帽子がトレードマークのハーミットになっていた。なお、ランタンはギフトなので持っていない。あくまで細胞単位で変身するだけだから、恩恵までは引き継げない。

「よいしょっつ」

腕の大きさも小さくなってガバガバになっている手錠を置くと、音を立てないように

歩く。

抜き足、差し足、猫の足々

ドアノブをジャンプして掴まって開けると、顔少しだけ出して辺りを窺う。

廊下には誰もおらず、耳には隣の部屋からの話し声がかすかに聞こえるだけだった。

時おり笑い声が聞こえてくるのをみるに、もうコーキのことなど忘れてガールズト

クに花を咲かせているのかもしれない。

「それはそれで寂しいものだけどねえ。」

そうポツリと呟いてコーキは歩き出す。

とりあえず、ゆっくり休めそうな農園区に行くことにした。

◇◇◇

水田区の端、水路の近くには何本かの木が生えている。

その中で太陽の角度的に良い木陰があるのを探して、コロんと寝っころがる。体が小

さいから擬音も可愛ければ、ビジュアルも可愛い。

そう考えると、猫ってというのは何だかズルい気がした。

(まあ、なろうと思えば大体のには化けられ続けられるけどね。しないけど)

空には本来天幕がありこんな綺麗に見えないはずなのだが、やはり箱庭の技術は遊

び心が多いのか無駄なところがある。前に黒ウサギも思っていた定期降雨もそうだ。

日差しは少し強いが、その分風が吹いているので涼しい。きつと日向にいたらジリジリと暑いだろうけど。

空気を吸い込めば湿った土の匂い、木々の香りがする。初めて見た時の土埃の舞う死んだ土地と違い、生きている。

耳をすませば子供たちのはしやぐ賑やかな声が聞こえてくる。

「何だか平和だなく。って、おじいちゃんかつ!!」

とつい呟いて自分でツッコミをいれてしまった。

「やっぱいいな。こんなことつい言っちゃうって精神だけ年取っちゃったのかな、僕」
気を付けないと。まだまだ僕は若いんだし。

それにしてもこの箱庭に来て数ヶ月相変わらず濃い時間を過ごしていることを自覚させられる。

召喚されたら空中で池に落ちて、第三宇宙速度の被害にあつた白雪ちゃんを治療して、ウサ耳少女の貧乏コミュニティに入って、黒死病の魔王と戦って、吸血鬼の姫君を救えた。

クソ嫌な奴にもあつたけど、楽しい時間を過ごせたなあ。

サーっと一際強い風が吹き抜ける。僕は葉の間から光を溢す太陽に向かって手を伸ばしながらこう呟いた。

「一体いつになったらこの夢は覚めるのだろうか。」

◇◇◇

農園区水田エリア

「猫。ちよつといいか？」

カズマが黙々と苗を植えていっていると隣の一行をやっている白雪が声をかけてきた。

「何か間違ってたか？」

「あ、いや、別に間違えてないぞ。田植えのやり方の話じゃなくてだな。」

とそのまま白雪は溜め息を吐いた。明らかに元気がない。

その原因に自分とは関係しているのだろうか？

カズマは機械のごとく田植え作業を続けながら頭を巡らす。

さっきまで白雪と反対の列をやっていたレティシアと米の話からスタートしてご飯を使った献立について講談していたが、それが原因だろうか。

確かにカズマは洋食系で攻めていたが、それは国柄仕方のないことだ。パン派だの米派だの和食派だの洋食派だの正直どうでもいい。普通に美味しく食べればそれで構わないだろう。なお、レティシアは中華の勉強中だったから中華系で攻めていた。

ともかく、ペストは喧嘩になると面倒だから午前組だったのでこれら関係ではないと

思う。

では田植えの仕方の説明の時、普段よりも薄着だったので当然のごとくあつた十六夜からのセクハラが原因だろうか。いや、それくらいで元気を無くす彼女ではない。むしろ、怒りに燃え上がっているはずだ。

「コーキの話なんだが。」

その一言でなんとなく理解した。原因はさっきの覗き事件のことだ。そして、確かに彼の話なら幼馴染みであるカズマに相談するのも領ける。

「で、何？」

「いや、そのだな。ちょっと思っただけで、私は十六夜の小僧や白夜叉様と違ってだな。」

といざ本題に入ろうとすると言葉を濁す白雪。

「前置きが長いな」

「いや、この前置きは大事なことなんだ！私の威厳に関わることなのだ！」

「で、結局なんなんだ？」

カズマは田植えをしている手を止めると白雪と向かい合った。

白雪は頬を少し赤く染め、目をそらしながら、どうにかカズマが聞き取れるくらいの声でこう言った。

「コーキは女の裸なら、胸が大きい女なら誰でもいいのか。やはり巫人ですらない私はダメなのか。」

カズマは二度ほど瞬きをしてこの言葉の意味をじっくり考える。

「いや、違うぞッ！別に私は小僧みたいな破廉恥なわけでも、白夜叉様のように助平なわけじゃないからなッ!!そこは勘違いするなよ!」

「わかつたわかつた。あんまり騒ぐな。十六夜に聞こえるかもしれないだろ」

はつとした白雪は辺りを見回すと、十六夜は隣の田んぼで子供たちと田植え競争に興じていた。そして、なぜレティシアも参加している？

「それで、お前。見られたかつたのか?」

「そういうわけでは、ないとは言い切れないな。正直、今日のことはちよつと嫉妬した。他の女の裸を見るくらいなら私を見て欲しい。何で私じゃないんだ?つとな。この私がかんなことを思うようになるなんてなあ。」

そう言いながら溜め息をまた一つ吐いた。どうやら白雪の元気のなさは自分の変化による戸惑いのようなだったみたいだ。

カズマは小説で同じように自分の気持ちの変化に戸惑いを感じる主人公の物語を思い出した。人の心とは移ろいやすい。だから誰にでもあることなんだろうなと思った(蛇神だけ)。

「なあ、猫。人間は異端のものより自分と同じようなものを好む傾向があるが、やはりコーキも私のような人外よりも普通の人間の女の方が好みなんだろうか？」

「さあな。俺も人間モドキだからな。参考にならないだろうが、少なくとも俺は気にしない。蛇だろろうが悪魔だろろうが化け物だろろうが関係ない。そこに確かな気持ちがあるなら種族差なんて些細な問題だ」

そうカズマらしくキツパリと言った。こういう時、相手に遠慮したりせずはつきりと言ってくれるからカズマは相談相手として適してる。

「コーキも俺と同じだと思う。実際この箱庭で態度変えたことなんて一度もなかっただろ？」

「そう、だな。なら、嬉しいことこの上ない。だが、たまに思うんだ、猫。コーキのしている世界は、私が見ている世界と違う気がする。なんだかとても遠く感じるんだ」

「確かにな。正直、俺もコーキのことはよく分からない。いつもニコニコヘラヘラしているがどこまでが本物なのやら。付き合いはお前たちより長いが、本当によく分からないよ。コーキって奴は」

白雪は相槌を打ちながらコーキが拘束されているであろう本抛の一角を見た。

(どこまでが本物か。)

白雪はコーキに初めて会った時のことを思い出す。

傷を治癒された時、あの懐かしい感じはなんだただらうか？

初対面なはずなのにコーキが暖かい視線だったのはなぜだったのだらう？

何か、今何かの糸の端を掴んだような気がした。

そう言えば、前に将棋をしている時にコーキにはぐらかされたことがあった。

もやもやとした思考をどうにかまとめる努力をするが、うまく線と点が繋がらない。

そんな風に白雪が自分の思考に没頭していると、

「ところで？白雪はコーキに言葉でちゃんと『I love you』って言ったのか？」

「ズファツ!!？」

「いきなり!!どうした？」

「そ、それはこっちの台詞だツ！お前はいきなり何言ってるんだ!？」

カズマの意外過ぎる一言で思考などぶっ飛んでしまった。まさかカズマからそんな

言葉を聞くことになるとは。

本人は相変わらずの無表情、いや若干怪訝そうな顔をしている。

「コーキはあんな風に積極的に見えるが意外と純情などこあるから、そういうのはしっかり言葉で言ってやった方がいいぞって思っただけだ」

「貴様にだけはそんなこと言われたくない!!その言葉コーキの部分をレティシア殿に変えて返してやる！」

「はあ？何でそこでレティシアが出てくるだあ？」

「レティシア殿もなあ！あんな風に振る舞っているが、貴様がはつきりしないからそれなりに悩んでいるんだぞっ！貴様こそさっさとレティシア殿にプロポーズしてこんか！！このツンデレ猫ー！！」

「いや、待て待て待て待て！前提条件からおかしいだろっ！何で俺がレティシアのことが好きってことになってんだよ！！？」

流石のカズマも白雪のその言葉に叫んだ。しかし、白雪はキョトンとしたふりをしながら問う。

「じゃあ、レティシア殿のこと嫌いなのか？」

これはカズマにとつて痛い質問だった。十中八九ここで答えたことはレティシアに伝えられるであろう。

カズマは悩んだ末に言葉を濁すように言った。

「別に嫌い、じゃあないが。」

「なら今すぐ行つてこい。」

「だから何でそうなるんだよ！俺は感情のことは知識として知っているが。」

「嘘をつけっ！本当は分かかっていて逃げてるんだろ。結局私と同じじゃないか。」

「そもそも、元の話から——」

「離れてない。貴様が——」

「何だよ、それ。気持ちをはつきりしてるなら——」

「カズマ様と白雪様がケンカなんて珍しいですね」

リリは田植えの手を止めてギャーギャーと言ひ合ひをしている二人を見ながら言った。

「まあそうだな。どっちかって言うと、カズマがくだらねーって言いそうなことでケンカしてるのが珍しいな」

「十六夜様にはケンカの原因が分かるのですか？」

「さつきから何やら話し込んでいたからな」

そう答えながら十六夜はじーつと二つ先の田んぼにいる二人の唇の動きを注視している。

リリには間の田んぼでワーワー楽しそうに泥塗れになりながら田植えをしている子供たちの声で聞き取るきとはできない。

「それで、何が原因でケンカしているんだ？」

と同じく田植えの手を止めたレティシアが聞く。

十六夜は二人の方を見たまま少し悩む素振りをした。

「あく。まあ、敢えて言うならヒロインたちの女子力高めめのケンカだな」

「ヒロイン？女子力？どういうことだ十六夜？」

「ヤハハハ、つまりレティシアには教えれないってことだぜ！残念なことにな」

教えられないとなると気になるのが当然であり、レティシアは食い下がったが結局十六夜は教えてくれなかった。

リリはこの変わっていく風景や仲間たちを見てこれからもっと頑張らなくちゃつと気合いを入れるのだった。

◇◇◇

暗い闇のような微睡みの中、うつすら目を開けた。

頭はブーツとしていて記憶の深海へと引きづり込まれそうな微睡みがコーキの意識に絡み付く。

それを引き剥がすように上体を起こして背伸びをした。

「んんんんあつ。僕いつの間にか寝てたんだ」

寝惚けた頭で辺りを見渡すと、夕日で風景が染められていた。空は少し紫色になっており月が出ている。

水田の方からは子供たちの声ももう聴こえず、田植えが終了したことを意味していた。

ポリポリと頭をかきながら頭のエンジンの回転数を徐々に上げていく。

まだ立ち上がる気力も生まれぬ脳に少し刺激を与えるために指をパチン、パチン、パチンと鳴らせた。

左耳に着けていた脳内魔導起機ヘッドフォンファズが起動する。適当な曲を選択すると呪いの唄が流れ始める。

『首なし♪顔無し♪頭上♪』

言語道断問答無用の死♪首なし——』

ズキンズキンと頭が痛み、呪いの唄が脳漿をダブダブに浸していく。

呪いの唄はたまに聴いて脳を慣れさせていくことも必要であるためコーキは日常生活でよく流す。こういう脳に刺激が欲しい時は特に。

脳が揺さぶられて調子が戻ってくると立ち上がり歩き出す。日の傾き方からそろそろ夕食だ。

寝起きでイマイチお腹は減っていないが食べないと後が辛い。

まあ、貯蔵してあるお菓子を食えばいいだけの話だけど。

そんなこんなことを考えながら彼はいつものコーキ・C・マユズミへと頭をシフトしていく。

「さあて、田植えのサボりをどう誤魔化そつかな〜♪」

そう鼻歌混じりにニコニコとコーキは笑いながら本拠へと帰っていったのだった。
この時彼は完全に忘れていたのだ。自らが墓穴へと入りつつあることに。
そう、脱獄者が呑気に監獄へ戻るように。

ペラッ。

・ ・ ・

付属レポート 耀の悩み

飛鳥の部屋

「♪」

飛鳥は熱い紅茶の入ったティーポットを軽く揺らしながら二つのカップに注いでいく。

本来ならレティシアでも呼んで淹れてもらおうところであるが、生憎いつの間にかいなくなつたカズマを探すのに忙しそうだったので自分で淹れることにした。

(メイドの幸せを応援するのも良き主の条件よ、なんてね)

紅茶で満たされたカップを持ち、一つを自室へ来てくれた耀の前に置く。もちろん、お茶菓子は配置済みだ。

飛鳥は自分の分の紅茶を置いて座ると、話を始めた。

「それで、春日部さん。私に相談したいことって何かしら？」

そう、耀が飛鳥の部屋を訪ねたワケは何やら話を聞いて欲しいからだ。

それをお願いされた時には、飛鳥は相談してくれるぐらい耀との友情が深まっていることに感激した。

そして、嬉々として部屋に招き入れたのである。

「相談じゃなくて、ただ話を聞いてもらうだけ。もつと言えば愚痴かな？それでも、飛鳥は聞いてくれる？」

「勿論よ。愚痴だろうが何だろうが好きなかだけ私に話してちょうだい。遠慮はいらないわ。だって、私たち友達でしょう？」

「うん、ありがとう飛鳥」

そう言つて耀はサクサクと食べていたクッキの最後の一片^{かけ}を食べ終え、紅茶を一口飲むところ言つた。

「最近、『錬金術師×2』での私の扱いが酷いと思う」

「!?。えっと、春日部さん？いきなり何を言っているのかしら？」

「だから、作者が私に対する扱いが酷いつて話。出番無いし、バトルパートカットされるし」

「いやいやいや、待つて待つて！一応ここ本編なのにそんなメタいこと言つて大丈夫なの!？」

「大丈夫だと思うよ。今章は丸々番外編みたいな本編らしいから。それに、もしNGなら勝手にカットされると思うし」

「そ、それはそうかもしれないけど。それって、結局カットされて春日部さんの出番が

減るんじゃないかしら?」

飛鳥のこの指摘に耀は、一瞬はつとしたがすぐに開き直った。

「もう今さらだし、このまま続ける」

「そう。春日部さんがそれで良いならいいわ。続けて」

「一番初めの箱庭に来た時は、当たり前だけどちゃんと出番があった」

「そうね。そうじゃないと、私たち存在出来ないものね」

「でも、いきなり『サウザンドアイズ』でのグリーとのギフトゲームでカット」

「そ、それは仕方がないと思うわ。だって、原作丸々そのままやっても読者は退屈でしょうし」

「そして、次にガルドとのギフトゲームはしっかり出番があった」

「私はその時、カズマ君に良いところ持っていかれたわね」

「次にゲス野郎ルイオスとのギフトゲームは序盤カットで出番無し」

「なにか今、春日部さんの黒い部分を見た気がするわ!」

「第二章では『造物主達の決闘』で出番有り。でも、原作通りに感染でその後の出番無し」

「でも、活動報告の方でアンケートとってたのよね。私に比べたらまだいい方よ」

「第三章は、原作では私のための物語みただったのにほぼ出番無し。『アンダーウツ

ド」に行った所と、最後のところしかない」

「私も大体似たものね。こう振り返ると、原作キャラである私たちの出番ってほぼ無いわね」

「そう思うよね！無さすぎるよね！酷いと思うよね？」

飛鳥は紅茶を飲みながら、少し興奮気味の耀にこう言った。

「でも、これって二次創作作品だしオリキャラであるカズマ君たちにスポットがあたるのは当然よね」

「それはそうだけど」

「この正論中の正論なので言い返すことが出来ない。」

「でも、他の作品ではちゃんと出番あるやつもあるよ」

「それはきつとオリ設定とかがある作品でしょ？この作品には無いから、諦めるか今後に期待するしかないわ」

「きつぱり飛鳥は言う。」

「。。飛鳥は何でそんな普通でいられるの？今の状況に不満はないの？」

「無いわ、全く。だって考えてみなさいよ春日部さん。私たちは原作キャラなのよ？原作でしっかり出番があつて見せ場があるじゃない。読者もここの比じゃないわ。私も貴女も主人公格だし、文章力も原作が圧倒的に上よ。だから、二次創作作品でぐらいサ

ブキャラっぽくてもいいじゃない。私たちは原作キャラとしての余裕をもって、オリキャラたちに出番や見せ場を譲ってあげるの。それに、結局私たちが中心人物であることに変わりはないわ。これで文句を言ったら、贅沢つてもものね」

「贅沢」

耀は飛鳥の言葉を口ずさむ。

「そして、しばし考えるようにして固まった。

飛鳥は空になったカップに新たな紅茶を注ぎ込みながら待った。

「うん、そうだね。確かにそうだ。飛鳥の言う通りだよ」

と耀は言うときさらに続けた。

「私たちは、余裕を持ってしっかりしていればいい。出番や見せ場が少なくても大丈夫。全然問題無かったんだ」

「そうよ、春日部さん。私たちは常に優雅に構えていればいいのよ」

「うん。ありがと飛鳥。飛鳥はやっぱりすごいね」

「別に大したことじゃないわ。でも、春日部さんの役に立ったのなら良かった」

飛鳥は誇らしげに笑いながら言った。

「じゃあ、次は私の話を聞いてくれないかしら？」